宮城県文化財調査報告書第103集

色麻町

香ノ木遺跡
色麻古墳群

―昭和59年宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書―

昭和 60 年 3 月

宮城県教育委員会

目　次

序
はじめに ……1
Ⅰ．香ノ木遺跡 ……3
Ⅱ．色麻古墳群 ……47

例　言

1.　本書は宮城県営圃場整備事業に係わる香ノ木遺跡・色麻古墳群の調査報告書である。
2.　調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、色麻町教育委員会の協力をいただいた。
3.　本書における土色は『新版標準土色帖』（小川・竹原：1967）を使用し、土性については国際土壌学会の粒径区分を参照した。
4.　本書に使用した地図は建設省国土地理院発行の５万分の１の地形図「中新田」を複製したものである。
5.　整理・報告書の作成は文化財保護課が行い、佐々木和博・古川一明・大槻仁一が担当した。なお、本書の作成にあたり東北学院大学学生大野亨氏・宮崎隆史氏の協力をいただいた。
6.　本遺跡の調査・整理に関する記録、出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

序

本報告書は宮城県営圃場整備事業に伴う色麻町色麻古墳群と香ノ木遺跡の発掘調査報告書である。この事業と文化財の係わりについては、さまざまな紆余曲折があったが、関係者の努力によって、できるだけ保存がはかられたことは幸いであった。色麻古墳群は、調査の結果からみて、もとは500基以上あったと推定され、東北地方では最大規模を誇るものである。この古墳群は、多賀城が設置された前後、約1200年前にこの地を開発し、土地改良につとめた人々の墳墓であり、このひとびとを顕彰する意味でも、現代の土地改良関係者によって、古墳の保存がはかられたことは、大変意義深いものと思われる。香ノ木遺跡は縄文時代晩期の大きな遺跡であったが、これも関係者の努力によって遺跡の大部分は水田下に保存されることになった。色麻町内で昭和56年度から４年続いた圃場整備事業に伴う発掘調査を機に、色麻町教育委員会は文化財保護普及の活動にとりくみ、町民の文化財にたいする理解を高めると同時に、本年度は色麻町文化財保護条例を制定し、町文化財審議会を設置されたことは喜びに耐えない。

調査や協議にあたって、色麻町土地改良区・宮城県農政部耕地課・古川土地改良事務所・色麻町教育委員会・色麻町文化財愛好会・地元地権者から寄せられた御好意と御協力に対し感謝申し上げる。

昭 和 60年 3月

宮城県教育委員会

教育長　郷 古　　康 郎

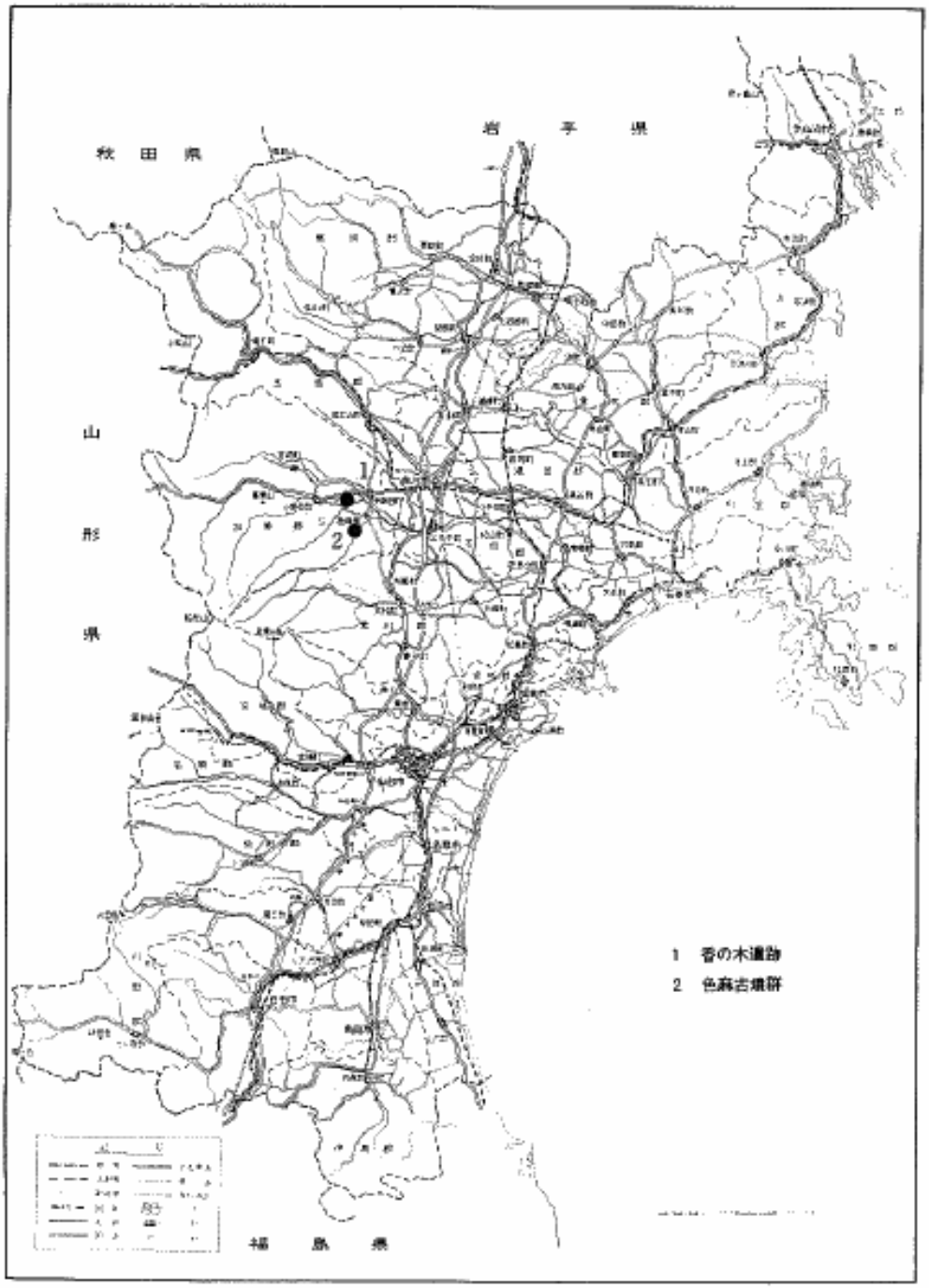
はじめに

宮城県教育委員会は、宮城県営圃場整備事業に係わる２遺跡(香ノ木遺跡･色麻古墳群)の詳細分布調査及び発掘調査を昭和59年度1国庫補助事業として実施した。

香ノ木遺跡は縄文時代後期、晩期の遺物が出土することで古くから周知されていた遺跡である。詳細分布調査の結果、遺跡の範囲は約40,000㎡に及ぶことが確認され、農政部との協議により盛土工法による保存が図られた。しかし支線排水路部分については掘削を伴う工事が避けられず、この部分について事前の調査を行わざるを得なかった。

色麻古墳群は対象範囲が約450,000㎡に及び圃場整備事業は昭和57、58、59年度の３ヵ年に分けて行われた。これに係わる埋蔵文化財の調査も各年度毎の国庫補助事業として実施され、今年度は最終年度の工事に係る遺跡東半の約130,000㎡についての詳細分布調査を行った。その結果、約120,000㎡に遺構、遺物の分布が確認され、農政部との協繊により盛土工法での遺跡の保存が図られた。掘削を伴う支線排水路部分については事前調査を行わざるを得なかったが、保存状態の良好な６基の古墳が係わる部分では計画路線を変更しその保存を図った。また圃場内の幹線道路部分には墳丘の残る古墳が3基かかったが計画路線を変更し保存された。さらに墳丘の残る古墳16基が新しい圃場内に保存され、古壌群の景観の一部がかろうじて残された。

以上２遺跡の保存については関係者間で度重なる協議を行い、支線排水路部分を除いて盛土工法により保存されることになった。工法の変更、道路・水路の路線変更、新圃場内に保存された古墳の取り扱いなどについては、経費の増加、耕作への影響などの問題から関係者間の協議は難航したが、農政部･色麻町の各関係者による努力と地元関係者の理解により遺跡の保存が図られたものである。特に農政部では独自に埋蔵文化財包蔵地における圃場整備事業の工法について検討が加えられ、施工に当たっては詳細な施工計画書が作成されるなど、遺跡保符に対して積極的な対応がなされた。



遺跡の位置図

Ⅰ 香ノ木遺跡

調査要項

遺 跡 記 号：ＨＳ（宮城県遺跡地名表登載番号　31009）
遺跡所在地：宮城県加美郡色麻町清水字香ノ木東
調 査 期 間：昭和59年４月16日～昭和59年６月８日
調査主体者：宮城県教育委員会
調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課
調査第二係長：藤沼邦彦　技術主査：加藤道男
技師：佐々木和博・古川一明・大槻仁一
調査対象面積：約75,000㎡
発掘調査面積：1,175㎡

目　次

Ⅰ．遺跡の位置と環境 5
Ⅱ．調査の方法と経過 5
Ⅲ．調査の成果 9
　1．基本層位 9
　2．遺物包含層 9
　3．遺物包含層出土遺物 10
　4．土壙とその出土遺物 27
　5．ピット列 30
Ⅳ．考　察 34
　1．出土土器の分類と組み合わせ 34
　2．出土土器の年代 37
　3．出土品の器種構成 38
　4．遺　構 38
　5．遺跡の範囲 39
Ⅴ．ま　と　め 39

Ⅰ　遺跡の位置と環境

香ノ木遺跡は宮城県の北部・加美郡色麻町清水字香ノ木東に所在する。付近の地形を概観すると、西に奥羽山脈がそびえ、江合川･鳴瀬川がほぼ南東方向に流下し、その流域には低平な丘陵が発達している。本遺跡は奥羽山脈に属する船形連峰の、北東に発達し、鳴瀬川によって北を限られる加美丘陵に位置する。加美丘陵の北には鳴瀬川と江合川にはさまれた玉造丘陵がみられる。加美丘陵には鳴瀬川の支流に開析され、ほぼ北東方向に樹枝状にのびる丘陵が形成されている。一方、玉造丘陵には鳴瀬川・江合川の支流の開析による、ほぼ南東方向に樹枝状にのびる丘陵が形成されている。本遺跡が位置する鳴瀬川上流域には扇状地形態をなす河岸段丘がみられ、それは高位からの大野（薬莱）段丘・原段丘・小野田段丘・金洗段丘に分けられる。本遺跡は鳴瀬川の支流保野川の左岸、小野田段丘の末端および沖積地に位置している。

本遺跡の地形をさらに詳細にみると、約１°30‘のゆるやかな傾斜をもって北東にのびているが、標高 41.5m～40.5m付近ではやや傾斜を増している。東側・西側には北側さら入る沢がみられ、この沢によって遺跡の東と西は限られる。遺跡は水田として利用されている。

つぎに本遺跡周辺の遺跡、とくに縄文時代の遺跡を中心に概観することにしたい。鳴瀬川の南、加美丘陵に所在する遺跡についてみると、本遺跡の南西約 3.5km に昭和 58 年度調査の大谷地遺跡(茂木：1984)がある。この遺跡では縄文時代中期末葉(大木 10 式期)の住居跡と縄文時代後期初頭の包含層が検出されている。また少量ではあるが縄文時代晩期の土器も出土している。この他、この地域には発掘調査された遺跡はなく、遺跡の内容についても不明なものが多い。また縄文時代の遺跡についても、さらに詳細な分布調査を実施すれば、増加する可能性がある。鳴瀬川の北、玉造丘陵の先端および河岸段丘には数多くの縄文時代の遺跡が知られている。なかでも、縄文時代早期から晩期までの土器を出土する遺跡が多くみられる。晩期の土器を出土する遺跡は 13 遺跡を数え、本遺跡と遺跡の位置は鳴瀬川の北と南で違うものの、大きく見れば、これらの遺跡は一つのまとまった分布を示しているととらえることも可能であろう。

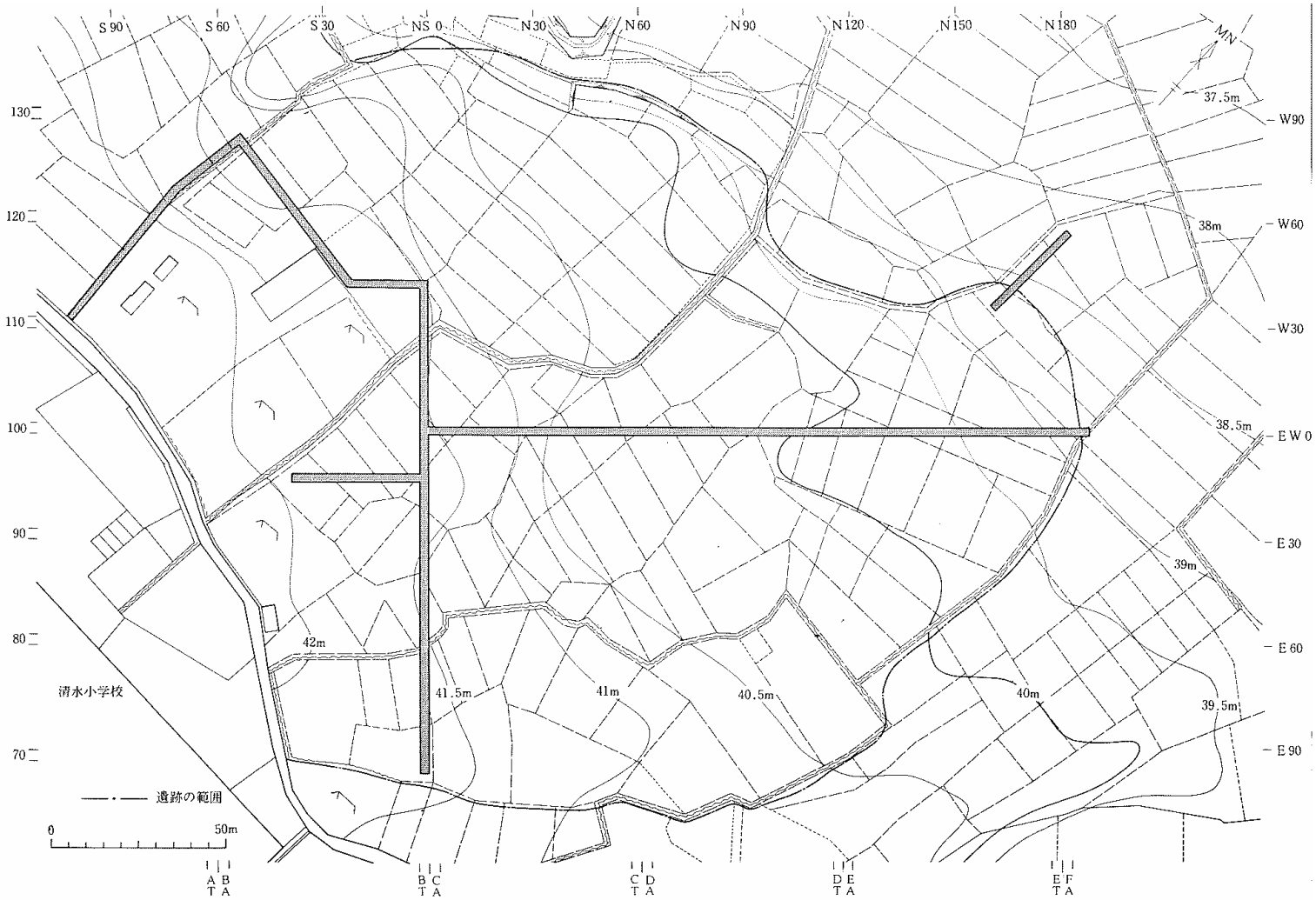
Ⅱ　調査の方法と経過

昭和 59 年４月 16 日から調査を実施した。調査対象は圃場整備事業が実施される地域のうちで、工法上保存が困難な排水路部分である。その目的は遺構の範囲確認と遺跡の記録保存である。

調査区の原点を小排水路４号センター兼支道４号センター杭から小排水路４号センターに沿って北東に 5.1m 進み、その点から直角に南東方向 1.2m 進んだところに設定した。調査区は 3m×3m で組み、南西－北東方向をアルファベット２文字で、南東－北西方向を数字で表示

No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期	No	遺跡名	時期
1	香ノ木遺跡	後・晩	9	寺宿遺跡	中	17	地蔵館遺跡	早・前	25	墳たれ山遺跡	前・中	33	郷の瀬遺跡	
2	大谷地遺跡	早～晩	10	月崎遺跡	早～後	18	小池萬遺跡	早～晩	26	畏沙門堂遺跡	中・晩	34	大清水遺跡	
3	西昌寺遺跡		11	月崎A遺跡	中	19	三吉平遺跡	早～晩	27	道祖神遺跡	中～晩	35	鳥屋ヶ森遺跡	
4	新沿A・B遺跡		12	向山遺跡	前・晩	20	中野遺跡	中・晩	28	墳の越遺跡	前～晩	36	浜田遺跡	早
5	南山A遺跡	中	13	上の原遺跡	早～晩	21	古屋敷遺跡	前・中・晩	29	岩見壇遺跡	晩	37	浜田前遺跡	
6'	沢口山遺跡		14	うごけ・だごけ遺跡		22	古城遺跡	早・前	30	古館遺跡		38	孫沢B遺跡	
7	土利壇遺跡	前	15	孫沢遺跡		23	大霧路・小霧路遺跡	中	31	天王神遺跡	早・前・晩			
8	熊野森遺跡	中	16	滝の上遺跡	早～晩	24	泥坂屋敷遺跡	中・晩	32	箱沢遺跡	晩			

第1図　遺跡の位置と周辺の縄文時代遺跡


S 90
S 60
S 30
NS 0
N 30
N 60
N 90
N 120
N 150
N 180
MN
130
120
110
100
90
80
70
37.5m
38m
38.5m
39m
39.5m
40m
40.5m
41m
41.5m
42m
W90
W60
W30
EW 0
E 30
E 60
E 90
清水小学校
遺跡の範囲
0
50m
A B
T A
B C
T A
C D
T A
D E
T A
E F
T A

第2図　グリッド配置図

した。川の中・下流域南北両岸の東西２㎞・られる（斉藤：[註2]、。したがって、各調査区はアルファベットと数字の組合せで表示されることになる。調査区の原点はＢＴ100 区の東コーナーに、また小排水路４号は 100 ラインにあたる。
４月 17 日から 24 日まで、重機による表土除去を行い、それに並行して精査を開始した。ＢＴラインでは縄文時代晩期を中心とする遺物包含層および土壙１基を検出した。ＢＮ～ＢＳ114 区でも縄文時代後期後半～晩期の遺物包含層を検出した。しかし、ＢＬ115～ＢＣ128～ＡＧ111 を結ぶＬ字状のトレンチでは遺物は発見されず、遺跡の西限を把握することができた。ＢＦ～ＢＳ95・96 区では縄文時代後期後半～晩期の遺物包含層を検出した。100 ラインでは、ＣＪ付近で地形が一段低くなる。ＣＳ100 区では現水田面下約 1.2㎡ に砂･礫層が認められ、その直上に遺物包含層が検出された。しかし、遺物包含層は薄く、土器も細片で微量である。北東に向うに従い、遺物包含層は厚さを減じ、ＥＳ100 区では水田床直下に礫層が認められた。ＣＡ～ＣＥ100 区でも縄文時代後期後半～晩期の遺物包含層が検出された。以上の各遺物包含層はほぼ水平堆積状態を示している点で基本的には共通している。これらの遺物包含層･遺構の精査は５月 22 日までに終了した。
　ＣＦ～ＣＪ100 区の遺物包含層の精査を５月 22 日から開始した。遺物包含層は地形の傾きとは逆で、南西に向って傾斜していた。遺物の出土状態･出土量･包含層の厚さからみて、今回調査した遺物包含層の中では最も良好なそれであった。この遺物包含層の中で土壙１基、地山面で弧状のピット列を検出した。
　土層断面･遺構･遺物包含層遺物出土状況について、縮尺 20 分 1 の実測図の作成と 35㎜･4×5 インチカメラによる撮影を行った。
　調査は６月８日に終了した。
　なお、５月 26 日に現地説明会を開催し、調査の成果を一般公開した。参加者は約 200 名であった。

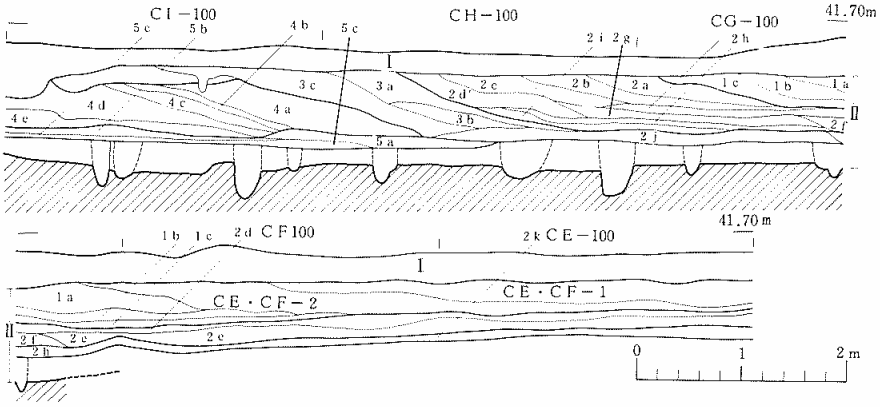
Ⅲ　調査の成果

1　基本層位

南西から北東に向かう緩やかな傾斜はＣＫ100 区付近で一段低くなる。これを境に、南西側の高位部分と北東側の低位部分とでは層位が異なっている。高位部分の基本層位は３層からなる。第Ⅰ層は厚さ 20～30cm の表土･耕作土、第Ⅱ層は厚さ 40～80cm の暗褐色･黒褐色を基調とするシルトで、遺物包含層、第Ⅲ層は褐色シルトの地山である。低位部分の基本層位は４層からなる。第Ⅰ層は厚さ 40～70cm の表土･耕作土、第Ⅱ層は厚さ 30～70cm の暗褐色砂質シルト（無遺物層）、第Ⅲ層は厚さ 10～15cm 黒褐色･暗褐色の砂質シルトで、遺物包含層、第Ⅳ層は砂層･礫層（無遺物層）である。

2　遺物包含層

遺物包含層は調査区の各所で検出されたが、とくにＣＥ～ＣＪ100 区で検出された遺物包含層



基本層位	層No	土　色	土性	備　考	基本層位	層No	土　色	土性	備　考
Ⅱ	CE,CF Ⅱ 2				Ⅱ	2 j	10YR2/3 黒　色	シルト	少量の炭化物を含む。
	1 a	10YR2/3 黒褐色	シルト	炭化物含む。		3 a	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	多量の褐色シルトを含む。少量の岩化物含む。
	1 b	10YR3/3 暗褐色	シルト	上と同じ		3 b	10YR3/3 暗褐色	シルト	やや多く炭化物を含む。
	1 c	10YR3/2 黒褐色	シルト	上と同じ		3 c	10YR3/2 黒褐色	シルト	多量の炭化物を含む（クルミ）
	2 a	10YR3/2 黒褐色	シルト	やや多く炭化物を含む。		2 k			
	2 b	10YR2/2 黒褐色	シルト	少量の炭化物を含む。		4 a	10YR4/6 褐　色	シルト	多量の炭化物、焼土を含む。
	2 c	10YR3/3 暗褐色	シルト	上と同じ		4 b	10YR4/4 褐　色	シルト	少量の炭化物含む。
	2 d	10YR2/3 黒褐色	シルト	少量の炭化物含む。焼土粒を少量含む。		4 c	上と同じ	シルト	褐色シルトを含む少量の炭化物を含む。
	2 e	10YR2/1 黒　色	シルト	少量の炭化物を含む。		4 d	10YR3/4 暗褐色	シルト	少量の炭化物を含む。
	2 f	10YR3/3 暗褐色	シルト	上と同じ		5 a	10YR2/2 黒褐色	シルト	
	2 g	10YR4/6 褐　色	シルト	(骨) 上と同じ		5 b	10YR3/2 黒褐色	シルト	
	2 h	10YR3/2 黒褐色	シルト	褐色シルトを含む。		5 c	10YR3/2 黒褐色	シルト	
	2 i	10YR2/3 黒褐色	シルト	炭化物、焼土を多量に含む。(クルミ)		5 d	10YR4/4 褐　色	シルト	地山漸移層

第３図　遺物包含層

は土層堆積状態･遺物出土状態･遺物出土量からみて、最も良好と判断された。そこで、以下ＣＥ～ＣＪ100 区の遺物包含層を中心に記述を進めることにする。

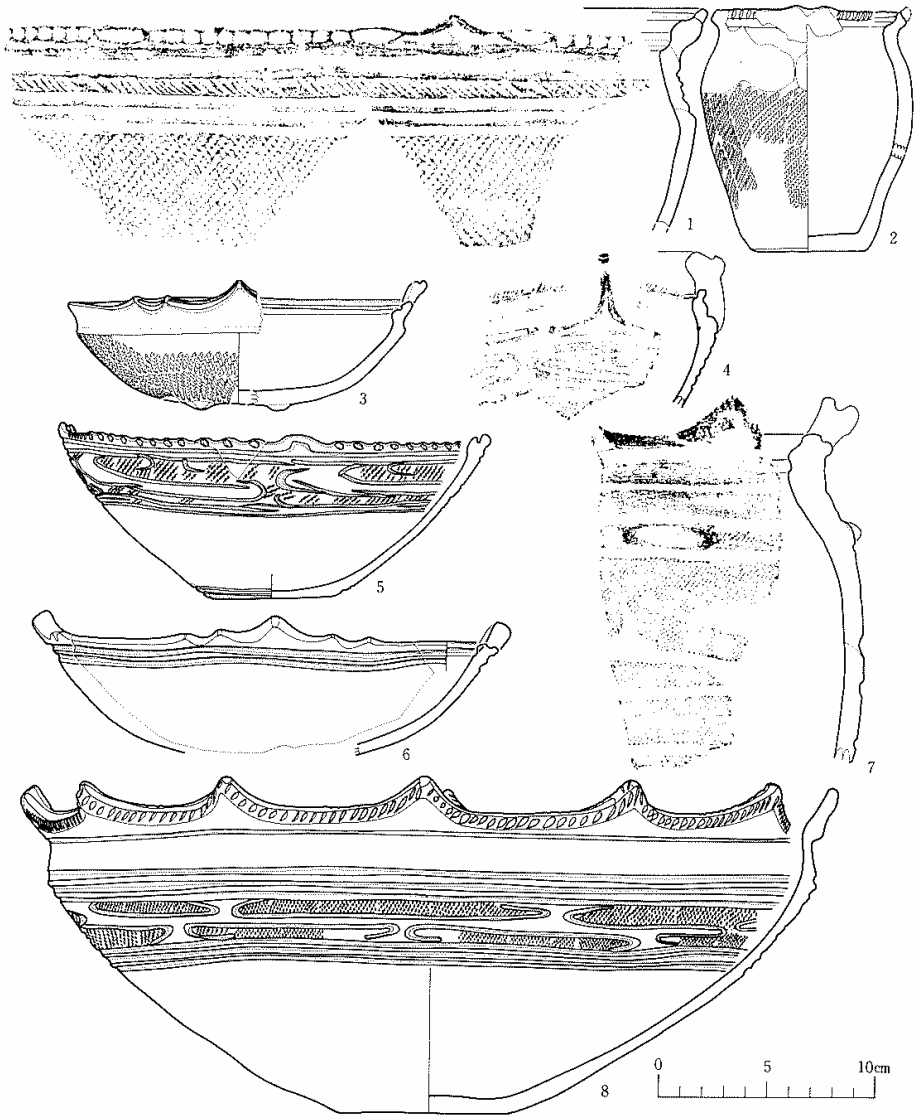
ＣＥ～ＣＪ100 区遺物包含層は南西から北東に緩やかに傾斜する遺跡全体の地形とは逆に、北東から南西に向って傾斜する堆積状態を示している。この遺物包含層は高位部分基本層位第Ⅱ層に対応し、５層に大別できる。第Ⅱ層１（ＣＥ～ＣＦ100 区第Ⅱ１・２）・２層は傾斜堆積部分もあるが、大半はほぼ水平に堆積しており、分布も広い。第Ⅱ３層は傾斜堆積し、分布は狭い。なお、第Ⅱ3a 層はにぶい黄褐色シルトで、第Ⅱ１・２層とは色調において顕著な違いがある。第Ⅱ４層は下層部分でほぼ水平堆積するものの、上層部分に移行するに従い、層の傾斜が顕著になる。とくに、この層の最上層（第Ⅱ4a 層）は厚さ約 30㎝ の褐色シルト層で、他の層とは色調において明瞭な相違がある。北東から北西に傾斜する包含層の形成は第Ⅱ４層の堆積に起因するものである。上記の各層は土色･土器出土面などの相違により、第Ⅱ１層は５層に、第Ⅱ２層は 11 層に、第Ⅱ３層は４層に、第Ⅱ４層は５層に、第Ⅱ５層は４層にそれぞれ細分された。

つぎに、遺物の出土状態についてみると、第Ⅱ1c・2b・2d・2h・2j の各層では遺物が面をなして出土している。また、これらの遺物は各層のほぼ水平に堆積している部分から出土している。

遺物の出土量は第Ⅱ２層が最も多く、第Ⅱ１・３・４層がこれにつぐ。第Ⅱ５層の遺物は微量である。

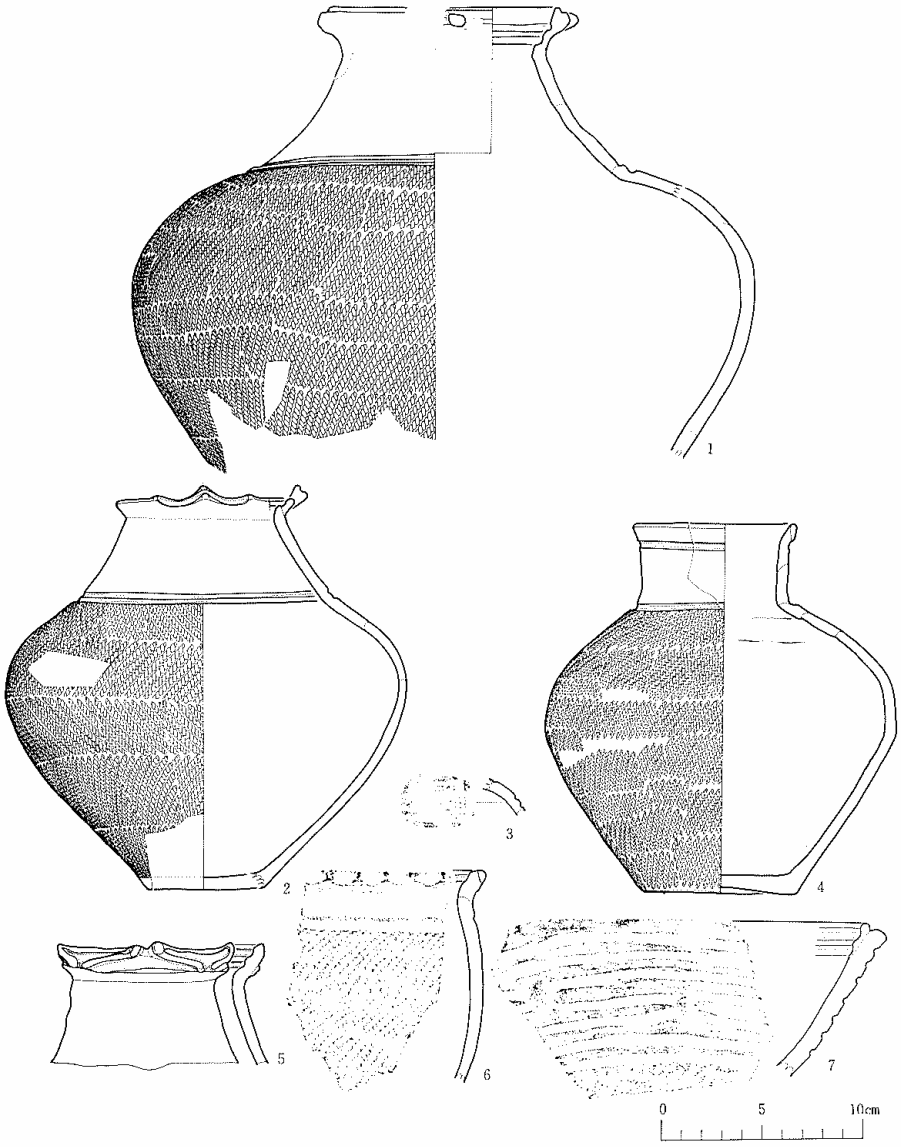
3　遺物包含層出土遺物

ＣＥ～ＣＪ100 区から出土した遺物には土器・土製品（土偶・耳飾・円盤形土製品）・石器･石製品（岩版・円盤形石製品）がある。以下、土器については下層から上層の順に、またその他の遺物については一括して掲示する。なお、遺物についての概括的な記述は観察表の中で行う。



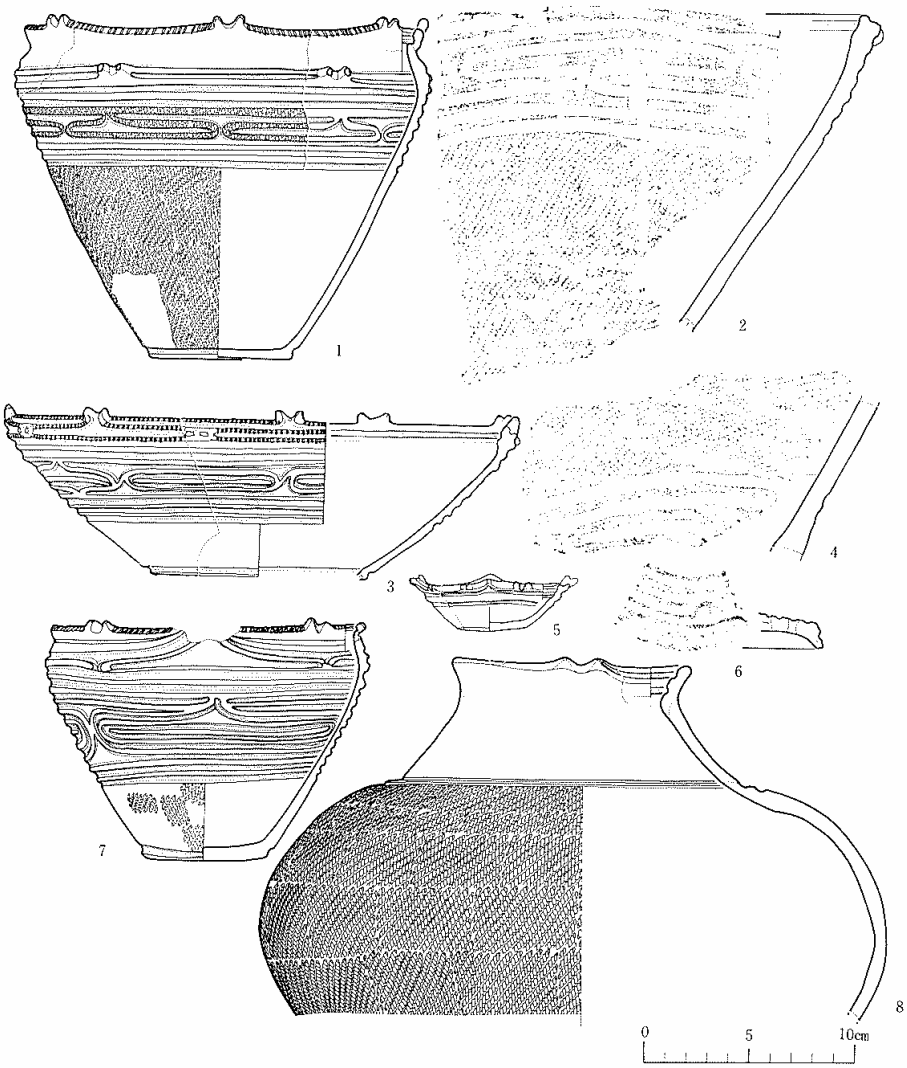
番号	地区	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	CF100	Ⅱ2d	鉢	BⅠⅳh3	体部：RL縄文横回転　口頸部：連続刺列痕・沈線　口縁部：刻目・A突起・内面に沈線	1	
2	CF100	Ⅱ2d	深鉢	CⅠⅲ1	体部：RL縄文横回転　口頸部：無文　口縁部：縦長刻目・内面に沈線	2	
3	CF100	Ⅱ2d	浅鉢	AⅠⅳj2	体部：RL縄文横回転　口頸部：無文　口縁部：A突起とⅠ対のB突起・口唇に沈線　底部：小突起の脚	3	
4	CF100	Ⅱ2d	鉢	BⅠⅴe5	体部：下半はRL縄文横回転・上半は弧線文の中に三叉文　口頸部：眼鏡状浮文と突起　口縁部：鳥嘴状突起・口唇に縦長刻目	4	Ⅴ1
5	CF100	Ⅱ2d	浅鉢	BⅠⅱb2	体部：下半は無文・上半は磨消縄文による長楕円文(RL縄文横回転)　口縁部：同高の波状と縦長刻目・口唇に沈線	5	
6	CE100	Ⅱ2d	浅鉢	BⅠⅳk2	体部：無文　口頸部：沈線　口縁部：A突起とⅠ対のB突起・口唇に沈線	6	
7	CE100	Ⅱ2d	鉢	AⅡb2	体部：彫りの深い磨消縄文による芋形文　口頸部：沈線　口縁部：波状・口唇に沈線　丹塗	7	
8	CE100	Ⅱ2d	浅鉢	AⅡⅰd2	体部：下半は無文・上半は磨消縄文による長楕円文(RL縄文横回転)　口縁部：同高の波状と縦長刻目・口唇に沈線	8	Ⅲ5

第4図　遺物包含層出土土器(1)



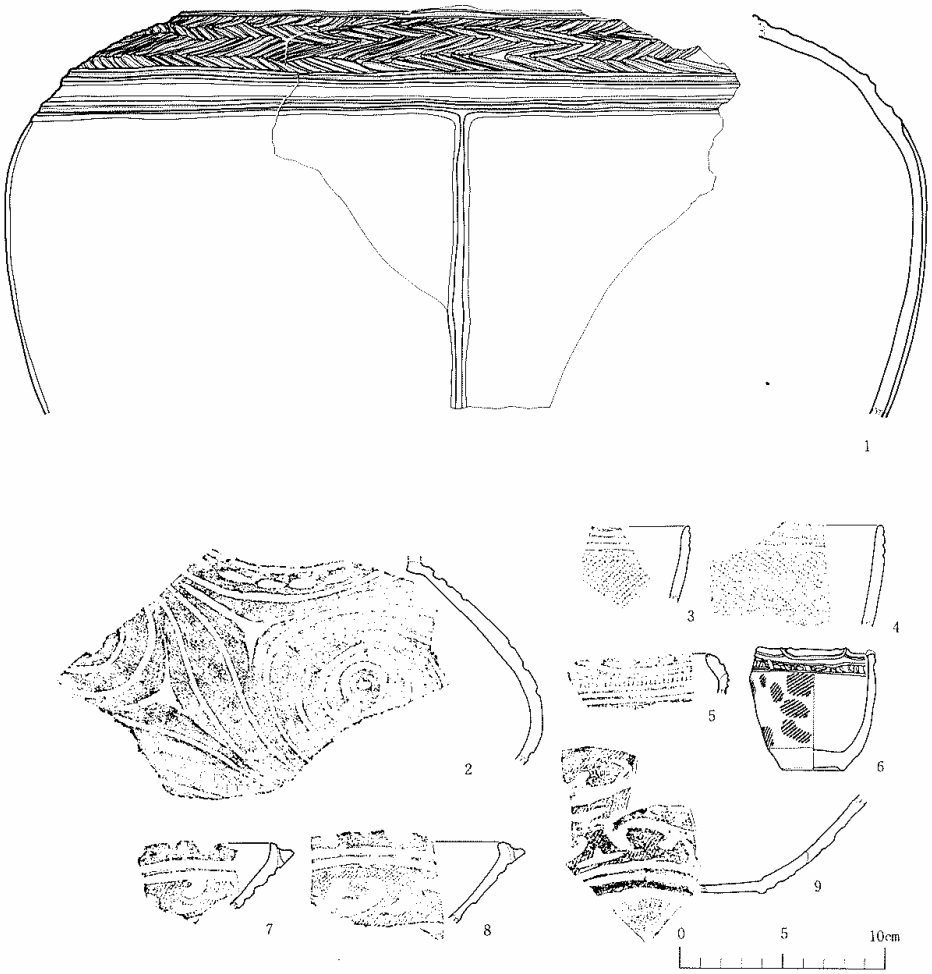
番号	地区	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	CF100	Ⅱ2d	壺	Bⅲ？j	体部：LR縄文横回転・上端に沈線　頸部：内傾　口縁部：突起・内面に沈線	9	
2	CF100	Ⅱ2d	壺	Bⅲj	体部：RL・LR縄文(1段3条)横回転羽状・上端に沈線　頸部：内傾　口縁部：A突起(大1・小2)・内面に沈線	10	
3	CF100	Ⅱ1e	壺		体部：LR縄文・横位沈線に連絡する縦位沈線	12	
4	CF100	Ⅱ1e	壺	Cⅰj	体部：LR縄文横回転・上端に沈線　頸部：直立　口縁部：下端に沈線	13	
5	CF100	Ⅱ1c	壺	Gⅲ	頸部：内傾　口縁部：B突起・内面に沈線	14	
6	CF100	Ⅱ1e	深鉢	Cⅰ12ロ	体部：LR縄文横回転　口頸部：無文で下端に沈線　口縁部：楕円形刻目・内面に沈線	15	
7	CF100	Ⅱ1e	浅鉢	Bⅰ2e	体部：下半はRL縄文横回転・上半は単純工字文　口縁部：口脇に沈線・内面に沈線　外面丹塗	16	

第５図　遺物包含層出土土器(2)



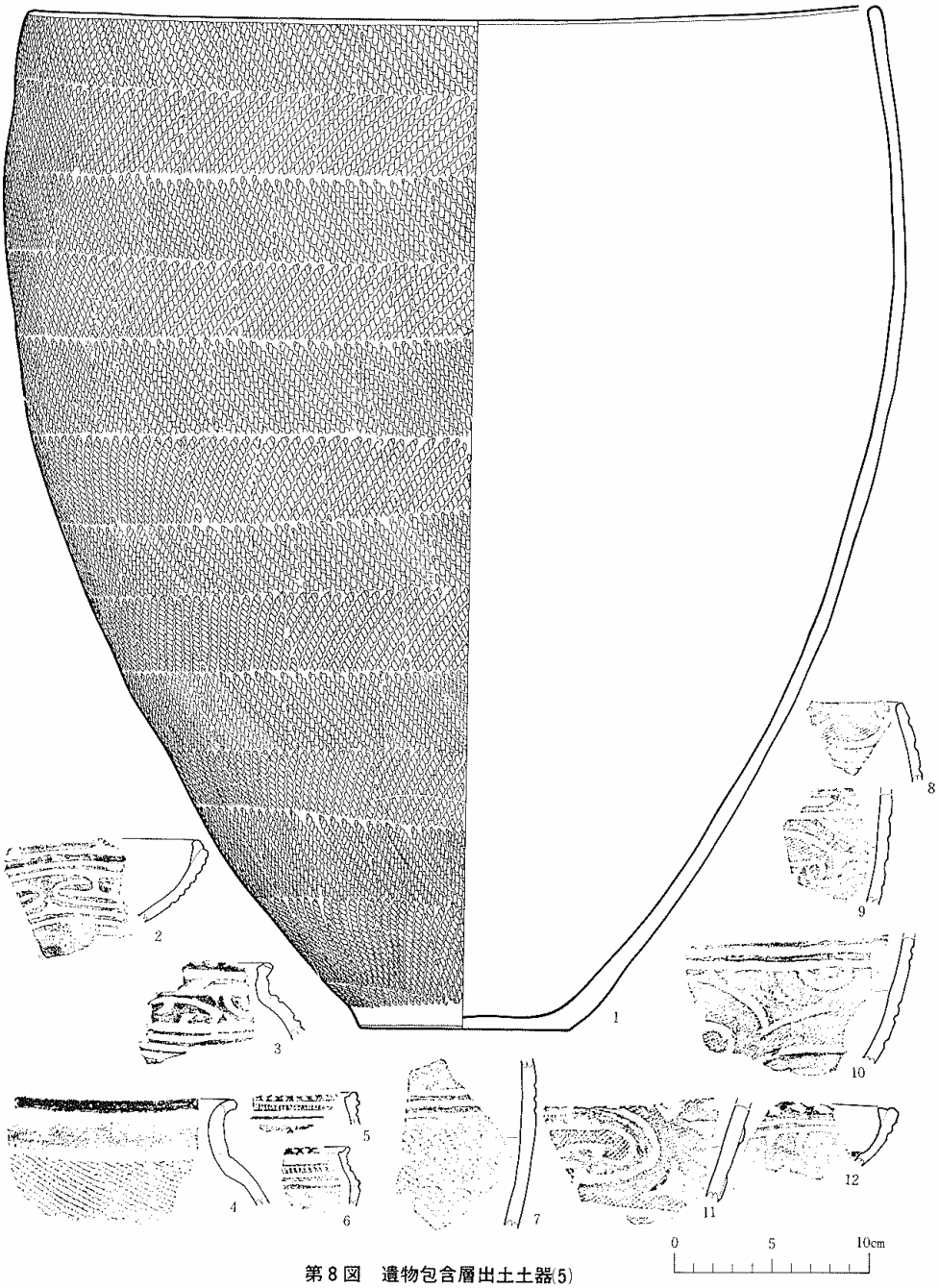
番号	地区	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	CF100	Ⅱ2	鉢	BⅠⅲf2	体部：下半はLR縄文横回転・上半は粗消縄文による π字形工字文　口頸部：下端に突起　口縁部：B突起・縦長刻目・内面に沈線	17	Ⅲ1
2	CF100	Ⅱ2	浅鉢	BⅠⅰe2	4と同一個体　体部：下半はLR縄文横回転・上半は単純工字文　口縁部：突起・口唇に沈線・内面に沈線	18	
3	CF100	Ⅱ2	浅鉢	BⅠⅲf7	体部：下端に沈線・下半は無文・上半は入組工字文　口縁部：縦長刻目・B突起・内面に沈線　丹塗	19	Ⅴ2
4	CF100	Ⅱ2	浅鉢		2と同一個体　体部：下端に沈線・脚付？	20	
5	CF100	Ⅱ2	浅鉢	BⅠⅳk2	体部：無文　口頸部：沈線　口縁部：A突起と1対のB突起・内面に沈線　抽珍 上器	21	
6	CF100	Ⅱ2	蓋		天井部：沈線・孔1個	22	
7	CE100	Ⅱ2	鉢	BⅠⅳg5	体部：下半はLR縄文横回転・上半は入組工字文　口頸部：眼鏡状浮文と突起　口縁部：B突起・口唇に縦長刻目	23	Ⅱ8
8	CE100	Ⅱ2	壺	Bⅲi	体部：LR縄文横回転・上端に沈線　頸部：内傾　口縁部：B突起・内面に沈線	24	

第6図　遺物包含層出土土器(3)

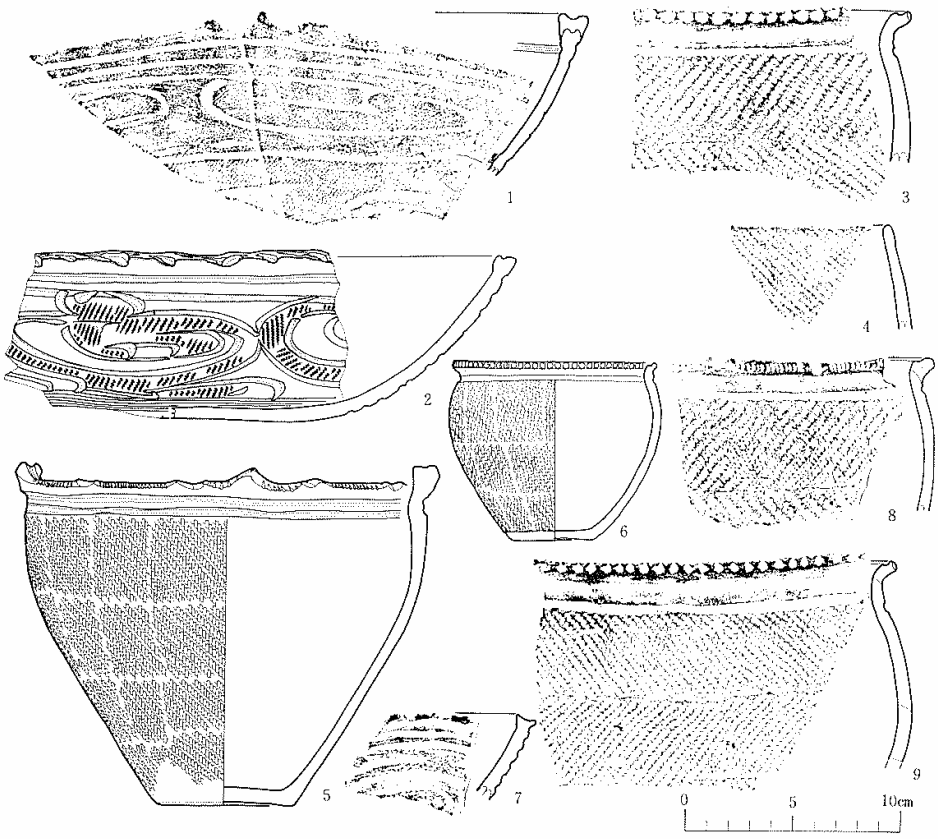


番号	地区	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	CF100	Ⅱ2	壺	f	体部：上半は沈線による綾杉文と横位隆線・下半は縦位隆線	25	Ⅱ1
2	CI 100	Ⅱ5c	壺	i	体部：沈線による渦巻文と三叉文　頸部：沈線と横長の刺突	26	Ⅴ4
3	CI 100	Ⅱ5c	鉢		体部：LR縄文横回転　口縁部：沈線	27	
4	CI 100	Ⅱ5b	鉢		体部：RL・LR縄文横回転羽状　口縁部：沈線	28	
5	CI 100	Ⅱ5b	鉢	BⅡid3	体部：縄文　口頸部：連続刺突列と沈線・口唇から口縁にかけて沈線	29	
6	CI 100	Ⅱ5b	鉢	BⅠih4	体部：LR縄文・下端は段がつき無文　口縁部：沈線間に連続刻目・B突起6個　補珍土器	30	
7	CI 100	Ⅱ5b	浅鉢	BⅡⅲa2	体部：曲線的な磨消縄文による雲形文(LR縄文)　口頸部：沈線　口縁部：口唇を彫去した波状(B突起)	31	
8	CI 100	Ⅱ5b	浅鉢	BⅡⅲa2	体部：曲線的な磨消縄文による雲形文(LR縄文)　口頸部：沈線　口縁部：口唇を彫去した波状(B突起)	32	Ⅴ5
9	CI 100	Ⅱ5b	浅鉢	a	体部：曲線的な磨消縄文による雲形文(LR縄文)・下端は沈線・内面下端に段	33	

第７図　遺物包含層出土土器(4)

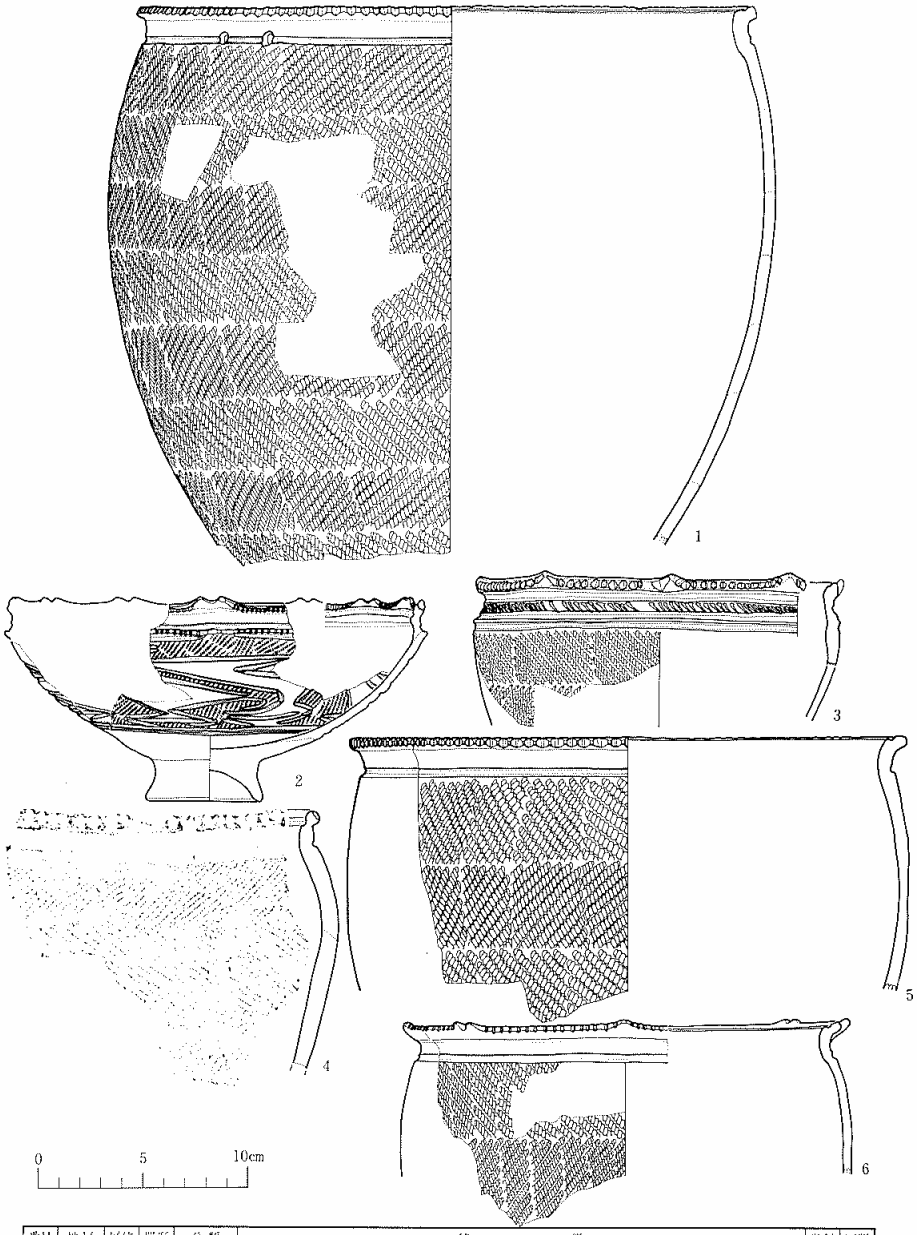


第８図　遺物包含層出土土器(5)



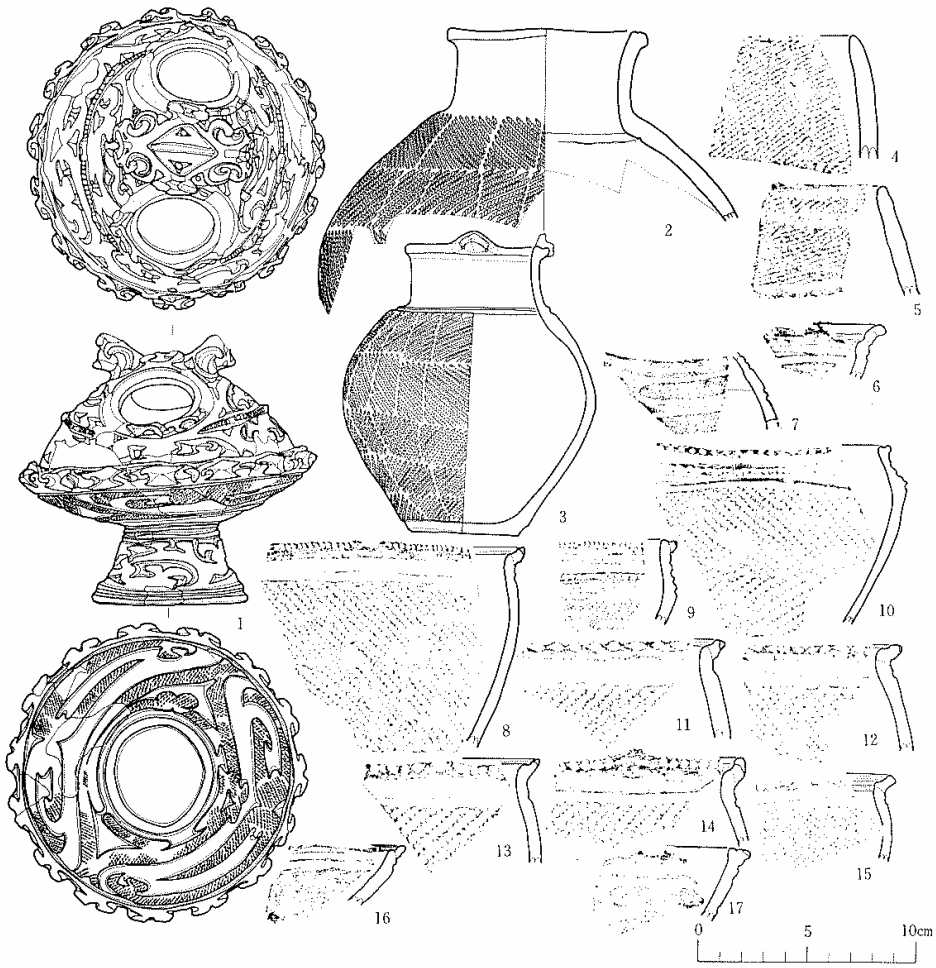
番号	地区	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
8-1	CI 100	Ⅱ4d	深鉢	A Ⅰ i ハ	体部：RL・LR縄文横回転	34	
2	CI 100	Ⅱ4b	浅鉢	B Ⅱ ? f 2	体部：下半は無文・上半は入組工字文　口縁部：口唇に縦長刻目・突起　混入	35	
3	CI 100	Ⅱ4b	鉢	D Ⅱ i 7	口頸部：沈線とC字状文　口縁部：彫去による小波状	36	
4	CI 100	Ⅱ4a	鉢	D Ⅰ i h1	体部：RL・LR縄文横回転羽状	37	
5	CI 100	Ⅱ4a	鉢	B Ⅰ i d4	体部：磨消縄文による文様(LR縄文)　口縁部：沈線間に連続刻目・口唇に菱形刻目・内面に沈線	38	
6	CI 100	Ⅱ4a	鉢	B Ⅰ i h3	体部：RL縄文横回転　口頸部：沈線と連続刺突列　口唇部：菱形刻目・内面に沈線	39	
7	CI 100	Ⅱ4a	鉢		体部：RL縄文横回転・沈線・磨消縄文	40	
8	CI 100	Ⅱ4a	鉢	Ⅰ i	体部：磨消縄文(LR縄文横回転)	41	
9	CI 100	Ⅱ4a	鉢		体部：磨消縄文による入組文	42	
10	CI 100	Ⅱ4a	浅鉢	a	体部：曲線的な磨消縄文による曲線的な雲形文(LR縄文)	43	
11	CI 100	Ⅱ4a	浅鉢	a	体部：曲線的な磨消縄文による曲線的な雲形文(LR縄文)	44	
12	CI 100	Ⅱ4a	浅鉢	B Ⅱ Ⅲ c 2	体部：LR縄文横回転・沈線による雲形文・内面に隆帯(LR縄文)　口頸部：沈線　口縁部：彫去による小波状	45	
9-1	CI 100	Ⅱ4a	浅鉢	B Ⅰ ⅳ a 2	体部：曲線的な磨消縄文による雲形文(LR縄文横回転)・内面に隆帯(LR縄文)　口縁部：A突起とB突起・口唇に沈線	46	
2	CI 100	Ⅱ4a	浅鉢	B Ⅰ a 2	体部：曲線的な磨消縄文による雲形文(LR縄文)　口頸部：沈線　口縁部：口唇を彫去	47	Ⅲ 6
3	CH100	Ⅱ2j	深鉢	B Ⅰ i 2 f	体部：LR・RL縄文横回転羽状　頸部：無文で下端に沈線　口縁部：口唇に円形の刻目・内面に沈線	48	Ⅴ 7
4	CH100	Ⅱ2j	深鉢	A Ⅰ i ハ	体部：RL縄文横回転	49	
5	CH100	Ⅱ2j	鉢	B Ⅰ ⅳ h1	体部：RL縄文横回転　口頸部：沈線　口縁部：A突起4個・B突起2個・口唇に縦長刻目・内面に沈線	50	
6	CH100	Ⅱ2j	鉢	B Ⅰ i h1	体部：下端に段・RL・LR縄文横回転羽状　口頸部：沈線　口縁部：口唇に菱形刻目・内面に沈線	51	
7	CH100	Ⅱ2j	浅鉢	B Ⅰ i a 2	体部：曲線的な磨消縄文による雲形文(LR縄文)　口頸部：沈線　口縁部：口唇を彫去	52	
8	CG100	Ⅱ2j	深鉢	B Ⅰ Ⅲ 2 f	体部：LR・RL縄文横回転羽状　頸部：無文で下端に沈線　口縁部：B突起・口唇に縦長刻目・内面に沈線	53	
9	CH100	Ⅱ2j	深鉢	B Ⅰ i 2 f	体部：RL・LR縄文横回転羽状　頸部：無文で下端に沈線　口縁部：菱形刻目・内面に沈線	55	

第9図　遺物包含層出土土器(6)



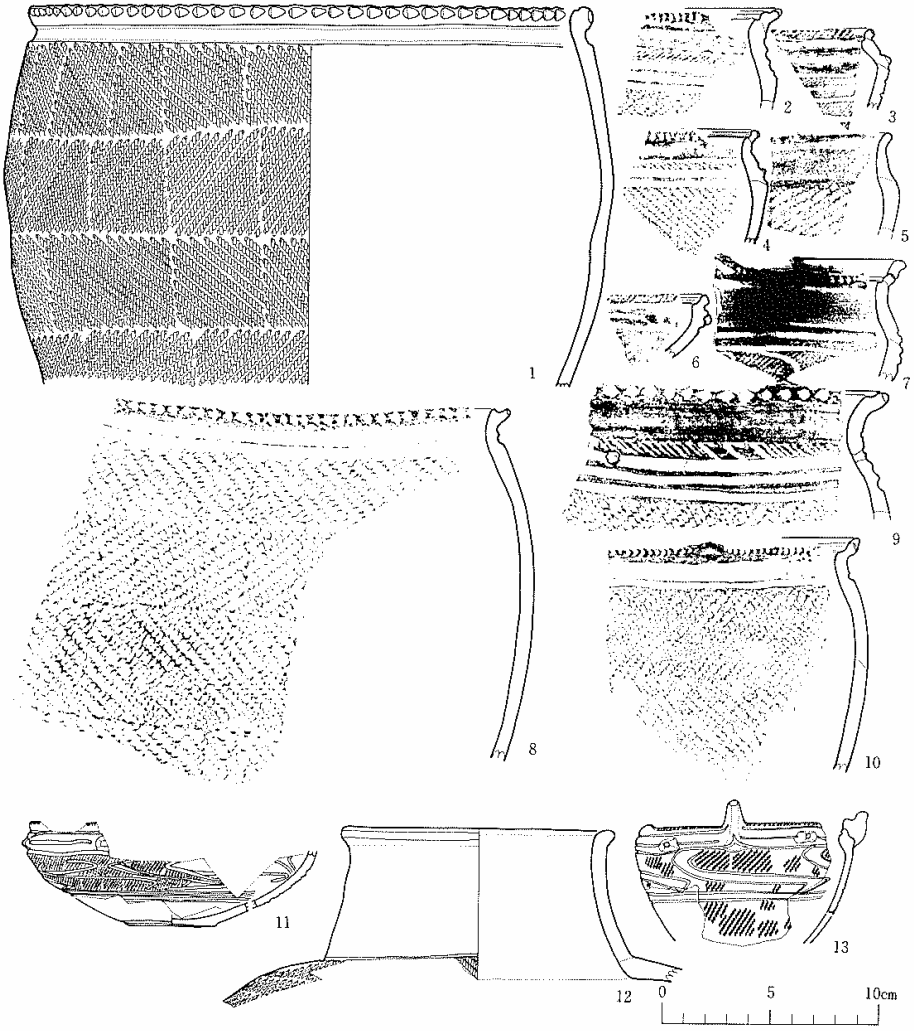
番号	地区	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	CG100	Ⅱ2j	深鉢	B Ⅰ i 2イ	体部：LR・RL縄文横回転羽状　頸部：無文で下端に沈線・補修孔2個　口縁部：口唇に菱形刻目・内面に沈線	57	Ⅱ2
2	CG100	Ⅱ2j	浅鉢	A Ⅰ ⅲb1	体部：平面的な煙消縄文による直線的雲形文(LR縄文)　口頸部：下端に陰線・縦長刻目・突起　口縁部：B突起・内外に縦長刻目	58	
3	CH100	Ⅱ2j	鉢	B Ⅰ ⅱh3	体部：RL・LR縄文横回転羽状　口頸部：連続刺突列と沈線　口縁部：A突起・内外に縦長刻目	59	
4	CG100	Ⅱ2h	深鉢	B Ⅰ 2イ	体部：LR・RL縄文横回転羽状　頸部：無文で下端に沈線　口縁部：口唇に縦長刻目・内面に沈線	60	
5	CH100	Ⅱ2j	深鉢	B Ⅰ i 2イ	体部：RL・LR縄文横回転羽状　頸部：無文で下端に沈線　口縁部：口唇に略菱形刻目・内面に沈線	61	
6	CH100	Ⅱ2j	深鉢	B Ⅰ iv2イ	体部：RL・LR縄文横回転羽状　頸部：無文で下端に沈線　口縁部：A突起とB突起・口唇に菱形刻目・内面に沈線	62	

第10図　遺物包含層出土土器(7)



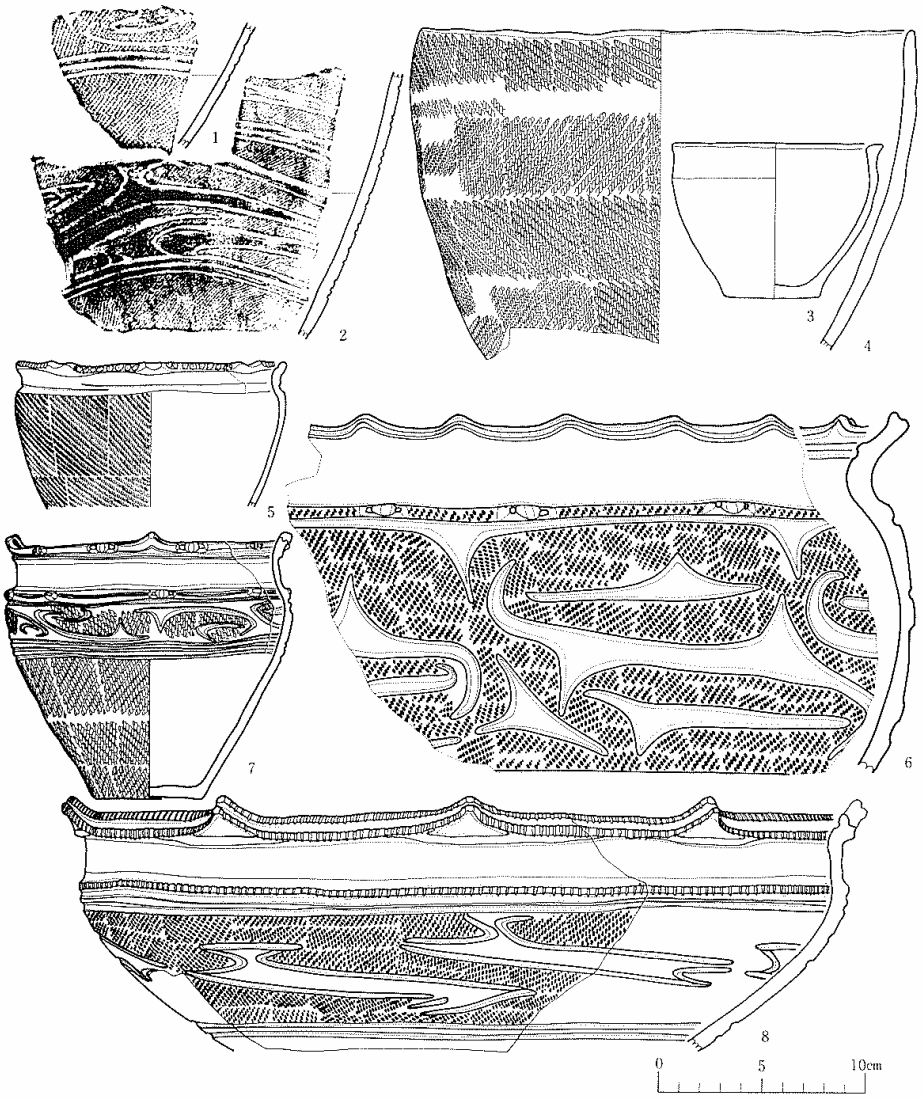
番号	地区	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	CI 100	Ⅱ3d	香炉		脚部：深い沈線による雲形文　体部：下半は曲線的な磨消縄文による雲形文(LR縄文) 上半は遺形的な雲形文・突起は彫去による B突起　体部上半外面に丹塗	63	Ⅳ7
2	CG100	Ⅱ2j	壺	Aⅰj	体部：RL・LR縄文横回転羽状　頸部：直立　口縁部：口唇に沈線	64	Ⅲ7
3	CG100	Ⅱ2j	壺	Aⅱj	体部：下端に段・LR・RL縄文横回転羽状・上端に沈線　頸部：直立　口縁部：A突起・口唇に沈線	65	Ⅲ8
4	CH100	Ⅱ3c	深鉢	AⅠハ	体部：LR縄文横回転	66	
5	CH100	Ⅱ3c	深鉢	AⅠハ	体部：LR縄文横・斜回転	67	
6	CH100	Ⅱ3c	浅鉢	BⅠⅲ2	口頸部：沈線　口縁部：B突起・内面に沈線　内外面丹塗	68	
7	CH100	Ⅱ3c	壺		体部：平面的な磨消縄文・平行線と曲線的文様　外面丹塗	69	Ⅴ12
8	CH100	Ⅱ3b	深鉢	BⅠⅲ2イ	体部：RL縄文横回転　頸部：無文で下端に沈線　口縁部：B突起・口唇に縦長刻目・内面に沈線	70	
9	CH100	Ⅱ3b	鉢	BⅠⅰh3	体部：LR縄文横回転　口頸部：連続刺痕列と沈線　口縁部：口唇を肥厚させ菱形刻目・頂部に沈線	71	
10	CH100	Ⅱ3c	鉢	BⅠⅰh3	体部：RL・LR縄文横回転羽状　口頸部：連続刺痕列と沈線　口縁部：口唇に菱形刻目・頂部に沈線	72	Ⅴ9
11	CH100	Ⅱ3b	深鉢	BⅠⅰ1イ	体部：LR縄文横回転　頸部：無文・段　口縁部：口唇に菱形刻目・内面に沈線	73	
12	CH100	Ⅱ3a	深鉢	BⅠⅰ2イ	体部：RL縄文横回転　頸部：無文で下端に沈線　口縁部：口唇に菱形刻目・内面に沈線	74	
13	CH100	Ⅱ3c	深鉢	CⅠⅲ2イ	体部：LR縄文横回転　頸部：無文で下端に沈線　口縁部：B突起・口唇に菱形刻目・内面に沈線	75	
14	CH100	Ⅱ3a	深鉢	CⅠⅱ2イ	体部：LR縄文横回転　頸部：無文で下端に沈線　口縁部：A突起・口唇に菱形刻目・内面に沈線	76	
15	CH100	Ⅱ3a	深鉢	BⅠⅲ2イ	体部：RL・LR縄文横回転　頸部：無文で下端に沈線　口縁部：B突起・口唇に菱形刻目・内面に沈線	77	
16	CH100	Ⅱ3b	浅鉢	BⅠk2	体部：無文　口頸部：沈線　口縁部：内面に沈線　内外面丹塗	78	
17	CH100	Ⅱ3b	浅鉢	Ba2	体部：曲線的な磨消縄文の雲形文(LR縄文)　口頸部：沈線　口縁部：彫去によるB突起	79	

第11図　遺物包含層出土土器(8)



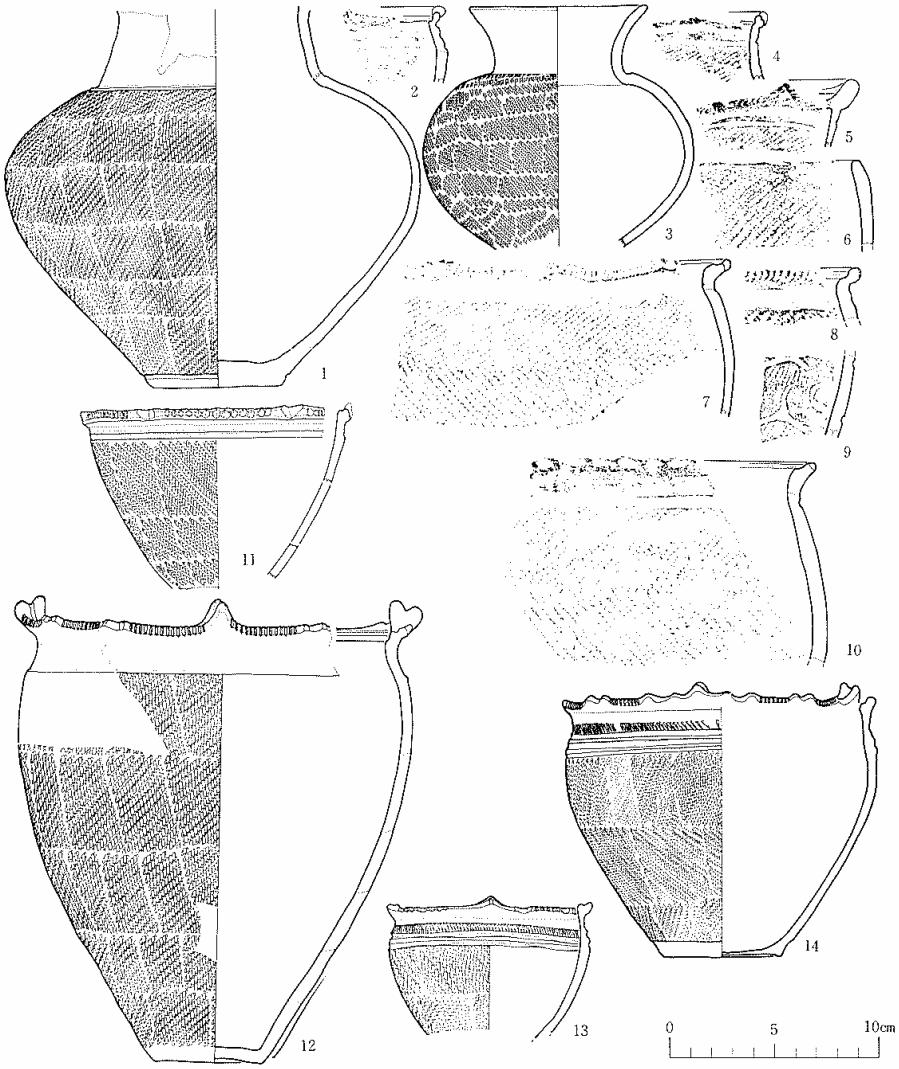
番号	地区	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	CH100	Ⅱ3b	深鉢	B Ⅰ i1f	体部：RL・LR縄文横回転羽状　頸部：無文・段　口縁部：菱形刻目・内面に沈線	80	
2	CH100	Ⅱ2i	鉢	B Ⅰ h3	体部：RL縄文横回転　口頸部：連続刺突列と沈線　口縁部：口唇に菱形刻目・内面に沈線	81	
3	CH100	Ⅱ2i	鉢	B Ⅰ l	体部：LR縄文横回転・磨消縄文　口頸部：無文で下端に沈線　口縁部：口唇に縦長刻目・内面に沈線	82	
4	CH100	Ⅱ3a	鉢	B Ⅰ h3	体部：LR縄文横回転　口頸部：連続刺突列と沈線　口縁部：突起・縦長刻目・内面に沈線	83	
5	CH100	Ⅱ2i	鉢	D Ⅰ i h1	体部：LR縄文横回転　口頸部：無文・下端に段	84	
6	CH100	Ⅱ2i	浅鉢	B Ⅰ i k5	体部：無文　口頸部：眼鏡状浮文と突起　口縁部：口唇に縦長刻目	85	
7	CH100	Ⅱ2i	鉢	D Ⅰ ⅱd1	体部：平面的な磨消縄文による文様(LR縄文)　口頸部：無文　口縁部：A突起・縦長刻目・内面に沈線	86	
8	CH100	Ⅱ3b	深鉢	B Ⅰ l2f	体部：RL・LR縄文横回転羽状　頸部：無文で下端に沈線　口縁部：口唇に菱形刻目・内面に沈線	87	
9	CG100	Ⅱ2i	深鉢	D Ⅰ i3f	体部：LR縄文横回転　頸部：連続刺突列と沈線・補修孔個　口縁部：口唇に菱形刻目・内面に沈線	88	V10
10	CH100	Ⅱ2i	深鉢	B Ⅰ ⅱ2f	体部：LR・RL縄文横回転羽状　頸部：無文で下端に段　口縁部：A突起・菱形刻目・内面に沈線	89	
11	CG100	Ⅱ2i	浅鉢	A Ⅰ i b5	体部：平面的な磨消縄文(LR縄文)　口頸部：眼鏡状浮文と突起　口縁部：口唇に縦長刻目・内面に沈線　外面丹塗	90	
12	CG100	Ⅱ2i	壺		体部：RL・LR縄文横回転羽状　頸部：内傾　口縁部：短く緩かに外傾	91	
13	CH100	Ⅱ2i	鉢	B Ⅰ Va5	体部：平面的な磨消縄文による羽状文(LR縄文)　口頸部：眼鏡状浮文と突起 口縁部：鳥頭状突起と B突起・口唇に縦長刻目・内面に沈線	92	

第12図　遺物包含層出土土器(9)



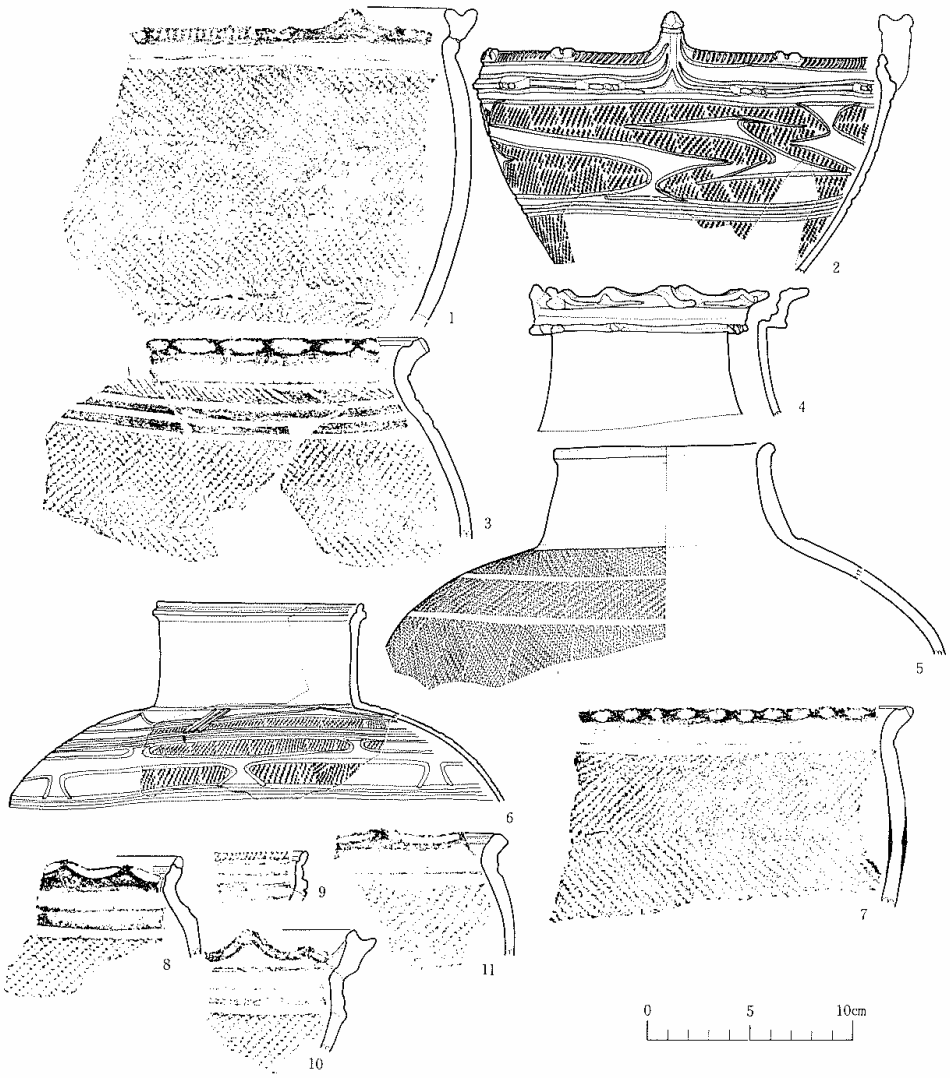
番号	地区	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	CH100	Ⅱ2i	鉢	a	体部：平面的な磨消縄文による雲形文(LR縄文)	93	
2	CH100	Ⅱ2i	鉢	a	体部：平面的な磨消縄文による雲形文(LR縄文)	94	
3	CG100	Ⅱ2h	鉢	BⅠⅰ1	体部～口縁部：無文	95	
4	CG100	Ⅱ2h	深鉢	AⅠ	体部：RL・LR縄文横回転羽状	96	
5	CG100	Ⅱ2h	鉢	BⅠⅲb1	体部：R縄文横回転　口頸部：無文・下端に沈線　口縁部：B突起・口唇に篦形刻目・内面に沈線	97	
6	CH100	Ⅱ2h	鉢	AⅡⅲb2	体部：彫りの深い磨消縄文による雲形文(LR縄文)　頸部：無文・下端に隆線と突起　口縁部：同高の波状・口唇に沈線・内面に沈線	98	Ⅱ3
7	CG100	Ⅱ2h	鉢	DⅠⅣc5	体部：下半はLR・RL縄文横回転羽状・上半は磨消縄文によるC字入組文(RL縄文) 口頸部：無文・下端に隆線状浮文と突起　口縁部：A突起(4個)とB突起(8個)	99	Ⅱ6
8	CH100	Ⅱ2h	浅鉢	AⅡⅰb1	体部：平面的な磨消縄文による雲形文(LR縄文)　口頸部：無文・下端に隆線に篦長刻目 口縁部：同高の波状・篦長刻目・沈線・内面に沈線	100	Ⅲ4

第13図　遺物包含層出土土器(10)



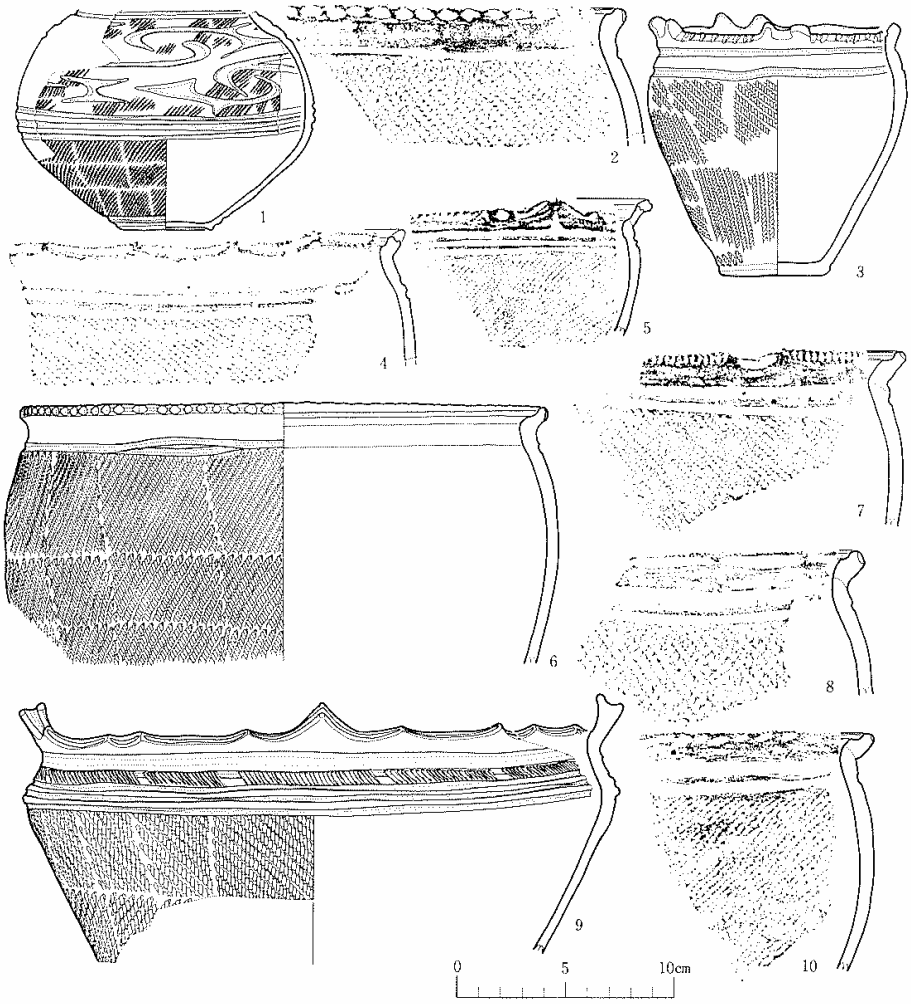
番号	地区	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	CG100	Ⅱ2h	壺		体部：下端に段・LR縄文横回転・上端に沈線	101	
2	CH100	Ⅱ2d	鉢	B Ⅰ h1	体部：LR縄文横回転　口頸部：沈線　口縁部：突起・縦長刻目・内面に沈線	102	
3	CH100	Ⅱ2h	壺	D Ⅰ j	体部：RL縄文横回転	103	Ⅳ2
4	CH100	Ⅱ2g	注口		5と同一個体　頸部：磨消縄文による文様(LR縄文)　口縁部：突起・口脇に沈線と縦長刻目・内面に沈線　外面丹塗	104	
5	CH100	Ⅱ2g	注口		体部：LR縄文横回転・屈曲部でA突起とB突起・縦長刻目と沈線　外面丹塗	105	
6	CG100	Ⅱ2f	深鉢	A Ⅰ i ハ	体部：LR縄文横回転	106	
7	CG100	Ⅱ2d	深鉢	B Ⅰ iv2イ	体部：LR・RL縄文横回転羽状　頸部：無文　口縁部：A突起とB突起・縦長刻目・内面に沈線	107	
8	CG100	Ⅱ2f	深鉢	B Ⅰ i イ	体部：LR縄文　頸部：無文　口縁部：縦長刻目・内面に沈線	108	
9	CG100	Ⅱ2f			体部：磨消縄文による三叉文(LR縄文)	109	
10	CH100	Ⅱ2d	深鉢	C Ⅰ i 2ロ	体部：LR・RL縄文横回転羽状　頸部：無文・下端に沈線　口縁部：口脇に横長楕円形の刻目・内面に沈線	110	
11	CG100	Ⅱ2g	壺	B Ⅰ iii h1	体部：RL縄文横回転　口頸部：無文・下端に沈線　口縁部：B突起・口脇に菱形刻目・頂部に沈線	111	
12	CG100	Ⅱ2d	深鉢	D Ⅰ iv1イ	体部：LR・RL縄文横回転羽状　頸部：無文・段　口縁部：A突起とB突起・口脇に縦長刻目・内面に沈線	112	
13	CH100	Ⅱ2g	鉢	B Ⅰ iv h3	体部：RL・LR縄文横回転羽状　口頸部：連続刺突列と沈線　口縁部：A突起とB突起・菱形刻目・内面に沈線	113	
14	CG100	Ⅱ2d	鉢	B Ⅰ iv h3	体部：下端に段・LR・RL縄文横回転羽状　口頸部：連続刺突列と沈線　口縁部：A突起とB突起・縦長刻目・内面に沈線	114	Ⅱ4

第14図　遺物包含層出土土器(11)



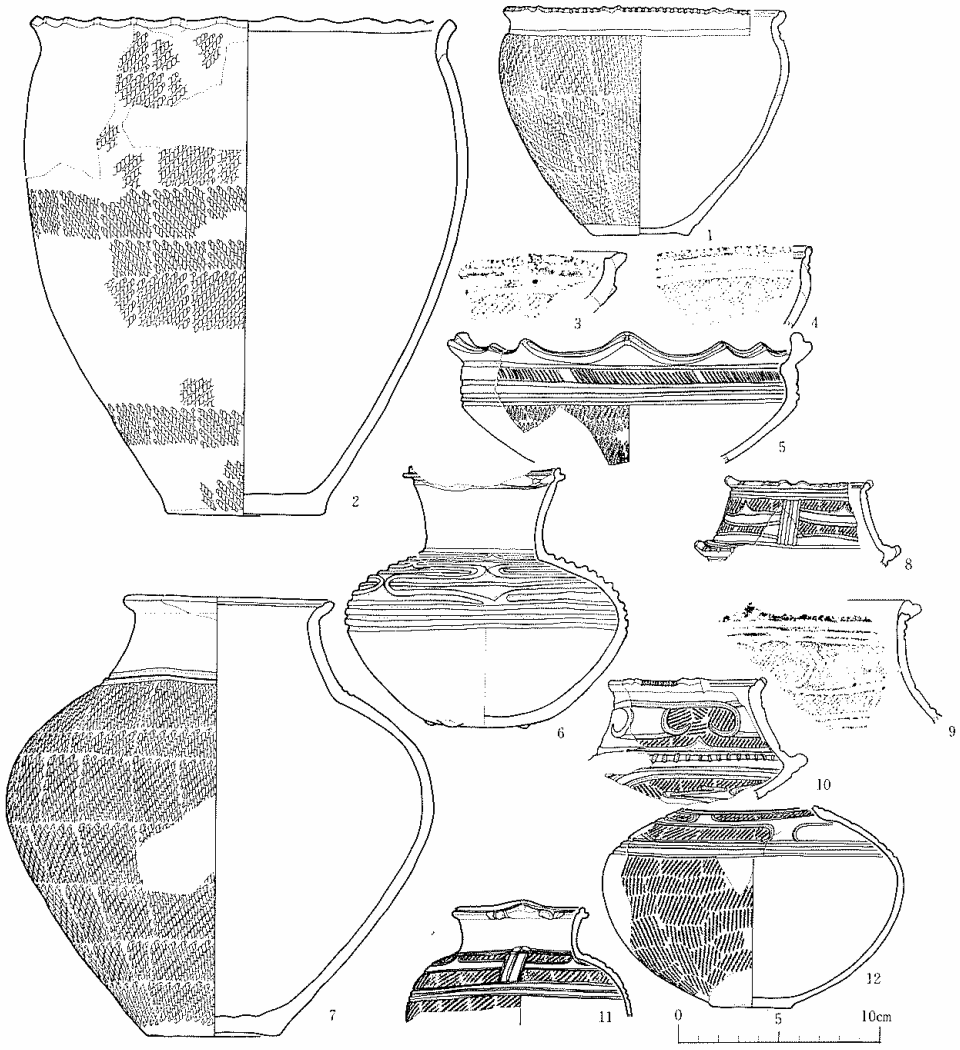
番号	地区	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	CH100	Ⅱ2d	深鉢	BⅠⅣ2イ	体部：RL・LR縄文横回転羽状　頸部：無文・下端に沈線　口縁部：A突起・口唇に縦長刻目・内面に沈線	115	
2	CG100	Ⅱ2d	鉢	BⅠⅤa2	体部：平面的な磨消縄文による鋸歯文（LR縄文）　口頸部：無文・下端に隆起と突起 口縁部：鳥頭状突起とB突起・口唇に縦長刻目・内面に沈線	116	Ⅱ5
3	CG100	Ⅱ2d	深鉢	DⅠ13ロ	口縁部：口縁帯をつくり、その上端にA突起とB突起・下端にB突起（6個）　内外面丹塗	117	
4	CG100	Ⅱ2d	壺	GⅣ	体部：RL・LR縄文横回転羽状	118	
5	CG100	Ⅱ2d	壺	HⅠj	体部：平面的な磨消縄文による長楕円文と擬位沈線（LR縄文）　外面体部丹塗	119	Ⅳ1
6	CG100	Ⅱ2d	壺	EⅠc	体部：LR・RL縄文横回転羽状　頸部：無文・下端に沈線　口縁部：横長楕円形刻目・内面に沈線	120	Ⅳ3
7	CH100	Ⅱ2c	深鉢	CⅠi2ロ	体部：LR縄文横回転　口頸部：無文・下端に沈線　口縁部：同高の波状・口唇に沈線・内面に沈線	121	Ⅴ13
8	CH100	Ⅱ2c	鉢	BⅡmh1	体部：LR縄文横回転　口頸部：無文・下端に沈線　口縁部：同高の波状・口唇に沈線・内面に沈線	122	
9	CH100	Ⅱ2c	鉢	BⅠi5	口頸部：眼鏡状浮文と突起　口縁部：口唇に縦長刻目・内面に沈線	123	
10	CH100	Ⅱ2c	深鉢	CⅡi2ハ	体部：LR縄文横回転　頸部：無文・下端に沈線　口縁部：同高の波状・口唇に沈線・内面に沈線	124	
11	CH100	Ⅱ2c	鉢	BⅡb1	体部：LR縄文横回転　口頸部：沈線　口縁部：A突起・内面に沈線	125	

第15図　遺物包含層出土土器(12)



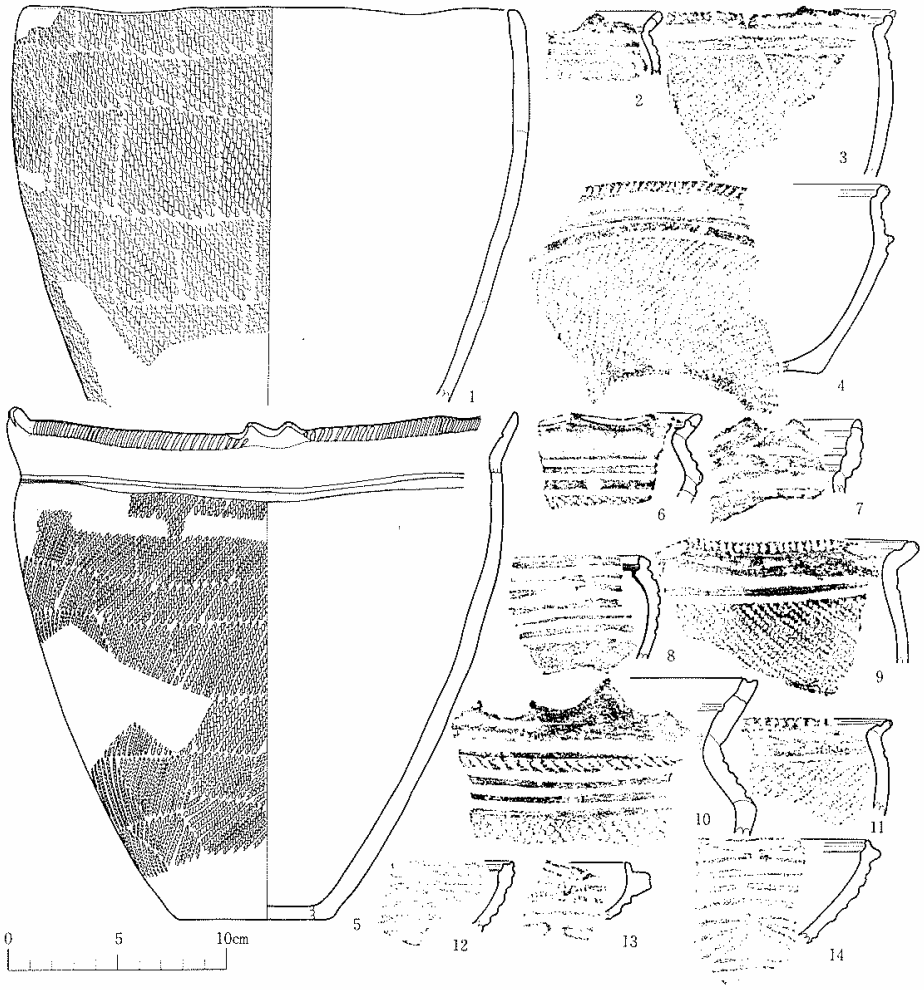
番号	地区	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	CG100	Ⅱ2c	壺	a	体部：下端は沈線・下半はLR縄文・上半は磨消縄文による雲形文(LR縄文)	126	
2	CG100	Ⅱ2b	深鉢	CⅠi2ロ	体部：RL縄文横回転　頸部：無文・下端に沈線　口縁部：横長楕円形の刻目・内面に沈線	127	
3	CG100	Ⅱ2b	鉢	BⅠⅲb1	体部：下端に沈線・RL縄文横・斜回転　口頸部：下端と屈曲部に沈線　口縁部：B突起4個・刻目・内面に沈線	128	
4	CG100	Ⅱ2b	深鉢	BⅡi2ハ	体部：RL縄文横回転　頸部：無文で下端に沈線　口縁部：同高の波状・口唇に沈線・内面に沈線	129	
5	CG100	Ⅱ2b	鉢	BⅠⅳb1	体部：LR縄文横回転　頸部：無文で下半に沈線　口縁部：A突起とB突起・口唇に縦長刻目・内面に沈線	130	
6	CG100	Ⅱ2b	深鉢	BⅠi2イ	体部：LR縄文横回転　頸部：無文で下端に沈線　口縁部：B突起・縦長刻目・内面に沈線	131	
7	CG100	Ⅱ2b	深鉢	CⅠⅲ2イ	体部：LR縄文横回転　頸部：無文で下端に沈線　口縁部：菱形刻目・内面に沈線	132	
8	CG100	Ⅱ2b	深鉢	CⅡi2ハ	体部：RL縄文横回転　頸部：無文で下端に沈線　口縁部：同高の波状・口唇に沈線・内面に沈線	133	V14
9	CG100	Ⅱ2b	鉢	BⅡh3	体部：RL・LR縄文横回転　口頸部：連続刻目列と沈線　口縁部：A突起とB突起連続・口唇に沈線・内面に沈線	134	
10	CG100	Ⅱ2b	鉢	BⅠih1	体部：LR縄文横回転　口頸部：無文で下端に沈線　口縁部：横長楕円形刻目・内面に沈線	135	

第16図　遺物包含層出土土器(13)



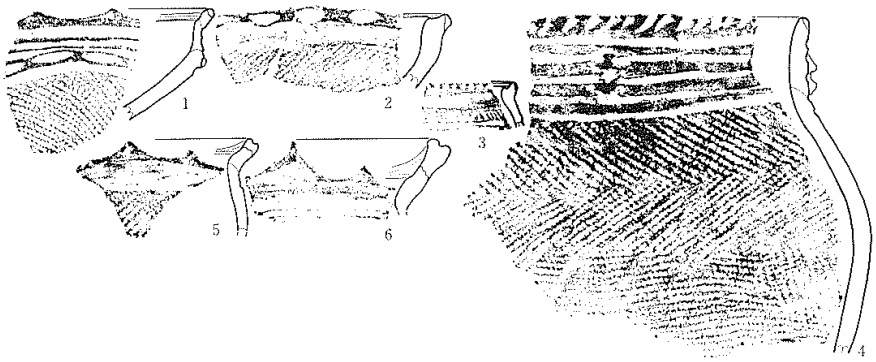
番号	地区	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	CG100	Ⅱ2b	鉢	BⅠⅲh1	体部：LR・RL縄文横回転　口頸部：無文で下端に沈線　口縁部：B突起(4個)・縦長刻目・内面に沈線	136	
2	CG100	Ⅱ2b	深鉢	CⅡⅰ1ハ	体部：LR・RL縄文横回転　頸部：無文　口縁部：同高の波状	137	
3	CG100	Ⅱ2b	浅鉢	BⅠⅲj2	体部：LR縄文横回転　口頸部：無文で下端に沈線　口縁部：B突起・口唇に縦長刻目	139	
4	CG100	Ⅱ2b	浅鉢	BⅠⅰj2	体部：LR縄文横回転　口頸部：沈線　口縁部：菱形刻目・内面に沈線	140	
5	CG100	Ⅱ2b	浅鉢	AⅡⅲj6	体部：LR縄文横回転　口頸部：連続刺痕列と沈線　口縁部：A突起と波状・口唇に沈線	141	Ⅴ16
6	CG100	Ⅱ2b	壺	e	底部：底い脚(4個)　体部：下半は無文・上半は入組工字文　口縁部：内面に沈線　外面と口縁内面丹塗	142	
7	CG100	Ⅱ2b	壺	Bⅰj	体部：LR縄文横回転　頸部：下端に沈線　口縁部：内面に沈線	143	Ⅳ5
8	CG100	Ⅱ2b	注口		体部：上端は刻目とB突起　頸部：磨消縄文による横位・縦位沈線(LR縄文)　口縁部：刻目とB突起・内面に沈線　外面丹塗	144	
9	CG100	Ⅱ2b	注口		頸部：磨消縄文による施文(上下端に沈線・その間に雲形文・地文はLR縄文)　口縁部：A突起とB突起・口唇に沈線　外面丹塗	145	Ⅴ15
10	CG100	Ⅱ2b	注口	ⅳ	体部：磨消縄文による直線的雲形文(LR縄文)・上端は刻目　頸部：磨消縄文(LR縄文)　口縁部：B突起と縦長刻目・内面沈線	170	
11	CG100	Ⅱ2b	壺	ⅳc	体部：下半はLR縄文・上半は磨消縄文による長楕円文と横位沈線に連結する縦位沈線　口縁部：A突起とB突起・口唇と内面に沈線	146	Ⅳ4
12	CG100	Ⅱ2b	壺	b	体部：下半はLR縄文・上半は磨消縄文による長楕円文(LR縄文)　外面丹塗	147	

第17図　遺物包含層出土土器(14)

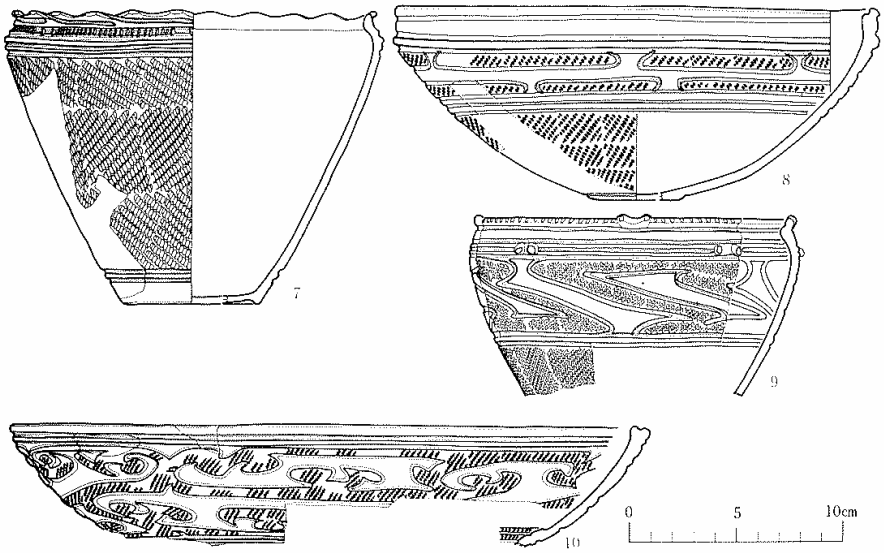


番号	地区	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	CH100	Ⅱ2a	深鉢	AⅠⅠハ	体部：RL縄文横回転	148	
2	CG100	Ⅱ2a	鉢	BⅠe1	体部：弧線文の中に三叉文を配する　口頸部：無文で上下端に沈線　口縁部：突起・内面に沈線	149	
3	CG100	Ⅱ2a	鉢	BⅠⅲh1	体部：LR縄文横回転　口頸部：無文で上半に沈線　口縁部：B突起・口唇に刻目・内面に沈線	150	
4	CG100	Ⅱ2a	浅鉢	AⅠⅰj2	体部：LR縄文　口頸部：無文で下半に沈線　口縁部：口唇に縦長刻目・内面に沈線	151	
5	CG100	Ⅱ1c	深鉢	CⅠⅲ2f	体部：LR縄文横回転　頸部：無文で下端に沈線　口縁部：B突起(4個)・縦長刻目・内面に沈線	152	Ⅱ7
6	CG100	Ⅱ1c	鉢	BⅡⅲh1	体部：RL縄文　口頸部：無文で下半に沈線・最下端沈線の一部を彫去　口縁部：同高の波状・口唇と内面に沈線	153	
7	CG100	Ⅱ1c			体部：無文　口縁部：B突起・内面沈線	154	
8	CG100	Ⅱ1c	鉢	Ⅰⅰi1	体部：無文　口頸部：沈線で一部を彫去　口縁部：内面に沈線	155	
9	CG100	Ⅱ1c	深鉢	CⅠ2f	体部：RL縄文横回転　頸部：無文で下端に沈線　口縁部：突起・縦長刻目・内面に沈線	156	
10	CG100	Ⅱ1c	鉢	BⅡⅳh3	体部：RL縄文横回転　口頸部：連続刺突列と沈線　口縁部：A突起とB突起・口唇と内面に沈線	157	
11	CG100	Ⅱ1b	鉢	BⅠⅰh1	体部：LR縄文横回転　口頸部：無文で下端に沈線　口縁部：菱形刻目・内面に沈線	158	
12	CG100	Ⅱ1b	浅鉢	BⅠⅰg2	体部：π字形工字文　口頸部：沈線　口縁部：内面に沈線	159	
13	CG100	Ⅱ1b	浅鉢		体部：工字文？　口頸部：下端に突起・隆線に刻目	160	
14	CG100	Ⅱ1b	浅鉢	BⅠf7	体部：入組工字文　口頸部：口縁に連絡する隆線　口縁部：突起・内面に沈線	161	Ⅴ17

第18図　遺物包含層出土土器(15)



番号	地区	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	CG100	Ⅱ1b	浅鉢	AⅡⅠj5	体部：RL縄文横回転　口頸部：無文で下端に隆起状浮文　口縁部：同高の波状・口唇と内面に沈線	162	
2	CG100	Ⅱ1b	浅鉢	AⅠⅠj2	体部：LR横回転縄文　口頸部：無文　口縁部：横長楕円の大きな刻目・内面に沈線	163	
3	CG100	Ⅱ1a	鉢	BⅠⅠ6	口頸部：連続刺突列と沈線　口縁部：菱形刻目・内面に沈線	164	
4	CG100	Ⅱ1a	深鉢	EⅠⅠ64	体部：RL・LR縄文横・斜回転　頸部：沈線と突起　口縁部：縦長刻目	165	
5	CG100	Ⅱ1a	鉢	BⅡⅳh1	体部：LR縄文横回転　口頸部：無文で下端に沈線　口縁部：波状・A突起・口唇と内面に沈線	166	
6	CG100	Ⅱ1a	鉢	Ⅰ	口縁部：A突起・口唇と内面に沈線	167	



番号	地区	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
7	CJ100	不明	鉢	BⅡⅠh3	体部：下端に沈線・RL・LR縄文横回転　口頸部：連続刺突と沈線　口縁部：形去による小波状	168	
8	CH100	不明	浅鉢	AⅠⅠd2	体部：下半はLR縄文横回転・上半は磨消縄文による長楕円文(LR縄文)　口頸部：無文・内面に沈線	169	
9	CH100	不明	鉢	BⅠⅢa2	体部：下半はLR縄文横回転・上半は磨消縄文による直線的な菱形文　口頸部：沈線と突起　口縁部：B突起と縦長刻目・内面に沈線	171	
10	CJ100	不明	浅鉢	BⅠⅠa2	体部：磨消縄文による半浮彫的な菱形文(LR縄文)・内面に隆帯(LR縄文)　口頸部：沈線　口縁部：口唇に沈線	172	

第19図　遺物包含層出土土器(16)

4　土壙とその出土遺物

土壙として遺構番号を付したものは７基ある。しかし精査の結果、第１・３・４・６・７号土壙としたものはわずかに凹む程度のもので、地山漸移層を埋土にしていることから遺構とは捉えられなかった。したがって、以下第２・５号土壙について記述する。

第２号土壙（第 20 図）

〔確認面〕ＢＴ92 区第Ⅱ２層上面で確認された。

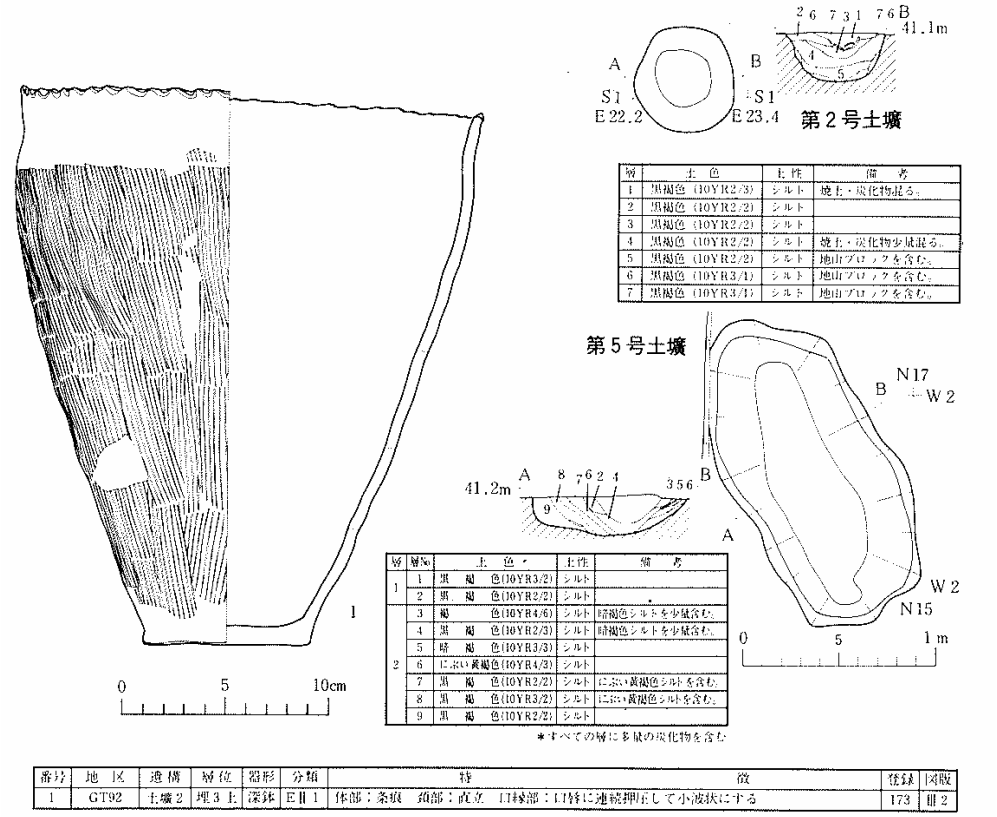
〔平面・規模〕土壙の平面形は上端・下端ともほぼ円形である。規模は上端直径 1.1 m・下端直径 60㎝、深さ 50㎝ である。

〔堆積土〕土壙内堆積土は７層にわかれる。第１・３層は土壙中央部に、第２層は西側に、第４・５層は全体に、第６層は壁際に、第７層は底面から壁に移行する部分にそれぞれ堆積している。人為的堆積の可能性がある。

〔遺物出土状態〕土壙中央部の第３層上面から、横位の状態で深鉢が一点出土している。

第５号土壙（第 20 図）

〔確認面〕ＣＦ100 区第Ⅱ２層上面で確認された。



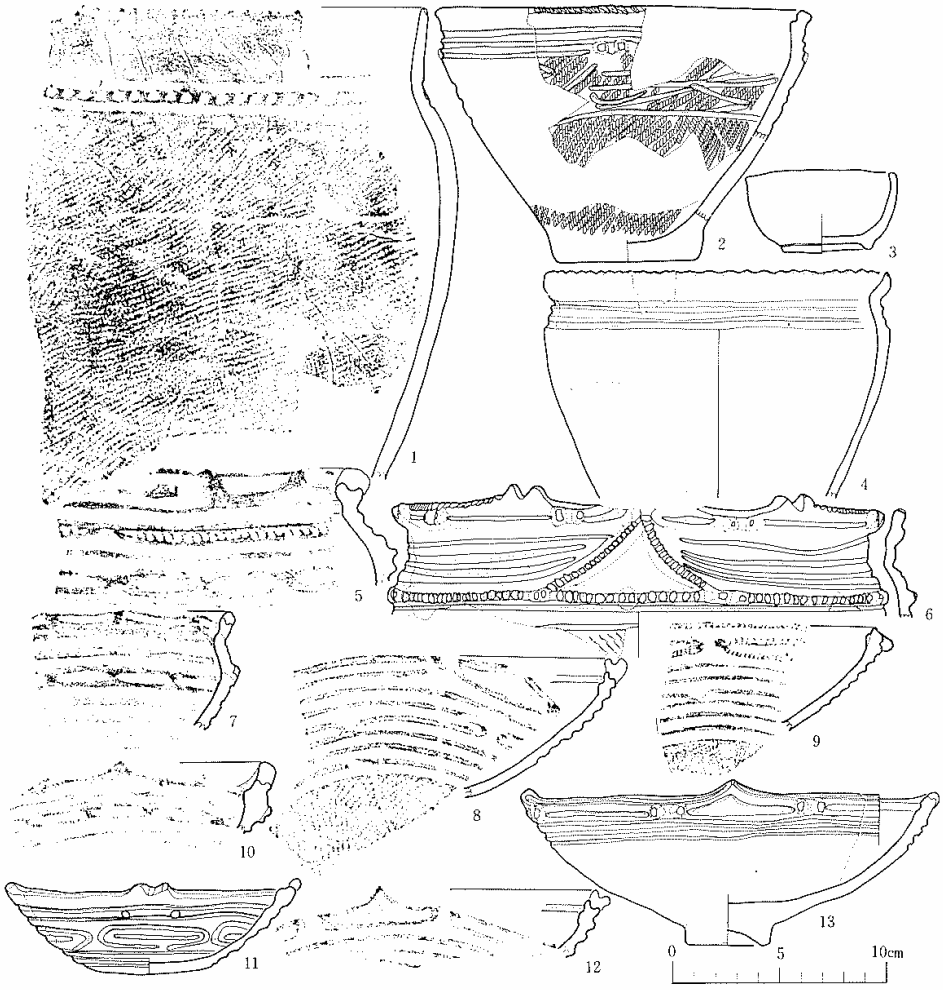
層	土色	土性	備考
1	黒褐色（10YR2/3）	シルト	焼土・炭化物混る。
2	黒褐色（10YR2/2）	シルト	
3	黒褐色（10YR2/2）	シルト	
4	黒褐色（10YR2/2）	シルト	焼土・炭化物少量混る。
5	黒褐色（10YR2/2）	シルト	地山ブロックを含む。
6	黒褐色（10YR3/1）	シルト	地山ブロックを含む。
7	黒褐色（10YR3/1）	シルト	地山ブロックを含む。

層	層No.	土色	土性	備考
1	1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
	2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	
2	3	褐色(10YR4/6)	シルト	暗褐色シルトを少量含む。
	4	黒褐色(10YR2/3)	シルト	暗褐色シルトを少量含む。
	5	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
	6	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	
	7	黒褐色(10YR2/2)	シルト	にぶい黄褐色シルトを含む。
	8	黒褐色(10YR3/2)	シルト	にぶい黄褐色シルトを含む。
	9	黒褐色(10YR2/2)	シルト	

＊すべての層に多量の炭化物を含む

番号	地区	遺構	層位	器形	分類	特徴	登録	図版
1	GT92	土壙２	埋３上	深鉢	EⅡ１	体部：条痕　頸部：直立　口縁部：口唇に連続押圧して小波状にする	173	Ⅲ２

第20図　土壙と出土土器(1)



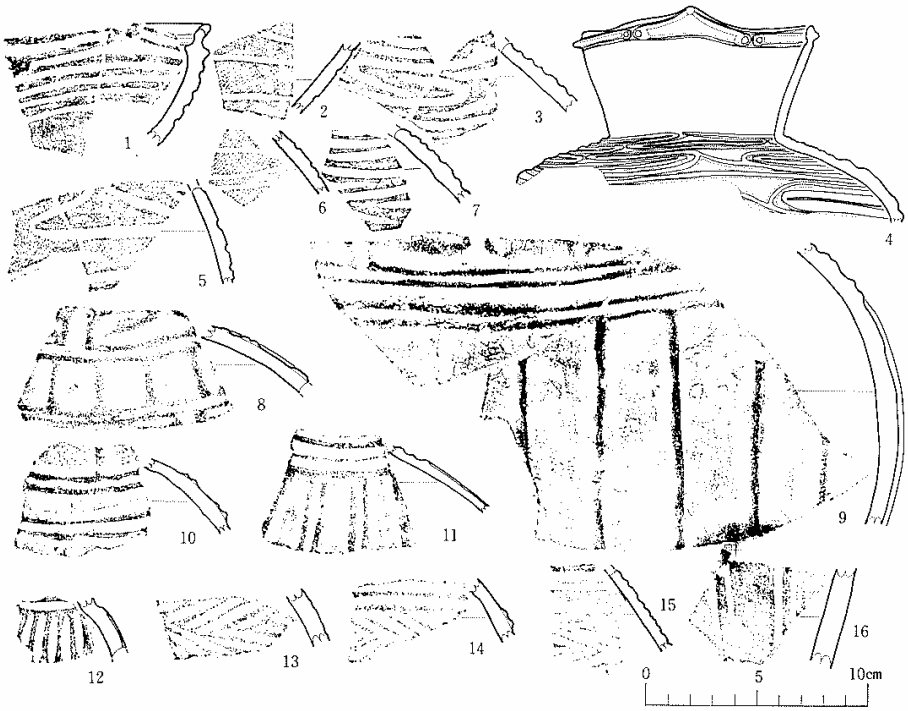
番号	層位	器形	分類	特　　徴	登録	図版
1	埋1	深鉢	E Ⅰ i イ	体部：LR縄文　頚部：下端に連続刺突と押引き　口縁部：菱形刻目	174	
2	埋2	鉢	B Ⅰ a 2	体部：下半はLR縄文・上半は磨消縄文による直線的雲形文(LR縄文)　口頚部：下半に沈線と突起　口縁部：縦長刻目・内面に沈線	175	用3
3		鉢		台付　体部～口縁部：無文	176	
4	埋1-2	鉢	B Ⅱ ii 1	体部：無文　口頚部：沈線　口縁部：刻みによる小波状	177	
5	埋2	鉢	C Ⅱ iii 5	口頚部：眼鏡状浮文と突起・沈線間に連続刺突　口縁部：同高の波状・口唇と内面に沈線	178	
6	埋2	深鉢		体部：RR縄文横回転　頚部：下端は隆線に刻目と突起・口縁に連絡する隆線　口縁部：B突起と縦長刻目	179	
7		鉢	B Ⅱ iii 5	体部：沈線　口頚部：眼鏡状浮文と突起　口縁部：同高の波状・口唇と内面に沈線	180	
8	埋2	浅鉢	B Ⅰ ig7	体部：下半はLR縄文・上半はπ字形工字文　口頚部：口縁に連絡する隆線　口縁部：A突起・内面に沈線	181	
9	埋2	浅鉢	B Ⅰ ig	体部：下半はLR縄文・上半はπ字形工字文　口頚部：眼鏡状的浮文(刻目)と突起　口縁部：刻目・内面に沈線　外面丹塗	182	
10	埋1	鉢	Ⅱ 5	口頚部：眼鏡状浮文と突起　口縁部：A突起と波長が長く低い波状・口唇と内面に沈線　外面丹塗	183	
11	埋2	浅鉢	B Ⅰ iii h2	体部：弧線の中に横線一本を加える(5単位)　口頚部：沈線・2孔　口縁部：B突起(4個)・内面に沈線	184	
12	埋1	浅鉢	B Ⅰ ig7	体部：π字形工字文　口頚部：口縁に連絡する隆線　口縁部：A突起・口唇と内面に沈線	185	
13	埋1	浅鉢	B Ⅰ ii 7	体部：無文　口頚部：沈線・眼鏡状浮文と突起・口縁に連絡する隆線　口縁部：A突起・口唇と内面に沈線	186	

第21図　土壙出土土器(2)

〔平面形・規模〕土壙の平面形は上端・下端ともほぼ楕円形である。規模は上端長径3.4m・短径1.6m、下端長径2.65m・短径75㎝、深さ40㎝である。

〔堆積土〕土壙内の堆積土は９層にわかれる。第１層は土壙中央部に厚く、第２・３層は第１層の脇に、第４～８層は流れ込むように薄く、第９層は西側壁際に厚くそれぞれ堆積している。

〔遺物出土状態〕遺物は土壙内堆積土の傾斜に沿って出土した。出土遺物には土器（深鉢・



番号	層位	器形	分類	備考	登録	図版
1		浅鉢	BⅠⅢi7	体部：下半は無文・上半は沈線　口頸部：口縁に連続する隆線と突起　口縁部：B突起・内面に沈線　外面丹塗	187	
2	埋2			磨消縄文(LR縄文)	189	
3	埋2	壺		沈線による曲線的な文様　外面丹塗	190	
4	埋2	壺	FⅣe	体部：入組工定文　頸部：無文　口縁部：A突起(1個)とB突起(2個)・内面に沈線	191	Ⅳ6
5	埋2	壺		体部：磨消縄文	192	
6	埋1			磨消縄文(LR縄文)	193	
7	埋2	壺		沈線による施文　外面丹塗　190と同一個体	194	
8		壺	g?	隆線で方形に画す　外面丹塗	195	Ⅴ18
9	埋2	壺	g	体部：上半は縦横の隆線で方形に画す・下半は縦位の隆線　外面丹塗	196	Ⅴ19
10	埋2	壺	g?	体部：横位の隆線と縦位の隆線　外面丹塗	197	
11	埋1	壺	h	体部：横位の隆線と間隔の狭い縦位の隆線	198	
12	埋1	壺	h	体部：横位の隆線と間隔の狭い縦位の隆線	199	
13	埋2	壺	f?	体部：沈線による綾杉文	200	
14	埋1	壺	f?	体部：横位隆線と沈線による綾杉文　外面丹塗	201	
15	埋2	壺	f?	体部：横位沈線による綾杉文	202	
16	埋1	壺		縦位隆線	203	

第22図　土壙出土土器(3)

浅鉢・台付浅鉢・壺・袖珍土器）・石器（石鏃・石錐）がある。

5　ピット列（第 23 図）

〔確認面〕ＣＧ～ＣＪ100 区の地山面で確認された。

〔平面形・規模〕調査区内におけるピット列の平面形は弧状を呈する。ピット列は２列認められ、さらに調査区内にのびる。外側のピット列は内側のものに比して、その間隔が広い。調査区東側におけるピット列の長さは内側のものが 8.6m、外側のものが 9.4mである。

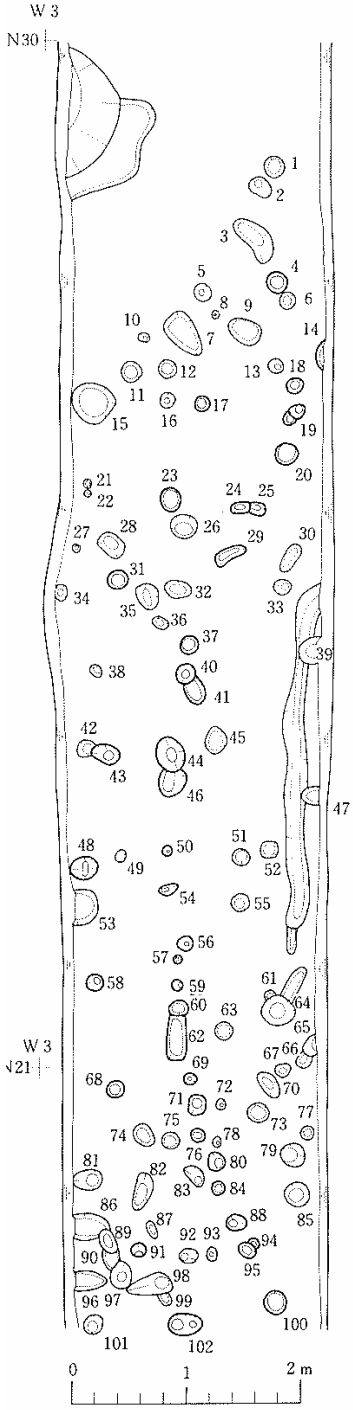
〔ピットの平面形・規模〕ピットの平面形は円形・楕円形を基調とする。規模は直径 10～30cm である。深さは8～33cmで15cm前後のものが多い。

〔堆積土〕ピット内堆積土は第Ⅱ5b・5c 層の黒褐色シルトと同質である。

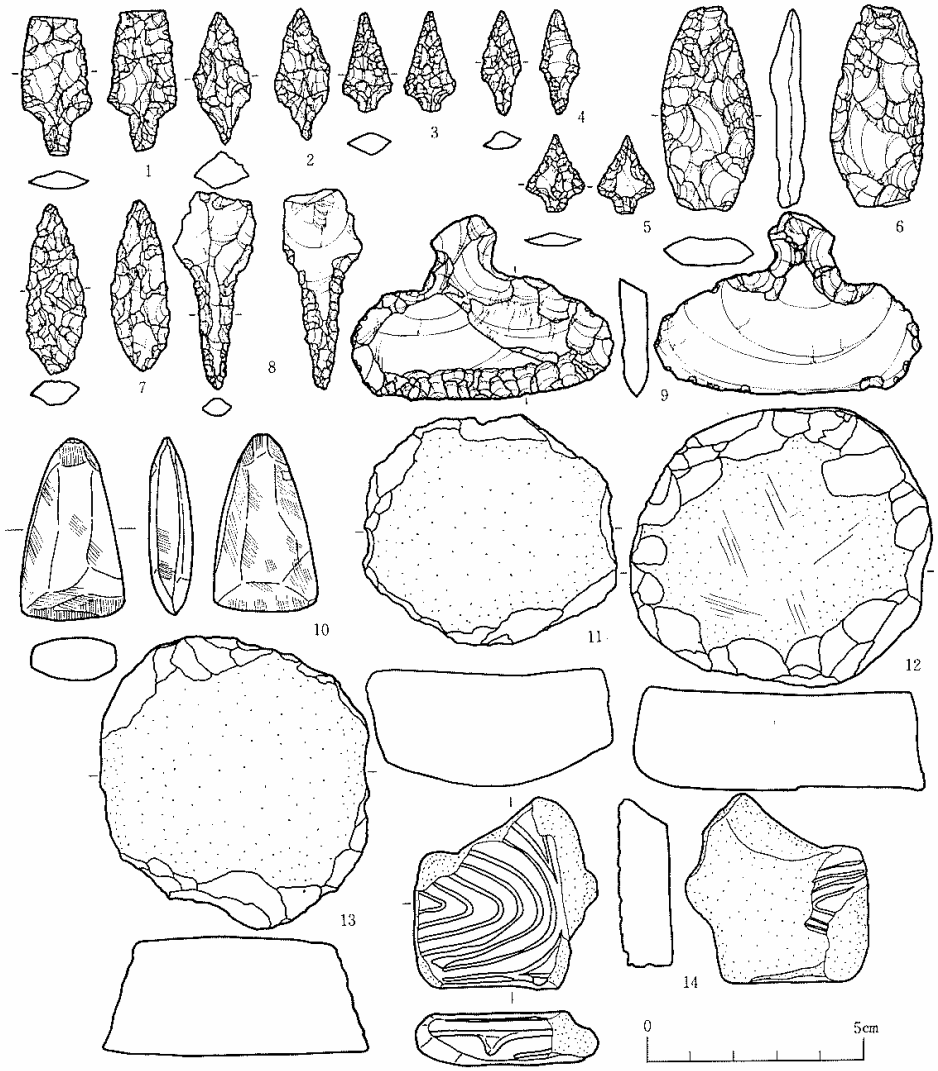
〔出土遺物〕なし。

深さ：cm

ピットNo	深さ	26	8	52	8	78	8
1	10	27	8	53	6	79	18
2	7	28	10	54	15	80	13
3	21	29	9	55	5	81	17
4	18	30	15	56	14	82	14
5	7	31	15	57	3	83	15
6	10	32	11	58	15	84	14
7	10	33	8	59	15	85	15
8	6	34	—	60	7	86	12
9	10	35	9	61	12	87	16
10	7	36	12	62	4	88	9
11	15	37	7	63	8	89	14
12	16	38	—	64	24	90	6
13	6	39	33	65	23	91	25
14	17	40	23	66	12	92	16
15	8	41	6	67	11	93	10
16	9	42	9	68	15	94	12
17	13	43	14	69	16	95	22
18	14	44	33	70	27	96	5
19	16	45	20	71	19	97	10
20	27	46	13	72	9	98	26
21	11	47	16	73	10	99	12
22	6	48	17	74	8	100	13
23	8	49	12	75	10	101	13
24	13	50	7	76	9	102	19
25	14	51	3	77	10		

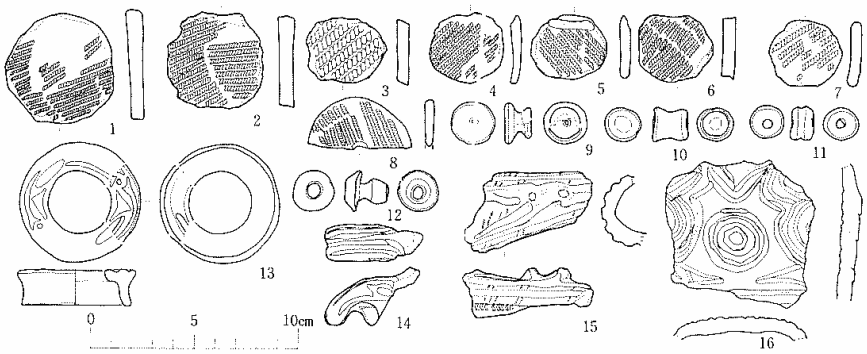


第23図　ピット列



番号	地区	層位	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)	特徴	石材	登録	図版
1	CH100	Ⅱ2d	石鏃	32.8	15.5	5.1	(2.3)	有茎・尖頭部側縁が直線的・基茎部は明瞭・茎部にアスファルト痕	貢岩	204	
2	CF101	土壙5埋土	石鏃	30.8	12.4	8.5	2.4	両端尖る、最大幅は基部近くに偏す、尖頭部側縁がわずかに外弯する	貢岩	208	
3	CF101	土壙5埋2	石鏃	(22.9)	11.8	4.9	(0..8)	有茎、尖頭部側縁が直線的、基茎部は明瞭	珪質貢岩	209	
4	CH100	Ⅱ3b	石鏃	23.9	9.0	4.2	0.5	有茎、尖頭部側縁が直線的・基茎部は不明瞭	珪質貢岩(玉ずい化)	210	
5	CG100	Ⅱ2a	石鏃	(18.0)	13.4	3.0	(0.4)	有茎、尖頭部側縁はやや内弯、基茎部は明瞭	珪化凝灰岩(玉ずい化)	212	
6	CH100	Ⅱ5c	尖頭器	4646.4)	20.5	7.2	(6.6)	両端欠損、尖頭部側縁は外弯	黒曜石	217	Ⅵ2
7	CF101	土壙5	石鏃	40.0	13.6	8.7	4.0	両端尖る、最大幅は基部近くに偏す、尖頭部側縁は外弯	珪質貢岩	218	Ⅵ1
8	CF100	土壙5埋2	石錐	46.8			2.9	つまみ部と錐部の境は明瞭、錐部は丁寧な剥離調整	貢岩	219	Ⅵ4
9	CG100	Ⅱ2g	石匙	43.0	60.8	10.5	19.8	横長、刃部に丁寧な剥離、つまみ部にアスファルト痕	珪質貢岩	222	Ⅵ5
10	CD100	Ⅰ	石斧	42.0	23.8	9.9	14.9	磨製、撥形、断面形は略隅丸長方形、両刃で刃面に膨みがあり、刃縁は外弯	蛇文岩	223	Ⅵ3
11	CG100	Ⅱ1b	円盤状石製品					板状の礫の周囲を打ち欠き円盤状にしている	安山岩	228	Ⅵ6
12	CF100	Ⅰ	円盤状石製品					板状の礫の周囲を打ち欠き円盤状にしている		229	Ⅵ8
13	CI100	Ⅱ3c	円盤状石製品					板状の礫の周囲を打ち欠き円盤状にしている	石英安山岩	230	Ⅵ7
14	CF100	Ⅱ	岩版	7条の弧線文からなる。正中線の一部が認められる。下端面にも施文がある。反対の面にも弧線文が認められる。					泥岩?	232	Ⅵ20

第24図　石器・石製品



番号	地区	層位	器　種	特　　徴	登録	図版	番号	地区	層位	器　種	特　　徴	登録	図版
1	CF100	Ⅰ	円盤状土製品	LR縄文　周縁打ち欠く	233	Ⅵ9	9	CD100	Ⅱ	耳　　飾	直径が異なる孟状、中央に孔、内外面丹塗	241	
2	CC100	Ⅱ	円盤状土製品	LR縄文　周縁を打ち欠く	234	Ⅵ10	10	CF100	Ⅱ	耳　　飾	臼形を呈す。孔はない	242	Ⅳ16
3	CG100	Ⅱ2b	円盤状土製品	LR縄文　周縁打ち欠き、部分的に研磨	235	Ⅵ13	11	DQ114	Ⅱ	土　製　玉	外面中央部に沈線が1周する。中央に孔	243	Ⅳ17
4	CH100	Ⅱ3c	円盤状土製品	LR縄文　周縁打ち欠く	236		12	BQ114	Ⅱ	耳　　飾	耳栓状を呈す。内外面丹塗　中央に孔	244	Ⅳ15
5	CF101	Ⅱ	円盤状土製品	沈線とRL縄文　周縁打ち欠き、研磨	237		13	CH100	Ⅱ5b	耳　　飾	断面形が内側に長い下方状 沈線による二又文　内外面丹塗	245	Ⅳ14
6	CI 100	Ⅱ5b	円盤状土製品	LR縄文　周縁打ち欠き、部分的に研磨	238	Ⅵ11	14	CG100	Ⅱ2g	土　　偶	肩～腕、沈線、腕先端は二又状、中実	246	
7	CH100	Ⅱ3c	円盤状土製品	LR縄文　周縁打ち欠き、研磨	239	Ⅵ12	15	CF100	Ⅰ	土　　偶	胴～腕、胴消縄文（LR縄文） 目突起、外面丹塗	247	Ⅳ19
8	CF100	Ⅱ2b	円盤状土製品	有孔、LR縄文　周縁を丁寧に研磨	240		16	CG100	Ⅱ2g	土　　偶	腰背面、猫線文と同心円文 粘土組積土偶、中空	248	Ⅳ18

第25図　土製品

第１表　出土土器分類表

深　鉢

〈器　形〉

類	体　　部	頚　　部	口　縁　部
A	やや丸味をもち、外傾しながら立上り、頚部をつくらず、そのまま口縁部に至るか、又はやや内傾気味に口縁部に至る。		
B	外傾して立上り、その上半で直立気味となり、頚部に近づくにしたがい内傾	短く直立かやや内傾	短く鋭く外折
C			緩やかに外傾
D		B・C類より長く直立かやや内傾	B類より長く緩やかに外傾
E		直立	直立

〈口縁部形状〉

Ⅰ　類 平口縁	ⅰ	突起なし
	ⅱ	A突起
	ⅲ	B突起
	ⅳ	A突起とB突起
Ⅱ　類 波状 口縁	ⅰ	同高の波状で、波長が長い
	ⅱ	刻みによる極小波状
	ⅲ	不規則な極低い波状

〈頚部文様〉

類	文　　様	類	文　　様
1	無文	4	沈線
2	無文で下端に沈線	5	隆線に刻目
3	連続刺痕列と沈線	6	沈線と突起

〈口縁部文様〉

類	文　　様
イ	刻みが縦長・菱形・円形
ロ	抉ったような刻みで横長の楕円形
ハ	刻みなし

鉢

〈器形〉

類	体部	口頸部	口縁部
A	体部が丸味をもち外傾しながら立上り、頸部が短く、口縁部が大きく外傾		
B	直線的またはわずかに丸味をもち外傾しながら立上る	内傾	内傾又は外傾
C			直立
D		直立気味	外傾

＊破片資料は口頸部・口縁部の形態で分類し、上記該当類に含めた。

〈体部文様〉

類	文様
a	平面的な磨消縄文による直線的な雲形文および雲形文的な文様
b	彫りの深い磨消縄文による曲線的な雲形文
c	平面的な磨消縄文によるC字入組文
d	平面的な磨消縄文による文様(文様の種類は不明)
e	弧線文の中に三叉文を配する
f	縄文のついた隆線によるπ字形工字文
g	入組工字文
h	縄文だけを施文
i	無文

＊a～c・e・f類の文様は横位沈線で上、下を区画され、その中に描かれることが多い。

〈口縁部形状〉

Ⅰ類 平口縁	i	突起なし
	ii	A突起
	iii	B突起
	iv	A突起とB突起
	v	鳥頸状突起とB突起
Ⅱ類 波状口縁	i	彫去した小波状
	ii	刻みによる小波状
	iii	同高の波状で、波長が長い
	iv	A突起とB突起の連続する波状

〈口頸部文様〉

類	文様
1	無文または沈線
2	無文または沈線で下端に隆線と突起
3	連続刺痕列と沈線
4	沈線とその間に連続刻目
5	眼鏡状沈線と突起
6	沈線と弧線の中に三叉文
7	沈線とC字状文
8	連続刺痕列と沈線。沈線間の一部を彫去

浅鉢

〈器形〉

A類	口頸部で屈曲する
B類	口頸部で屈曲せず口縁部に至る

〈口縁部形状〉

Ⅰ類 平口縁	i	突起なし
	ii	A突起
	iii	B突起
	iv	A突起とB突起
Ⅱ類 波状口縁	i	同高の波状
	ii	A突起とB突起の連続する波状
	iii	彫去による小波状

〈口頸部文様〉

類	文様
1	無文で下端に隆線。その隆線に刻目
2	無文または沈線
3	沈線を施し、突起を加える
4	沈線とその間の一部を彫去する
5	眼鏡状浮文と突起
6	連続刺列痕と沈線
7	口縁に連絡する隆線と突起

〈体部文様〉

類	文様	類	文様
a	磨消縄文で文様を区画する沈線が僅かに残る曲線的な雲形文	f	入組工字文
b	平面的な磨消磨縄による直線的な雲形文	g	π字形工字文
c	縄文を地文とする沈線による雲形文	h	弧線文の中に横線一本を加えた工字文
d	平面的な磨消縄文による長楕円文	i	沈線文
e	単純な工字文	j	縄文
		k	無文

壺

〈器　形〉

類	体部	頸部	口縁部
A	最大径は体部中央にある。なで肩	直立	短く緩かに外傾
B	最大径は体部中央よりやや上にある	内傾	A類に比して長く「く」字に外傾
C		直立	A類に比して長く緩かに外傾
D	偏球形、最大径は体部中央にある	緩かに外傾	緩かに外傾

類	頸部	口縁部
E	直立	「く」字状に短く外傾。口縁端部は直立
F	外傾	
G	内傾	ほぼ直角に外折し、さらに直立気味に立上り口縁帯をつくる
H		短く緩かに外傾する

＊E～H類の体部は遺存良好なものがなく不明である。よって頸部・口縁部の形態で分類する。

〈口縁部形状〉

類	形状	類	形状
i	突起がない	Ⅳ	A突起とB突起
ii	A突起	Ⅴ	上端と下端にそれぞれB突起
iii	B突起	Ⅵ	上端にA突起とB突起。下端にB突起

＊すべて平口縁である。突起の有無・突起の形態で分類する。

〈体部文様〉

類	文様	類	文様
a	磨消縄文による曲線的な雲形文	g	体部上半は縦・横位の隆線で方形に画す。下半には縦位の隆線
b	平面的な磨消縄文による長楕円文		
c	b類に横位の沈線に連絡する縦位の沈線を加える	h	横位の隆線と間隔の狭い縦位の隆線
d	横位沈線とそれに連絡する縦位沈線	i	沈線による渦巻文と三叉文
e	入組工字文	j	縄文
f	体部上半は横位の隆線で画し、その上位に綾杉文を配する。下半には縦位の隆線	k	工字文（形態不明）

＊a～c類は体部上半の上下を横位の沈線で画し、その中に文様を描く。

Ⅳ　考　　察

1　出土土器の分類と組み合わせ

遺物包含層から出土した土器は、器形と文様の特徴からいくつかに分けることができる。第１表は器形・文様それぞれの特徴によって類別したものであるが、それらを相互に組み合わせた土器の分類、および遺物包含層からの出土状況を第２表に示している。その結果、いくつかの層では土器の組み合わせに共通点を見出すことができ、まとめると四つの土器群に大別される。すなわち第１群土器（Ⅱ4a～5b 層）・第２群土器（Ⅱ2h～2j 層）・第３群土器（Ⅱ2a～2b 層）・第４群土器（ＣＥ・ＣＦⅡ2～Ⅱ1c 層）である。各群の土器の組合せはつぎのようになる。

第１群土器…深鉢ＡⅠｉ4ハ・ハ類、鉢ＢⅠｉ4h 類、ＢⅠｉ3・4d 類、ＢⅠ2a 類、ＢⅡｉ3d 類、ＤⅠｉh 類、ＤⅡｉ7 類；浅鉢ＢⅠiv2a 類、ＢⅡii2・2c 類

第２群土器…深鉢ＡⅠｉハ類、ＡⅡiiiハ類、ＢⅠｉ1イ類、ＢⅠｉ～iv2イ類、ＣⅠii2イ類、ＣⅠiii2ＣⅠiii2イ類、ＤⅠｉ3イ類；鉢ＡⅡii2b 類、ＢⅠｉ1h 類、ＢⅠ3h 類、ＢⅠii1h・3h 類、ＢⅠiii1h 類、ＢⅠiv1h 類、ＢⅠｖ5a 類、ＤⅠｉ1h 類、ＤⅠii1d 類；浅鉢

器種	深鉢																				鉢																																	
器形	A			B						C						D			E		A		B																										C	D					
形状	I		II	I					II	I				II		I			I	II	II		I																	II								II	I				II	
文様	i		iii	i		ii	iii	iv	i	i	ii	iii		i		i		iv	i	ii	ii		i							ii		iii		iv			v			i		ii	iii			iv		ii	i		ii	iv	i	
	4			1	2	2	2	2	2	2	2	1	2	1	2	3		1	6	5	2	2	4		1	3		5	6	1	3	1	2	5	1	3	2	5		3		1	1	8	5	1	3	8	1		1	5	7	
層位	ハ	ハ	ハ	イ	イ	イ	イ	イ	ハ	ロ	イ		イ	ハ	ハ	イ	ロ	イ	イ	イ	b	b	d	h	h	h				g	h	h	f	g	h	h	a	a	c	d	h	h	h	h		h	h	h	h	i	d	c		
Ⅱ5c																																																						
Ⅱ5b																								1																1														第1群土器
Ⅱ4d	1	1																																																				第1群土器
Ⅱ4b																																																					1	第1群土器
Ⅱ4a																										1																							1					第1群土器
Ⅱ3d																																																						
Ⅱ2j		1			3	1	1	1																	1	1					1				1														1					第2群土器
Ⅱ2k																																																						第2群土器
Ⅱ3c		2									1		1													1																												第2群土器
Ⅱ3b				1	1		1																			1																												第2群土器
Ⅱ3a					1		1				1																																											第2群土器
Ⅱ2i						1										1									1													1											1		1			第2群土器
Ⅱ2h			1																		1											1																				1		第2群土器
Ⅱ2d'								1		1																																												
Ⅱ2g																		1														1				1																		
Ⅱ2f		1			1																																																	
Ⅱ2d								1				1					1	1				1														2	1		1															第3群土器
Ⅱ2c										1																		1															1			1								第3群土器
Ⅱ2b					1				1	1			1													1						2			1												1			1				第3群土器
Ⅱ2a		1																												1		1																						第3群土器
Ⅱ1c										1			1	1	1																												1	1			1							第4群土器
Ⅱ1b																									1								1																					第4群土器
Ⅱ1a																			1								1		1																	1								第4群土器
CE・CFⅡ2																																	1	1														1						第4群土器

第2表　遺物包含層出土土器の器形・形状と文様の組合せ（1）

層位 ＼ 器種	浅鉢																											壺																			注口	香炉	蓋	
器形	A										B																	A		B			C	D	E	F		G		H										
形状	Ⅰ					Ⅱ					Ⅰ															Ⅱ																								
文様	ⅰ			ⅲ	ⅳ	ⅰ				ⅱ	ⅰ							ⅱ		ⅲ					ⅳ	ⅲ		ⅰ	ⅱ	ⅰ	ⅱ	ⅲ	ⅰ	ⅰ	ⅰ	ⅳ		ⅲ	ⅳ	ⅰ										
	5	2		1	2	1	2	5		6	2					4	5	2	5	7	2	7	2	2	2	2																								
	b	d	j	b	j	b	d	j		j	a	e	g	j	k	i	k	b	i	f	h	i	j	a	k	a	c	j	j	j	j	j	j	j	c	b	c			j	a	b	d	e	f	i				
Ⅱ 5 c																																														1				
Ⅱ 5 b																								2		2																								第1群土器
Ⅱ 4 d																																																		
Ⅱ 4 b																																																		
Ⅱ 4 a																						1		1		1	1																							
Ⅱ 3 d																																																1		
Ⅱ 2 j				1							1																	1	1																					第2群土器
Ⅱ 2 k																																																		
Ⅱ 3 c																								1		1																!?								
Ⅱ 3 b															1																																			
Ⅱ 3 a																																																		
Ⅱ 2 i	1														1		1																																	
Ⅱ 2 h						1																												1																
Ⅱ 2 d′																																																		
Ⅱ 2′g																																																		
Ⅱ 2 f																																																		
Ⅱ 2 d					1		1									1		1					1		1						1	1			1				1	1										第3群土器
Ⅱ 2 c																					1																				1									
Ⅱ 2 b										1				1									1							1						1	1					1		1			3			
Ⅱ 2 a			1																																															
Ⅱ 1 c												1				1																	1					1					1							第4群土器
Ⅱ 1 b			1					1					1																																					
Ⅱ 1 a																																																		
CE・CFⅡ2												1					1	1	1	1			1		1						1	1													1				1	

第2表　遺物包含層出土土器の器形・形状と文様の組合せ(2)

ＡＩｉ5ｂ類、ＡＩiii1ｂ類、ＢＩｉ2ａ類・2k・5k 類、ＢⅡiii2ａ類、壺Ａii・ii ｊ類；Ｄｉ ｊ類、ｂ?類

第 3 群土器…深鉢ＡⅡiiiハ類、ＢＩｉ・iv2 イ類、ＢⅡｉ2 ハ類、ＣＩiii1･2 イ類、ＣⅡｉ2 ハ類、ＤＩiv1 イ類；鉢ＡⅡ2ｂ類、BＩｉ5 類、ＢＩｉ1h 類、ＢＩii1ｇ類、ＢＩiii1h 類、ＢＩiii2f 類、ＢＩiv1h・3h 類、ＢＩｖ2ａ・5ｅ類、ＢⅡiii1h 類、ＢⅡiv1h・3h 類、ＤＩｉ1i 類；浅鉢ＡＩｉ2j 類、ＡＩiii2g 類、ＡⅡｉ2ｄ類、ＡⅡii6j 類；壺Ｂｉ・ii・iiij 類、Ｅｉｃ類、Ｆivb 類、Giv類、ａ・b・ｅ類；注口

第 4 群土器…深鉢ＣＩｉ2 ロ類、ＣＩiii2 イ類、ＥＩｉ6 イ類；鉢ＢＩｉ1h・3・6 類、ＢＩiv5g 類、ＢⅡiii・1h8h 類、ＢⅡiv1h 類、ＣⅡii8h 類；浅鉢ＡＩｉ2j 類、ＡⅡｉ5j 類、ＢＩｉ2ｅ・4i 類、ＢＩii5ｉ類、ＢＩii7f 類、ＢＩiv2k 類；壺Biii（iv）ｊ類、Ｃｉｊ類、ｄ・ｆ類；蓋

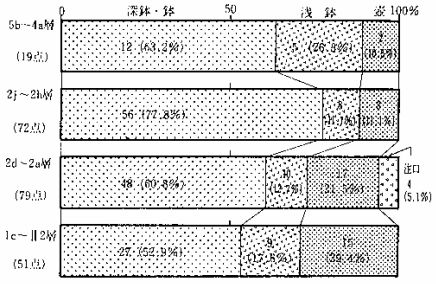
第 1 群土器は鉢ＢⅡｉ3d 類、浅鉢ＢＩiv2ａ類・ＢⅡiii2ａ類によって特徴づけられる。第 2 群土器は鉢ＡⅡii2ｂ類・ＢＩＶ5ａ類、浅鉢ＡＩｉ5b 類・ＡＩiii1ｂ類・ＡＩｉ1ｂ類によって特徴づけられるが、浅鉢ＢⅡiii2ａ類は第 1 群土器に認められる類であり、浅鉢ＢＩｉ2ａ類は第 1 群土器の浅鉢に類似するものである。第 3 群土器は壺Ｅｉｃ類・Ｆivb 類、鉢ＢＩｖ2ａ類・ＢＩｖ5e 類、浅鉢ＡⅡｉ2ｄ類によって特徴づけられる。このうち鉢ＢＩｖ2ａ類は第 2 群土器の鉢に類似するものである。第 4 群土器は壺ｄ・ｆ類、鉢ＢＩiii2f 類・ＢＩiv5g 類、浅鉢ＢＩｉ2ｅ類・ＢＩｉ2g 類・ＢＩiii7f 類によって特徴づけられる。

2　出土土器の年代

上記の各土器群を特徴づける土器によって、各土器群の年代を考えてみたい。第 1 群土器には口縁部を彫去し小波状にする鉢や磨消縄文で文様を画する沈線が僅かに残る曲線的な雲形文を体部に施す浅鉢がみられる。第 2 群土器には鉢・浅鉢に平面的な磨消縄文による直線的な雲形文を施すものがみられるが、第 1 群土器に類似する雲形文もみられる。第 3 群土器には壺・浅鉢に平面的な磨消縄文による長楕円丈を施すものやこの楕円文に縦位沈線を加えた壺、さらにに弧線文の中に三叉文を配する鉢がある。なお第 2 群土器に類似する雲形文もある。第 4 群土器には横位沈線に連絡する縦位沈線を施す壺、沈線による綾杉文を施す壺、工字文を施す鉢・浅鉢がある。

以上の特徴から第 1・2 群土器は大洞C_2式（宮城県教育委員会：1976）、第 4 群土器は大洞Ａ式（宮城県教育委員会：1977）と考えることができる。第 3 群土器は大洞C_2式から大洞Ａ式への移行期と考えられる。第 1・2 群土器は同一型式ながら、その様相に違いが認められる。したがって第 1 群土器は大洞C_2式前半段階、第 2 群土器は大洞C_2式後半段階と考えることができる。

3. 出土品の器種構成(第３表)



第３表　遺物包含層における器種別構成比率

遺物包含層出土土器の器種構成を深鉢･鉢･浅鉢、壺、注口の４器種に大別し、また遺物包含層を 5b～4a 層・2j～2h 層・２d～2a 層・1c～Ⅱ2h 層の４グループに分けて検討することにしたい。遺物の点数は異個体と判断される口縁部数を集計した。総点数 221 点のうち、5b～4a 層出土からの出土は 19 点（8.6%）と極端に少なく、他の３グループとの単純な比較には問題がある。そこで、まず 2j 層～Ⅱ２層の３グループについて、見ることにしよう。深鉢･鉢は 2i～2h 層で 77.8%を占めるが、2d～2a 層で 60.8%、1c～Ⅱ2 層で 52.9%であり、上層にゆくにしたがいその比率を漸減する。これに対して浅鉢･壺は 2j～2h 層→2d～2a 層→1c～Ⅱ２層と上層にゆくにしたがってその比率を漸増している。このことから、この３グループの土器の器種別構成比の変化は漸移的であると考えられる。

5c～4a 層では浅鉢の占める比率が 26.3%と高い。前述のように、このグループでは出土点数が極端に少ないという問題はある。しかし他の３グループの中で浅鉢が 20%を越えていないという点を重視すれば、浅鉢の占める比率が高いということは、このグループの特徴として理解することができよう。したがって、5c～4a 層と 2j～2h 層の器種別構成比は浅鉢を主因として大きく異なっていると考えられる。

4　遺構

(1)　土　壙

第 2 号土壙の堆積土は大きく３層にわけられ、その堆積状況から人為的堆積の可能性が考えられる。土壙中央の第３層上面で横位の状態で深鉢が１点出土している。この土器は出土状態から、この土壙に伴うものと考えられる。しかし、土壙内から骨粉など、その性格を明瞭に把握できる遺物の出土はない。第２号土壙の確認面は大洞Ａ式期の包含層であり、また土壙出土の深鉢も同時期と考えられることから、その所属時期は大洞Ａ式期とすることができる。

第５号土壙の堆積土はその状況から自然堆積と考えられる。土器は堆積層に沿って出土している。確認面は大洞Ａ式期の包含層であり、土壙内出土土器のうち最も新しいものが大洞Ａ式であることから、大洞Ａ式期の土壙と考えられる。第５号土壙においてもその性格を限定する遺物の出土はない。

(2)　ピット列

弧状を呈するピット列で、さらに調査区外にのびる。ピット内堆積土は第Ⅱ5b・5c層と同質であることから、大洞C_2式期以前の可能性がある。弧状のピット列が円形になると仮定した場合、内側のピット列の直径は約16m、外側直径は約17mと推定される。しかし、このピット列が家屋になるのか他の施設になるのかについては不明である。

5　遺跡の範囲

発掘調査の成果と微地形の観察により、遺跡の範囲はつぎのように把握された。すなわち、北東－南西の規模は250m以上あり、南西部はさらに調査対象区外にのびることが考えられる。南東－北西の規模は200mである。遺跡の面積は調査対象区内に限っても約41,000㎡に及ぶ。

Ⅴ　ま と め

1.香ノ木遺跡は鳴瀬川の支流である保野川左岸の段丘末端および沖積地に位置している。

2.北西から北東に向かって緩かに傾斜し、そこに縄文時代後・晩期の遺物包含層が形成されている。

3.最も良好な遺物包含層はＣＥ～ＣＪ100区で検出され、それは縄文時代晩期大洞C_2式～大洞Ａ式期に形成されたものである。

4.この包含層は大洞C_2式期が最も厚い。これにより、大洞C_2式土器は前半・後半の2段階存在することが層位的に把握された。

5.大洞C_2式から大洞Ａ式への移行段階も層位的に把握された。

〈引用・参考文献〉

宮城県教育委員会（1976）：『梁瀬浦遺跡』　角田市教育委員会

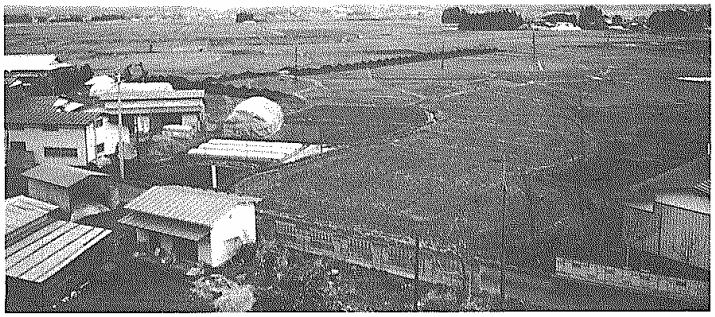
宮城県教育委員会（1977）：『巻堀遺跡』　一迫町教育委員会

茂木好光（1984）：「大谷地遺跡」『宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書（昭和58年度）』宮城県教育委員会

写 真 図 版

図版Ⅰ

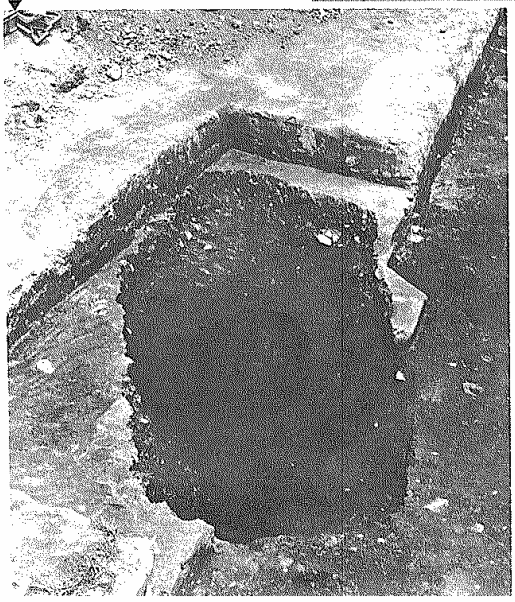
遺跡の遠景▶



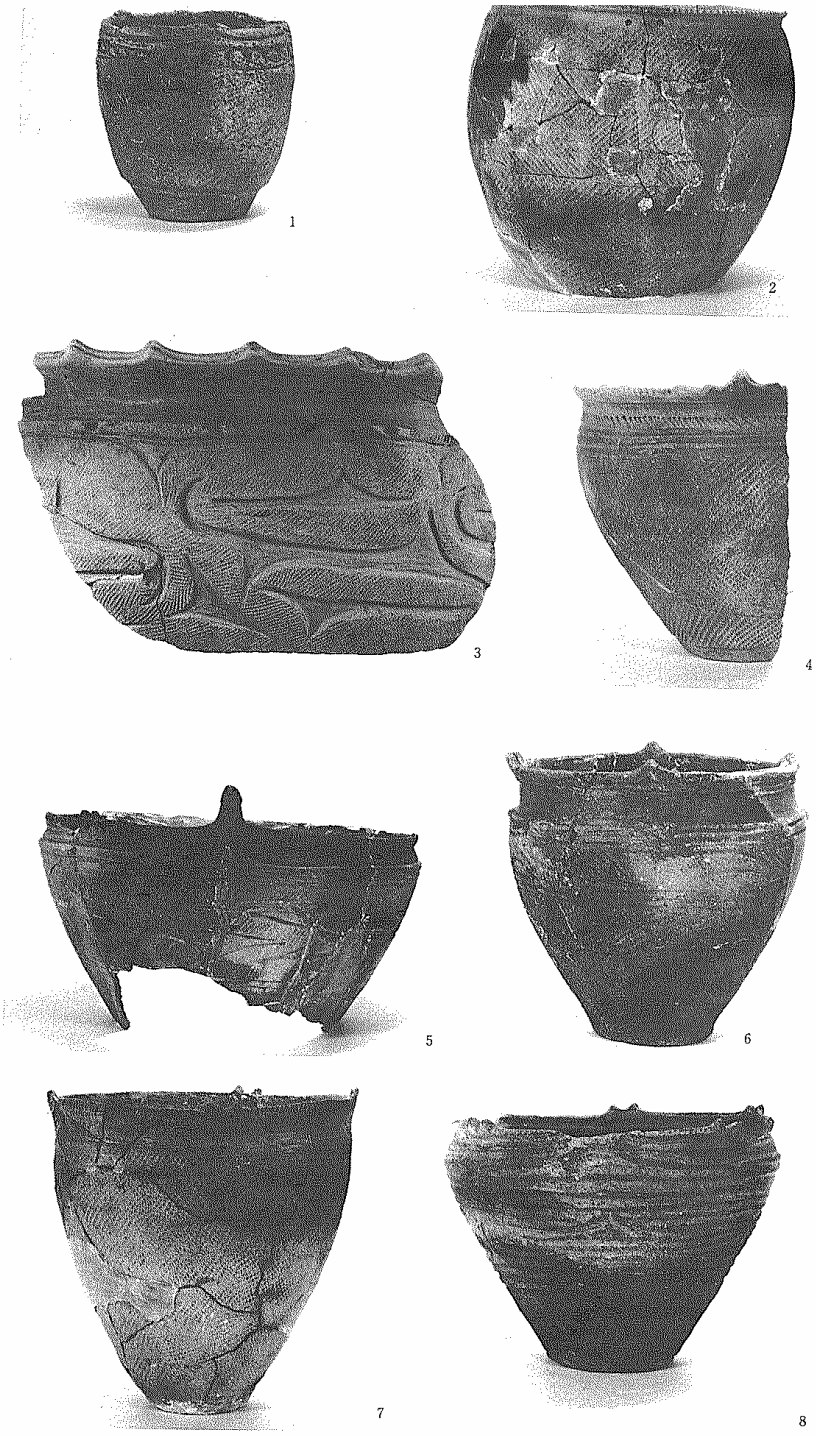
第２号土壙

第５号土壙▼

ピット例▲



図版Ⅱ



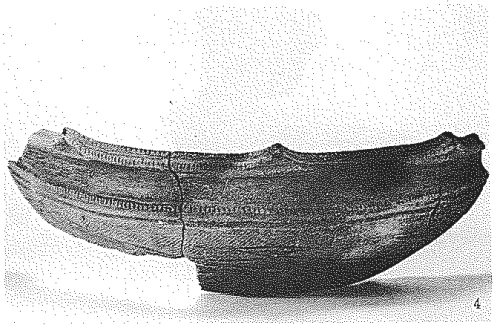
1：第7図6
2：第10図2
3：第13図6
4：第14図14
5：第15図2
6：第13図7
7：第18図5
8：第6図7

図版Ⅲ

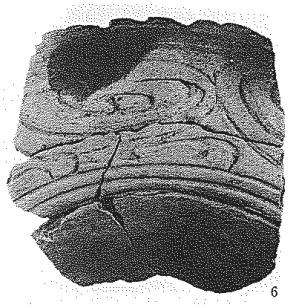
1

2

3


4

5

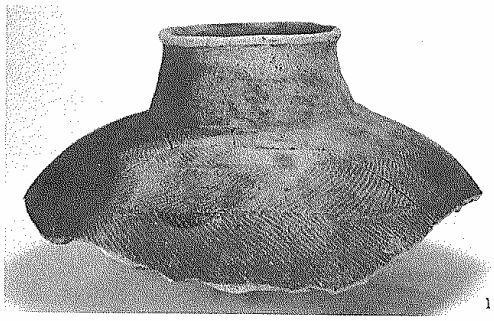

6

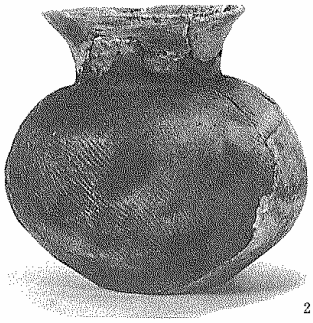
1：第6図1
2：第20図1
3：第21図2
4：第13図8
5：第4図8
6：第9図2
7：第11図2
8：第11図3

7

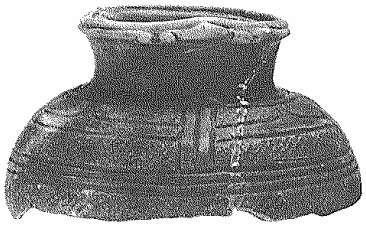
8

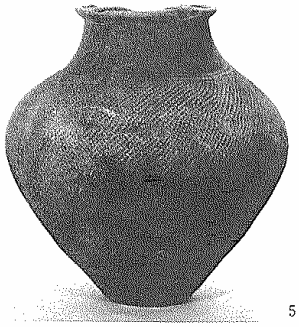
図版Ⅳ

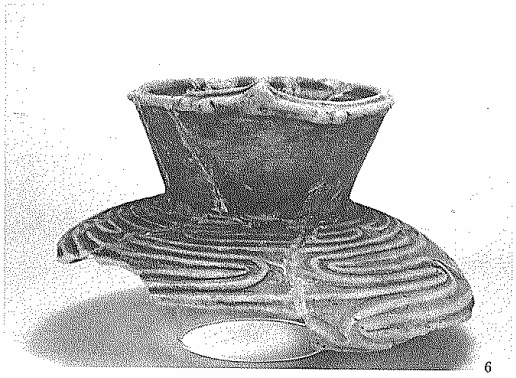

1


2

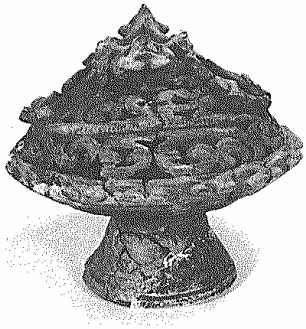
3


4


5

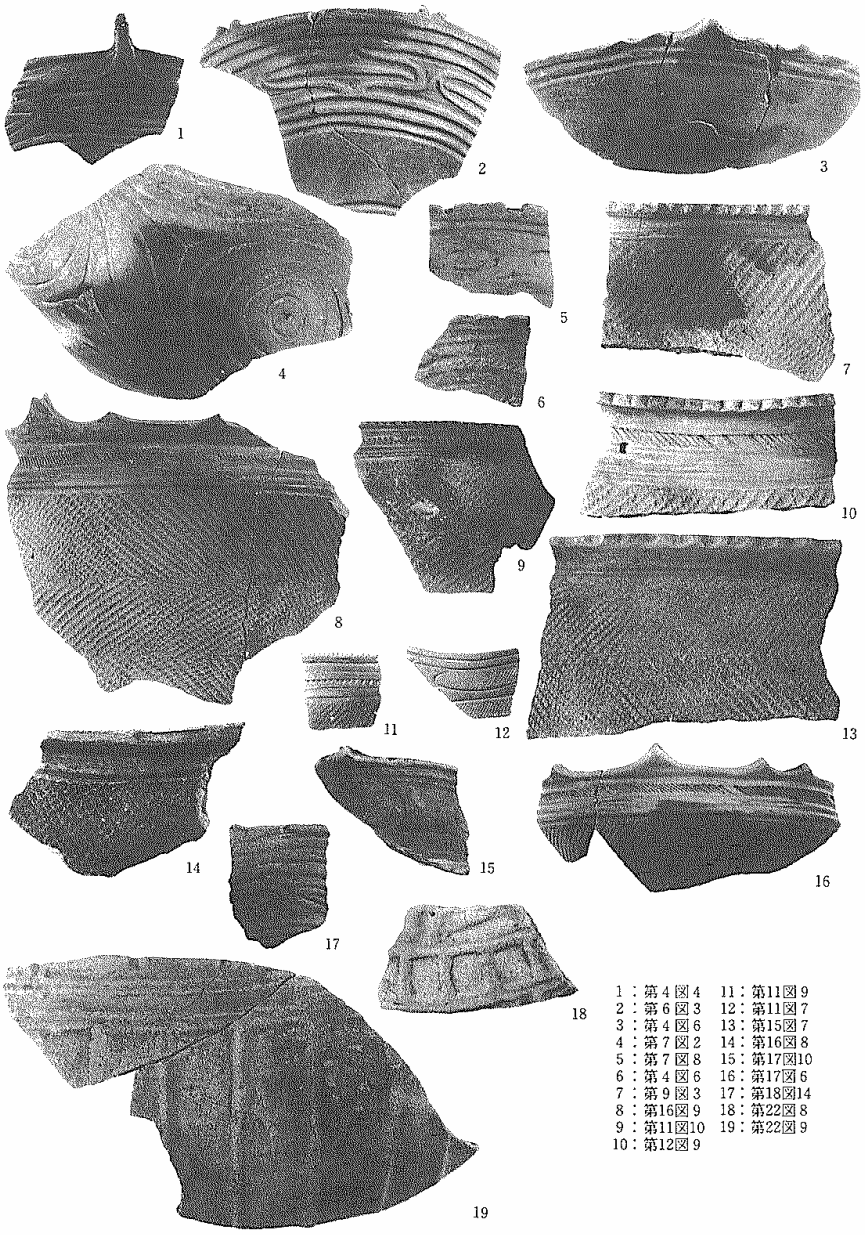

6

7a


7b

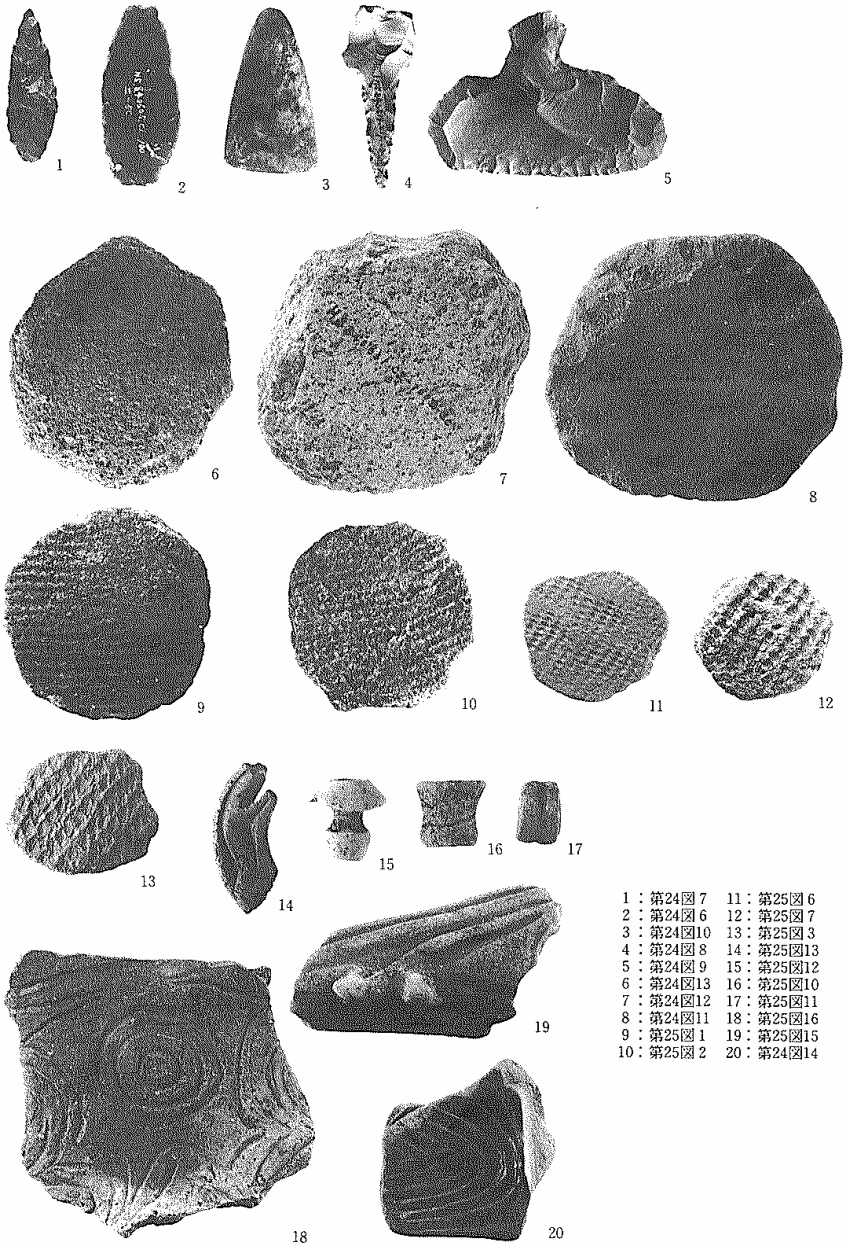
1：第15図5
2：第14図3
3：第15図6
4：第17図12
5：第17図8
6：第22図4
7：第11図1

図版Ⅴ



1：第4図4
2：第6図3
3：第4図6
4：第7図2
5：第7図8
6：第4図6
7：第9図3
8：第16図9
9：第11図10
10：第12図9
11：第11図9
12：第11図7
13：第15図7
14：第16図8
15：第17図10
16：第17図6
17：第18図14
18：第22図8
19：第22図9

図版Ⅵ



1：第24図7　11：第25図6
2：第24図6　12：第25図7
3：第24図10　13：第25図3
4：第24図8　14：第25図13
5：第24図9　15：第25図12
6：第24図13　16：第25図10
7：第24図12　17：第25図11
8：第24図11　18：第25図16
9：第25図1　19：第25図15
10：第25図2　20：第24図14

Ⅱ 色麻古墳群

調 査 要 項

遺 跡 記 号：ＧＴ（宮城県遺跡地名表登載番号　31006）

遺跡所在地：宮城県加美郡色麻町上郷・高野

調 査 期 間：昭和59年６月11日～昭和59年10月12日

調査主体者：宮城県教育委員会

調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

調査第二係長：藤沼　邦彦・技術主任：加藤　道男

技師：佐々木　和博・後藤　彰信・古川　一明・大槻　仁一

調査補助員：大野　亨・西村　博幸

調査対象面積：約130,000㎡

発 掘 面 積：約8,100㎡

目　次

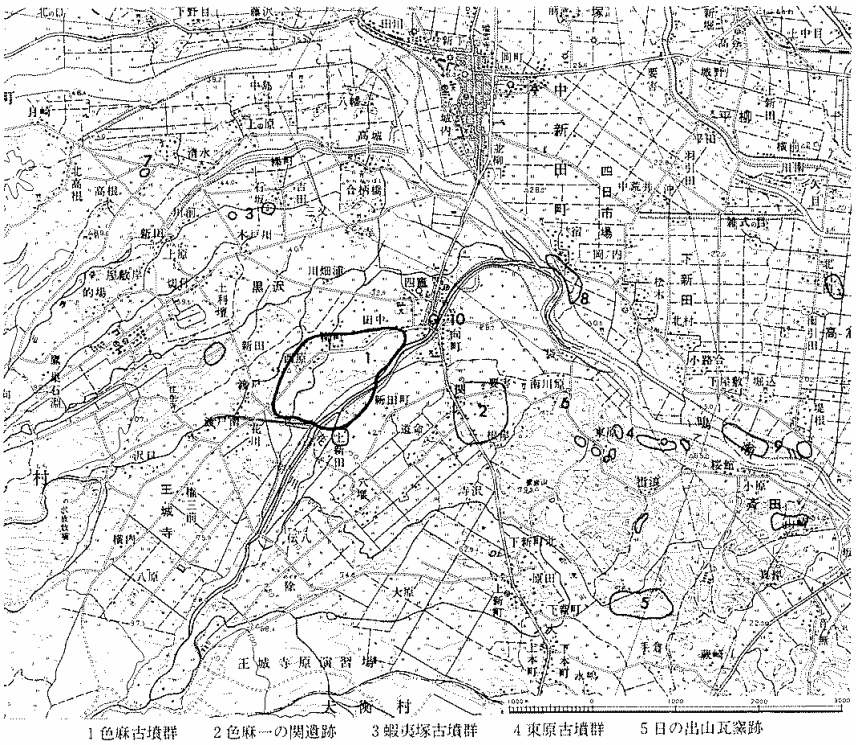
Ⅰ　遺跡の位置と環境 …… 49
Ⅱ　調査の方法と経過 …… 52
Ⅲ　発見された遺構とその出土遺物 …… 53
1　古墳 …… 53
2　住居跡 …… 84
3　その他の遺構・遺物 …… 101
（1）土壙 …… 101
（2）畑跡 …… 103
（3）溝跡 …… 104
（4）ピット群 …… 104
（5）井戸跡 …… 105
（6）中世陶器 …… 105
4　弥生時代の遺物包含層と出土遺物 …… 106
Ⅳ　考　察 …… 114
1　古墳群とその出土遺物 …… 114
（1）出土遺物 …… 114
（2）古墳の構造 …… 126
（3）古墳群と被葬者の性格 …… 130
2　住居跡とその出土遺物 …… 134
（1）出土土器について …… 134
（2）組み合わせと年代 …… 136
（3）墨書土器について …… 138
（4）住居跡の構造 …… 138

Ⅰ　遺跡の位置と環境

色麻古墳群は宮城県北部、加美郡色麻町上郷・高野に所在しており、町の南西部にあたる。

遺跡の含まれる宮城県北部の地形を概観すると、西部は奥羽山系の丘陵、東部は北上山系の丘陵地帯であり、両丘陵地間の中央部が平野部となっている。中央の平野部はさらに東西に区分することができる。東部は北上川を母胎として南北に広がる沖積地を主体とするものである。西部は奥羽山系から東へ枝状にのびる丘陵間に形成された東西に広がる沖積地を主体とするものであり、南から吉田川流域、鳴瀬川・江合川流域、迫川流域との三部分がある。東部の沖積地は“北上川低地帯”と呼ばれるように谷地部分が多くその本格的な開発は近世以降のことであるが、西部の各沖積地は古くから開発が進んでいたと考えられ、そのことは周辺に各時代を通じて多数の遺跡が存在していることから推定できる。

本古墳群は江合川・鳴瀬川流域の平野部（大崎平野）の南西端に位置している。この地域には標高 30～90m の扇状地性の洪積台地が広がっており、この台地を解析して花川・保野川などの中小河川が各所に狭い氾濫原を形成しながら北東に流下し鳴瀬川に合流している。古墳群は花



第１図　周辺の遺跡

川の中・下流域南北両岸の東西 2 ㎞・南北 1 ㎞、標高 35～45㎡ の範囲に分布している。北岸が上郷地区、南岸が高野地区で、現状は一部山林部分もあるが大部分は水田であり、確認できる古墳は水田中に残存している。

本遺跡周辺には各時代の遺跡が多数所存しているが、その中でも、本古墳群と深く関連する古墳時代から奈良時代の諸遺跡の状況についてみて行きたい。まず古墳時代前期・中期の遺跡として鳴瀬川・江合川流域に分布する諸古墳がある。これらの諸古墳は、岩手県胆沢町角塚古墳のような孤立的なものを除けば、前期・中期古墳分布の北限地域を形成している。主要なものとして宮崎町夷森古墳・色麻町御山古墳・同念南寺古墳・古川市青塚古墳・小牛田町京銭塚古墳・同保土塚古墳など 50㎡ を超える規模の円墳・前方後円墳・前方後方墳があり、時期的には、東北地方南部土師器編年（氏家：1957）の第Ⅰ型式「塩釜式」期の土器類が出土し、４世紀に遡る可能性の指摘される青塚古墳（平沢・太田：1981）・夷森古墳、５～６世紀の年代が想定される御山古墳・念南寺古墳などがある。このような規模・年代は、仙台平野以南における主要古墳の在り方と比較した場合でも大きな相違はないものと言える。

一方、古墳時代の集落跡についても、鳴瀬川・江合川流域の自然堤防などの微高地上に多く立地するものと推定され、古川市塚の目・竹の内両遺跡では「塩釜式」期に属するとみられる竪穴住居跡が 15 軒、同じく留沼遺跡（手塚：1980）でも 1 軒発見されている。小牛田町山前遺跡（小牛田町教委：1976）では前期に属する竪穴住居跡 25 軒と大溝とが確認され、大溝からは農工具を主とした木製品も発見されている。上記諸遺跡のうち、特に御山古墳は、花川沿岸で本遺跡の下流 0.5 ㎞に位置するもので、本古墳群との関係は必ずしも明確ではないが、距離的には極めて近接した位置にある。

次に古墳時代後期・奈良時代の遺跡として、後期・終末期群集墳、官衙、寺院跡、窯跡がある。まず、群集墳は高塚と横穴の双方がみられるが、高塚群集墳は大崎低地西部の丘陵･台地上に主に分布するのに対し、横穴群集墳は主に大崎低地北部・南部・東部の丘陵に分布し、高塚と横穴が共存する地域もみられる。群の規模は、高塚、横穴ともに 10～30 基前後によって構成されるものが多いが、岩出山町川北横穴古墳群（氏家他：1970）では 200 基を超える横穴の存在が推定され、高塚群集墳における本古墳群同様、極めて突出した規模を誇っている。本古墳群周辺で内容が明らかなものとしては、本遺跡の北西約 1 ㎞の色麻町内に所在する蝦夷塚古墳群、北方約 5 ㎞宮崎町米泉館山横穴古墳群がある。蝦夷塚古墳群は径 10㎡ 前後の円墳がかつては十数基確認されていたが、現在では 1 基のみが地上から確認できる。立地は、本古墳群に極めて類似し、保野川中流域南岸の扇状地性洪積台地上にある。古墳群の範囲･規模は確認されていないが、十数基規模を大きく上回るものではないと推定される。古墳の構造･出土遺物の在り方は、本古墳群のそれに極めて類似しており、本古墳群の一部と共存するものと考え

られる（斉藤： 1983）。米泉館山横穴古墳群（佐々木：1972）では２基の横穴が調査されている。高塚群集墳が主に分布する大崎低地面部の中にあることに加え、その内部構造は、他地域のものとはやや異なり床面敷石、間仕切り石等の特徴ある施設が確認されており、横穴式石室との類似性も指摘されている。出土土器の特徴から古墳の使用年代として８世紀前半から８世紀後半の年代が想定されている。

上記の群集墳の年代に近接もしくは重複する時期に本地域には官衙･寺院が造営されている。大崎低地西部地域では古川市名生館跡･伏見廃寺、中新田町城生遺跡･菜切谷廃寺、色麻町一の関遺跡など比較的多くの遺跡が調査されている。(宮城県教委：1977)は、本遺跡の南東約 1㎞ に位置し、建物基壇跡・掘建柱建物跡・土塁状遺構などが発見され出土遺物から 8 世紀を中心とした寺院跡もしくは官衙跡である可能性が強いとされている。しかし、部分的な調査のため遺構の範囲、性格については不明な点が多い。

城生遺跡（中新田町教委：1978 他）は、一の関遺跡の北方約 6㎞ に位置し、現在までの調査で築地、溝による外郭施設と、その内部に掘込地業倉庫跡、掘立柱建物跡、竪穴式住居跡が発見され、北辺外郭線中央に八脚門も確認されている。出土遺物から８世紀前半から平安時代にかけてのものと考えられており、遺構の状況から官衙施設としての性格をもつものとされている。なお、この北東約 1㎞ には、付属寺院とされる菜切谷廃寺跡（伊東：1979）がある。

城生遺跡のさらに 6㎞ 北北東には名生館遺跡（多賀城跡調査研究所：1982・1913）が位置している。現在までの調査で、７世紀末から 9 世紀にかけての掘立柱建物群、竪穴住居跡などが発見され、特に７世紀末から 8 世紀初頭には瓦葺き、四面廂付掘建柱跡が造営され、整った官衙施設としての性格をもつものとされている。なお、この南約 0.8㎞ には付属寺院とされる伏見廃寺跡（佐々木：1971）がある。

窯跡としては、本遺跡の南東約 3㎞ に日の出山窯跡群、同じく北西約 4㎞ に高根窯跡群がある。このうち日の出山窯跡群Ａ地点（岡田他：1970）では 7 基の窯が調査され、瓦･須恵器が発見されている。瓦は多賀城跡の創建期に供給されたものであり８世紀前葉の操業期が想定されている。

以上のように、群集墳、官衙、寺院跡、窯跡は位置的、年代的に極めて密接な関係にある。特に一の関、城生、名生館などの官衙関係遺跡は、現在の陸羽街道沿いに約６㎞間隔で位置するが、名主館遺跡は古代玉造郡域内に属し、「玉厨」の墨書土器が発見されたことなどから玉造柵跡の強力な擬定地とされ、一方、一の関遺跡は古代色麻郡域に属すと考えられ、色麻柵跡に関連する施設と推定されている(宮城県教委：1977)。このような特色ある遺跡群の周辺に高塚を主体とする群集墳が分布することは、それらの被葬者の性格を考える上で極めて興味深いものと言える。本古墳群の被葬者集団の性格は、上記のような歴史的環境の中で理解されるものと考えられる。

Ⅱ　調査の方法と経過

宮城県営圃場整備事業の行われた四釜地区は総面積 450*ha* で、昭和 57、58、59 年３ヶ年に分けて工事が行われた。これに伴う対象地内の埋蔵文化財の調査はその分布地域が主に水田であるため、休耕・工事期間との関係から各年次の工事対象地域を対象とした範囲確認、記録保存の調査を各年度ごとに分けて行い、報告書を刊行している（古川：1982；古川 1983）。最終年度の今年度は、四釜地区の北東側ににあたる約 130*ha* について調査した。

宮城県農政部耕地課・古川土地改良事務所、色麻町土地改良区、文化財保護課の間の協議により、墳丘の残る古墳 24 基は現状のまま保存され、面工事も盛土によるものとされた。したがって調査は工事の際掘削される支線排水路線（総延長約 2.5 ㎞）に巾 3㎜ のトレンチを設定し遺構の詳細分布調査を中心にし、排水路予定地に古墳などの遺構が発見された場合、そのつど協議してできるだけ排水路をまげるなどして保存をはかることを原則とし、どうしても工法上、保存の困難なものについては記録保存調査を行うこととした。その結果、古墳･住居跡などの遺構が、対象地区の南東端部の花川の氾濫原を除きほぼ全域に分布することが確認された。支線排水路にかかる古墳 3 基、住居跡 9 軒、土壙 5 基、遺物包含層、溝跡などについては記録保存のための調査を行った。トレンチ、調査区は平板で 1/200 の実測図を作成し、遺構は簡易遣り方により 1/20・1/10 の実測図を作成し、写真を撮影した。また墳丘の残る古墳は現況写真を撮影し、残りの良いものは平板により 1/40 の現況図を作成した。

以上の調査期間中に、農政側から旧水田の耕作土を新しい水田の耕作土として利用したいとの要望が出された。また文化財保護課側からは排水路路線にかかる古墳のうち残存の良好な 6 基の古墳(74、118、121、122、124、130 号墳)についての保存の要望が出された。これらについて、上記各関係機関・団体の間で改めて協議が重ねられ、現在の水田耕作土については調査員の立ち合いのもとに表層の 5 ㎝をバックホーの平バケットで剥ぎ集めることとし、古墳の保存については水路の路線を部分的に変更し保存することで合意に達した。表土剥離作業は約 10*ha* が対象となった。立ち合いの結果数ヶ所で古墳の石室用材と考えられる集石が認められたためその周辺は表土剥離を行わなかった。水路の変更により保存された古墳は新たに水路にかかる周溝の一部を調査し 1/20 の実測図、写真をとったが、主体部・墳丘の調査は行わなかった。

遣り方、基準杭は昨年・一昨年同様、新圃場内幹線道路の交叉点のセンター杭を原点とし磁北方向を基線としたものである。(註1) 各古墳の番号は昭和 54 年度の宮城県教育委員会による本古墳群の分布調査の番号 (註2) を基本とし新発見のものには 118 以降の継続番号を付した。住居跡の番号は昨年の住居跡の番号に継続する 36 以降の番号を付した。

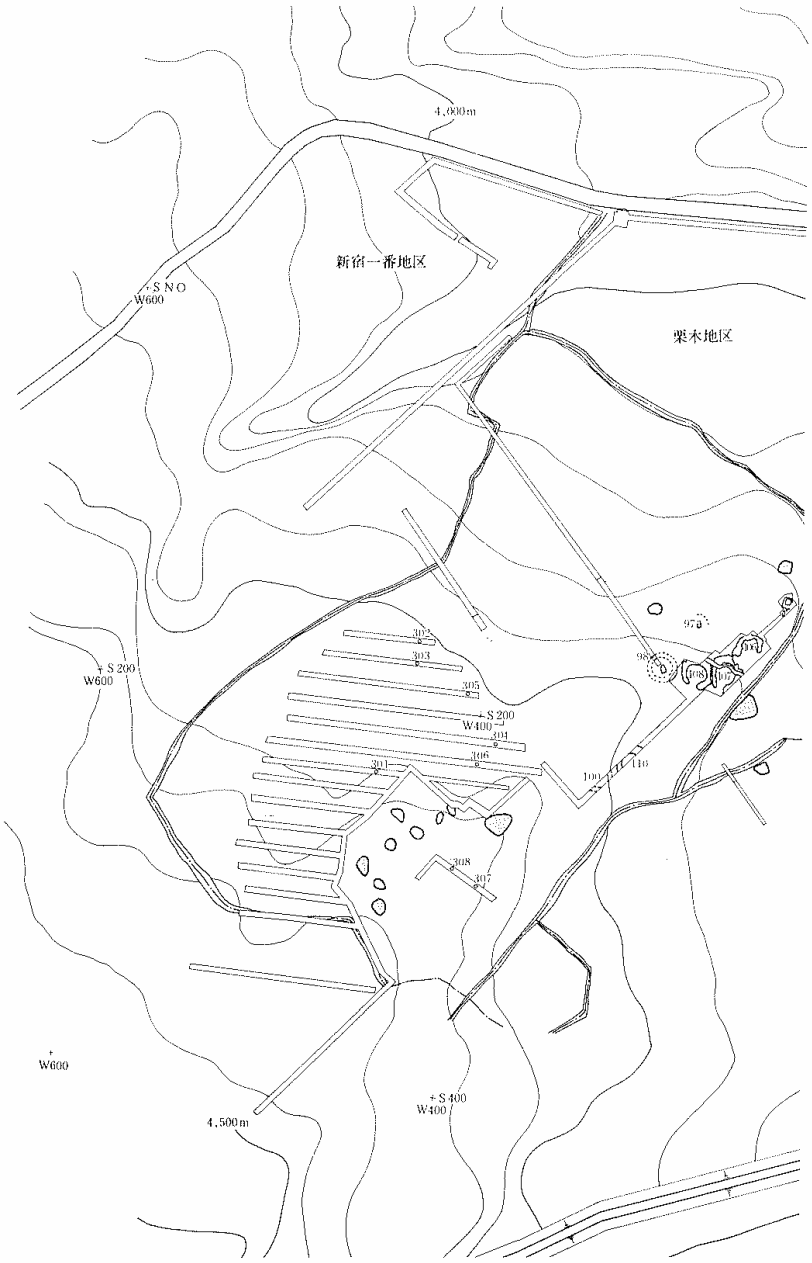
註１　古川一明（1982）「色麻古墳群」『宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書』宮城県教育委員会
註２　阿部　恵（1980）「　　〃　　」『　　〃　　』　　〃

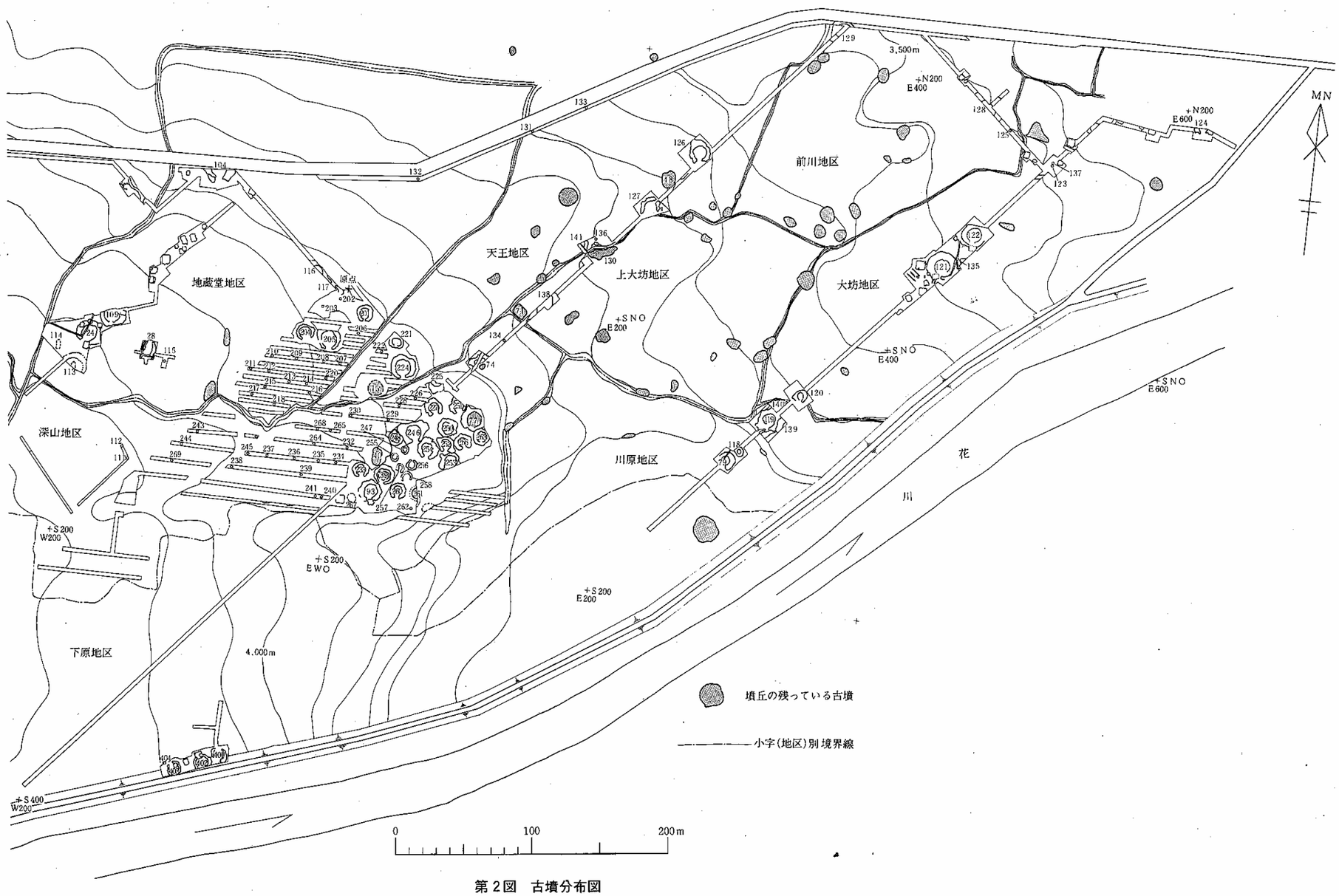
Ⅲ　発見された遺構とその出土遺物

発見された遺構は古墳 28 基・住居跡 17 軒・土壙 7 基・ピット群 2 ヶ所・溝跡 7 本・畝状遺構 4 ヶ所・遺物包含層 2 ヶ所であり、それぞれから土器類を主とした遺物が出土している。この他に調査区外に墳丘の残存する古墳が 23 基確認されている。以下各遺構について記述するが、遺構の一部のみが調査区にかかったものや、調査区の拡張部から検出されたものについては一覧表に示すにとどめる。なお、各遺構の分布は対象地内の微地形と深く関わっており、この微地形は小字の区切りによく対応している（第２図参照）。これらは古墳群の支群構成や住居跡などの集落構成にも関連すると考えられることから各遺構の位置の記載には小字名による地区名も付記した。

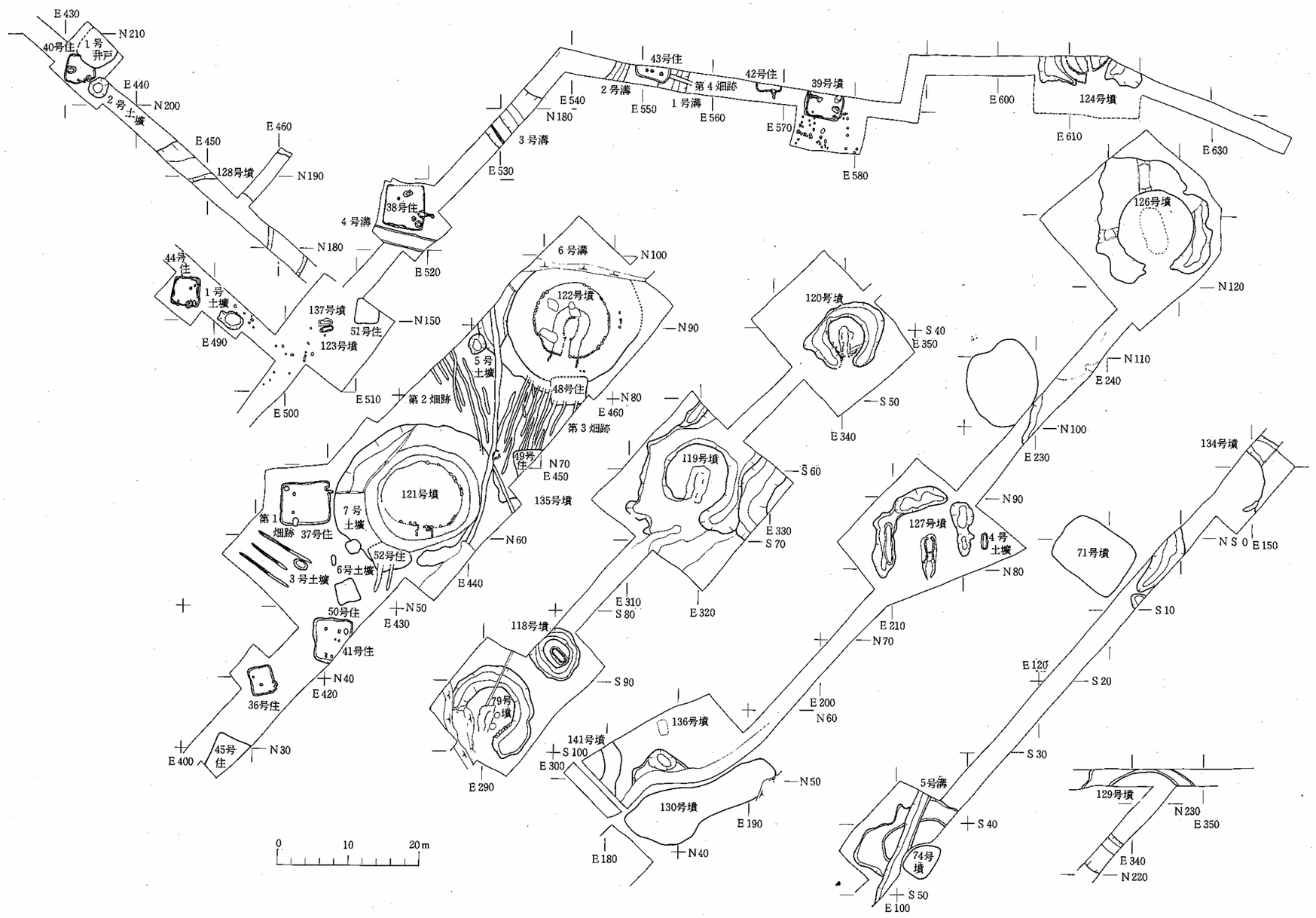
１　古　墳

古墳は調査対象地区内南端部の花川の旧氾濫原を除きほぼ全域に分布している。西側は昨年・一昨年に調査された古墳群に連続し、北側は調査区外にさらに延びることが確認された。各古墳は、巨視的には平坦地に立地し密集した状態で分布する傾向が認められるが、微地形的には花川沿いに南西から北東に延びる段丘状の微高地上に立地している。


4,000m
新宿一番地区
栗木地区
+S NO
W600
+S 200
W600
+S 200
W400
+S 400
W400
4,500m
W600
302
303
305
304
306
301
308
307
100
110
97a
98
408
407


MN
前川地区
天王地区
地蔵堂地区
上大坊地区
大坊地区
川原地区
深山地区
下原地区
花
川
3,500m
4,000m
原点
+N200
E400
+N200
E600
+SNO
E200
+SNO
E400
+SNO
E600
+S200
W200
+S200
EWO
+S200
E200
+S400
W200
0
100
200m
墳丘の残っている古墳
小字(地区)別境界線

第2図　古墳分布図


E 430
N 210
40号住
1 号
井戸
E 440
N 200
2 号土壙
E 450
E 460
128号墳
N 190
N 180
44号
住
1 号
土壙
E 490
E 500
137号墳
51号住
123号墳
N 150
E 510
4 号溝
38号住
E 520
3 号溝
E 530
E 540
N 180
2 号溝
43号住
第 4 畑跡
E 550
1 号溝
E 560
42号住
39号墳
E 570
E 580
E 600
124号墳
E 610
E 630
126号墳
N 120
N 110
E 240
N 100
E 230
6 号溝
N 100
122号墳
N 90
5 号
土壙
48号住
N 80
E 460
第 2 畑跡
第 3 畑跡
49号
住
N 70
E 450
135号墳
121号墳
第 1
畑跡
37号住
7 号
土壙
52号住
6号土壙
3 号土壙
N 60
E 440
50号住
N 50
E 430
41号住
N 40
E 420
36号住
45号
住
E 400
N 30
118号墳
S 90
79号
墳
E 290
141号墳
S 100
E 300
E 310
S 80
E 320
119号墳
S 60
E 330
S 70
120号墳
S 40
E 350
S 50
E 340
127号墳
4 号
土壙
N 90
N 80
E 210
N 70
E 200
N 60
136号墳
130号墳
N 50
E 190
E 180
N 40
E 120
S 20
S 30
5号溝
S 40
74号
墳
S 50
E 100
71号墳
134号墳
N S 0
E 150
S 10
129号墳
N 230
E 350
E 340
N 220
0
10
20 m

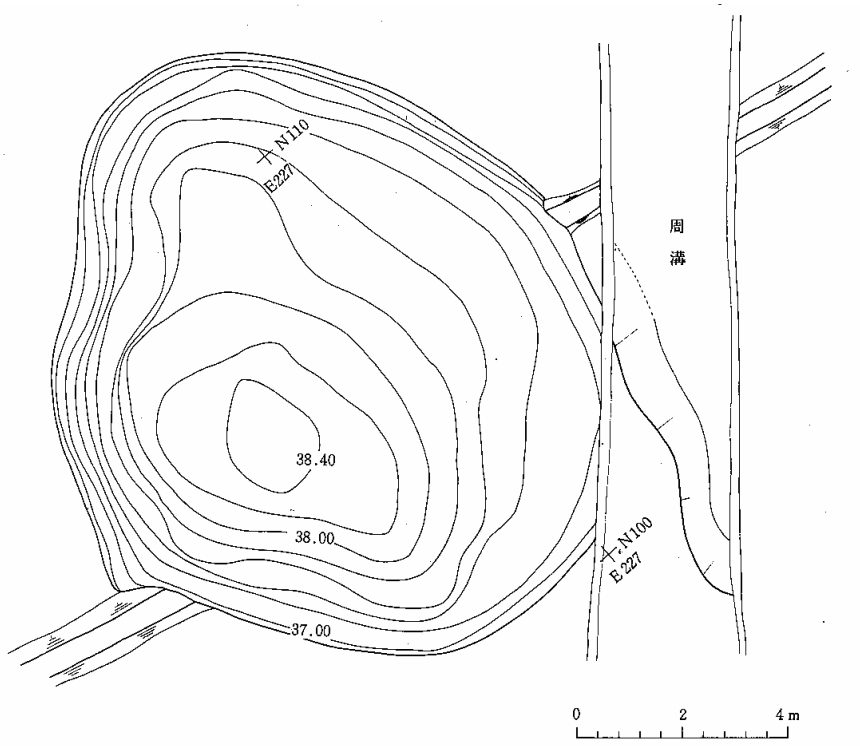
第 3 図　遺構位置図

第48号墳

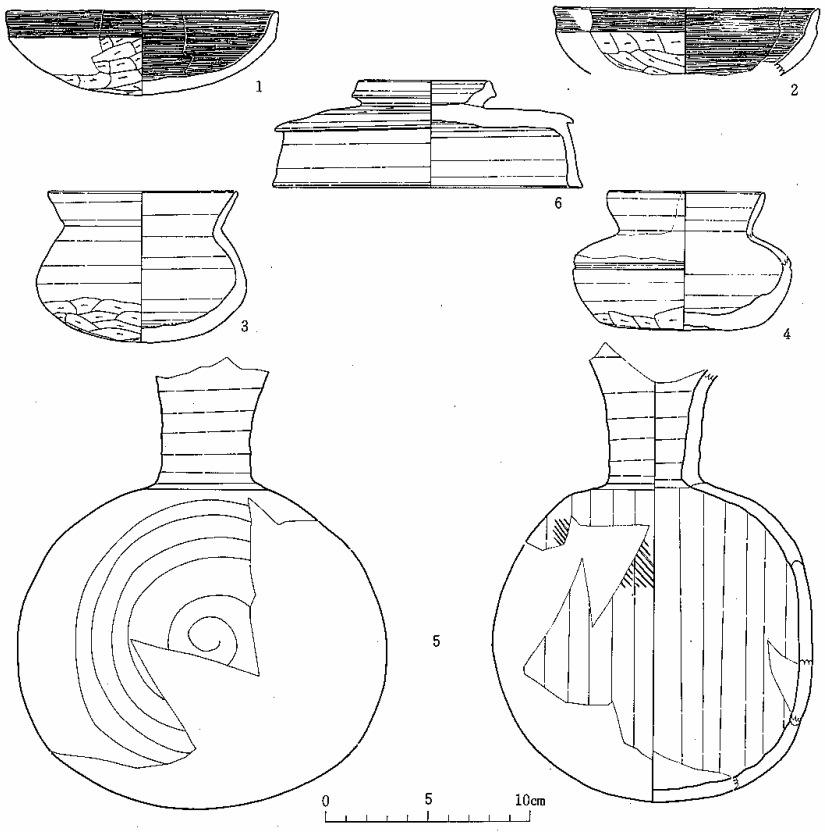
〔確認状況〕直径約 10m の円形の墳丘が残存していた。周囲の水田との比高は約 1.5m で、表面は寄せ集められた礫で覆われている。墳丘の東半の上部に近世、近代の墳墓があった。墳丘の南東裾部のトレンチで本古墳の周溝の一部が確認され土師器、須恵器が出土した。周溝が墳丘の南東部で途切れることから、主体部は南方に開口する横穴式石室と推定される。墳丘本体は保存され調査は行わなかった。

〔周溝〕確認面は水田耕作土直下の地山、砂質シルト層である。墳丘東部から北部にかけては開田による深い削平を受けており明確に確認できたのは、南東部の内縁部分だけである。確認面からの深さは深い所で約 15 cmで、南部では途切れている。堆積土は黒褐色シルト層である。

〔遺物出土状況〕周溝堆積土から土師器、須恵器が出土した。これらは墳丘側、もしくは前庭側に集中しており、さらに調査区外にも埋蔵されると考えられた。出土地点が、前庭部付近であることから、これらの土器は本古墳に伴う土器群と考えられる。しかし出土状態に規則性がなく、大多数の破片は表土に含まれていたもので原位置を示すものはなかった。

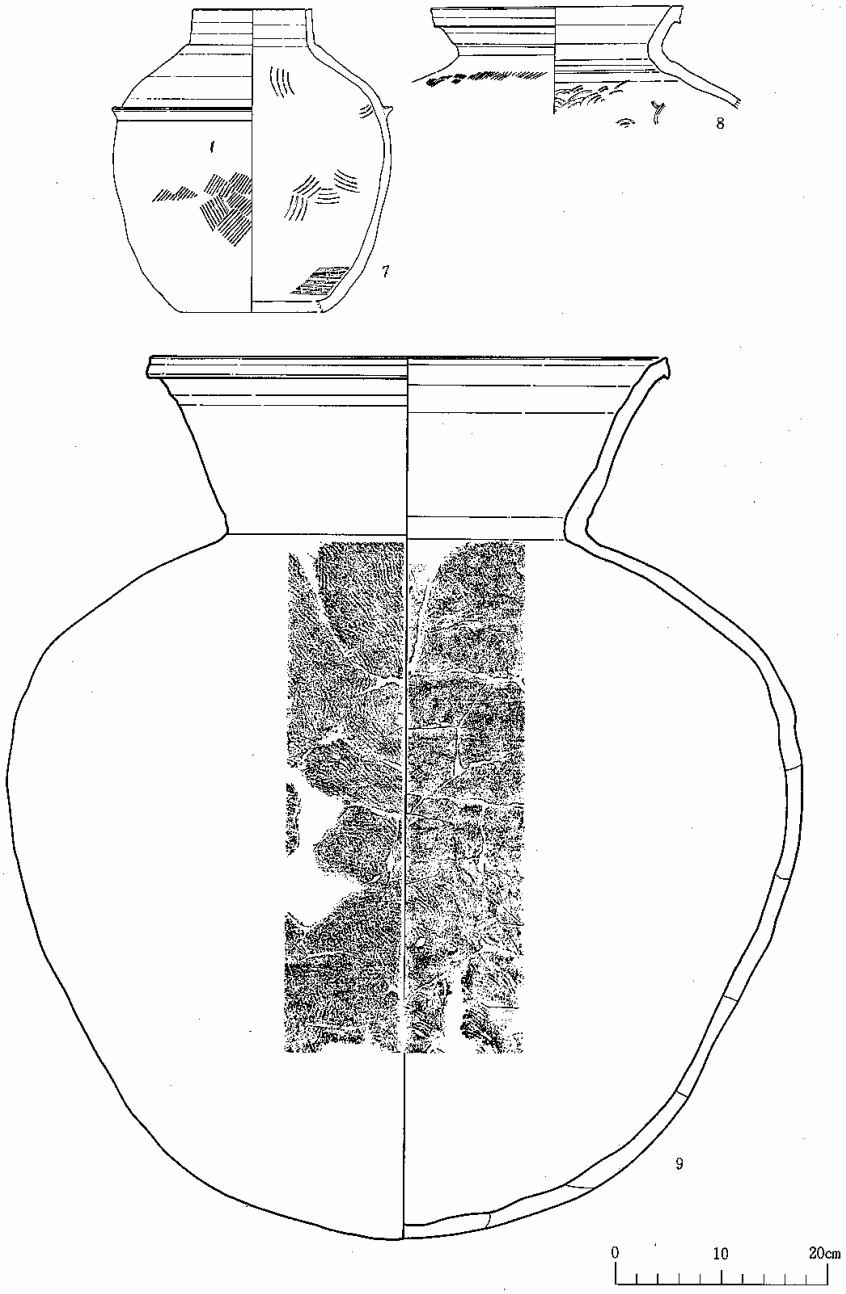


第 4 図　第48号墳



No	種　類	出土地点・層位	分類	特　徴	残存	登録No
1	土師器坏	墳丘南東部Ⅰ層	BⅠ1	内面ナデ調整。外面口縁下部に稜。口縁部は短く直立。	小破片	48-Po 1
2	〃	〃	〃	〃　〃　〃　外反。	1/4	48-Po 2
3	須恵器広口壺	〃	AⅠ	丸底。体部は丸味を帯びる。体部下端～底部手持ちヘラケズリ。	2/3	48-Po 3
4	〃	南東部周溝底面	〃	平底。　〃　〃	2/3	48-Po 4
5	須恵器提瓶	〃		体部は丸味が強い。外面に平行タタキの痕跡。	1/2	48-Po 5
6	須恵器蓋	〃		口縁部は外傾。リング状（？）のつまみ。天井部受部の境に段	2/3	48-Po 6
7	須恵器壺	墳丘南東部Ⅰ層		肩部に鍔状の突帯。口縁部は直立気味に内傾。平底。	1/5	48-Po 7
8	須恵器甕	〃	BⅠ	口縁帯下部は下方につまみ出され鋭い。外面平行タタキ、内面同心円オサエ。	1/4	48-Po 8
9	〃	〃	AⅠ	頸部は無文。口縁帯下部は下方につまみ出される。	1/2	48-Po 9

第５図　第48号墳出土遺物（１）



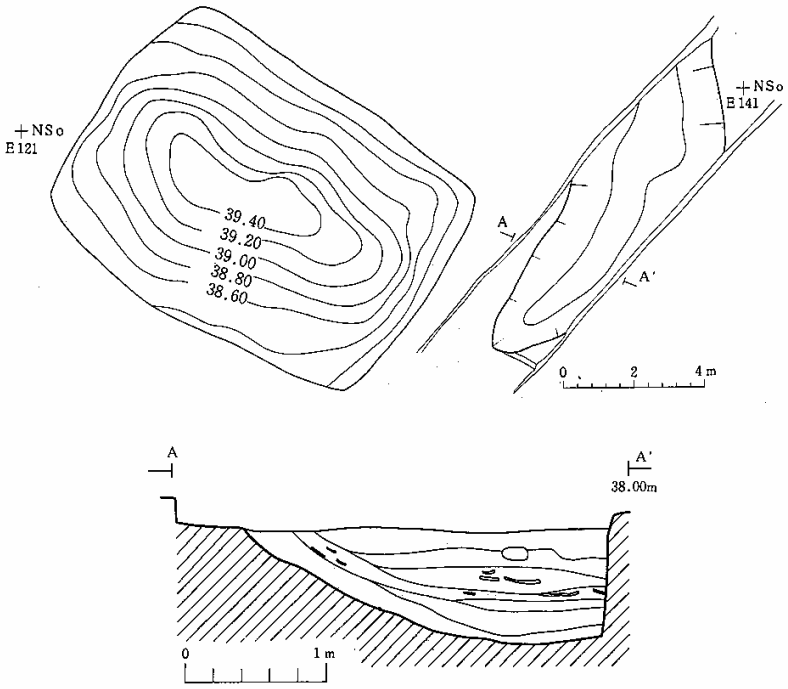
第６図　第48号墳出土遺物（２）

第71号墳

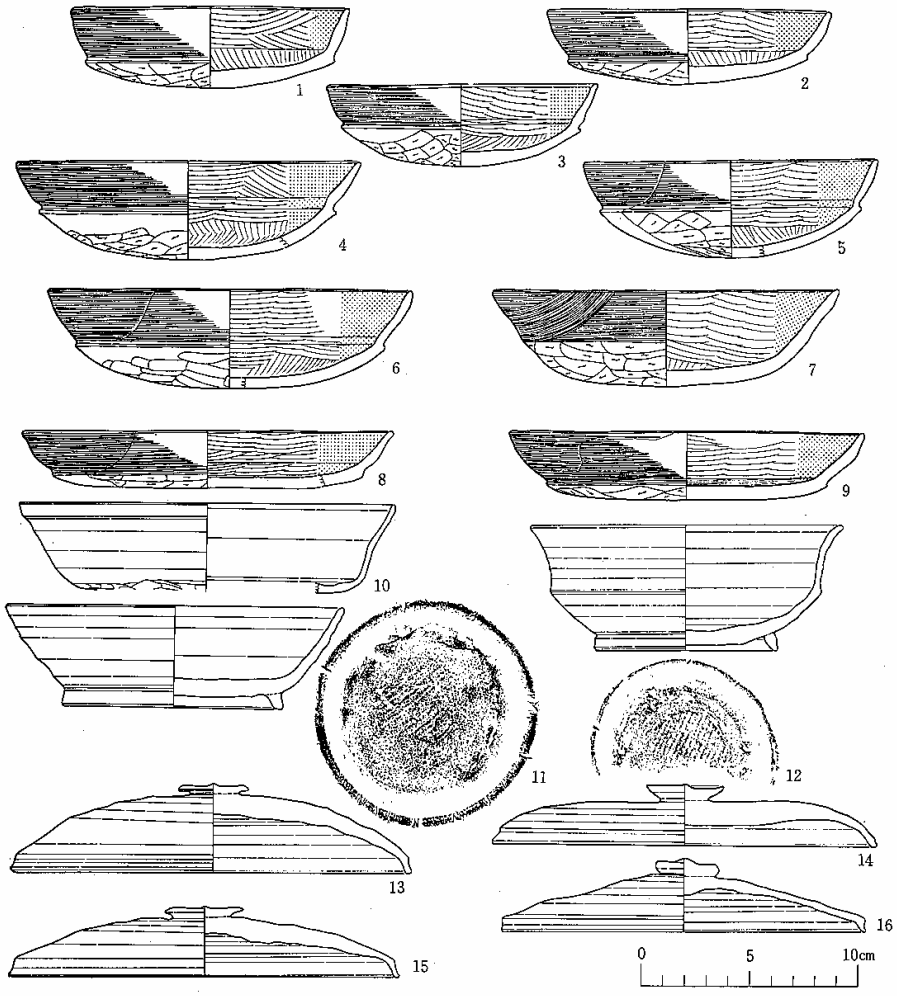
〔確認状況〕8×10m の長方形を呈する墳丘が残存していた。周囲の水田面との比高は約 1.5m で表面は寄せ集められた礫で覆われている。墳丘東側裾のトレンチで本古墳の周溝の一部が確認され土師器、須恵器が出土した。周溝は第 48 号墳同様墳丘の南東部で途切れることから、主体部は南方に開口する横穴式石室と推定される。

〔周溝〕確認面は水田耕作土直下の地山、砂質シルト層である。周溝は墳丘の北東部から南東部にかけて弧状に廻っており、「みかけ」の墳端から、周溝の内法まで約 2m ある。北東部は西方に廻り込んで墳丘の北側へ伸びているが南東部では徐々に浅くなり途切れている。上巾約 4m、確認面からの深さ約 0.4m で堆積土は 4 層識別されいずれも自然流入の状態を示していた。

〔遺物出土状況〕周溝南東部の周溝底面、堆積土から土師器、須恵器が出土した。底面出土の土器は土師器坏 7 点（第 8 図 1～7）である。堆積土出土のものは主に第 4 層以上に含まれ図示できたものとして土師器坏、須恵器高台付坏、蓋、長頸瓶、甕がある。これらはいずれも墳丘側から流入した状態で出土しており、本古墳に伴う遺物と考えられる。ただし、第 5 層に炭化物層がみられることから第 5 層を境とした上下の土器に時期差があるものと考えられる。第 5 層の成因は第 4 層に土器が集中していることから追葬に関係したものかもしれない。

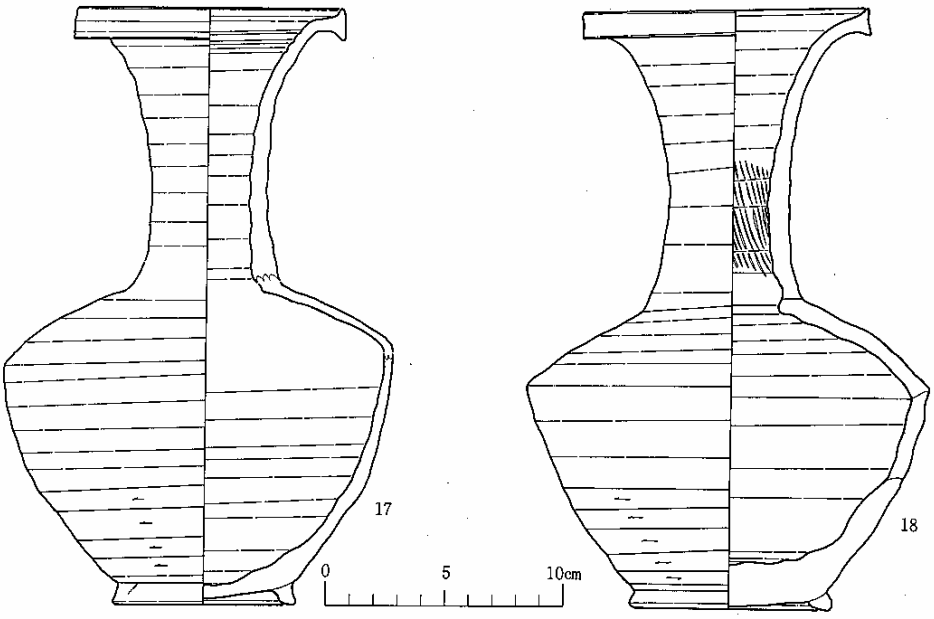


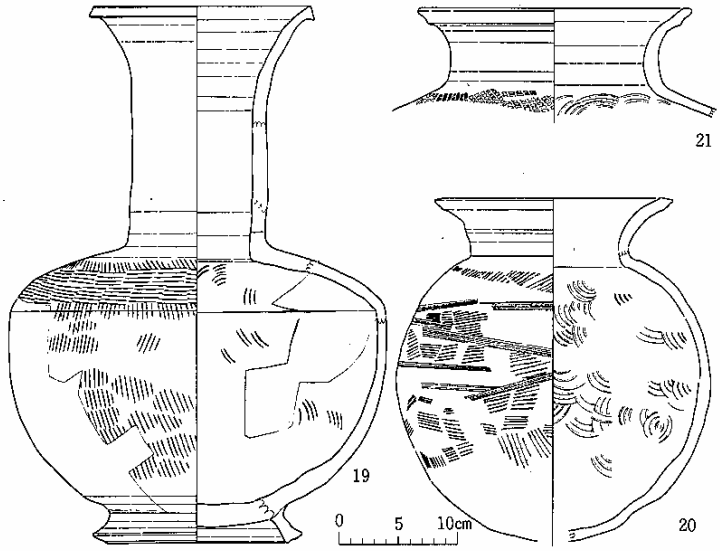
第 7 図　第71号墳



No	種　類	出土地点・層位	分類	特　徴	残存	登録No
1	土師器 坏	南東周溝底面	AⅠ1a	内黒。外面下位に段。丸底。段以上は直線的に外傾。	完	71-Po 1
2	〃	〃	〃	〃　〃　〃　段以上は内弯気味に外傾。	〃	71-Po 2
3	〃	〃	〃	〃　外面中位に段。丸底。段以上は直線的に外傾。	〃	71-Po 3
4	〃	〃	〃	〃　〃　〃　〃	1/3	71-Po 4
5	〃	〃	〃	〃　〃　〃　〃	1/2	71-Po 5
6	〃	〃	〃	〃　〃　〃　〃	〃	71-Po 6
7	〃	〃	AⅡ	〃　外面中位に稜。〃　〃	完	71-Po 7
8	〃	周溝堆積土1層	A12a	〃　外面下位に段。平底風の丸底。段以上は短く強く内弯。	1/3	71-Po 8
9	〃	〃	〃	〃　〃　〃　〃	完	71-Po 9
10	須恵器 坏	周溝堆積土5層	AⅡ2	丸底。底部は手持ちヘラケズリ再調整。器壁が3mm前後の薄さ。	1/2	71-Po10
11	須恵器高台付坏	周溝堆積土4層	BⅡ	平底。底部は静止糸切り離し。体・口縁部は直線的に外傾。	1/2	71-Po11
12	〃	〃	D	〃　〃　体部中位に稜。口縁部は外反。	1/4	71-Po12
13	須恵器 蓋	〃	BⅠ2	口縁端部で屈曲。天井部は丸味が強く高い。ツマミは偏平な翼状。	完	71-Po13
14	〃	〃	〃	〃　天井部は平らで低い。〃	〃	71-Po14
15	〃	〃	〃	〃　天井部は丸味があるが低い。〃	〃	71-Po15
16	〃	〃	〃	〃　〃　ツマミは偏平擬宝珠。	〃	71-Po16

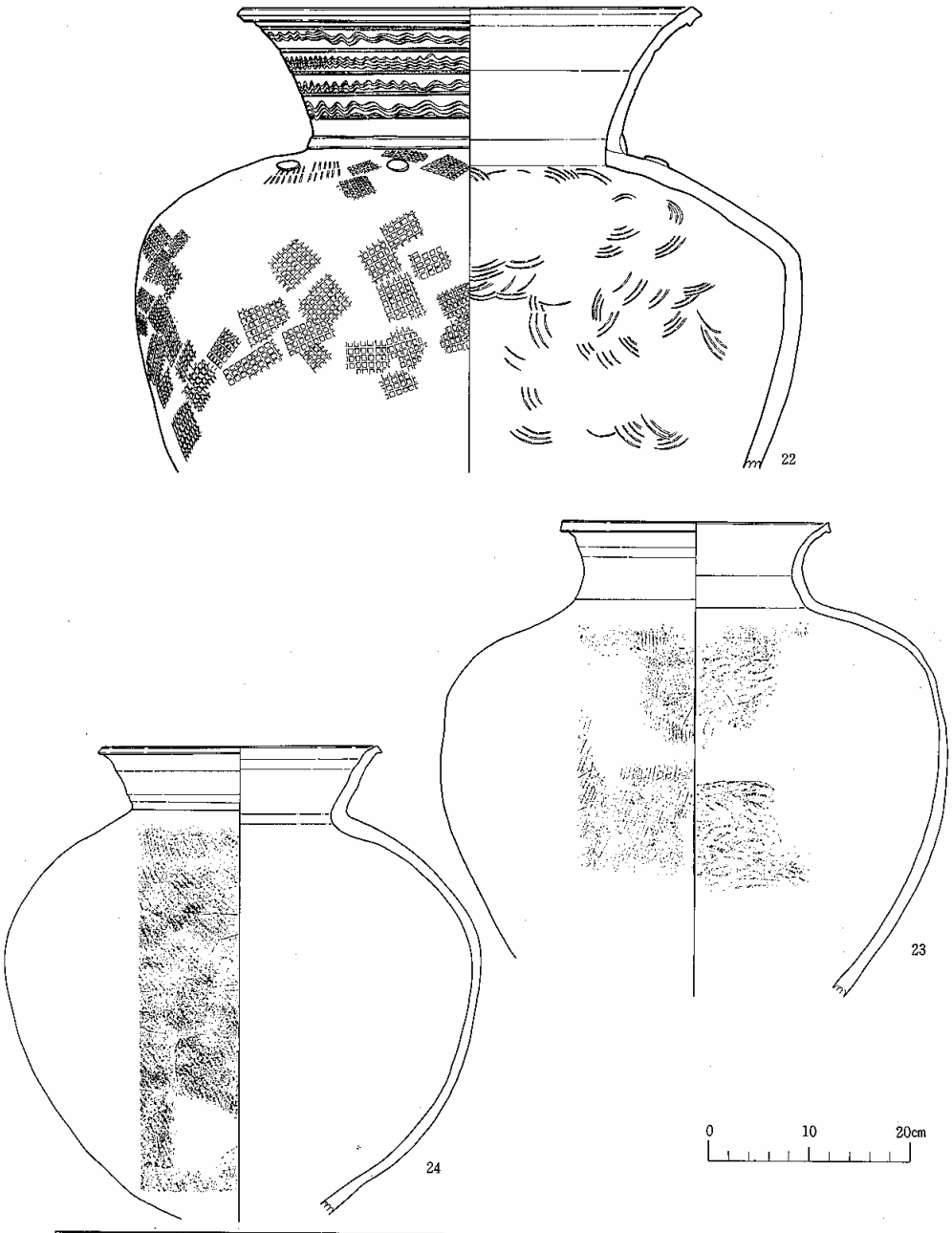
第8図　第71号墳出土遺物(1)





No	種　類	出土地点・層位	分類	特　徴	残存	登録No
17	須恵器長頸瓶	周溝堆積土3層		付高台。肩部に稜。口縁部は大きく外反し巾広い口縁帯が付く。	完	71-Po17
18	〃	〃		〃　〃　〃	2/3	71-Po18
19	〃	〃		大型、高台は外方にふんばる。体部外面平行タタキ、内面同心円オサエ。	1/2	71-Po19
20	須恵器甕	〃	C	体部外面平行タタキ後カキ目、内面同心円オサエ。	完	71-Po20
21	〃	〃	BI	口縁下部に隆帯、体部外面格子タタキ目、内面同心円オサエ。		71-Po21

第9図　第71号墳出土遺物(2)



No	種　類	出土地点・層位	分類	特　徴	残存	登録No
22	須恵器甕	周溝堆積土3層	A Ⅰ	頸部に波状沈線。体部外面は格子タタキ目。肩部にボタン状の貼付。	1/2	71-Po22
23	〃	〃	B Ⅰ	外面平行タタキ目、内面ナデ。	完	71-Po23
24	〃	〃	B Ⅰ	外面　〃　内面同心円オサエ。	〃	71-Po24

第10図　第71号墳出土遺物(3)

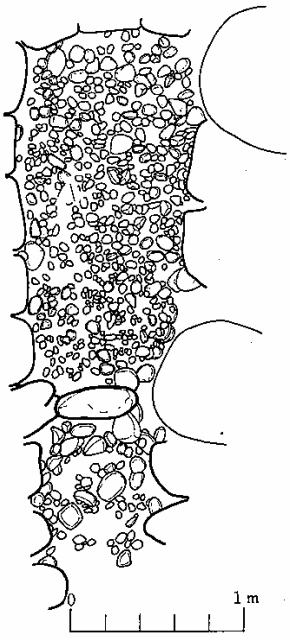
第79号墳

〔確認状況〕畑地の中に東西 2m、南北 5m の楕円形で高さ約 80 cmの盛り土を伴う近世墓 4 基が確認されていた。調査の結果この盛り土下に石室が確認され、周囲に周溝も検出された。周溝確認面は地山褐色砂質シルト層である。石室は上部が削平され、さらに東半部は近世墓壙により破壊されていた。

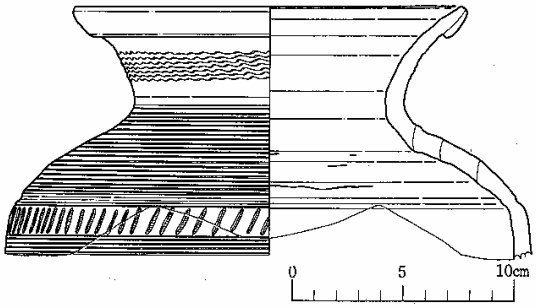
〔主体部〕河原石使用の横穴式石室である。玄室部の平面形は矩形で奥半部にのみ弱い胴張りがみられる。奥壁部の石材は抜き取られている。側壁は残りの良い西側で四段まで残存し、床面からの高さは約 50 cmある。横長で偏平な石材を互目積みにしたもので弱い持ち送りがみられる。玄門部は偏平な石を通目積みにしている。床面は玄室部が羨道部よりも 5 cm高い。玄室部には径 5 cm前後の小石を密に敷いているが羨道部には、粗く敷かれている。玄門部床面には横長の梱石が埋置されており羨門部床面は撹乱を受けている。閉そくは羨道内に径 20～30 cmの石が粗雑に充填されたものである。石室裏込めには径 5 cm前後の小石と径 30 cm前後の石を使用している。

〔外部施設〕周溝内縁は石室奥半部が中心となるやや不整な円形を呈する。巾は約 3m、確認面からの深さは約 20 cmで底面はほぼ平坦である。なお、調査前に確認されていた盛土は近世墓に伴うもので本古墳に直接関係するものではない。南東部の周溝内縁に葺石状の石列が確認されているが他の部分で葺石の崩落等はみられず、葺石の有無は不明である。前庭部の構造も攪乱により不明である。

〔出土遺物〕南東部の周溝底面より土師器甕 1 点・須恵器壺 1 点が出土している。土師器甕は内外面ともハケ目調整で体部と頸部の境に稜を持つものである。口縁部、底部が欠損しており、図化できなかった。これらの土器は本古墳に伴うものである。

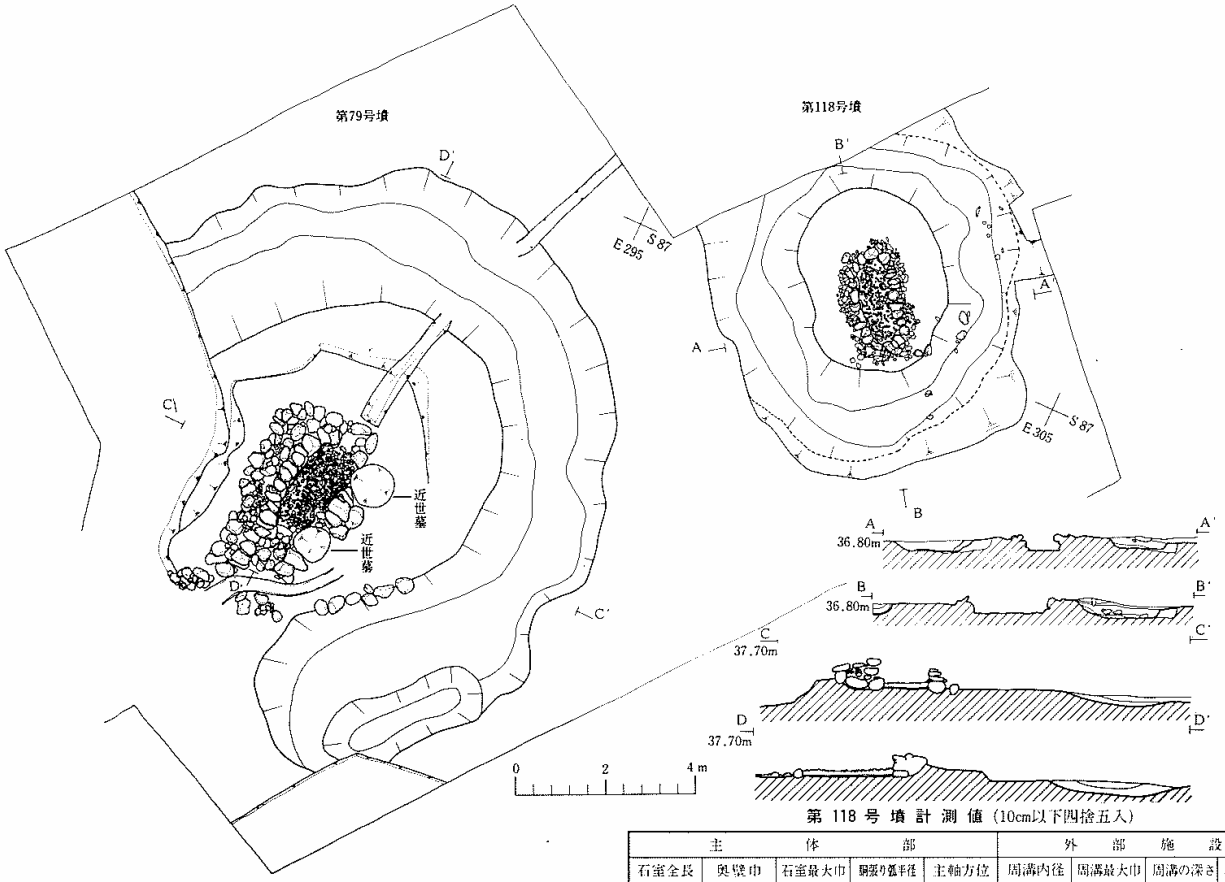


第11図　第79号墳石室



No	種　類	出土地点・層位	分類	特　徴	残存	登録No
1	須恵器壺	南東部周溝底面	A II	頸の張りは弱く肩部に櫛歯状工具による列点文。頸部に波状文。	1/2	79-Po 1
2	土師器甕	〃		図示不能。外面ハケ目調整。頸部と体部の境に稜。長胴か?		79-Po 2

第12図　第79号墳出土遺物



第 118 号 墳 計 測 値（10cm以下四捨五入）

主体部					外部施設			
石室全長	奥壁巾	石室最大巾	側張り弧半径	主軸方位	周溝内径	周溝最大巾	周溝の深さ	墳丘直径
1.9m	0.2m	0.7	20m	N-35°-W	3×4m	2.2m	0.4	——

第 79 号 墳 計 測 値（10cm以下四捨五入）

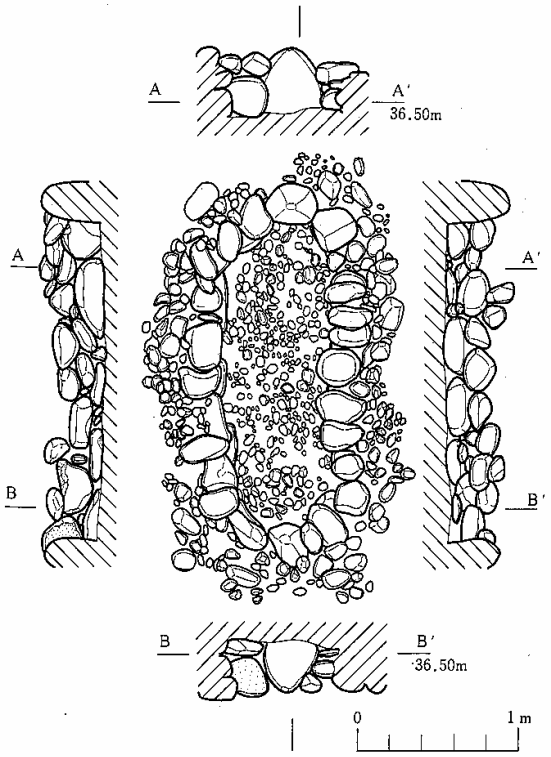
主体部								外部施設			
石室全長	玄室長	羨道長	奥壁巾	玄室最大巾	羨道巾	側張り弧半径	主軸方位	周溝内径	周溝最大巾	周溝の深さ	墳丘直径
3.5m	2.2m	1.3m	0.6m	1.0m	0.6	——	N-12°-E	6.4m?	3.4m	0.3m	——

第13図　第79、118号墳

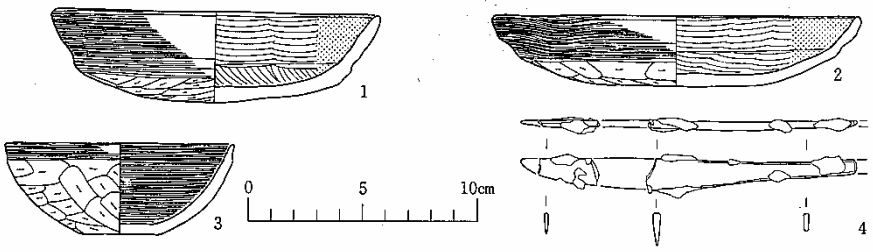
第118号墳

〔確認状況〕現況は畑地であった。新発見の古墳である。表土下約 60 cmで石室が確認された。確認面は地山褐色砂質シルト層である。表土から確認面までしまりのない砂質シルト層で撹乱を受けた痕跡はなかった。しかし、封土、天井部などを識別することはできなかった。周溝についても遺構面の認定が難しく全体的に掘り過ぎた。

〔主体部〕竪穴式石室で側壁に弱い胴張りがみられる。石材は全て河原石で側壁は根石とその上段を広口積みにし、それ以上を横長の石材による小口積みにし持ち送りも加えている。これに対し妻部は南北とも柱状の石を直立させて構成している。床面は径 2～5 cmの小石を平坦に敷き詰めている。石室の深さは約 50 cmである。天井の高さもほぼこれに等しかったと考えられる。石室裏込めは径 5～10 cmの小石を石室掘り方向に充填したものである。



第14図　第118号墳石室



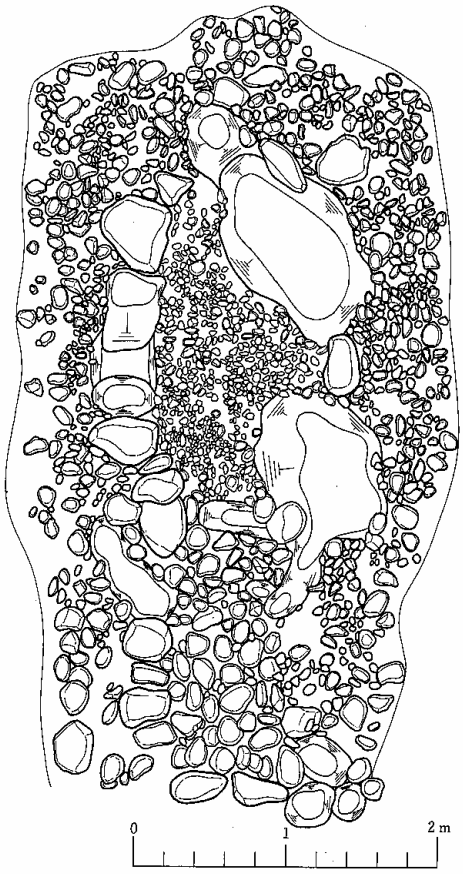
No	種　類	出土地点・層位	分類	特　徴	残存	登録No
1	土師器 坏	南側周溝底面	AI2a	内黒、器外面下位に不明瞭な段。底部は丸味の弱い平底風のもの。	完	118-Po 1
2	〃	〃	〃	〃	〃	118-Po 2
3	〃	〃	BIV	内面ナデ調整、口縁下部で屈曲し段をもたない。平底。	〃	118-Po 3
4	刀　子	石室床面		平棟・平造、フクラはない。刃関のみか？	〃	118-E 1

第15図　第118号墳出土遺物

〔外部施設〕低墳丘が存在したと考えられるが明確にできなかった。周溝内周は 4×3m の楕円形を呈し、巾は 1m 前後で外周は北端部が調査区外に延び不明確であるが内周にほぼ相似した形と推定される。確認面からの深さは 30～40 cmで低面はほぼ平坦である。周溝堆積土は基本的に 3 層に大別されいずれも自然堆積の状態を示している。
〔遺物出土状況〕石室の北東隅床面から鉄製刀子が 1 点、南側の周溝底面から土師器坏 3 点が出土している。いずれもほぼ完形で、出土状況から本古墳に伴う遺物と考えられる。

第 119 号墳

〔確認状況〕現況は水田であった。新発見の古墳である。水田面下 15 cmで石室が確認され、周囲に周溝が検出された。径 8m 前後の円墳と考えられる。石室の根石は西半の敷石を残して抜き取られ、石室床面、裏込めも部分的に撹乱を受けている。また、石室北側には破壊した石室の石材を投棄した弧状の撹乱溝が認められた。石室南方には 2 条の溝状遺構が認められたが、削平が著しく本古墳の前庭、周溝との関係は明らかでない。本古墳の東側に第 139 号墳、北西側に第 140 号墳が隣接しており 140 号墳は前庭部が 139 号墳は周溝の西端部がそれぞれ本古墳の周溝と切り合っている。140 号墳との前後関係は不明であるが、139 号墳の周溝は本古墳の周溝を切っている。



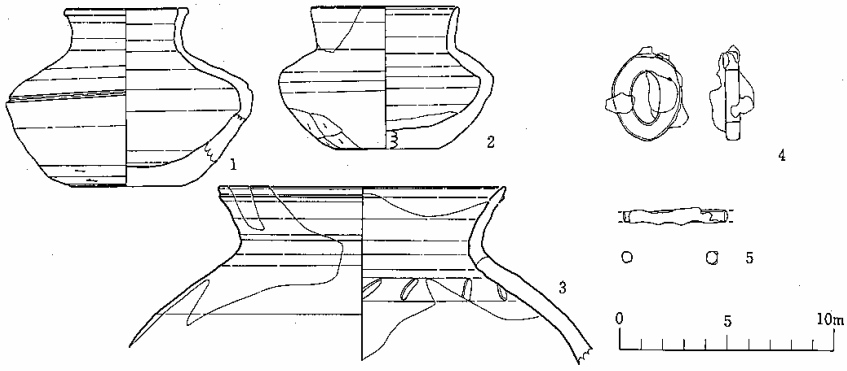
第16図　第119号墳石室

〔主体部〕横穴式石室で玄室部に胴張一りを持つ。奥壁部、玄門部、羨門部の主要な石材は全て抜き取られている。また玄門部の梱石も抜き取られているが、抜き取りの痕跡から横長の石が一つ用いられたものと推定される。羨門部にはやや大きめの石が二つ梱石状に並列されている。玄室床面はほぼ平坦で径2㎝前後の石が敷かれている。羨道床面は玄室床面と同一レベルで平坦であるが径 10 ㎝前後の大きめの石が敷かれている。石室裏込めは石室掘り方向に径 2〜10 ㎝の石を充填したものである。

〔外部施設〕水田耕作土直下の地山面で周溝が確認された。外周は北端部が調査区外に延びているが凹凸のある不整円形を呈するものと考えられる。周溝の東半部は深く断面が「U」字状となるが西半部では浅く底面が広く平坦である。石室入口部では途切れており前庭部に取り付いていたものと考えられる。堆積土は周溝各部で異なった様相を示しているが東側の最も深い部分をみると基本的に 4 層に大別される。なおこれら各層はいずれも隣接する第 139 号墳周溝にまたがって自然堆積したものである。

〔構築方法〕断ち割りの結果、旧表土が確認された。旧地形は南西から北東に緩やかに傾斜しており、石室は東・北方に盛り土を行い整地した後に構築されている。石室は、旧表土、地山を堀り込んだ隅丸長方形の掘り方向に作られている。掘り方向に土を入れて平坦にし同時に石室・根石・梱石などを固定した後外側に裏込め石を充填し内側には床面の敷石を施している。側壁根石はこの段階で上面がほぼ水平になるように置かれている。また、これらの石はその上面が平坦もしくは中央がやや凹む形状のものが選択されており、上部に積み上げる側壁が安定するよう配慮されている。

〔出土遺物〕玄室床面から鉄製鍔・鏃、前庭東側から須恵器広口壺・甕が出土している。



No	種類	出土地点・層位	分類	特徴	残存	登録No
1	須恵器広口壺	南東部周溝底面	AⅡ	肩が張り肩部に一条の沈線が廻る。口縁部は直立気味に外傾。	1/2	119-Po 1
2	〃		〃	肩が張る。口縁部は直立する。	完	119-Po 2
3	須恵器甕		BⅡ	体部は丸味があり口縁部は直線的に外傾。口縁下部に稜。	1/2	119-Po 3
4	鍔	石・釜床面		喰み出し鍔。	完	119-E 1
5	鉄鏃	〃		長茎被の一部か？	1/4	119-E 2

第18図　第119号墳出土遺物

第 119 号 墳 計 測 (値10cm以下四捨五入)

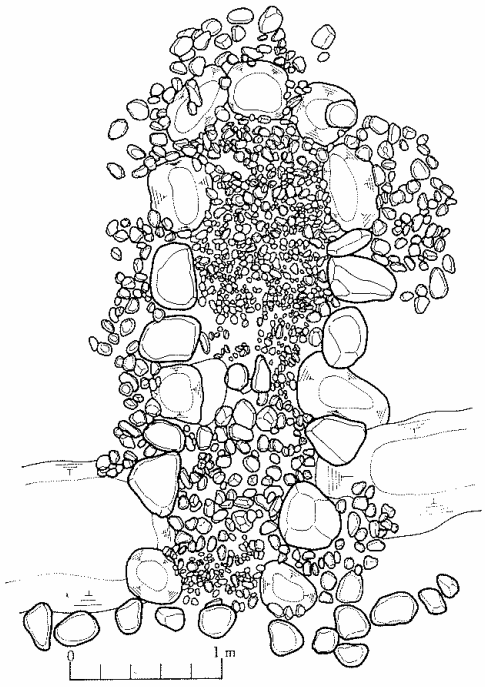
主体部								外部施設			
石室全長	玄室長	羨道長	奥壁巾	玄室最大巾	羨道巾	側壁り弧半径	主軸方位	周溝内径	周溝最大巾	周溝の深さ	墳丘直径
4.2m ?	2.4m	1.8m	———	1.2m	0.7m	2.2m	N-13° E	9 m	4 m以上	0.8m	———

第17図　第119号墳

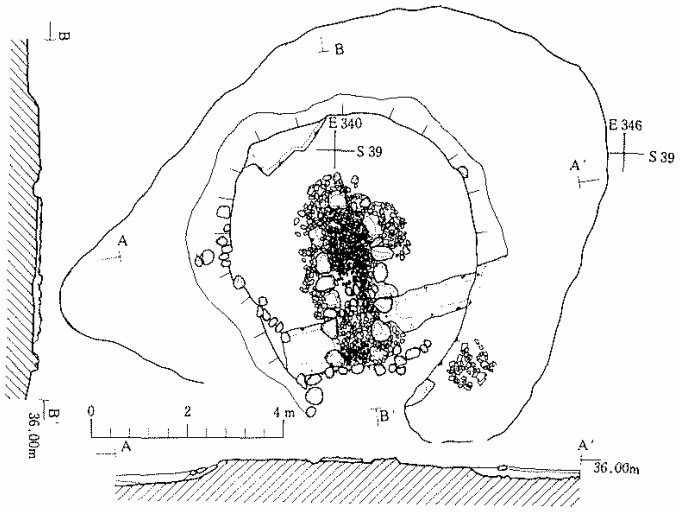
第120号墳

〔確認状況〕現況は水田であった。新発見の古墳である。水田下約20㎝の地山面で石室が確認された。石室奥半部の壁材玄門は抜き取られ、羨道部は横断する溝状の攪乱を受けていた。石室周囲には周溝内縁の輪郭が確認できたが外縁は明確でない。墳丘は失われている。

〔主体部〕河原石使用の横穴式石室で玄室部に弱い胴張りを持つ。奥壁、玄門の石材は抜き取られ、羨道部の側壁根石も若干原位置から移動している。玄室・羨道の床面は同一レベルで径2㎝前後の石が平坦に敷かれている。玄門部、羨道部の床面に梱石はみられない。径20㎝前後の閉そく石が数個玄門部付近に認められた。石室裏込めは



第19図　第120号墳石室



第120号墳計測値（10cm以下四捨五入）

主体部								外部施設			
石室全長	玄室長	羨道長	奥壁巾	玄室最大巾	羨道巾	胴張り弧半径	主軸方位	周溝内径	周溝最大巾	周溝の深さ	墳丘直径
3.3m	1.9m	1.4m	0.4m	0.8m	0.6m	1.3m	N-11°W	5.2m	――		――

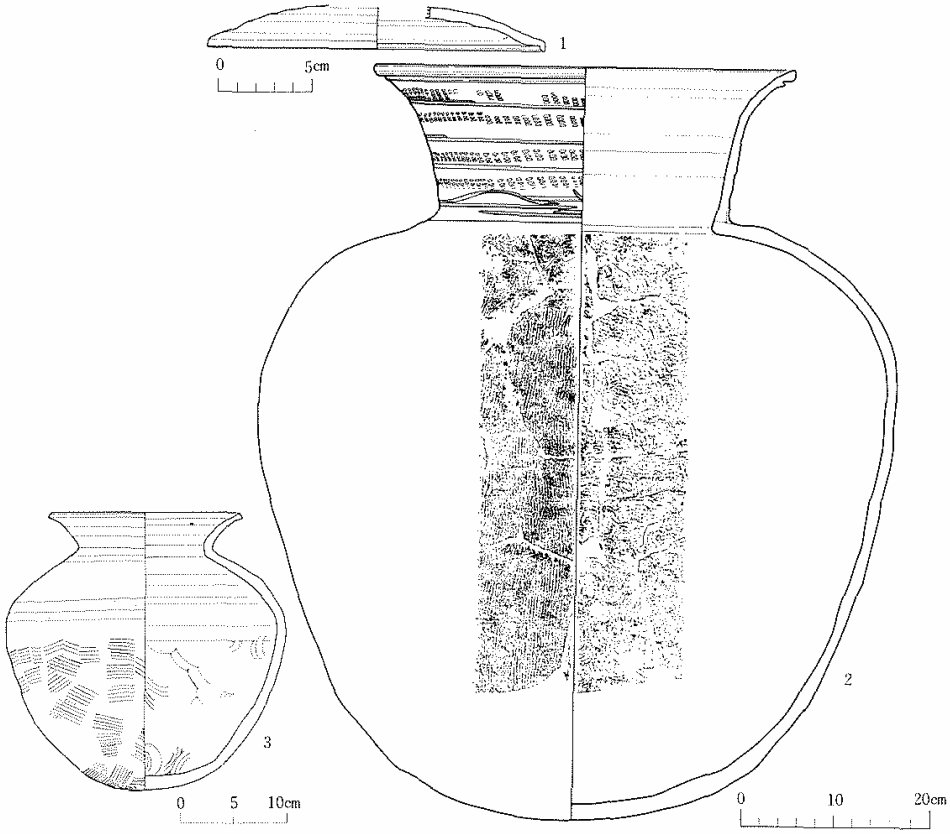
第20図　第120号墳

径 10cm 前後の石からなる。

〔外部施設〕周溝内縁は玄室中央部付近を中心とした円形である。外周はなだらかに立ち上がり外縁は明確でない。確認面からの深さは約20cmで内周側が深く、外側に向って徐々に浅くなる。石室入口部では浅くなり途切れており前庭部に取り付いている。堆積土は３層で自然堆積である。前庭部に石組みは認められない。

〔構築方法〕石室は地山を掘り込んだ隅丸長方形の掘り方内に作られている。石室掘り方内にはさらに側壁根石、奥壁を固定するための溝状の掘り方が認められる。側壁根石の上面は水平になるように固定され配置された後、石室裏込め、床面敷石が敷かれている。

〔出土遺物〕周溝南東部の底面から須恵器甕、蓋が出土している。



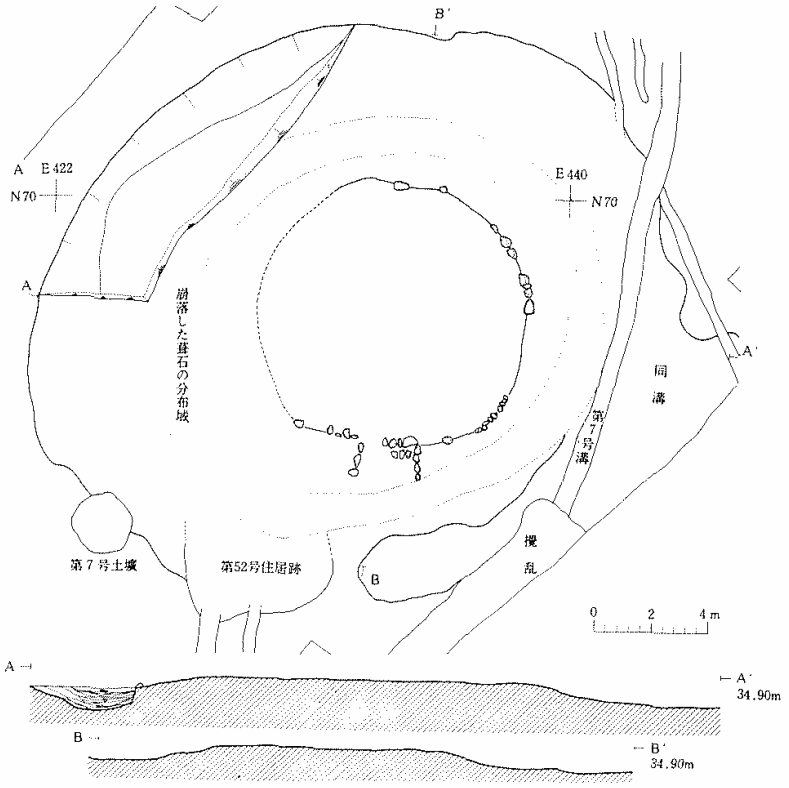
No	種類	出土地点・層位	分類	特徴	残存	登録No
1	須恵器蓋	南東部周溝底面	B I 2	ツマミは欠損。端部で屈曲し下方に短く折れる。	1/2	120-Po 1
2	須恵器甕	〃	A I	頸部に櫛状工具による波状列点文。口縁下部に沈線。平行タタキ目。	完	120-Po 2
3	〃	〃	C	外面平行タタキ。内面同心円オサエ。	〃	120-Po 3

第21図　第120号墳出土遺物

第121号墳

〔確認状況〕現況は水田であった。新発見の古墳である。水田面下約10㎝で、前庭石組みの根石及び葺石と考えられる石材が検出されたが封土石室は削平により完全に失われている。葺石は原位置を保つものが少ないがその分布は直径約11m のほぼ円形を呈しており墳丘の外周に崩落した状態を示していた。一方周溝は葺石の確認面から約50㎝下で確認された。内周は崩落した葺石に覆われており部分的にしか確認できなかった。周溝は周辺に分布する第7号溝、第7土壙・畝状遺構などに切られている。また前庭南方には第52号住居跡が本古墳の周溝を切って掘り込まれている。本古墳は保存されることになり排水路路線部分にかかる周溝北西部のみを調査した。

〔主体部〕削平により失われている。前庭石組みの存在から南南西に開口する横穴式石室で



第121号墳計測値（10cm以下四捨五入）

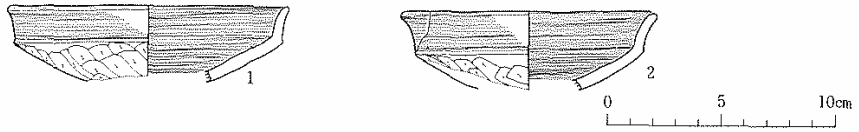
主体部								外部施設			
石室全長	玄室長	羨道長	奥壁巾	玄室最大巾	羨道巾	胴張り弧半径	主軸方位	周溝内径	周溝最大巾	周溝の深さ	墳丘直径
――	――	――	――	――	――	――	N-7°E ?	――	4～5m	0.8m	10.5m

第22図　第121号墳

あったと考えられる。

〔外部施設〕前庭部・葺石・同溝が確認された。前庭部は、「コ」の字状の石組みにより区画されている。地山を掘り込んで作られているが、底面の状況や掘り方は不明である。東半部に部分的に残存する葺石・根石の配列から直径 9m 前後の円墳であったと考えられる。周溝は外周のプランがやや凹凸のある径 25m 前後の円形、内周は直径 16m 前後の円形を呈すると考えられる。前庭の南方では途切れている。葺石・根石と周溝内周とは 2.5m 離れており、その比高は約 50 cmある。この間は崩落した葺石により覆われているがテラス状の平坦面や段などの施設が存在するものと考えられる。周溝巾は 4m 前後で、深さ約 1m、底面は平坦である。

〔出土遺物〕前庭東側のテラス上面から土師器坏が出土した。



No	種　類	出土地点・層位	分類	特　徴	残存	登録No
1	土師器 坏	南東部テラス上	B I	内面ナデ調整、丸底、外面上位に段。口縁部は外反。赤褐色を呈す。	1/2	121-Po 1
2	〃	〃	〃	〃	1/3	121-Po 2

第23図　第121号墳出土遺物

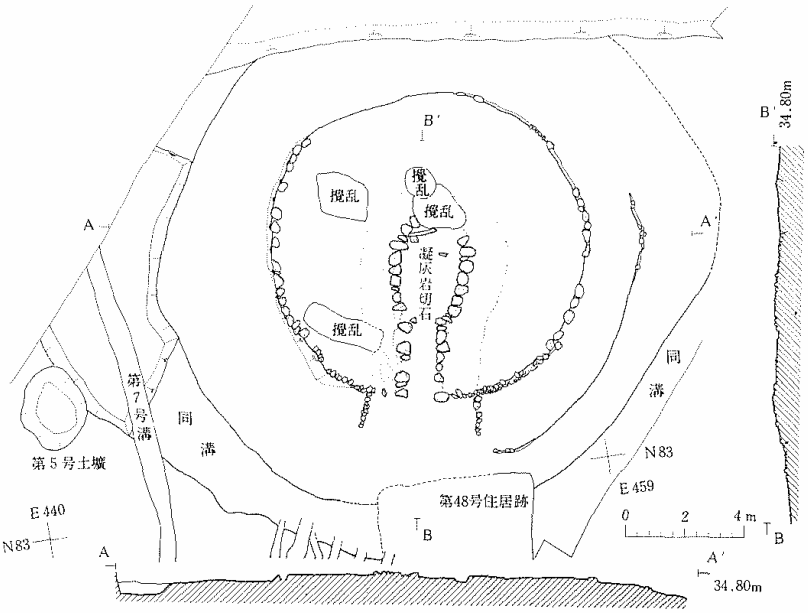
第 122 号墳

〔確認状況〕現況は水田であった。新発見の古墳である。水田面下約 10 cmで石室、葺石が確認され、周囲に周溝も検出された。石室は奥壁部が攪乱により失われ、玄室内全体に破壊された折に投棄されたと考えられる大小の礫が乱雑に詰まっていた。石室床面の深さは不明である。葺石は北側部分が失われていたが南半部は調査区外に延びており確認できなかった。南端部の前庭南部は第 48 号住居跡にに切られており、畝状遺構、第 7 号溝、第 5 号土壙なども本古墳の周溝南西部を切っている。本古墳に伴う出土遺物はない。

〔主体部〕河原石を使用し一部に割り石や凝灰岩切り石を用いた横穴式石室で、玄室部に胴張りを持つ。石室内は未調査であるが奥壁部に巾 1.5m 厚さ 10 cmの凝灰岩切り石を使用し、玄門部に断面が一辺 15 cm前後の柱状の割り石を直立させている。

〔外部施設〕前庭部・葺石・テラス・周溝が確認された。前庭部は「コ」の字状の石組みにより区画されている。葺石は石室奥半部を中心として直径約 10m の円形に廻るもので、羨門左右は小石が整然と小口積みされ、その他は直径 20～40 cmの根石のみが残存しており部位により異なっている。葺石下端のレベルで、北側と南側とでは約 70 cmもの比高がある。周溝は内周の平面形が石室奥半に中心を置く円形で、外周は調査区外に延び不明である。

〔出土遺物〕なし。



第 122 号 墳 計 測 値（10cm以下四捨五入）

主体部								外部施設			
石室全長	玄室長	羨道長	奥壁巾	玄室最大巾	羨道巾	側壁弧半径	主軸方位	周溝内径	周溝最大巾	周溝の深さ	墳丘直径
5.8m？	2.8m？	3.0m？	――	1.9m	0.84m	4.2m	N-12°E	18.4m	4m以上	0.4m以上	10.8m

第24図　第122号墳

第 124 号墳

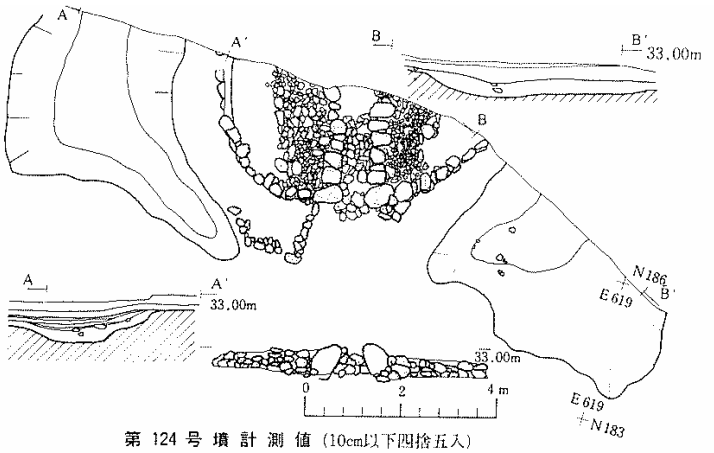
〔確認状況〕現況は水田であった。新発見の古墳である。水田下約 20 cmで石室が確認され、周囲から葺石・周溝が検出された。石室の玄室部以北は調査区外にあり未調査である。

〔主体部〕河原石使用の横穴式石室である。玄門、羨門に門柱状の石が立てられている。このうち羨門の石柱は内傾気味に立てられており、正面から見ると八の字状となる。羨道部の残存壁高は床面から約 60cm であり羨道天井部の高さもこれに同じと推定される。閉そく石は、羨道部に径 20 cm前後の石を充填したもので、羨門部で径 30 cm～40 cmの大きめの石を積んで押さえている。石室裏込めは、径 5 cm前後の小石を使用し、その外縁に偏平で大きめの石を配している。

〔外部施設〕封土、葺石、テラス、周溝、前庭が確認された。封土は同溝確認面から高さ約 40cm まで残っている。土質は黒褐色系の砂質シルトであるが積み方は不明である。直径 7m 前後の円墳になると考えられる。葺石は羨門の左右で横長の石材を 3～4 段小口積みにしている。石室の東西では根石だけが確認された。テラスは、内周が縦 8m 前後の円形を呈し、外周は不規則な出入りがあると考えられる。確認面は地山褐色砂質シルト層で、確認面からの深さは、最も深い西部で約 40 cmを計る。底面はほぼ平坦であるが、南方に行くにつれ浅くなり前庭

部は「ハ」の字状の石組みをもつものと考えられる。

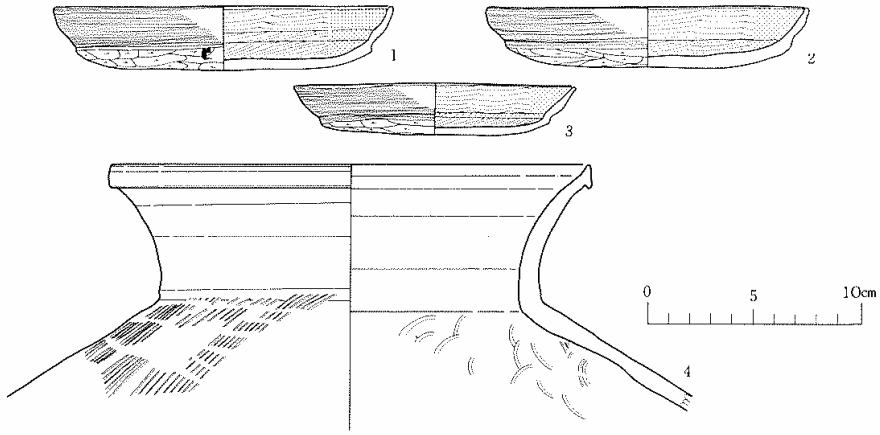
〔出土遺物〕南東部の周溝堆積土から土師器３点、須恵器１点が出土している。いずれも墳丘方向から流れ込んだ状態で出土しており本古墳に伴う遺物と考えられる。また、南西部の周溝堆積土から弥生土器、フレイクが出土している。周辺の弥生時代の遺物包含層からの混入物である。



第 124 号 墳 計 測 値（10cm以下四捨五入）

主体部								外部施設			
石室全長	玄室長	羨道長	奥壁巾	玄室最大巾	羨道巾	側壁り弧手径	主軸方位	周溝内径	周溝最大巾	周溝の深さ	墳丘直径
———	*———	1.8m	———	———	0.6m	———	N-24°W	8 m ?	3.4m	0.6m	6 m

第25図　第124号墳



No	種類	出土地点・層位	分類	特徴	残存	登録No
1	土師器 坏	南東部周溝堆積土	A I 2a	内黒、外面下位に段。平底状の底部。器高が低く皿状を呈す。	完	124-Po 1
2	〃	〃	〃	〃	〃	124-Po 2
3	〃	南東部周溝底面	〃	内黒、外面下位に沈線状の段。平底状の底部。	〃	124-Po 3
4	須恵器 甕	〃	B II	体部外面は平行タタキ目、内面は同心円文のオサエ。	1/3	124-Po 4

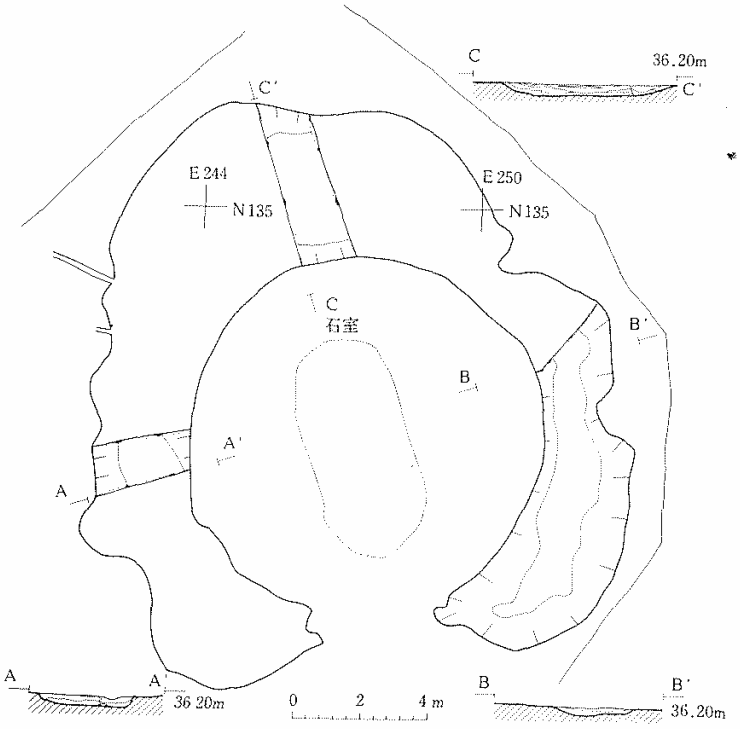
第26図　第124号墳出土遺物

第 126 号墳

〔確認状況〕現況は水田であった。新発見の古墳である。水田面下約 15 ㎝で石室が確認され周囲に周溝も検出された。石室用材、裏込め石などは削平により原位置をとどめていない。調査は計画排水路にかかる周溝南東部について行った。

〔周溝・前庭〕周溝の確認面は地山褐色砂質シルト層である。内周は直径約 10.5m の円形で外周は出入りがあり不整形である。巾は部分により異なり 2〜5m 前後で、確認面からの深さは約 30 ㎝である。堆積土はいずれも自然堆積を示している。底面は平坦で、南方に行くにつれ浅くなり前庭部では途切れている。前庭部に径 30㎝ 前後の礫が散乱していたが、石組みは認められなかった。

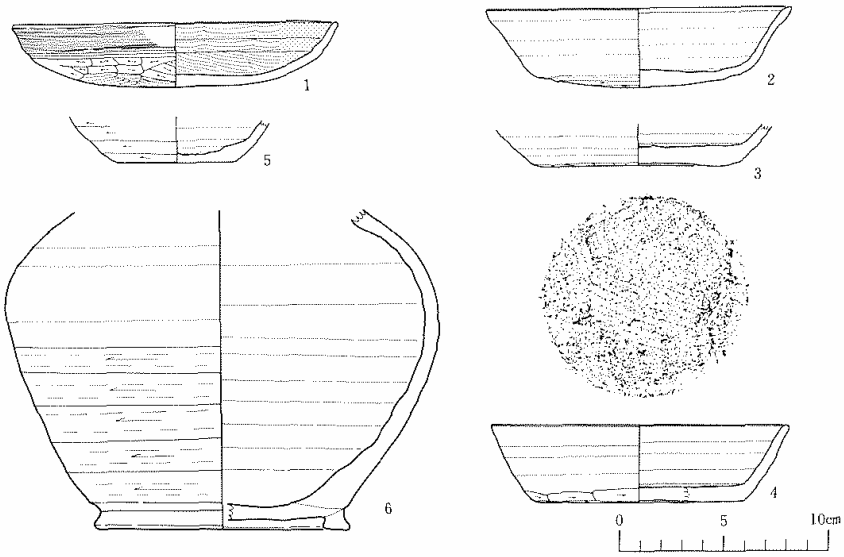
〔出土遺物〕周溝南東部の底面、堆積土から土師器、須恵器が出土している。図示できたものは底面出土の須恵器壺、甕類 3 点、堆積土出土の土師器坏 1 点、須恵器坏 3 点である。出土状況からいずれも本古墳に伴う遺物と考えられる。

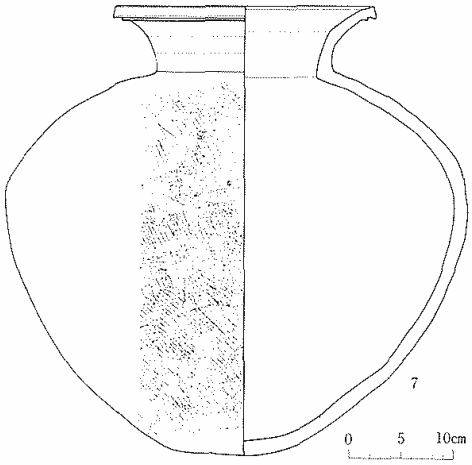


第 126 号 墳 計 測 値（10cm以下四捨五入）

主体部								外部施設			
石室全長	玄室長	羨道長	奥壁巾	玄室最大巾	羨道巾	胴張り弧半径	主軸方位	周溝内径	周溝最大巾	周溝の深さ	墳丘直径
――	――	――	――	――	――	――	N-16°-W	10.9	5 m	0.4m	――

第27図　第126号墳





No	種　類	出土地点・層位	分類	特　徴	残存	登録No
1	土師器坏	南東部周溝堆積土	AⅠ2a	内黒、外面下位に段。器高が低く皿状を呈する。	1/2	126-Po 1
2	須恵器坏	〃	AⅡ2	丸底。底部は全面回転ヘラケズリ。口縁部は外反する。	1/2	126-Po 2
3	〃	〃	BⅡ2	平底。底部周縁～体部下端に手持ちケズリ。底部中央に静止糸切り痕。	1/3	126-Po 3
4	〃	〃	BⅢ2	〃　底部全面を手持ちケズリ。	1/4	126-Po 4
5	須恵器壺	〃		器形不明。胎土は灰色で緻密、黒色微粒を含む精良なもの。	1/4	126-Po 5
6	須恵器長頸瓶	南東部周溝底面		肩部は丸味を帯びる。高台は低くふんばりは弱い。	1/3	126-Po 6
7	須恵器甕	〃	BⅠ	口縁下部に隆帯。体部外面は平行タタキ後カキ目、内面は同心円オサエ。	完	126-Po 7

第28図　第126号墳出土遺物

第127号墳

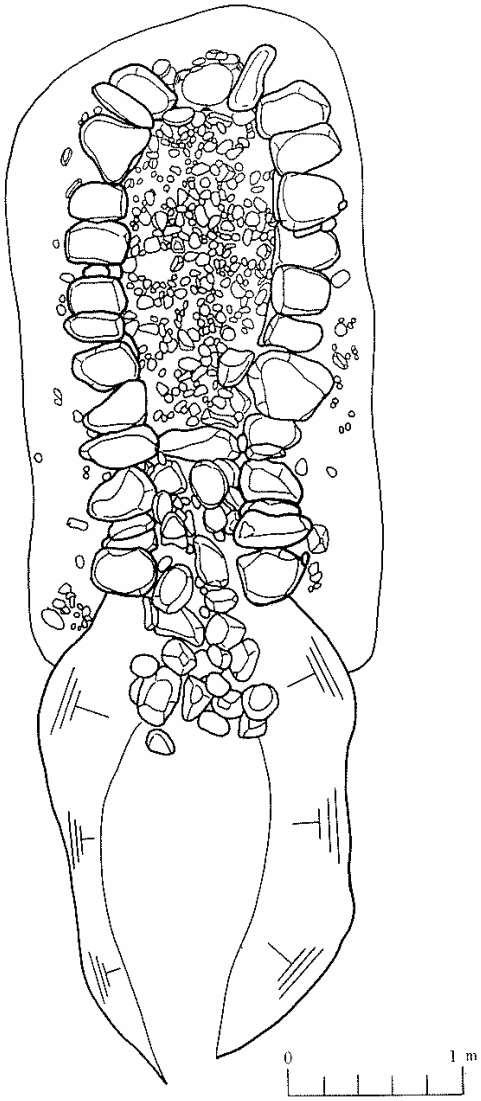
〔確認状況〕現況は水田であった。新発見の古墳である。水田面下約20㎝で石室が確認され周囲に周溝も検出された。石室の奥半部の石材は抜き取られているが側壁は二段前後まで残存している。墳丘は失われている。

〔主体部〕河原石使用の横穴式石室で玄室部に胴張りをもつ。奥壁部は失われているが抜き取り痕跡から一枚石を立てたものと考えられる。側壁は乱石積みで、玄門、羨門部では通目積みにしている。玄室床面は径5㎝前後の石が敷かれ、ほぼ平坦で玄門部には梱石が埋め込まれている。羨道内には径10～20㎝の閉そく用の石が充填されている。裏込めは石室掘り方内に径5㎝の石を弱干含む砂質土を詰めたものでしまりがある。

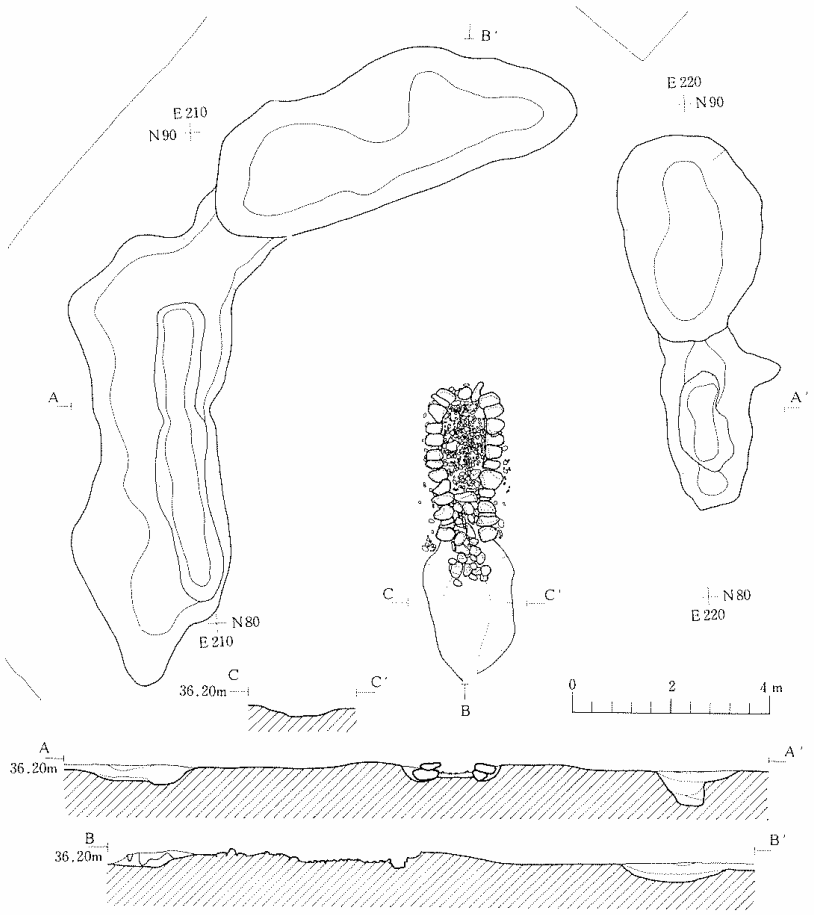
〔外部施設〕周溝は南側が開く「コ」の字状を呈している。石室の北東隅では途切れ陸橋状となり、同じく北西隅も周溝が巾狭く、浅くなっている。確認面からの深さは一様でなく、玄室の東西両側には底面からほぼ垂直に落ち、極端に深い部分がある。最も深い所で60㎝前後で堆積土は自然堆積である。前庭部は地山を掘り込んで作られている。石室正面に細長く延びるもので羨門部前面には閉そく石が崩落している。

〔構築方法〕前庭部の掘り込みと石室掘り方は一連のものであり、石室はこの一連の掘り込みの奥半部に作られている。石室側壁の根石はこの掘り方内にさらに溝状の据え方を掘り埋置されている。側壁根石の上面はやや外傾気味に固定されている。裏込めは側壁の積み上げに伴って詰められており、床面も根石の配置後に敷かれている。

〔出土遺物〕なし。



第29図　第127号墳石室



第 127 号 墳 計 測 値 (10cm以下四捨五入)

主体部								外部施設			
石室全長	玄室長	羨道長	奥壁巾	玄室最大巾	羨道巾	隅張り弧半径	主軸方位	周溝内径	周溝最大巾	周溝の深さ	墳丘直径
2.9m	1.9m	1.0m	0.6	0.9m	0.5m	2.2m	N－1°E	8.1×8.0m	3.2m	0.7m	――

第30図　第127号墳

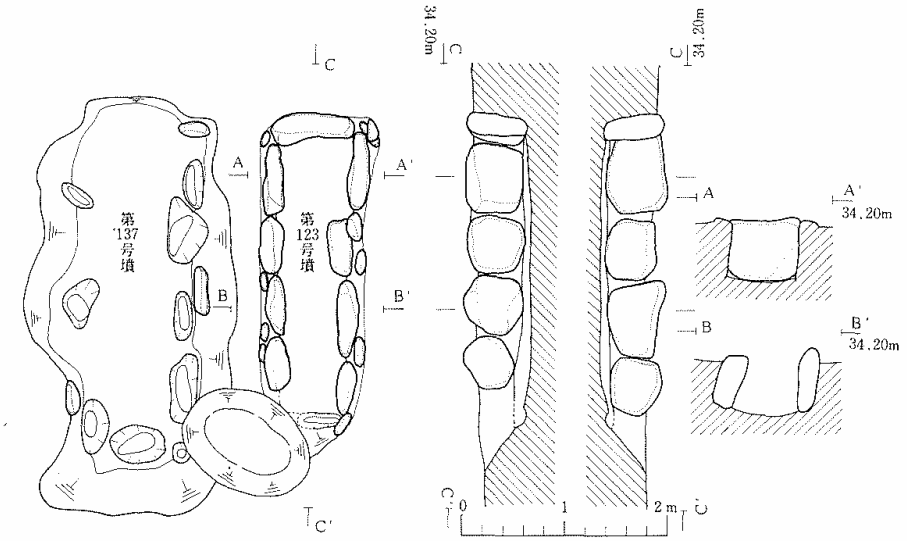
第 123 号墳

〔確認状況〕現況は水田であった。新発見の古墳である。水田下約 20 cmの砂質シルト層で石棺が確認された。外部施設は認められなかった。

〔主体部〕箱式石棺である。地山を掘り込み、板状の河原石を立て並べ石棺を構成している。側壁はやや内傾気味に立てられており、妻部の石は直立している。側壁端は妻部の石の前端に接し、各石材のすきまは青灰色粘土で目張りされている。床面に敷石、貼り床はみられず掘り方底面を平坦に仕上げて直接床面としている。天井部は失われている。裏込めは、側壁外側に

のみ認められ、妻部にはみられない。棺材より小さめの偏平な河原石を掘り方と、棺材の間に挿入し、粘土でつないだものである。

〔出土遺物〕本古墳に直接伴う遺物は無い。石棺内堆積土から弥生土器の細片が出土した。



第31図　第123、137号墳

古墳番号	地区	備考	現況	古墳番号	地区	備考	現況	古墳番号	地区	備考	現況
第4号墳	天王	水田の畦上の巨石。	埋没	第59号墳	上大坊	小規模・低平。	埋没	第77号墳	深山	昭和57年調査。	埋没
42	〃	径約10m。	保存	60	〃	径約8m。	保存	78	川原	水田の畦の巨石。	〃
43	〃	径約5m。低墳丘。	〃	61	〃	〃	〃	79	〃	調査本文参照。	消滅
44	〃	径約10m。墳頂に祠。	〃	62	〃	小規模・低平。	埋没	80	〃	径約3m。	保存
45	〃	小規模・低平。	埋没	63	〃	径約5m。	保存	81	大坊	〃	〃
46	〃	〃	〃	64	〃	小規模・低平。	埋没	82	〃	径約12m。近世墓。	〃
47	?	未確認	—	65	〃	〃	〃	83	〃	未確認。	—
48	〃	調査。本文参照。	保存	66	〃	径約7m。	〃	84	〃	小規模・低平。	埋没
49	前川	径約10m。近世墓域。	埋没	67	〃	径約8m。	保存	85	天王	水田の畦の一部。	〃
50	〃	〃 〃	〃	68	〃	径約6m。	〃	86	前川	〃	〃
51	〃	未確認	—	69	?	未確認	—	87	川矢	径約15m。近世墓。	保存
52	〃	径約5m。	保存	70	?	〃	—	88	上大坊	水田の畦の一部。	埋没
53	〃	小規模・低平。	埋没	71	上大坊	調査。本文参照。	保存	89	深山	〃	〃
54	〃	〃	〃	72	深山	小規模・低平。	埋没	90	〃	〃	〃
55	大坊	径約10m。	保存	73	〃	〃	〃	91	天王	水田の畦上の	〃
56	〃	〃	〃	74	〃	径約3m。	保存	92	深山	水田の畦の一部。	〃
57	〃	小規模・低平。	〃	75	〃	径約4m。	〃				
58	〃	〃	〃	76	〃	径約5m。	〃				

古墳番号	地区	備考	現況	古墳番号	地区	備考	現況
118	川原	新発見、本文参照。	埋没	130	天王	径約10m、北西部の周溝を確認。遺物無	保存
119	〃	〃	消滅	131	〃	新発見、石室を確認。横穴式石室、〃	埋没
120	大坊	〃	〃	132	地蔵堂	〃 〃 〃	〃
121	〃	〃	埋没	133	天王	新発見、周溝のみ確認。 〃	〃
122	〃	〃	〃	134	深山	〃 〃 〃	〃
123	〃	〃	消滅	135	大坊	〃 第一図参照。竪穴式小石室、〃	〃
124	〃	〃	埋没	136	天王	〃 石室を確認。竪穴式小石室、〃	〃
125		新発見、周溝のみ確認。規模不明。出土遺物無	〃	137	大坊	〃 本文参照。	消滅
126		新発見、本文参照。	〃	138	天王	〃 周溝のみ確認。古墳か否か不明。	埋没
127		〃	〃	139	川原	〃 〃 規模不明。	〃
128	前川	新発見、周溝のみ確認。周溝内径約12m、遺物無	埋没	140	〃	〃 〃 〃	〃
129	〃	〃 〃 約9m、〃	〃	141	天王	〃 〃 〃	〃

第1表　調査区内古墳一覧表

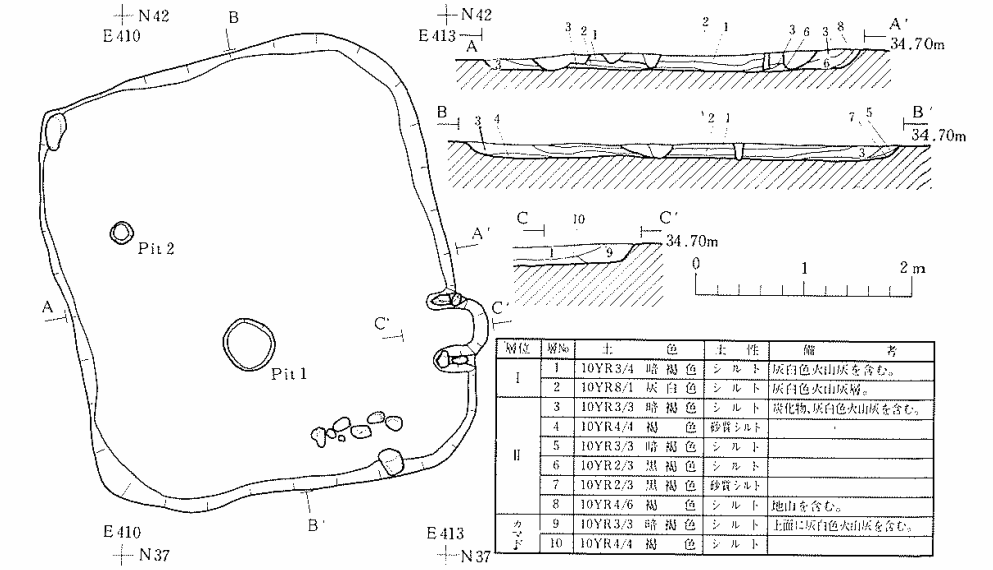
2　住居跡

住居跡は、調査対象地区内北東部にあたる大坊地区に 16 軒、同じく前川地区に 1 軒の計 17 軒が確認された。このうち調査を行なったものは、大坊地区 8 軒（第 36～39、第 41～44 号住居跡）、前川地区 1 軒（第 40 号住居跡）の計 9 軒で、いずれも竪穴住居跡であった。以下調査を行なった住居跡については個別に述べるが、精査を行なわなかった住居跡 8 軒については遺構配置図（第 3 図）への記載にとどめる。

第 36 号住居跡

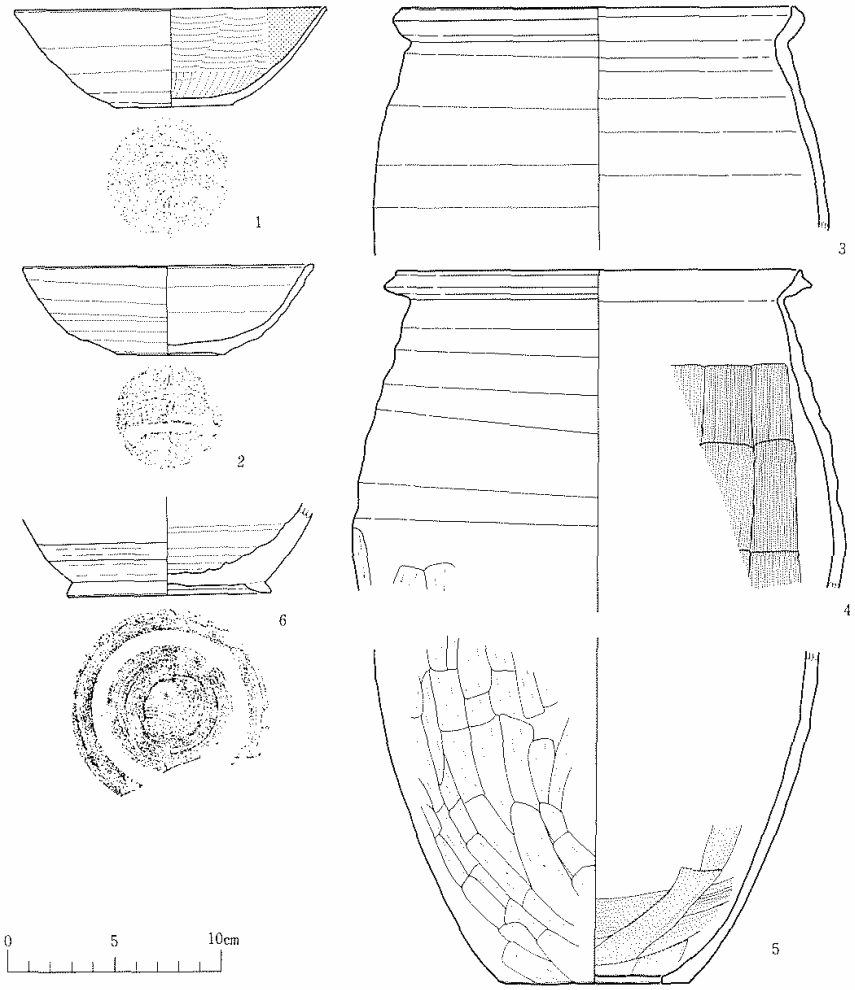
〔平面形・規模〕平面形は東西約 3.6m、南北約 4.0m の方形を呈す。〔堆積土〕自然堆積である。灰白色火山灰層を境に 2 層に大別される。〔壁・床面〕壁は地山で、緩やかに立ち上がる。もっとも遺存の良い南東隅で高さ 17 cmである。床面も地山で、ほぼ平坦である。〔付属施設〕東南隅寄りに河原石を袖とするカマドが確認された。燃焼部は浅く掘り窪められ、煙道はみられない。その他に深さ約 10cm（ピット 1）、同じく約 7cm（ピット 2）のピットが床面で確認された。

〔出土遺物〕住居跡に伴う遺物として土師器坏・高台・甕・甑、赤焼土坏、須恵器甕、灰釉陶器高台が出土している。このうち図示できたものは、土師器坏 1 点(1)、赤焼土坏 1 点（2）、土師器甕 2 点（3、4）、同甑 1 点（5）、灰釉陶器高台付長頸瓶 1 点（6）である。堆積土中からは、土師器坏・高台、赤焼器高台、須恵器甕の破片が出土している。



層位	層No.	土色	土性	備考
I	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	灰白色火山灰を含む。
	2	10YR8/1 灰白色	シルト	灰白色火山灰層。
II	3	10YR3/3 暗褐色	シルト	炭化物,灰白色火山灰を含む。
	4	10YR4/4 褐色	砂質シルト	
	5	10YR3/3 暗褐色	シルト	
	6	10YR2/3 黒褐色	シルト	
	7	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	
	8	10YR4/6 褐色	シルト	地山を含む。
カマド	9	10YR3/3 暗褐色	シルト	上面に灰白色火山灰を含む。
	10	10YR4/4 褐色	シルト	

第32図　第36号住居跡



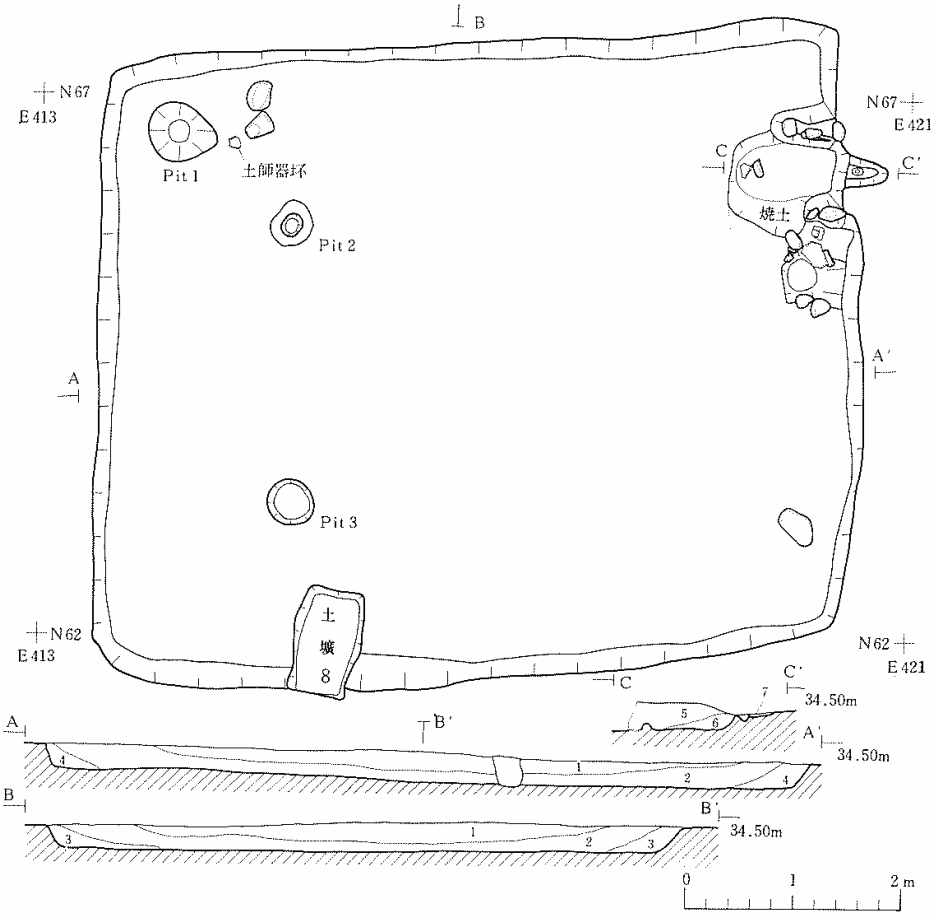
番号	器種	出土層位	特徴	法量(cm) 口径	器高	底径	登録No.	分類	写真図版
1	土師器 坏	カマド	外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り 内面：ヘラミガキ，黒色処理	146	46	54	36住－Po．1	BⅡ	7－1
2	赤焼土器 坏	床面	外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り 内面：ロクロナデ	134	42	不明	36住－Po．5		7－17
3	土師器 甕	カマド	外面：(上部)ロクロナデ(下部)ヘラケズリ 内面：(上部)ロクロナデ(体部)縦位ヘラナデ	190?	不明	不明	36住－Po．2	BⅡ	
4	土師器 甕	カマド	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	184	不明	不明	36住－Po．3	BⅡ	
5	土師器 甕	床面	外面：ヘラケズリ 内面：横位ヘラナデ	不明	不明	不明	36住－Po．4		
6	灰釉陶器高台付長頸瓶	床面	外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り→回転ヘラケズリ→ 内面：ロクロナデ 付け高台→ナデ	不明	不明	93	36住－Po．6		

第33図　第36号住居跡出土遺物

第37号住居跡

〔平面形・規模・重複〕平面形は東西約7.0m、南北約9.5mの長方形を呈し、南辺の一部を第8号土壙が切っている。〔堆積土〕自然堆積である。壁際のもの、床面全体のもの、上部中

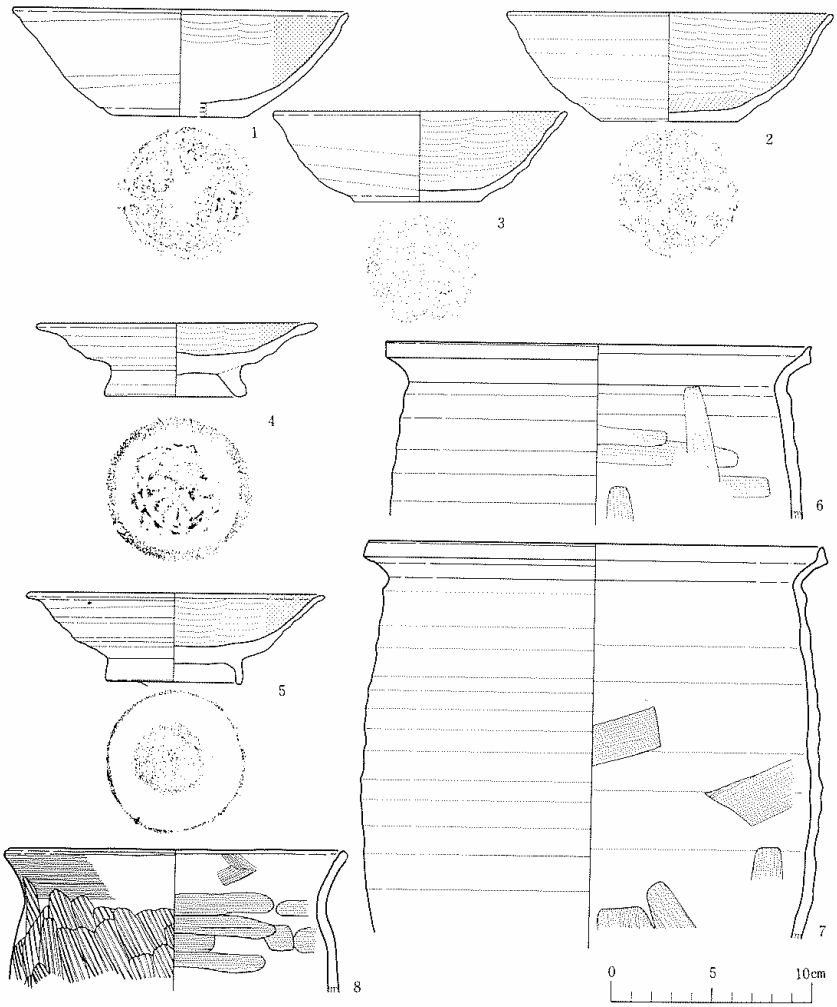
央のものの３層に大別される。〔壁・床面〕壁はすべて地山で、ほぼ垂直に立つ。もっとも遺存の良い北西隅で高さ 33 cmである。床面は地山からなり、中央部には礫層が露出している。ほぼ平坦である。〔付属施設〕柱穴と思われるピットが北西部と南西部に２ヶ所確認された。ピット２は柱痕跡の直径 20 cm、掘り方の直径 40 cmで深さは 20 cm、ピット３は直径 40 cmの円形で、柱跡は認められず深さ 15cm である。柱間は 2.6m である。また東北隅寄りには河原石を袖とするカマトが確認された。燃焼部は浅く掘り窪められ、煙道は長さ約 40 cmである。煙り出しピットは確認されず、煙道の一部は攪乱を受けている。その他に北西隅に深さ約 20cm のピットが確認された(Pit1)。



層位	層No	土色	土性	備考					
Ⅰ	1	10YR4/3 暗褐色	シルト	灰白色火山灰を含む。	Ⅲ カマド	4	10YR3/2 黒褐色	シルト	
Ⅱ	2	10YR4/3 暗褐色	シルト			5	10YR2/3 黒褐色	シルト	焼土粒を含む
Ⅲ	3	10YR3/3 暗褐色	シルト			6	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	焼土を多量,炭化物を少量含む。
						7	10YR4/4 褐色	シルト	

第34図　第37号住居跡

〔出土遺物〕住居跡に伴う遺物として土師器坏・高台・甕・赤焼土器坏が出土している。このうち図示できたものは、土師器坏3点（1～3）、同高台付皿2点（4、5）、同甕3点（6～8）である。堆積土中からは、上記のほか須恵器甕破片が出土している。

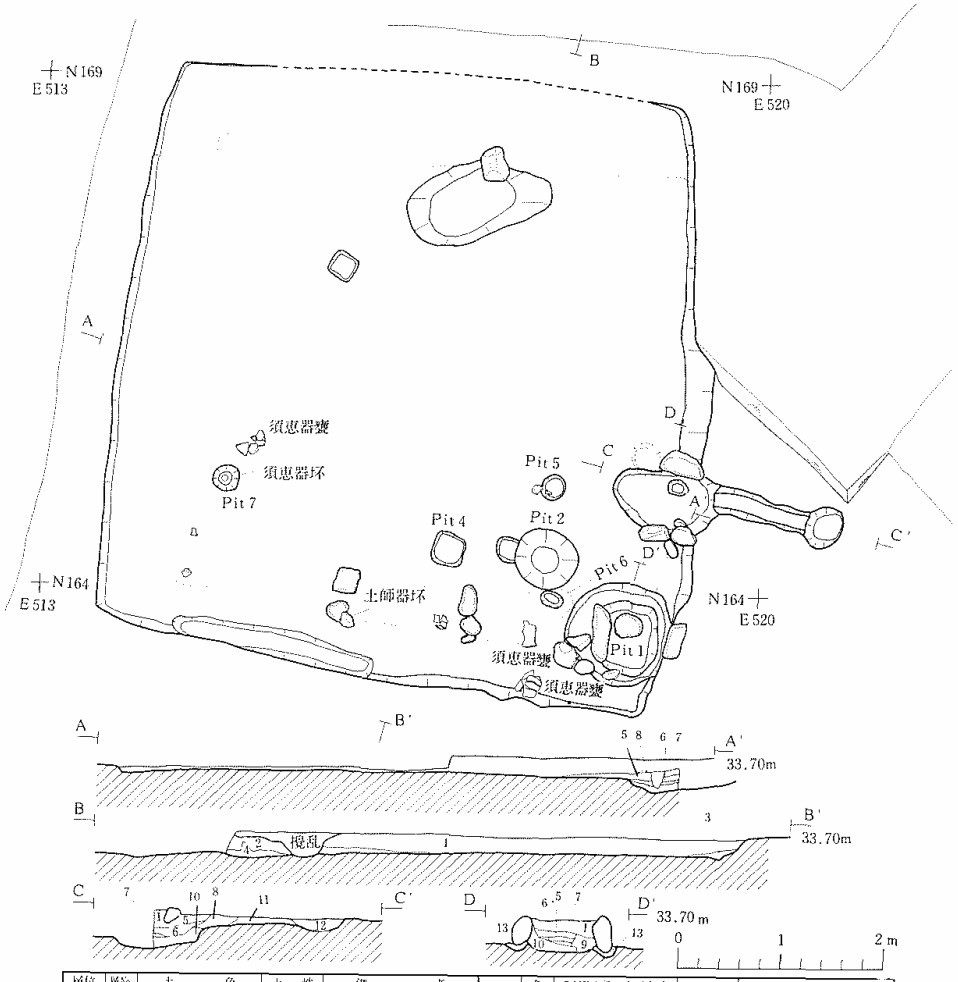


番号	器種	出土層位	特徴	法量(cm) 口径	底径	器高	登録No.	分類	写真図版
1	土師器 坏	カマド	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理 底部：回転糸切り	144	55	62	37住－Po．1	A	7－2
2	土師器 坏	カマド	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理 底部：回転糸切り	158	54	68	37住－Po．2	A	7－3
3	土師器 坏	カマド	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理 底部：不明	164	53	65	37住－Po．3	A	7－4
4	土師器高台付皿	床面	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理 底部：不明→ナデ	138	36	70	37住－Po．4		7－21
5	土師器高台付皿	床面	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理 底部：不明	143	44	66	37住－Po．5		7－22
6	土師器 甕	カマド	外面：ロクロナデ 内面：(口縁)ロクロナデ、(体部)ヘラナデ	224	不明	不明	37住－Po．6	B Ⅰ	
7	土師器 甕	Pit1	外面：ロクロナデ 内面：(上部)ロクロナデ、(体部)ヘラナデ	224	不明	不明	37住－Po．7	B Ⅰ	
8	土師器 甕	カマド	外面：(口縁)ヨコナデ、(体部)刷毛目 内面：ヘラナデ		不明	不明	37住－Po．8	A	

第35図　第37号住居跡出土遺物

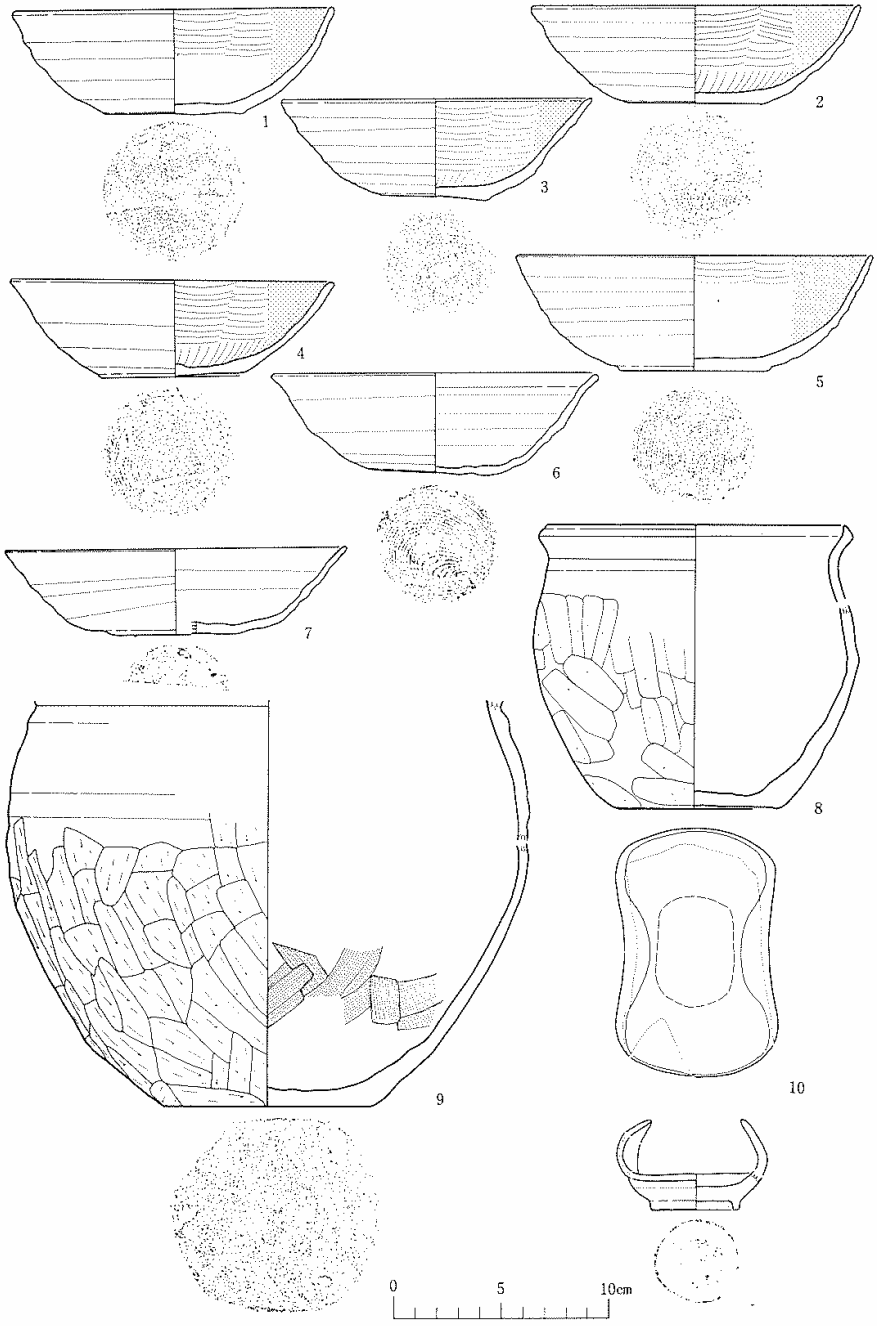
第38号住居跡

〔平面形・規模〕平面形は東西約5.5m、南北約6.0mのやや長方形を呈す。〔堆積土〕自然堆積であり、壁際のもの、床面直上から上部のものの2層に大別される。〔壁・床面〕壁は東辺カマド部分のほかはすべて地山であり、もっとも遺存の良い東北隅寄りで高さ13cmである。床



層位	層No	土色	土性	備考	カマド				
Ⅰ	1	10YR3/2 黒褐色	シルト			7	5YR4/8 赤褐色	シルト	
Ⅱ	2	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト			10	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	
	3	10YR2/2 黒褐色	シルト	地山を含む。		9	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土	
	4	10YR2/1 黒色	シルト			8	10YR3/2 黒褐色	シルト	
カマド	5	10YR3/2 黒褐色	シルト	焼土、炭化物を含む。		11	7.5YR3/2 黒褐色	シルト	
	6	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土			12	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭化物を含む。
						13	5YR3/2 暗褐色	シルト	焼土を含む。

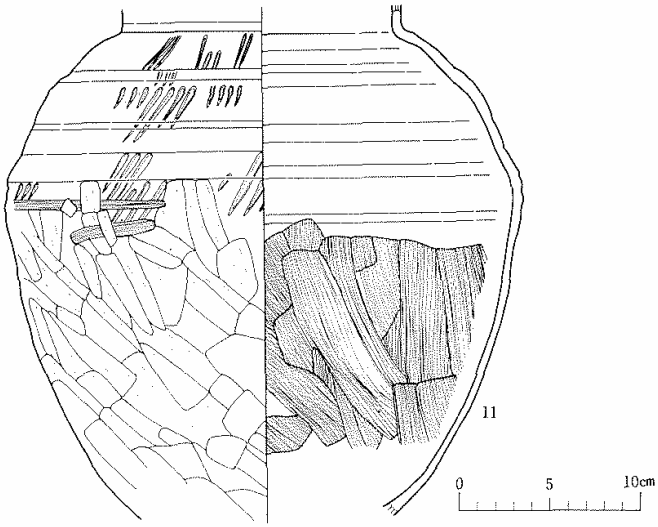
第36図　第38号住居跡



第37図　第38号住居跡出土遺物（1）

面は、中央部分床面下に平面形約 4.5×4.5m、深さ 5 cmの方形の掘り方がみられ、暗褐色シルトを埋土にしており、中央部分では平坦である。一方掘り方のみられない壁際では凹凸がある。〔付属施設〕東南隅寄りに河原石を粘土で固め袖とするカマドが確認された。燃焼部は 7～10 cm掘り窪められ、煙道は長さ約 1m、幅約 20 cmで地面をトンネル状に掘り抜いたものである。先端部には平面形約 40×40 cmの円形で、深さ約 15cm の煙り出しピットが認められた。なお南東隅からはカマド天井に架構したと思われる河原石がみつかっている。南東隅寄りには、直径約 80×80cm、深さ約 30 cmのすり鉢状の貯蔵穴がみられる。その他床面でピット 6 ヶ所が確認されたが、柱穴にあたるものはない。

〔出土遺物〕住居跡に伴う遺物として土師器坏・甕、須恵器坏・甕が出土している。このうち図示できたものは、土師器坏 5 点（1～5）、同甕 1 点（8）、須恵器坏 2 点（6、7）、同甕 1 点（9）である。堆積土中からは、図示できた須恵器甕（11）、赤焼土器耳皿（10）のほか、赤焼土器坏、須恵器長頸瓶、弥生土器の破片が出土している。

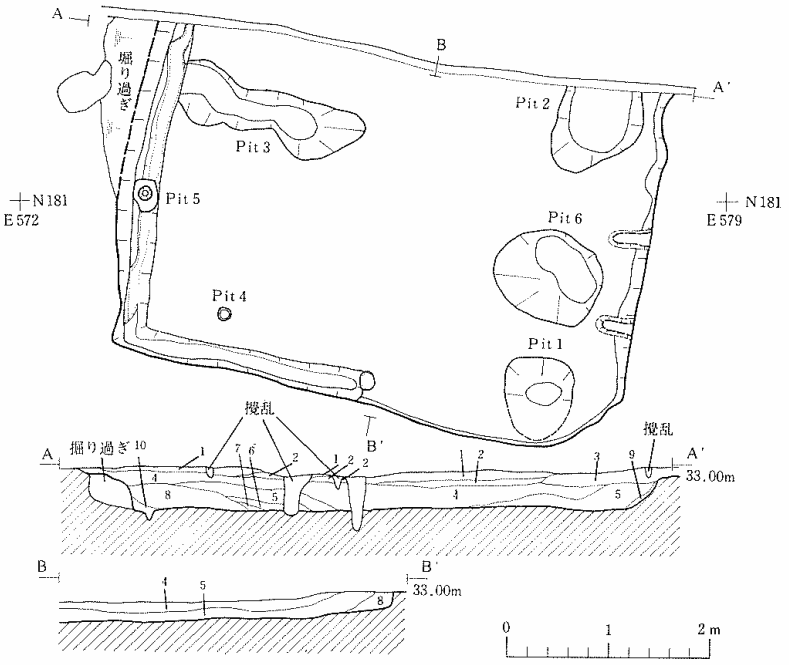


番号	器種	出土層位	特徴	法量 (mm) 口径	器高	底径	登録No	分類	写真図版
1	土師器 坏	貯蔵穴	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	152	49	64	38住－Po. 1	B Ⅱ	7－5
2	土師器 坏	床面	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	150	45	64	38住－Po. 2	B Ⅱ	7－6
3	土師器 坏	床面	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	142	43	49	38住－Po. 3	B Ⅱ	7－7
4	土師器 坏	Pit 6	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	150	47	64	38住－Po. 4	B Ⅱ	7－8
5	土師器 坏	カマド	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	164	54	68	38住－Po. 5	A	7－9
6	須恵器 坏	Pit 7	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	149	47	49	38住－Po. 6	B	
7	須恵器 坏	Pit 1	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	156	40	54	38住－Po. 7	B	
8	土師器 甕	床面	外面：ヘラケズリ 内面：ナデ	138	132	70	38住－Po. 8	B Ⅲ	
9	須恵器 甕	床面	外面：（上部）（下部）ヘラケズリ 内面：（上部）ロクロナデ （下部）ヘラナデ	不明	96	不明	38住－Po. 9	B	
10	耳恵 皿	堆積土	赤焼			41	38住－Po. 10		
11	須恵器 甕	堆積土	外面：（上部）タタキ→ロクロナデ（下部）手持ヘラケズリ 内面：（上部）ロクロナデ （下部）ヘラナデ	不明	不明	不明	38住－Po. 11	B	

第38図　第38号住居跡出土遺物（2）

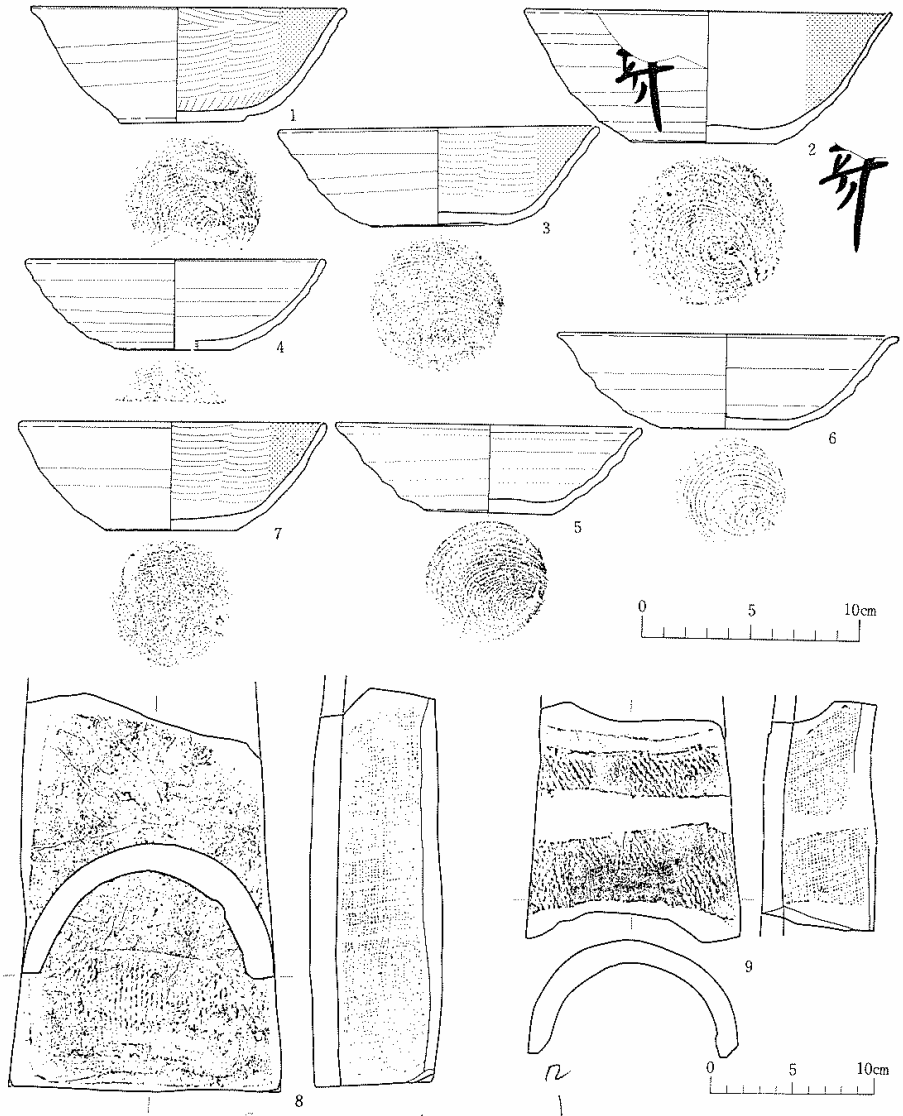
第 39 号住居跡

〔平面形・規模・重複〕住居跡確認面において、住居跡上に 6 ヶ所、住居跡東側に 8 ヶ所、住居跡南側に 46 ヶ所の大小様々なピット群が確認され、住居跡上のピットは住居跡を切っている。北側部分が調査対象区外のため、確認できたのは南辺、東・西辺の一部で、南辺約 5.0m、東・西辺約 3.0m であった。〔堆積土〕自然堆積であり、壁際のもの、床面直上のもの、上部の灰白色火山灰層以上のものの 3 層に大別される。〔壁・床面〕壁は地山で、南東部では礫層が露出している。立ちあがりは東壁が比較的緩やかで、西・南壁は急激である。もっとも遺存の良い東辺北部で高さ 31 cm である。床面も地山からなり南東部では礫層が露出している。ほぼ平坦である。〔付属施設〕東南隅寄りに河原石を袖とするカマドが確認された。平面図・セクション図を取り忘れてしまったが、燃焼部は深さ約 10 cmで礫層が露出しており、煙道は確認されなかった。カマド右側には全体形は不明であるが貯蔵穴状のピットがある。また西壁から南壁西



層位	層No	土色	土性	備考					
Ⅰ	1	10YR2/3 黒褐色	シルト		Ⅱ	6	10YR3/2 黒褐色	シルト	
	2	10YR2/2 黒褐色	シルト	灰白色火山を多量に含む。		7	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	
Ⅱ	3	10YR2/3 黒褐色	シルト		Ⅲ	8	10YR3/3 暗褐色	シルト	
	4	10YR2/3 黒褐色	シルト			9	10YR2/3 黒褐色	シルト	
	5	10YR2/3 黒褐色	シルト			10	10YR2/2 黒褐色	シルト	

第39図　第39号住居跡



番号	器種	出土層位	特徴	法量(mm) 口径	器高	底径	登録No.	分類	写真図版
1	土師器 坏	床面	外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り 内面：ヘラミガキ、黒色処理	142	43	55	39住－Po、1	B Ⅱ	7－10
2	土師器 坏	貯蔵穴	外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り 内面：ヘラミガキ、黒色処理	166	61	68	39住－Po、4	A	7－24
3	土師器 坏	貯蔵穴	外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り 内面：ヘラミガキ、黒色処理	146	45	61	39住－Po、3	B Ⅱ	7－12
4	須恵器 坏	貯蔵穴	外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り 内面：ロクロナデ	138	42	48	39住－Po、6	B	
5	須恵器 坏	貯蔵穴	外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り 内面：ロクロナデ	138	41	59	39住－Po、5	A	7－19
6	須恵器 坏	床面	外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り 内面：ロクロナデ	154	44	58	39住－Po、7	B	7－18
7	土師器 坏	堆積土	外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り 内面：ヘラミガキ、黒色処理	138	50	60	39住－Po、2	A	7－11
8	瓦	貯蔵穴	凸面：縄タタキ→ヨコナデ、粘土板作り 側面：ヘラケズリ						
9	瓦	貯蔵穴	凸面：縄タタキ→ヨコナデ、粘土板作り 側面：ヘラケズリ 玉縁あつ						

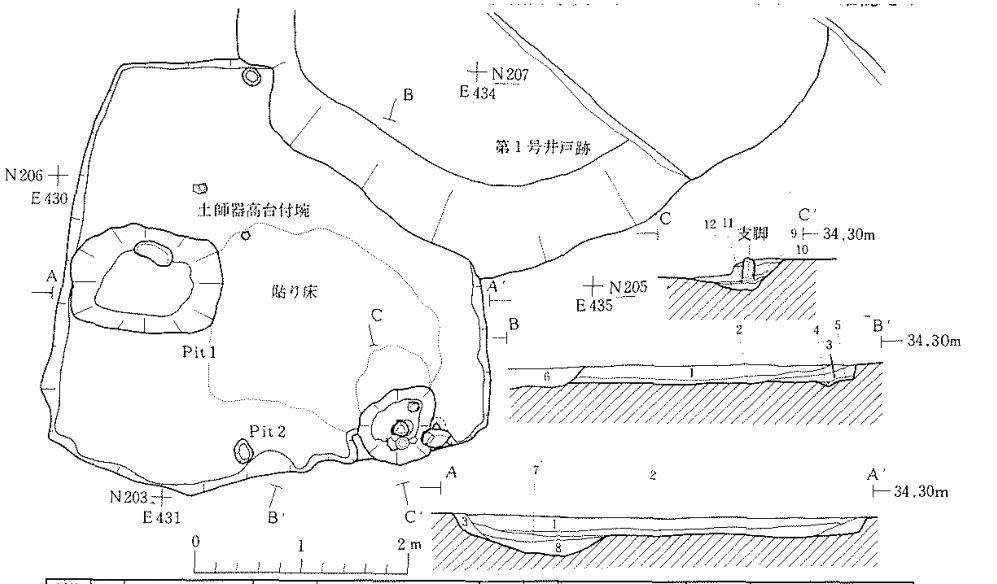
第40図　第39号住居跡出土遺物

半分沿いに周溝が確認された。深さは6～9mで西辺中央の周溝内にはピット5が確認された。その他に東辺北部で深さ約15cmのピット2、ピット3が確認された。

〔出土遺物〕住居跡に伴う遺物として土師器坏・高台・甕、赤焼土器坏、須恵器坏・甕、丸瓦が出土している。このうち図示できたものは、土師器坏3点(1～3)、須恵器坏3点(4～6)、丸瓦2点(8、9)である。なお（2）には墨書がある。堆積土中からは、図示できた土師器坏（7）のほか、土師器、須恵器の破片が出土している。

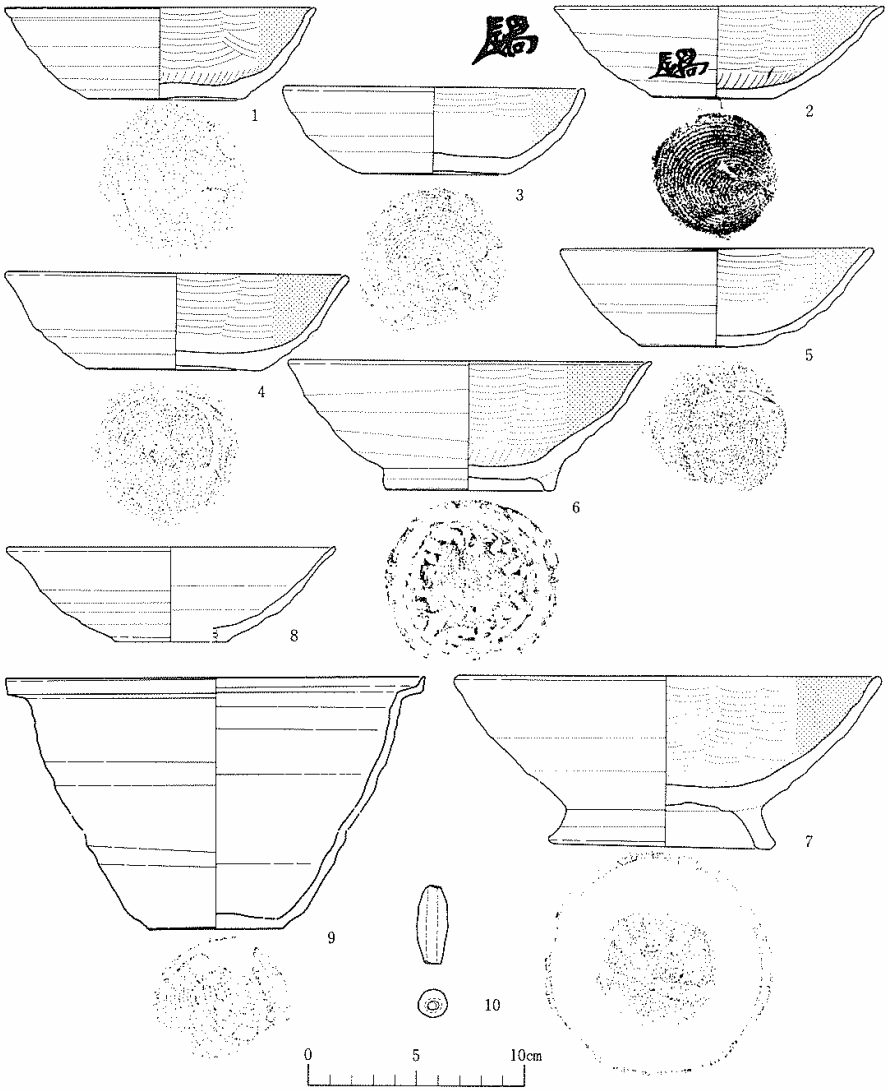
第40号住居跡

〔平面形・規模・重複〕北東部が第1号井戸跡により切られているが、平面形は東西・南北とも約4.0mの不整な方形を呈するものと思われる。〔堆積土〕すべて自然堆積であり、壁際のもの、床面直上のもの、上部のものの3層に大別される。〔壁・床面〕壁はすべて地山で、ほぼ垂直に立ち上がる。もっとも遺存の良い南西隅寄りで高さ23cmである。床面は北から西に緩やかに傾斜し、カマド付近から中央部にかけて貼り床が認められる。他は地山である。〔付属施設〕南東隅寄りに河原石を粘土で固定して構築されたカマドが確認された。燃焼部は浅く掘り窪められ、その中央部に支脚状の河原石が立っていた。煙道は認められない。西辺中央に平面形約70×50cmの楕円形で深さ約25cmのピット1、南辺中央に直径20cmのピット2が確認された。



層位	層No	土色	土性	備考					
I	1	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	灰白色火山灰粒を含む。	ピット1	7	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	
II	2	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	灰白色火山灰、焼土、炭化物を含む。		8	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	
III	3	10YR3/2 黒褐色	シルト	地山の砂質土をブロック状に含む。	カマド	9	10YR3/2 黒褐色	シルト	
	4	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト			10	10YR2/2 黒褐色	シルト	焼土を含む。
	5	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト			11	7.5YR3/3 暗褐色	シルト	焼土を含む。
井戸	6	10YR2/2 黒褐色	シルト	グライ化(井戸堆積土)		12	10YR2/2 黒褐色	シルト	

第41図　第40号住居跡



番号	器種	出土層位	特徴	法量 (mm) 口径	器高	底径	登録No	分類	写真図版
1	土師器 坏	カマド	外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り 内面：ヘラミガキ、黒色処理	142	43	70	40住－Po. 1	B Ⅰ	7－13
2	土師器 坏	カマド	外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り 内面：ヘラミガキ、黒色処理	151	46	55	40住－Po. 2	B Ⅱ	7－25
3	土師器 坏	床面	外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り 内面：ヘラミガキ、黒色処理	136	40	74	40住－Po. 3	B Ⅰ	
4	土師器 坏	カマド	外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り 内面：ヘラミガキ、黒色処理	154	45	80	40住－Po. 4	B Ⅰ	7－14
5	土師器 坏	堆積土	外面：ロクロナデ、底部：回転糸切り→手持ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	144	47	不明	40住－Po. 5		7－15
6	土師器高台付椀	床面	外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り 内面：ヘラミガキ、黒色処理	167	60	78	40住－Po. 6		7－23
7	土師器高台付椀	床面	外面：ロクロナデ 底部：不明→ナデツケ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	194	70	98	40住－Po. 7		
8	須恵器 坏	堆積土	外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り 内面：ロクロナデ	152	44	52(?)	40住－Po. 9		
9	土師器 鉢	床面	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	194	165	62	40住－Po. 8		
10	土錘	堆積土					40住－Po.10		

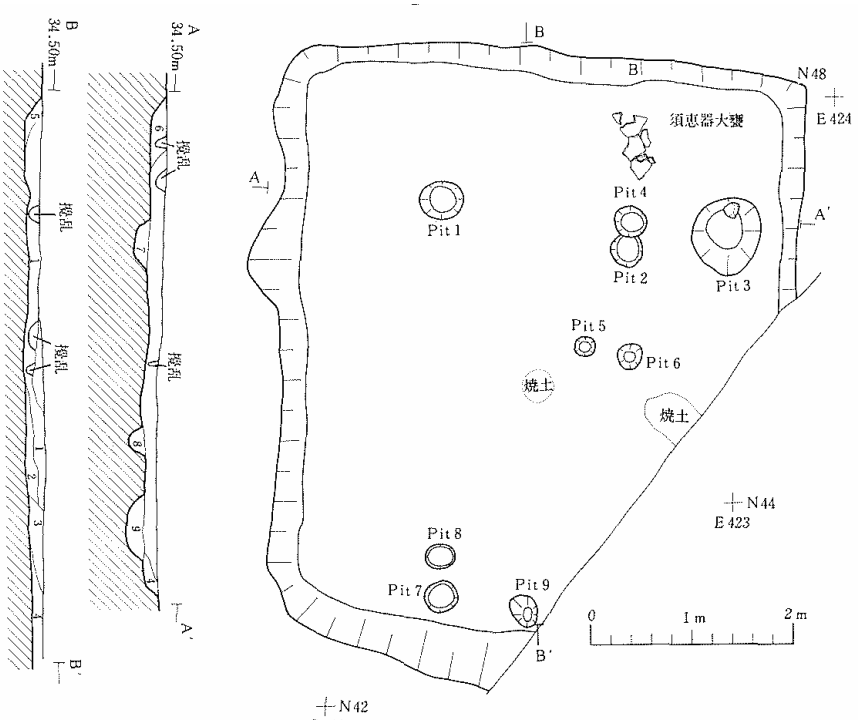
第42図　第40号住居跡出土遺物

〔出土遺物〕住居跡に伴う遺物として土師器坏・高台・甕・鉢が出土している。このうち図示できたものは、土師器坏 4 点（1～4）、同高台付埦 2 点（6、7）、同鉢（9）である。なお（2）には黒書がある。堆積土中からは、図示できた（5）などの土師器類、須恵器坏（8）、同甕、縁釉陶器片、土錘 1 点（10）が 1 出土している。

第 41 号住居跡

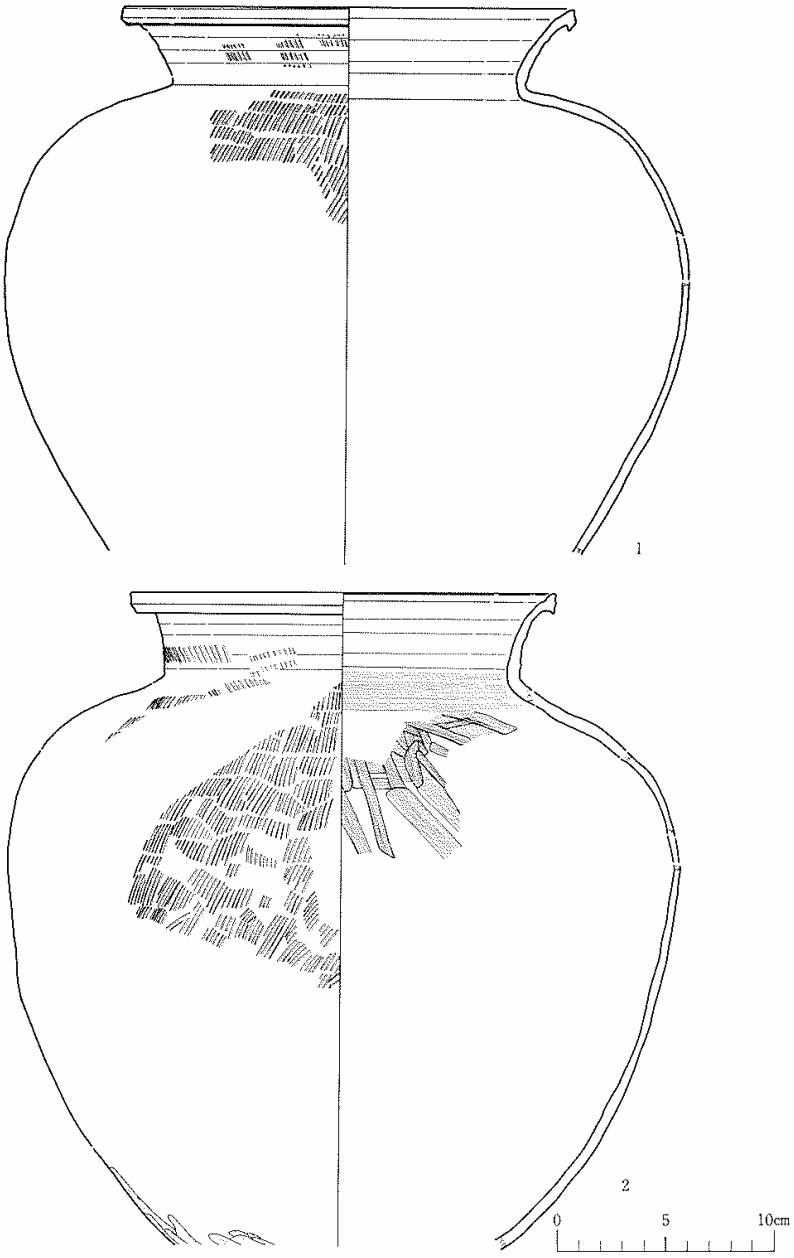
〔平面形・規模〕南東部が調査対象区外に延びているが、平面形は東西約 5.0m、南北約 5.6m のやや長方形を呈するものと思われる。〔堆積土〕自然堆積である。壁際のもの、床面直上、上部のものの 3 層に大別される。〔壁・平面〕壁はすべて地山であり、緩やかに立ち上がる。もっとも遺存の良い北西隅で高さ 20 cmである。床面も地山であり、東から西へ緩やかに傾斜する。

〔付属施設〕住居底面で深さ 2 cm～17 cmのピット 9 ヶ所が確認された。このうち北西部にある深さ 17cm のピット 1 が柱穴に該当するものと思われる。



層位	層No	土色	土性	備考						
Ⅰ	1	10YR2/3 黒褐色	シルト		Ⅱ	5	10YR4/4 褐色	シルト		
	2	10YR2/3 黒褐色	シルト	焼土を多量に含む。		6	10YR3/3 暗褐色	シルト	10 YR2/3 シルト含む	
Ⅱ	3	10YR2/2 黒褐色	シルト	一部に灰白色火山灰を含む。	ピット1	7	10YR3/2 黒褐色	シルト	柱穴(?)	
	4	10YR3/4 暗褐色	シルト	上面に部灰白色火山灰を含む。	ピット2	8	10YR3/3 暗褐色	シルト		
					ピット3	9	10YR4/6 褐色	シルト		

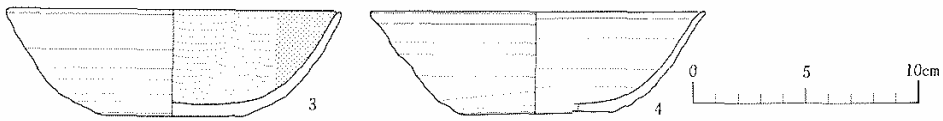
第43図　第41号住居跡



番号	器種	出土層位	特徴	法量 (mm) 口径	胴径	底径	登録No.	分類
1	須恵器大甕	床面	外面：タタキ 内面：タタキ→ナデ	410	不明	不明	41住－Po. 3	
2	須恵器大甕	床面	外面：タタキ（下部）ヘラケズリ 内面：タタキ→ナデ	390	不明	不明	41住－Po. 4	

第44図　第41号住居跡出土遺物（1）

〔出土遺物〕住居跡に伴う遺物として土師器坏・甕、赤焼土器坏、須恵器大甕が出土している。このうち図示できたものは須恵器大甕2点（1、2）である。堆積中からは、図示できた土師器坏（3）、須恵器坏（4）のほか、土師器、須恵器、赤焼土器などの破片が出土している。

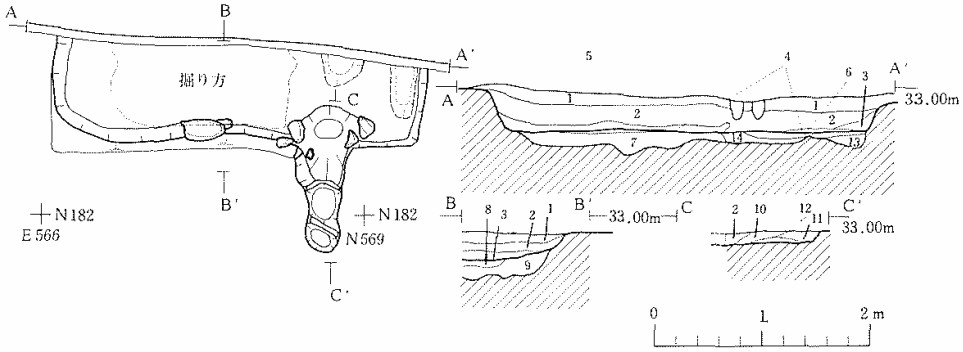


番号	器種	出土層位	特徴	法量（cm） 口径	器高	底径	登録No.	分類	写真図版
3	土師器 坏	堆積土	外面：ロクロナデ 内面ヘラミガキ、黒色処理 底部：回転糸切り	146(?)	47	60	41住－Po. 1	B Ⅱ	7－16
4	須恵器 坏		外面：ロクロナデ 内面ロクロナデ 底部：回転糸切り	148	45	66	41住－Po. 2	A	7－20

第45図　第41号住居跡出土遺物（2）

第42号住居跡

〔平面形・規模〕北側部分が調査対象地区外に延びており、確認できたのは南辺と東･西辺の一部で、長さはそれぞれ約3.4m、0.7m、1.1mであった。〔堆積土〕自然堆積である。床面直上層、壁際のもの、上部を覆うものの3層に大別される。〔壁・床面〕壁はすべて地山である。立ちあがりはやや急で、もっとも遺存の良い西南部で高さ19cmある。床面はほぼ平坦であり、全体を炭化物を多量に含む黒色層が覆うことから火災住居跡であると思われる。床面下西

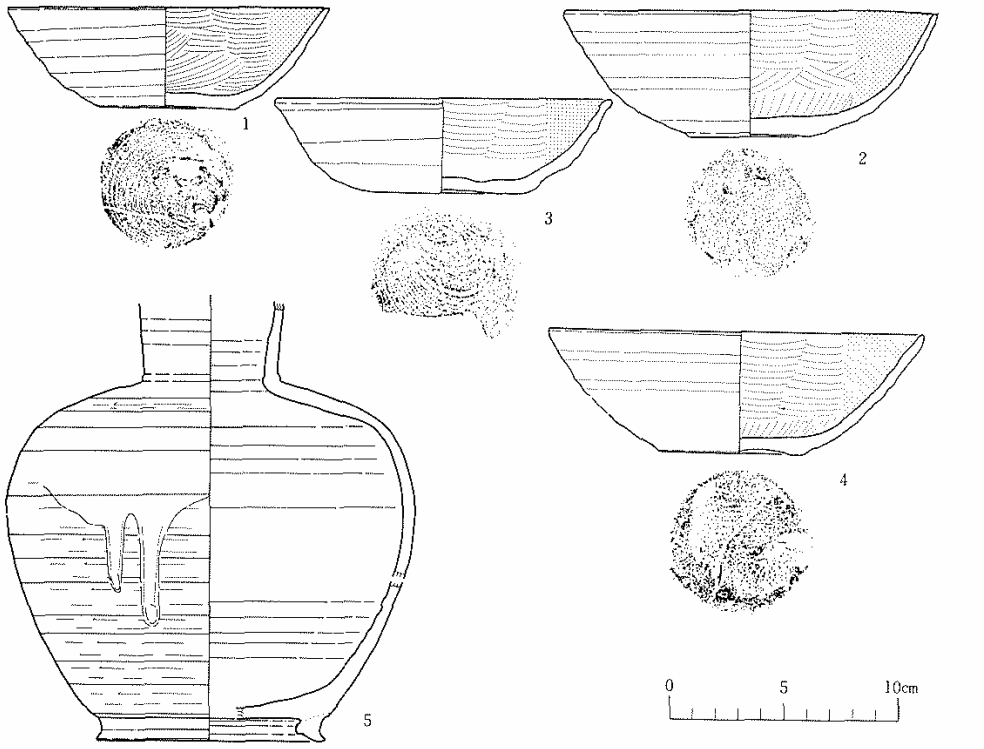


層位	層No.	土色	土性	備考
Ⅰ	1	10YR3/4 暗褐色	シルト	
	2	10YR2/3 黒褐色	シルト	炭化物を少量含む。
Ⅱ	3	10YR2/2 黒褐色	シルト	炭化物を少量含む。
Ⅲ	4	10YR1.7/1 黒色	シルト	炭化物を多量に含む。
掘り方	5	10YR5/6 黄褐色	シルト	地山色に類似。
	6	10YR 黒色	シルト	炭化物を多量に含む。
	7	10YR2/2 黒褐色	シルト	
掘り方	8	10YR3/2 黒褐色	シルト	炭化物,灰を多量
	9	10YR3/2 黒褐色	シルト	
カマド	10	10YR2/2 黒褐色	シルト	焼土含まず。
	11	10YR2/3 黒褐色	シルト	焼土含まず。
	12	10YR3/2 黒褐色	シルト	焼土含まず。
ピット1	13	10YR3/2 黒褐色	シルト	
ピット2	14	7.5YR3/4 暗褐色	シルト	

第46図　第42号住居跡

側の掘り方は、地山の礫層を掘り込み整地したものである。また東側の床面下に深さ約 10 cmのピットが 2 ヶ所確認された。〔付属施設〕南東隅寄りに河原石を袖とするカマドが確認された。燃焼部は約 10cm 掘り窪められており、煙道は長さ約 1m、幅 30～50cm である。先端部には平面形約 30×20 cmの楕円形で深さ約 25 cmの煙り出しピットが認められた。なお南辺中央部にはカマド天井に架構したものと思われる河原石があった。

〔出土遺物〕住居跡に伴う遺物として土師器坏・甕、赤焼土器坏、須恵器・甕・長頸瓶が出土している。このうち図示できたものは、土師器坏 4 点（1～4）、須恵器長頸瓶 1 点（5）である。堆積土中からは土師器、須恵器、赤焼土器の破片が出土している。



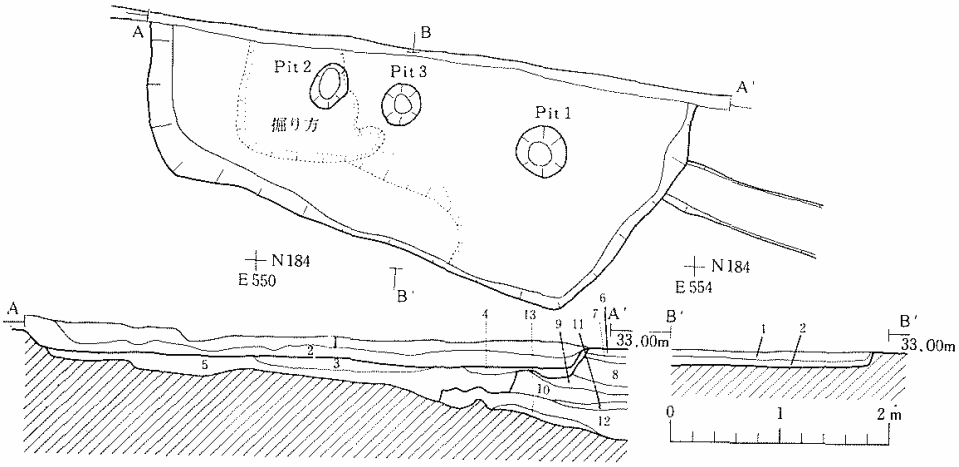
番号	器種	出土層位	特徴	法量 (mm) 口径	器高	底径	登録No	分類
1	土師器 坏	カマド	外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り 内面：ヘラミガキ、黒色処理	138	44	59	42住－Po. 1	B Ⅱ
2	土師器 坏	カマド	外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り 内面：ヘラミガキ、黒色処理	162	55	51	42住－Po. 2	A
3	土師器 坏	床面	外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り一手持ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ、黒色処理	144	42	65	42住－Po. 3	B Ⅱ
4	土師器 坏	カマド	外面：ロクロナデ 底部：回転糸切り 内面：ヘラミガキ、黒色処理	161(?)	54	61	42住－Po. 4	A
5	須恵器長頸瓶	カマド	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ				42住－Po. 5	

第47図　第42号住居跡出土遺物

第43号住居跡

〔平面形・規模・重複〕北側部分が調査対象地区外に延びており、確認できたのは南辺と東・西辺の一部で、長さはそれぞれ約 3.8m、2.3m、1.4m であった。なお東辺は第１号溝を切っている。〔堆積土〕自然堆積であり、２層にわけられる。いずれも住居跡全体を覆っている。〔壁・床面〕南・西壁は地山であるが、東壁は第１号溝を切り、その堆積土を壁としておりほぼ垂直に立ちあがる。もっとも遺存の良い南東隅で高さ 18cm である。床面は西側から東側に緩やかに傾いている。住居跡の掘り方は地山礫層を掘り込んで整地したものである。〔付属施設〕深さ 5～10cm のピット３ヶ所が確認された。

〔出土遺物〕住居に伴う遺物はなく、図示できたものもない。堆積土中からは、土師器坏・甕、須恵器坏の破片が出土している。



層位	層No	土色	土性	備考					
I	1	10YR3/2 黒褐色	シルト		第1号溝堆積土	8	10YR3/2 黒褐色	シルト	
II	2	10YR2/3 黒褐色	シルト			9	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	
掘り方	3	3/3 暗褐色	シルト			10	10YR3/1 黒褐色	シルト	
	4	2/3 黒褐色	シルト	灰白色火山灰を含む。		11	10YR2/3 黒褐色	粘土質シルト	
	5	2/3 黒褐色	シルト			12	10YR2/1 黒色	シルト	
1号溝	6	4/4 褐色	サンド質シルト			13	10YR2/3 黒褐色	シルト	
	7	3/3 暗褐色	シルト	灰白色火山灰を含む。		14	10YR3/4 暗褐色	シルト	地山

第48図　第43号住居跡

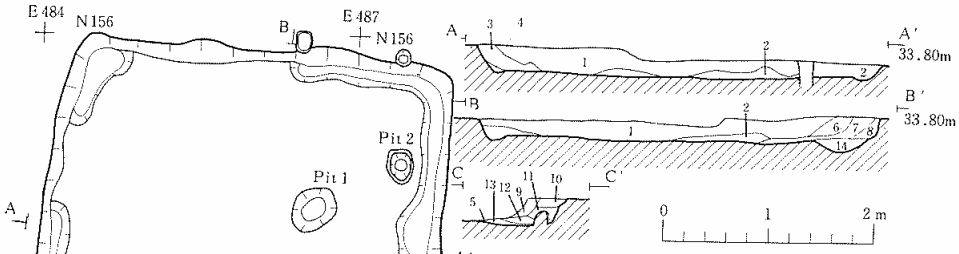
第44号住居跡

〔平面形・規模・重複〕北辺の一部が小ピットに切られているが、平面形は東西約 3.9m、南北約 3.7m の方形を示す。〔堆積土〕自然堆積である。壁際のもの、床面直上・上部全体を覆うものの２層に大別される。〔壁・床面〕壁はすべて地山であり、急角度で立ちあがる。もっとも遺存の良い西南隅で高さ 30 cmである。床面は、カマド前面である東南部に貼り床が認められ

るほかはすべて地山であり、ほぼ平坦である。〔付属施設〕南東隅に河原石を袖とするカマドが確認された。燃焼部は浅く掘り窪められ、中央奥には支脚状の河原石が立っていた。煙道は認められない。カマド西側には平面形約 55×60㎝、深さ約20㎝の貯蔵穴（ピット7）もある。また、北西隅、西南隅、北辺中央から東辺中央など部分的に周溝が認められ、深さ3〜11㎝である。その他にピットが6ヶ所確認されている。このうちピット2は柱痕跡があるが本住居との関係は不明である。

〔出土遺物〕住居跡に伴う遺物として土師器坏・高台・甕、赤焼土器坏、須恵器坏が出土しているが、図示できたものはない。堆積土中からは土師器、須恵器、赤焼土器の破片のほか、弥生式土器片、土錘1点（1）が出土している。

第44号住居跡
出土遺物　S＝1/3



層位	層No	土色	土性	備考
Ⅰ	1	10YR3/3 暗褐色	砂質シルト	
	2	10YR4/3 暗褐色	砂質シルト	
Ⅱ	3	10YR2/2 黒褐色	シルト	10YR3/3シルトを少量含む。
	4	10YR2/2 黒褐色	シルト	
	5	10YR3/3 暗褐色	シルト	
	6	10YR4/6 褐色	砂質シルト	
	7	10YR2/3 黒褐色	シルト	
	8	10YR3/2 黒褐色	シルト	
カマド	9	10YR2/2 黒褐色	シルト	焼土、炭化物を含む。
	10	10YR2/2 黒褐色	シルト	
	11	10YR3/3 黒褐色	シルト	焼土を少量含む。
	12	10YR4/3 暗褐色	砂質シルト	焼土を少量含む。(カマド崩壊土?)
	13	10YR2/1 黒色	シルト	焼土、炭化物を含む、骨片出土
ピット7	14	10YR3/3 暗褐色	シルト	焼土、炭化物を含む。

第49図　第44号住居跡

住居跡番号	立地	位置	規模(㎡)	平面形	主軸	カマド	煙道	その他の施設	備考
第36号住居跡	大坊地区	N40、E411	3.6×4.0	方形	N-13°-W	東南隅寄り	なし		堆積土に灰白色火山灰
〃37 〃	〃	N65、E417	7.0×5.9	長方形	N	東北隅寄り	40㎝(?)	柱穴2ヶ所	〃
〃38 〃	〃	N165、E517	5.5×6.0	方形	N-10°-E	東南隅寄り	1 m	貯蔵穴、掘り方	
〃39 〃	〃	N181、E576	不明	不明	N-10°-E	東南隅寄り	なし	貯蔵穴、周溝	
〃40 〃	前田地区	N205、E432	4.0×4.4	不整な方形	N-9°-E	南東隅寄り	なし	貼り床	堆積土に灰白色火山灰
〃41 〃	大坊地区	N46、E421	5.0×5.6	長方形(?)	N-2°-E	不明	不明	柱穴(?)1ヶ所	〃
〃42 〃	〃	N183、E568	不明	不明	N-2°-E	南東隅寄り	1 m	掘り方	火災住居跡
〃43 〃	〃	N185、E551	不明	不明	不明	不明	不明	掘り方	
〃44 〃	〃	N154、E486	3.9×3.7	方形	N-5°-E	南東隅	なし	貯蔵穴、周溝、貼り床	
〃45 〃	〃	N35、E405	不明	不明	不明	不明	不明	不明	未調査
〃46 〃	〃	N34、E410	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃47 〃	〃	N100、E458	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃48 〃	〃	N81、E455	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃49 〃	〃	N70、E449	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃50 〃	〃	N52、E423	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
〃51 〃	〃	N152、E511	〃	〃	〃	東南隅(?)	〃	〃	〃
〃52 〃	〃	N56、E429	〃	〃	〃	不明	〃	〃	〃

第2表　住居跡一覧

3　その他の遺構・遺物

(1) 土　壙

大坊地区に 6 基（第 1、3、6、7、8 号土壙）、前川地区に 1 基（同 2）、天王地区に 1 基（同 4）の計 8 基が確認されている。

〔第 1 号土壙〕第 44 号住居跡の東南方向に位置する。北辺で小ピットを切り、平面形は約 3.8×2.2m の楕円形を呈し、深さ約 50 cm、底面は地山礫層である。長軸方向がほぼ東西を向いている。出土物には、図示した土師器坏（第 51 図 1）、須恵器坏（第 51 図 2）のほかに、土師器坏、須恵器甕、弥生土器の破片と中世陶器の小破片 1 点がある。ロクロ使用の土師器坏と、須恵器坏はほぼ完形でいずれも底面近くの堆積土から出土しており本土壙に伴う遺物と考えられる。したがって弥生土器と中世陶器はその一部が混入したものと考えられる。本土壙は平安時代に属する。

〔第 2 号土壙〕第 40 号住居跡の東南に隣接する。平面形は約 2.7×2.6m のほぼ円形を呈し、深さ約 55 cmですり鉢状である。出土遺物はなく時期は特定できない。

〔第 3 号土壙〕第 37 号住居跡の西に位置する。平面形は約 2.0×1.2m の楕円形を呈し、深さ約 45cm、底面には大きさ約 20cm の石が数個認められた。出土遺物には、土師器坏、須恵器坏、同甕、三筋壺(第 51 図 3)があり、いずれも破片である。三筋壺は体部下半の破片で単線の沈線が二条認められる。上の一本は沈線の始まりの部分と終りの部分が上下に交叉しかみあっていない。外面の色調は褐色で黄緑色の自然釉がかかり、内面は灰黒色を呈し胎土は砂粒を含んでいる。県内での三筋壺の出土例は 13 例あり、うち 9 例は経塚出土のものである。（藤沼・中村：1982）。本遺跡の東隣にも三筋壺を出土した伊達神社経塚がある。本土壙出土の三筋壺は土壙に伴う遺物と考えられ平安時代後～末期に位置付けられるが土壙の性格は不明である。

〔第 4 号土壙〕第 127 号墳の東に位置する。平面形は約 2.3×0.8m の隅長方形を呈し、深さ約 25 cmである。出土遺物には、第 1 層出土であるが、外面ロクロナデ、内面ヘラミガキ・黒色処理された高台付埦がある。（第 51 図 4）出土層位が上方であるが、周辺に同期の遺物の散布はみられず他からの混入とは考えられない。したがって本土壙は平安時代に属すと考えられる。

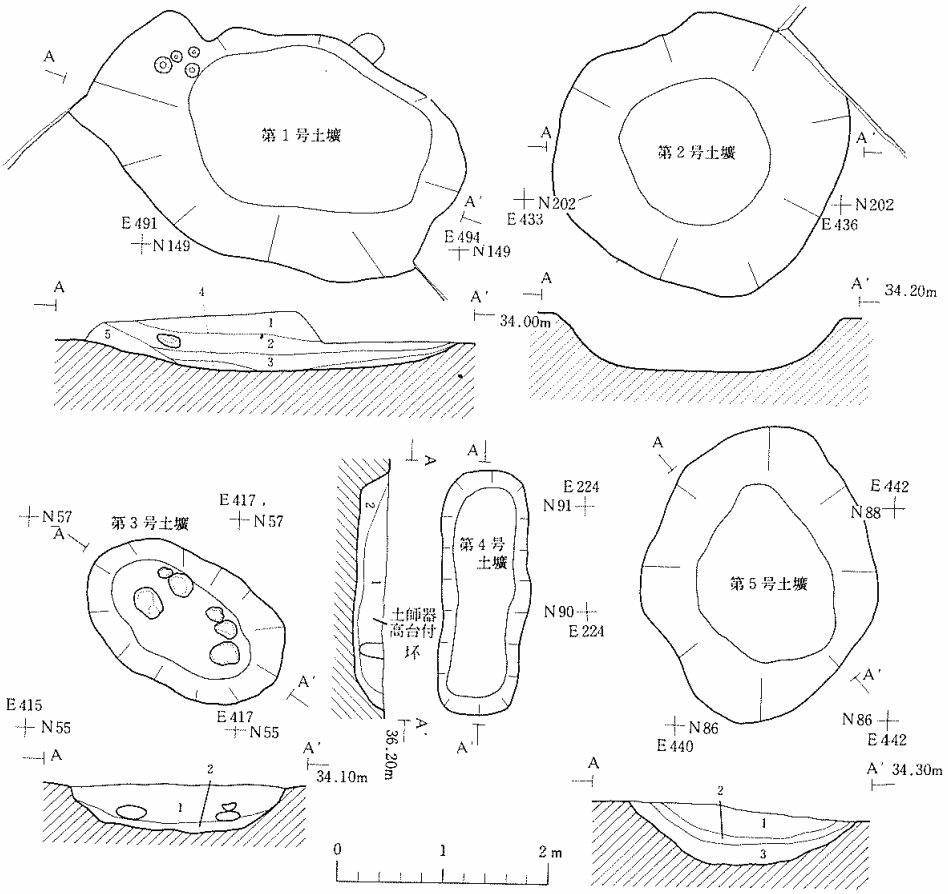
〔第 5 号土壙〕第 121 号墳の北、第 122 号墳の西に位置する。平面形は約 2.8×2.4m の楕円形を呈し、深さ約 48 cmである。長軸方向がほぼ真北を向く。出土遺物はなく時期は特定できない。

〔第 6 号土壙〕第 121 号墳の西に位置する。平面形は約 1.6×0.7m の隅丸長方形を呈し、長軸がほぼ真北を向く。確認のみで掘り下げは行わなかった。

〔第 7 号土壙〕第 121 号墳の西に位置する。平面形は約 2.1×2.1m の円形を呈す。確認のみ

で掘り下げは行われなかった。

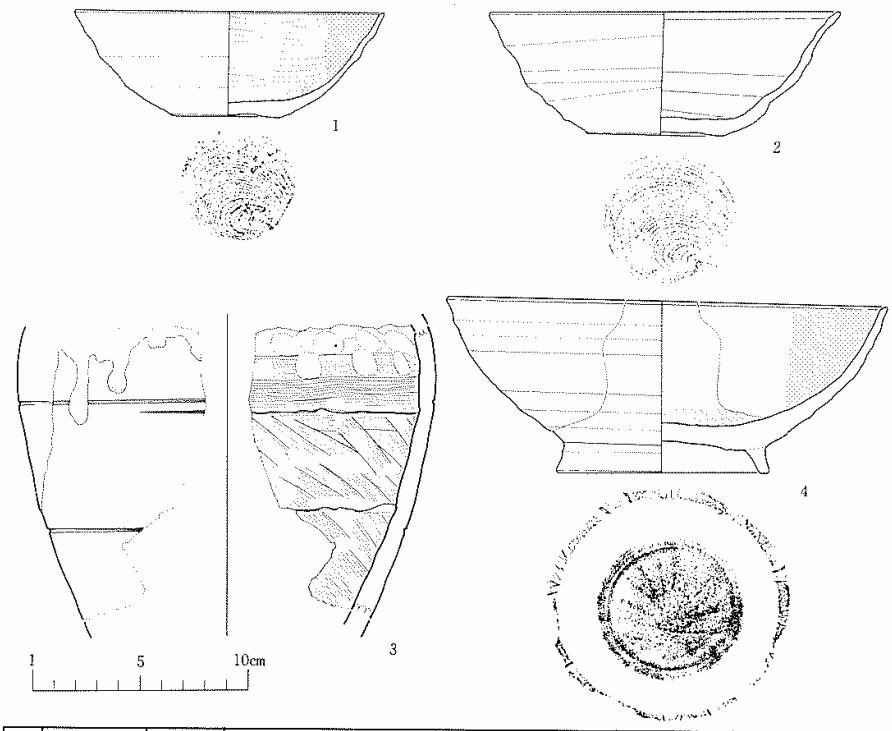
〔第 8 号土壙〕第 37 住居跡の南辺一部を切る。平面形は約 1.0×1.5m の長方形を呈し、深さは約 45cm である。埋土は黒褐色シルトで炭化物を含む。出土遺物はなく時期は特定できない。



土坑	層No	土 色	土 性	備 考
1	1	10YR3/3 暗 褐 色	シ ル ト	炭化物を含む。
	2	10YR2/3 黒 褐 色	シ ル ト	炭化物を含む。
	3	10YR3/2 黒 褐 色	シ ル ト	
	4	10YR2/2 黒 褐 色	シ ル ト	
	5	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	

3	1	10YR3/2 黒 褐 色	シ ル ト	
	2	10YR3/3 暗 褐 色	サ ン ド	
4	1	10YR2/3 黒 褐 色	粘土質シルト	
	2	10YR3/4 暗 褐 色	粘土質シルト	礫を多量に含む。
5	1	10YR4/2 灰黄褐色	シ ル ト	灰白色火山灰を含む、グライ化
	2	10YR6/3 にぶい黄橙色	シ ル ト	灰白色火山灰層
	3	10YR3/2 黒 褐 色	シ ル ト	グライ化

第50図　土壙一覧



番号	器種	出土土坑	特徴	法量(cm) 口径	器高	底径	登録No	分類
1	土師器坏	第1号土坑	外面：ロクロナデ 内面：ヘラミガキ、黒色処理 底部：回転糸切り	140	49	50	1号土坑-Po1	B Ⅱ
2	須恵器坏	第1号土坑	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ 底部：回転糸切り	161	56	64	1号土坑-Po2	
3	三筋壺	第3号土坑	外面に黄緑色の自然釉				3号土坑-Po1	
4	土師器高台付椀	第4号土坑	外面：ロクロナデ、内面：ヘラミガキ、黒色処理	201	80	97	4号土坑-Po1	

第51図　土壙出土遺物

(2) 畑　跡

大坊地区の4ヶ所で確認された。第1･4号畑跡は灰白色火山灰が畝間に堆積し、第2・3号畑跡は灰白色火山灰の下で確認された(第3図参照)。確認面はいずれも地山である。

〔第1畑跡〕第37号住居跡に隣接しており、畝巾約30cm、畝間1.6～2.2m、深さ約10cm、畝の方向はN－55°－Wである。

〔第2畑跡〕第121号墳北側に位置し、畝巾約30cm、畝間約75cm、黒褐色シルトを埋土とし、畝の方向はN－18°－Wである。

〔第3畑跡〕第122号墳南西側、第2畑跡の東則に位置し、畝巾約30cm、畝間20～60cm、黒褐色シルトを埋土とし、畝の方向はN－20°－Eである。

〔第4畑跡〕第3号住居跡に切られ東側に位置する。畝巾約40cm、畝間約30cm、深さ3～8

㎝、畝の方向はN－75°－Wである。いずれの畑跡からも出土遺物はなく、遺物からの時期は特定できない。灰白色火山灰が一度の降下であるという前提にたてば、第1・4号畑跡よりも第2・3号畑跡の方が古いことになる。しかし灰白色火山灰の降下回数が不確定のため明言はできない。いずれの畑跡も方向が異なり、相互の関連は見出せない。

(3) 溝　跡

大坊地区に6ヶ所（第1～4、6、7号溝跡）、川原地区に1ヶ所（第5号溝跡）が確認されている。いずれもトレンチ内での調査であり全容は不明である(第3図参照)。

〔第1号溝跡〕第43号住居跡がこの溝を切っている。南北方向に走り、幅約3.6㎜、深さ55～90㎝である。溝が埋まった所に、灰白色火山灰の堆積した第4畑跡が作られ、第43号住居跡がさらにその畑跡を切って作られている。出土遺物はない。

〔第2号溝跡〕第43号住居跡の西を南北方向に走り、幅約2.0㎜、深さ約35㎝である。出土遺物はない。

〔第3号溝跡〕第38号住居跡の北東を北西～東南方向に走り、幅約8.8㎜、深さ約60㎝である。南西部分は、一度緩やかに下ったあと再び上がり平坦部がみられ、さらに下っている。出土遺物には、外面ロクロナデ、内面ヘラミガキ・黒色処理の土師器坏のほか、同甕、赤焼土器坏、須恵器甕の破片がある。図示できたものはない。

〔第4号溝跡〕第38号住居跡の南側にあり、東西方向に走る。幅約2.0㎜、深さ約20㎝である。出土遺物には、土師器甕体部破片があるが図示できなかった。

〔築5号溝跡〕第74号墳の同溝を切っている。北東～南西方向に走り、幅約2.0㎜、深さ35～40㎝である。出土遺物には、外面ロクロナデ、内面ヘラミガキ・黒色処理の土師器高台付坏のほか、同甕、須恵器の破片がある。図示できたものはない。

〔第6号溝跡〕第122号墳の同溝北辺部分を切り東西方向に走る。出土遺物はない。

〔第7号溝跡〕第121号墳と第122号墳の間を南北に走り、幅約60㎝である。確認のみで掘り下げは行わなかった。上層には灰白色火山灰が堆積している。出土遺物はない。

(4) ピット群

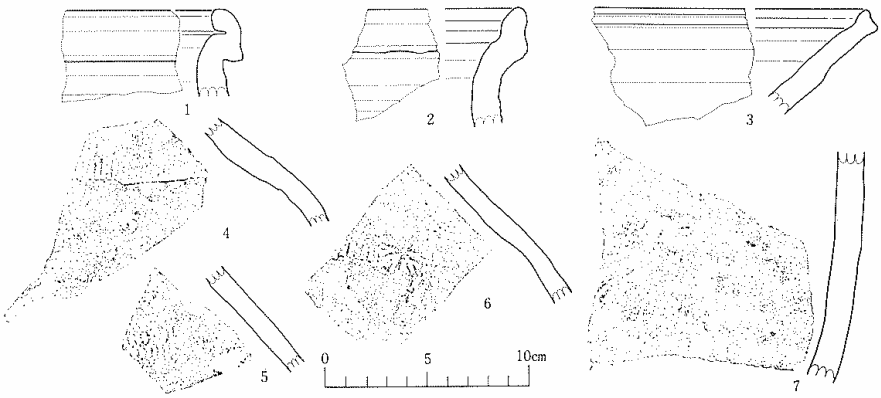
2ヶ所で確認されている。1ヶ所は第123号墳の南、第44号住居跡の北東にあり、29個のピットが確認された。このうち柱痕跡のあるものは10個である。もう1ヶ所は第39号住居跡周辺にあり、39住を切る6個と周辺の54個と計60個が確認された。このうち柱痕跡のあるものは28個である。双方とも明瞭な配列関係は見出せない。

(5) 井戸跡

前川地区で 1 ヶ所確認された。第 40 号住居跡を切っている。埋土はグライ化したシルト層である。確認から 1m まで掘り下げたが精査は行わなかった。

(6) 中世陶器について

37 点の出土がある。遺構に伴うものはいずれも少破片である。このうち口縁部破片 4 点（第 52 図 1～3）、押印のあるもの 3 点（52 図 4～6）、外側に布の付着したもの 3 点（写真図版 9－下）などがある。分布の集中するところは、第 120 号墳周辺、第 122 号墳周辺、第 123 号墳周辺の三地点であり、いずれも大坊地区にある。



番号	器種	出土地点	特徴	色調 外面	色調 内面	色調 胎土	個体No
1	甕口縁部	121墳周辺	口縁帯をもつ。内面に沈線があり、口縁帯下端は鋭い。	5B4/1 暗青灰色	2.5GY4/1 暗オリーブ灰色	10GY5/1 緑灰色	1
2	甕口縁部	119墳周辺	口縁部内面に沈線状の窪み、ほぼ垂直にたつ。	10BG3/1 暗青灰色	10BG3/1 暗青灰色	5G5/1 緑灰色	2
3	すり鉢口縁部	120墳周辺	口縁部上端に沈線状の窪み	10R4/4 赤褐色	10R5/6 赤色	2.5YR6/6 橙色	3
4	体部	A-108	簾状格子目の押印	10R3/3 暗赤褐色	2.5YR6/3 にぶい橙色	5B5/1 青灰色	4
5	体部	A-108	格子目の押印	5YR5/4 にぶい赤褐色	5YR5/2 灰褐色	7.5YR7/3 にぶい橙色	5
6	体部	表採	格子目の押印と菊花状の押印、内面ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐色	7.5YR5/4 にぶい褐色	5BG7/1 明青灰色	6
7	甕体部	128墳周辺	左側中央部に布目痕、内面ナデ	5BG4/1 暗青灰色	5BG4/1 暗青灰色	5BG4/1 暗青灰色	7

第52図　中世陶器

No	出土地点	色調	備考								
1	121墳周辺	5B4/1 暗青灰色	図版1	13	C-32	7.5R3/3 暗赤褐色	内外面とも滑らか 13・14は同一個体	26	120墳周辺	2.5YR4/4 にぶい赤褐色	16・26は同一個体
2	119墳周辺	10BG3/1 暗青灰色	図版2	14	C-32	7.5R3/3 暗赤褐色		27	C-120	7.5R3/3 暗赤褐色	
3	120墳周辺	10R4/4 赤褐色	図版3	15	C-120	7.5R4/1 暗赤灰色	側面に研摩痕 下石に転用	28	121墳周辺	7.5YR4/2 灰褐色	
4	A-108	10R3/3 暗赤褐色	図版4 押印あり、自然軸	16	表採	2.5YR4/4 にぶい赤褐色	16・26は同一個体	29	A-135	7.5YR4/2 灰褐色	
5	表採	5YR5/4 にぶい赤褐色	図版5 押印あり	17	122墳周辺	2.5YR5/6 明赤褐色	17・18・19は同一個体	30	A-135	5YR4/3 にぶい赤褐色	
6	A-108	7.5YR5/4 にぶい褐色	図版7 布目あり	18	120墳周辺	2.5YR5/6 明赤褐色		31	不明	2.5YR3/2 暗赤褐色	
7	128墳周辺	5BG4/1 暗青灰色	口縁部破片	19	A-107	2.5YR3/4 暗赤褐色		32	不明	2.5YR6/8 橙色	
8	A-133	2.5Y6/3 にぶい黄色	布付着 9・10・11は同一個体	20	A-78	10Y3/2 オリーブ黒色		33	A-165	7.5R2/1 赤黒色	内外面とも滑らか
9	C-2	5YR6/4 にぶい橙色	布付着	21	C-2-3	7.5YR4/1 褐灰色	外面滑らか	34	不明	2.5YR5/4 にぶい赤褐色	
10	C-2	5YR6/4 にぶい橙色	布付着	22	A-134	7.5YR4/1 褐灰色		35	A-133	2.5YR5/3 にぶい赤褐色	
11	A-100	5YR6/4 にぶい橙色	布付着	23	C-4	7.5R4/6 赤色		36	第1号井戸	10R5/2 灰赤色	
12	A-103	7.5YR5/4 にぶい褐色		24	122墳石室	10YR4/1 褐灰色	タタキ目あり	37	土坑1	10R5/4 にぶい赤褐色	
				25	A-107	5YR6/4 にぶい橙色					

第 3 表　中世陶器一覧表

4　弥生時代の遺物包含層と出土遺物

大坊地区の 123 号墳周辺と 124 号墳周辺の 2 ヶ所で弥生時代の遺物包含層が確認された。(第 3 図)両地域での包含層のあり方と出土土器の様相に相違がみられる。

(1) 第123号墳周辺

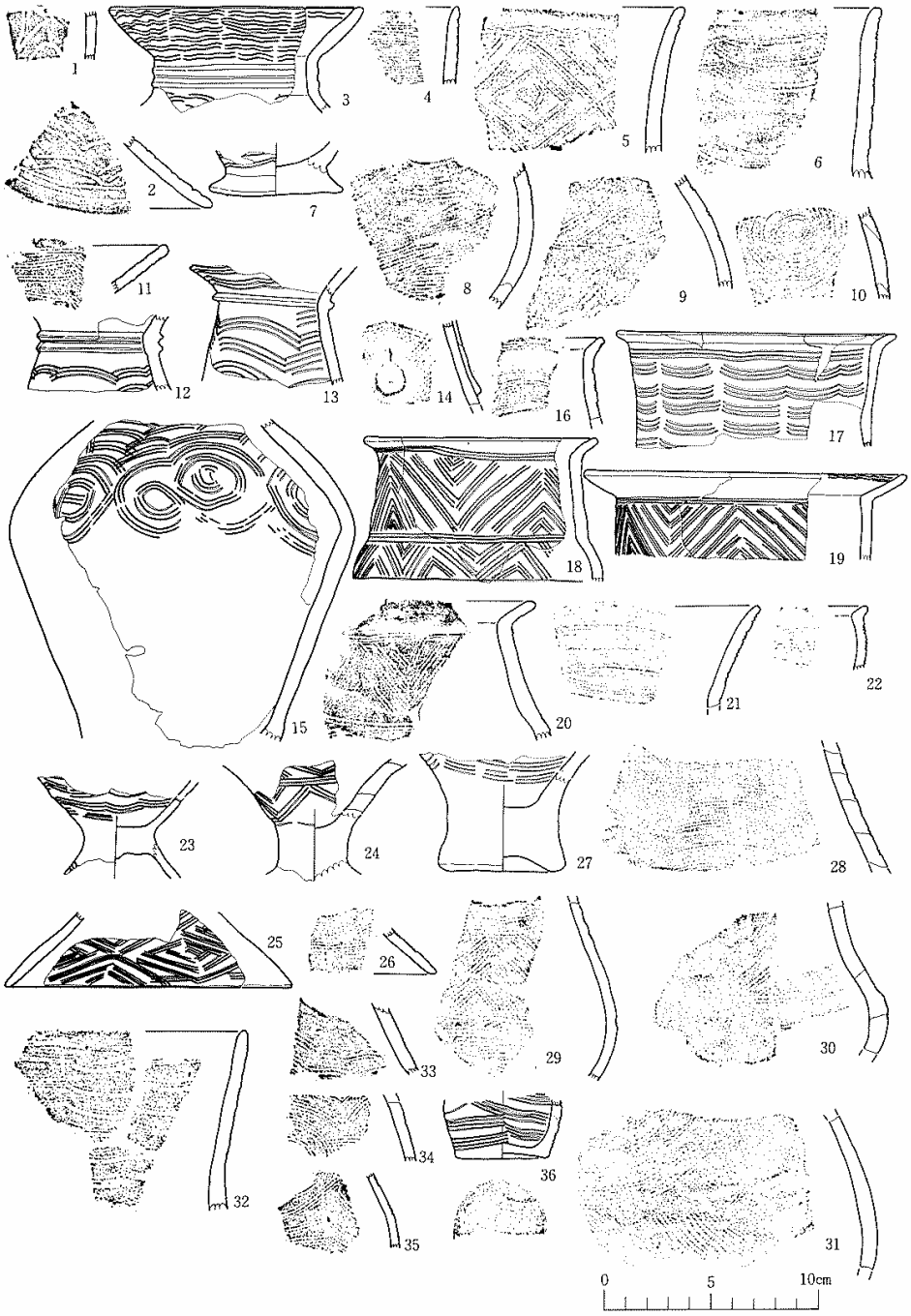
地山礫直上の暗褐色シルト層から土器、土製品、石器、フレイク類が出土している。遺物包含層の状態は地山礫層の上面凹凸が強く層の厚さは 5 ㎝～30㎝ と一様ではない。遺物の出土状況は、礫層の礫に接して出土したものが多くみられる。層の上部から出土したものは少量で、しかも層理面に対し不規則な状態で出土している。土器破片総数は 900 点前後になるがこのうち地山礫層上面として取り上げられたものが全体の 80%を占める。

〔土器〕器種としては壺・甕・高坏・蓋がみられる。文様、地文の特徴には以下のようなものがみられる。

第Ⅰ類：1 本工具により波状文鋸歯文を描いたり、沈線区画内に縄文が施されたもの。（第 53 図 1）

No	種　類	出土地点・層位	分　類	特　　質
1	(？)	A-100グリット　3層	Ⅰ　類	すり消し縄文。磨滅が著しい。
2	蓋(？)	〃　　2層	Ⅱa類	条間が巾4㎜と広い。
3	壺	〃　　3層	〃	頸部に粘土紐貼り付けの凸帯が2条廻る。波状文。
4	甕	A-98グリット　1層	〃	端部は丸くおさまる。
5	〃	C-4,5グリット　礫層	〃	端部は丸くおさまる。ひし形文。
6	〃	A-98グリット　3層	〃	口縁端部に撚糸の押捺。連弧文。
7	(？)	〃	〃	底部は無文
8	壺	A-100グリット　3層	Ⅱa＋Ⅲb類	体部下半は撚糸文（LR)。
9	〃	〃　　3層	Ⅱa＋Ⅲa類	体部下半は縄文（LR)。
10	〃	〃　　2層	〃	渦巻文
11	壺(？)	123号墳石棺内	Ⅱb類	内面にも連弧文
12	〃	C-1グリット　3層	〃	頸部に粘土紐貼り付けの凸帯が2条廻る。連弧文。
13	〃	A-100グリット　3層	〃	〃　　1条廻る。連弧文。
14	〃	〃　　3層	〃	頸部につり輪状の粘土紐貼り付け文が有る。
15	〃	A-103グリット　3層	〃	体部下半は無文。体部上半に同心円状文。
16	〃	A-96グリット　礫層	〃	口縁端部に撚糸の押捺。下向きの連弧文。
17	〃	C-5,6グリット　1層	〃	〃　　上向きの連弧文。
18	〃	〃	〃	連続山形文。
19	〃	C-5,6グリット　1層	〃	〃
20	〃	A-101グリット　2層	〃	連続山形文。
21	甕(？)	C-2グリット　3層	〃	口縁端部に撚糸の押捺。上向き連弧文。
22	〃	〃	〃	
23	高　坏	A-101グリット　2層	〃	連弧文。
24	〃	A-100グリット　3層	〃	連続山形文。
25	〃	C-4,5グリット　礫層	〃	ひし形文。
26	〃	C-1グリット	〃	
27	〃	A-105グリット　礫層	〃	連弧文。
28	壺	A-101グリット　2層	〃	下向き連弧文。
29	〃	〃　　2層	Ⅱb＋Ⅲb類	連続山形文。体部下半は撚り糸（LR)。
30	〃	〃　　2層	Ⅱb類	〃　　体部下半は無文。
31	〃	A-94グリット　礫層	Ⅱb＋Ⅲb類	渦巻文。体部下半は撚り糸（LR)。
32	甕	A-100グリット　3層	Ⅱc類	端部は丸くおさまる。上向き連弧文。
33	〃	〃	〃	波状文。
34	〃	C-4～5グリット　礫層	〃	渦巻文。
35	〃	〃	〃	〃
36	〃	〃	Ⅱc＋Ⅴa類	底部は揚げ底風で木葉痕。

第53図　遺物観察表



第53図　遺物包含層（ｉ）出土遺物（１）

第Ⅱ類：平行施文具により連弧文、連続山形文、渦巻文、三角文などの幾何学的な文様が施されるもの。沈線の本数が異なり以下のものがみられる。

ａ類：2本1単位の平行沈線文（第53図2～10）；

ｂ類：3本1　〃　（第53図11～31）；

ｃ類：4本1　〃　（第53図32～36）

第Ⅲ類：地文のみられるもので縄文、もしくは撚糸文が施されたもの

ａ類：縄文　(小破片で磨滅したものが1点出土している。)

ｂ類：撚糸文　（第54図1～9）

第Ⅳ類：無文のもの　（第54図10、11）

第Ⅴ類：底部破片である。底部に各類の圧痕のみられるものがある。

ａ類：木葉の圧痕　（第54図12～14）

ｂ類：布の圧痕　（第54図15、16）

ｃ類：圧痕のないもの　（第54図17～20）

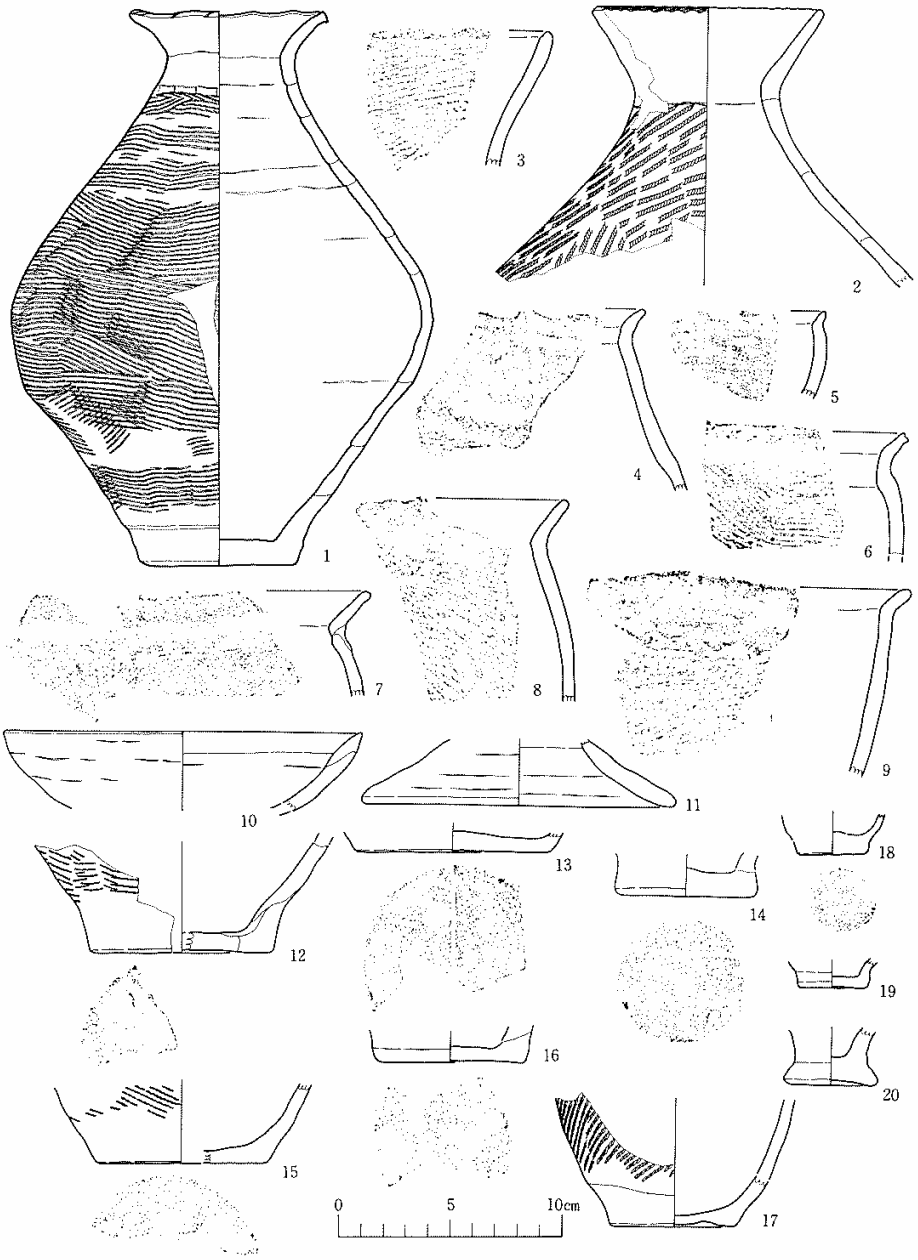
上記各類は包含層内で混在し、層位的に区別されたものではない。量的にはⅡａ、ｂ類の2ないし3本1単位の平行沈線文を施した壺（第53図11～20）やⅢｂ類の撚り糸を地文とした壺、甕（第54図1～9）が破片総数の約85%を占める。これに対しⅠ類は10点と少くいずれも磨滅した小破片である。一方底部破片ではⅤａ類の木葉痕のものが約75%を占め、布痕のものは約10%である。

〔土製品〕土製の曲玉が1点出土している。頭部の穿孔は両辺から行っている。全面に軽いケズリの痕跡が残る。(第55図1)

〔石器〕石庖丁、石鏃がある。石庖丁は2点ある。いずれも黒みがかった青灰色の粘板岩製である。完形のものは背部寄りに両辺から2孔1対の穿孔がなされている（第55図2～3）。

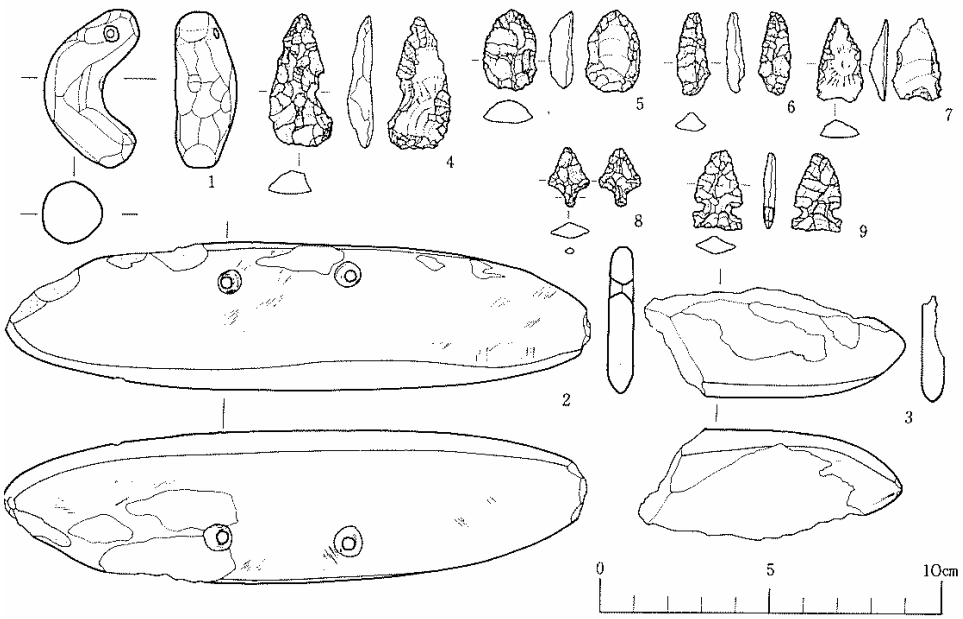
No	種　類	出土地点・層位	分　類	特　徴
1	壺	C-4,5グリット　礫層	Ⅲｂ類	口縁～頸部は無文。口縁端部に撚り糸押捺。撚糸(LR)
2	〃	A-99グリット　3層	〃	〃　〃　〃
3	(？)	A-99グリット　礫層	〃	口縁端部に撚り糸押捺　〃
4	壺	A-100グリット　1層	〃	口縁、頸部は無文。　〃
5	？	〃　3層	〃	〃　〃
6	甕	A-101グリット　2層	〃	〃　口縁端部に撚り糸押捺　〃
7	〃	A-95グリット　礫層	〃	〃　〃　〃
8	〃	A-100グリット　2層	〃	〃　〃　〃
9	〃	A-98グリット　3層	〃	〃　〃
10	高坏(？)	A-94グリット　礫層	Ⅳ　類	粘土紐の輪積み痕が残る。
11	〃	A-100グリット　3層	〃	
12	壺	C-2,3グリット　1層	Ⅲｂ＋Ⅴｂ類	体部下半に撚り糸(LR)。底部に笹の葉の圧痕。
13	〃	A-94グリット　礫層	Ⅴａ類	
14	〃	C-101グリット　3層	〃	
15	〃	A-100グリット　3層	Ⅲｂ＋Ⅴｂ類	体部下半に撚り糸(LR)。
16	〃	A-101グリット　3層	Ⅴｂ類	
17	〃	A-98グリット　3層	Ⅲｂ＋Ⅴｃ類	体部下半に撚り糸(LR)。
18	〃	C-5,6グリット　1層	Ⅴｃ類	
19	〃	A-100グリット　3層	〃	
20	〃		〃	

第54図　遺物観察表



第54図　遺物包含層（ｉ）出土遺物（２）

〔石鏃〕無柄鏃 3 点（第 55 図 4～6）有柄鏃 2 点（7、8）アメリカ式石鏃 1 点（9）がある。黒曜石製のもの（4、5、8）とチャート製のもの（6、7、9）がある。
〔フレイク〕黒曜石、チャートがあるが黒曜石が多い。黒曜石は全て自然面を残すもので径 1～2cm の極めて小さな母岩に限られる。



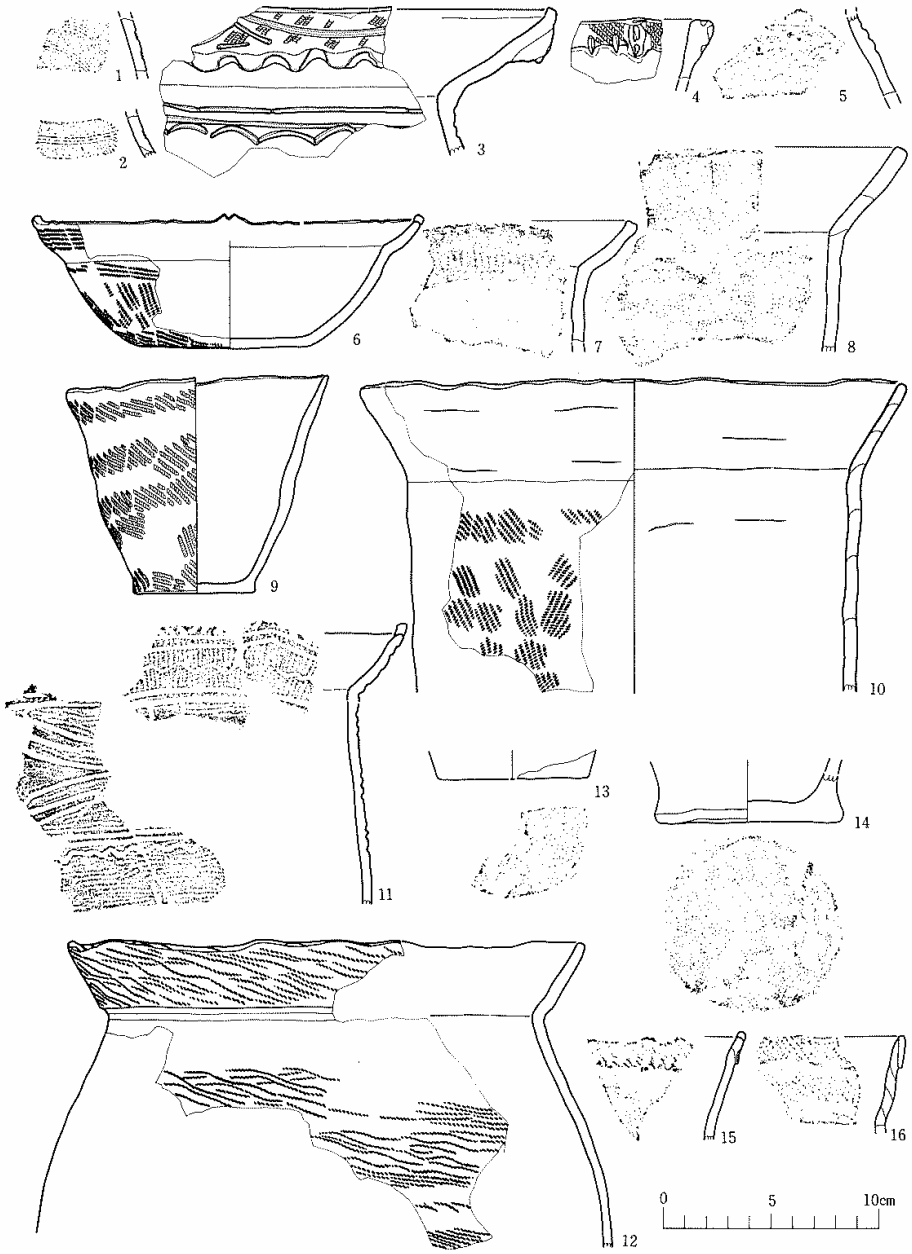
第55図　遺物包含層（ｉ）出土遺物（３）

（2）124 号墳周辺

地山褐色砂層上の褐色砂質シルト層、及び第 124 号墳周溝底面下から土器、フレイク類が出土している。地山及び包含層は全体に東方に傾斜しており第 124 号墳以東では古墳の下に包含層がもぐり込む。第 124 号墳周溝底面出土の遺物の一部は、掘り過ぎにより包含層の遺物が出

No	種　類	出土地点・層位	分　類	特　　徴
1	壺	A-58グリット	Ⅱ　類	渦巻文。
2	〃	〃	〃	連弧文。
3	〃	〃	Ⅰa 類	有段口縁。段の下端を波状に抉る。地文は斜縄文。
4	（？）	124号墳周溝底面	〃	〃　段の下端に刺突を加える。　〃
5	壺	〃	〃	下向きの連弧文　〃
6	壺	〃	Ⅲa 類	口縁部は内弯気味に外傾。口縁に突起、縄文は横位、従位
7	壺	〃	〃	〃　体部は無文。縄文は従位
8	〃	〃	Ⅳ　類	〃
9	鉢	A-58地山直上	Ⅲa 類	口縁部は波状。地文の縄文は斜位。
10	壺	124号墳周溝底面	〃	波状口縁で内弯気味に外傾。口縁部は無文で縄文は斜位
11	〃	〃	Ⅰb 類	〃　沈線の区画内に縄文。
12	〃	A-59　6層	Ⅲb 類	有段口縁。口縁部は波状。
13	〃	A-50グリット	Ⅴ　類	布目痕
14	〃	〃	〃	〃
15	壺	120号墳		
16	〃	〃		

第56図　遺物観察表



第56図　遺物包含層（ⅱ）出土遺物

土したものである。遺物の出土状態は不規則である。良好な包含層は第 124 号墳下に残存しているものと考えられる。破片総数は 97 点で、このうちの約 60%は第 124 号墳周溝底面出土として取り上げられたものである。

〔土器〕器形を判別できるものは少ないが埦、鉢、甕がみられる。文様、地文、器形の特徴には以下のようなものがみられる。

第Ⅰ類：1 本工具により刺突文、連弧文、鋸歯状を描いたり沈線の区画内に縄文を施すもの。口縁部形態に違いがみられる。

ａ類：口縁部下端に段が形成されるもの。（第 56 図 3、4）

ｂ類：口縁部が内弯気味に外傾するもの。（第 56 図 11）

第Ⅱ類：平行施文具により 3 本 1 単位の平行沈線文が施されるもの。（第 56 図 1、2）

第Ⅲ類：地文のみのもので、縄文もしくは撚糸文が施されるもの。

ａ類：縄文　（第 56 図 6、7、9、10）

ｂ類：撚糸文　（第 56 図 12）

第Ⅳ類：無文のもの　（第 56 図 8）

第Ⅴ類：底部破片で布の圧痕がみられる。（第 56 図 13、14）

上記の各類は包含層内で混在し層位的に区別されたものはない。量的にはⅢａ類の縄文を地文とし、口縁部が内弯気味に外傾する甕（第 56 図 7、10）が多くみられる。これに対し、Ⅱ類の平行沈線文は、小破片が 9 片出土したに過ぎない。またⅢｂ類の撚糸地文のものとⅠ、Ⅲd 類を合わせた縄文地文のものとでは 1：4 と、縄文地文のものが多い。

〔フレイク〕黒曜石 3 点、頁岩 1 点が出土している。いずれも自然面を残すものである。

第 123 号墳周辺では、出土土器破片総数の約 85%をⅡａ、ｂ類、Ⅲｂ類が占め、これにⅡｃ類と木葉圧痕を主としてもつ底部が加わり土器群の主体を構成している。このうちⅡａ、ｂ類は 2～3 本 1 単位の平行施文具による文様をもつもので宮城県地域での弥生器編年の十三塚式(伊藤:1957)に比定されるものである。Ⅲｂ類、Ⅱｃ類は厳密な型式比定はできないが、Ⅲｂ類の壺、甕(第 54 図 1～9)については口縁部、頚部が無文で、口縁端部に撚糸の押捺が加えられるなどの特徴から十三塚式期を中心とし、その前後に位置付けられるものである。またⅡｃ類についても、沈線の本数は異なるものの器形、文様の構成がⅡａ、ｂ類に共通した内容をもつもので十三塚式期に属すものと考えられる。これに対しⅠ類及びⅢａ類は層位的に分離できないが出土量が極端に少く砕片はいずれも磨滅が著しいことなどから一括することはできず混入した遺物と考えられる。細片のためいずれも明確な型式比定はできない。以上のように第 124 号墳周辺の遺物包含層出土の土器類は主に十三塚式期に属すものからなり石庖丁、石

鏃、勾玉などもこれに伴ううものと考えられる。

第 124 号墳周辺では、出土土器破片総数 97 点のうち第Ⅰ類、第Ⅲａ類が 53 点とその 54%を占め上記の第 123 号墳周辺出土土器とは大きく異なった様相を示す。これらの中には、連弧文・縦走縄文・口縁部が複合口縁、有段口縁となるものなどがみられ宮城県地域の弥生土器編年（伊藤:1957）における天王山式期に属すものと考えられる。しかし、その一方で天王山式土器の標式資料（坪井:1953）に特徴的にみられる横走縄文・連弧文・交互刺突文は少数みられるに過ぎない。文様要素・波状口縁が少なく地文のみ、もしくは無文で口縁部が内弯気味に外傾する器形のものが多くみられることが土器群の一つの特徴であるが、東北地方北部域との強い関連を示すものも含まれている(第 56 図 11)。この他平行沈線文をもつⅡ類、撚糸地文のⅢｂ類などがある。Ⅱ類はいずれも磨滅した小破片で混入の可能性が強い。Ⅲｂ類は上記の土器群との関係は明らかでないが層位的には分けられず伴う可能性もある。天王山式については資料の増加とともに細分も試みられているが(興野:1976・中村:1976・佐藤他:1978)定着したものではなく上記の土器群の位置付けも今後の検討課題としておきたい。

ⅰ第123号墳周辺

Ⅰ沈線文	Ⅱ平行沈線文			Ⅲ地文のみ		Ⅳ無　文	Ⅴ底　部			計
	ａ２　本	ｂ３　本	ｃ４　本	ａ縄　文	ｂ撚り糸		ａ木　葉	ｂ　布	ｃ無　文	
10	31	166	33	12	563	7	35	6	6	869

ⅱ第124号墳周辺

Ⅰ沈線文		Ⅱ平行沈線文	Ⅲ地文のみ		Ⅳ無　文	Ⅴ底　部	計
ａ有段口縁	ｂ	（３本）	ａ縄　文	ｂ撚り糸		（木葉痕）	
3	2	9	48	14	19	3	98

第４表　遺物包含層破片集計表

引用・参考文献

伊東信雄（1957）：「古代史」『宮城県史』第１巻　宮城県

坪井清足（1953）：「福島県天王山遺跡の弥生式土器――東日本弥生文化の性格」『史林』第36巻第１号　史学研究会

興野義一（1976）：「第三節・弥生文化」『一迫町史』　一迫町

佐藤信行（1978）：『上の原Ａ遺跡』　一迫町教育委員会

中村五郎（1976）：「東北地方南部の弥生式土器編年」『東北考古学の諸問題』　東北考古学会

Ⅵ　考　察

1　古墳群とその出土遺物

昨年、一昨年を含めた三年次に渡る調査で確認された古墳は 163 基で、このうち 139 基は水田下などから新たに発見された古墳である。古墳の分布範囲からみて花川北岸の上郷地区には推定総数約 500 基の古墳が造られたと考えられることから、一連の調査によって確認された古墳は全体の約 40%に達したと考えることができる。発掘調査の対象になったのは以下の 122 基である。ここでは三年次の調査成果を総括的に検討し、本古墳群の形成過程とその歴史的意義について考察を行う。

（1）出土遺物

古墳に伴う出土遺物には、直刀、刀子、鉄鏃、耳環、琥珀玉、釘、土師器、須恵器などの石室内出土遺物と、石室外出土の土師器、須恵器とがある。前者を副葬品、後者を供献土器群と仮りに分けて考えると、副葬品は稀少で、中でも耳環、玉類は各 1 点が発見されただけである。（第 5 表）副葬品の稀少性は本古墳群の特徴の一つと言えよう。これに対し、供献土器群は豊富な数量、内容をもつものである。ここではこれらの土器について検討を加え、古墳群の形成過程、性格について考察を加えたい。

○出土土器の分類

図示できたものは土師器 164 点、須恵器 192 点である。分類は基本的に一昨年の基準によるが土師器坏、須恵器坏、同高台付坏、同坏蓋類については資料の増加もあり部分的に改訂した。

〔土師器〕

坏、埦、鉢、高坏、蓋、壺、甕がある。坏 124 点、埦 9 点、鉢 4 点、高坏 11 点、蓋 2 点、甕 3 点である。坏は第 57 図のように分類される。

〔須恵器〕

坏、高台付坏、蓋、広口壺、長頸瓶、短頸蓋、横瓶、提瓶𤮬、甕がある。坏 32 点、高台付坏 19 点、蓋 24 点、広口壺 16 点、長頸瓶 18 点、短頸瓶 5 点、横瓶 1 点、提瓶 9 点、𤮬 3 点、甕 57 点である。坏・高台付坏・蓋については第 58 図のように分類される。

○土器の出土状況

土器類を出土した古墳は横穴式石室、竪穴式小石室を主体部とする古墳に限られ箱式石棺に伴う土器は発見されなかった。土器の出土位置は第 106 号墳の玄室内、第 218、228 号墳の石室裏込め出土の例を除き、すべて横穴式石室の入口部、竪穴式小石室の南側周溝内に限定されている。出土層位は①前庭、テラス、周溝の各遺構面出土のもの、②遺構面から浮いた状態のもの、③周溝堆積土各層に前庭、テラス方向から流下した状態で含まれていたものの三者がある。

	古墳番号	地区	主体部形態	前庭周辺出土品	玄室出土品
昭和57年度報告	15	天王	横穴式石室	土師器・須恵器	
	39	深山	〃 (?)	〃	
	40	〃	〃 (?)	なし　　し	
	77	〃	〃	土師器・須恵器	
	93	〃	〃	〃	
	201	地蔵堂	〃	〃	金環
	202	〃	〃 (?)	土師器	
	203	〃	〃 (?)	なし	
	204	〃	〃	須恵器	
	205	〃	〃	土師器・須恵器	
	206	〃	〃 (?)	なし	
	207	〃	〃	須恵器	
	209	〃	〃	〃	
	210	〃	〃	なし	
	211	〃	〃	〃	
	212	〃	〃 (?)	土師器・須恵器	
	213	〃	〃	なし	
	214	〃	〃	〃	
	215	〃	箱式石棺	〃	
	217	〃	横穴式石室	土師器	
	218	〃	〃	土師器・須恵器	直刀・刀子・鎌
	220	〃	〃	土師器	
	221	天王	〃	土師器・須恵器	直刀・刀子・鎌
	222	〃	〃	須恵器	
	224	〃	〃	土師器	
	225	深山	〃	〃	
	226	〃	〃	なし	
	227	〃	〃	土師器・須恵器	
	228	〃	〃	土師器	
	229	〃	〃	なし	
	230	〃	〃	〃	
	232	〃	〃	〃	
	233	〃	〃	土師器・須恵器	
	234	〃	〃	須恵器	
	235	〃	〃	なし	
	236	〃	〃	〃	
	237	〃	〃	〃	
	238	〃	〃	〃	
	239	〃	〃	〃	
	240	〃	〃	〃	
	241	〃	〃	〃	
	242	〃	〃	〃	
	243	〃	〃	〃	
	244	〃	〃	〃	
	245	〃	〃	〃	
	246	〃	〃	須恵器	直刀
	247	〃	竪穴式小石室	なし	
	248	〃	横穴式石室	土師器・須恵器	鎌
	250	〃	〃	〃	
	251	〃	〃	〃	
	252	〃	〃	〃	
	253	〃	〃	〃	直刀(銀像)
	254	〃	〃	〃	
	255	〃	竪穴式小石室	なし	
	256	〃	〃	土師器	
	257	〃	〃	須恵器	
	258	〃	〃	なし	刀子
	260	〃	横穴式石室	須恵器	
	261	〃	〃	なし	直刀
	262	〃	〃		
	263	〃	〃	土師器・須恵器	
	264	〃	〃	なし	
	265	〃	竪穴式小石室	須恵器	

	古墳番号	地区	主体部形態	前庭周辺出土品	玄室出土品
昭和57年度報告	266	深山	横穴式石室	土師器・須恵器	
	267	〃	〃	なし	
	268	〃	〃	〃	
	269	〃	〃	土師器・須恵器	
	301(281)	新宿二番	〃	なし	直刀・刀子・鎌
	302	〃	〃 (?)		
	303	〃	〃 (?)		
	304	〃	〃 (?)		
	305	〃	〃 (?)		
	306	〃	〃 (?)		
	307	〃	〃 (?)		
	308	〃	〃 (?)		
	401	下原	〃	須恵器	
	402	〃	〃	なし	
	403	〃	〃	土師器・須恵器	鎌
	404	〃	箱式石棺		刀子
昭和58年度報告	24	地蔵堂	横穴式石室	土師器・須恵器	直刀鎌玉
	28	〃	〃	〃	直刀・刀子
	97	新宿二番	〃 (?)	須恵器	
	98	〃	〃 (?)	土師器・須恵器	
	100	〃	〃 (?)	〃	
	104	地蔵堂	〃 (?)	〃	
	105	新宿二番	〃 (?)		
	106	〃	〃	須恵器	土師・須恵釘
	107	〃	〃	土師器・須恵器	直刀
	108	〃	〃	〃	
	109	地蔵堂	〃	〃	
	110	新宿二番	〃 (?)	なし	
	111	深山	〃 (?)	〃	
	112	〃	〃 (?)	須恵器	
	113	地蔵堂	〃	なし	
	114	〃	〃	須恵器	
	115	〃	〃	なし	
	116	〃	〃 (?)	須恵器	
	117	〃	〃 (?)	なし	
昭和59年度報告	48	天王	〃 (?)	土師器・須恵器	
	71	上大坊	〃 (?)	〃	
	74	深山	〃 (?)	なし	
	79	用原	〃	土師器・須恵器	
	118	〃	竪穴式小石室	土師器	刀子
	119	〃	横穴式石室	土師器・須恵器	直刀・鎌
	120	大坊	〃	〃	
	121	〃	〃	土師器	
	122	〃	〃	なし	
	123	〃	箱式石棺	〃	
	124	〃	横穴式石室	土師器・須恵器	
	125	前川	〃 (?)		
	126	天王	〃 (?)	土師器・須恵器	
	127	〃	〃	なし	
	128	前川	〃 (?)	〃	
	129	〃	〃 (?)	〃	
	130	上大坊	〃 (?)	〃	
	131	天王	〃	〃	
	132	〃	〃	〃	
	133	〃	〃 (?)	〃	
	134	深山	〃 (?)	須恵器	
	135	大坊	竪穴式小石室	なし	
	136	大王	〃	〃	
	137	大坊	箱式石棺	〃	
	138	上大坊	不明	〃	
	139	大坊	横穴式石室	須恵器	
	140	〃	〃 (?)	〃	
	141	天王	〃 (?)	〃	

昭和25年　東北大学考古学研究室調査古墳

古墳名	今回の調査での新番号	地区	主体部形態	主体部の規模		
上郷105号墳	第96号墳(?)	新宿二番	横穴式石室	石室全長 7.0～6.85m	玄室長 2.85～2.9m	羨道巾 0.75～0.9m
上郷109号墳	該当するものなし	〃	〃	〃 5.8m	〃 2.85～2.9m	〃 0.7～0.75m
上郷135号墳	第9号墳	〃	〃	〃 4.92m	〃 2.5～2.55m	〃 0.7～0.75m

○色麻古墳群関係文献
○原　秀四郎(1901)：「陸前の積石塚」『東京人類学会雑誌』第184号　東京人類学会
○布施　千造(1903)：「累々たる蝦夷塚を探見するの記」『東京人類学会雑誌』第202号　〃
○渚水東四郎(1931)：「色麻柵」『宮城県史跡・名勝・天然記念物3』　宮城県史跡名勝天然記念物調査会
○　〃　(1938)：「宮城県内の古墳及横穴」『同上4』
○　〃　(　〃　)：「加美郡四釜の古墳」『同上4』
○伊東　信雄(1955)：「宮城県加美郡上郷古墳群」『日本考古学年報8』　日本考古学協会
○鈴木　貢他(1979)：『色麻町史』　宮城県色麻町教育委員会

第5表　発掘調査古墳一覧表

調査の過程で①と②、③の間に時間差が認められた例は第71号分周溝出土例があり、これは時期を異にした土器の供献が行われたものと理解された。一方、他の古墳でこのような時間差を示す出土状況は確認されなかった。すなわち②、③に含まれる土器は破片であり①と接合するものであることから①、②、③は同時もしくは短い時間巾の中で供献された土器群と考えられた。第 71 号墳での土器のあり方はむしろ例外的であり各古墳出土の土器群は限られた時間巾の中で供献された土器群とすることができよう。

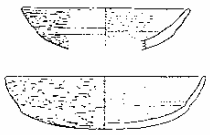
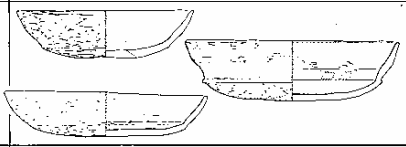
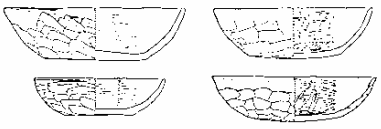
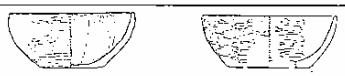
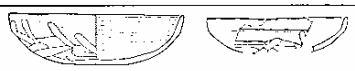
〇出土土器の組み合わせと年代

出土状況の検討により、第 71 号墳を除く各古墳出土の土器群は短い時間巾の中で供献された土器群と考えられた。各古墳ごとの出土土器の器種・類型の組成は第 6 表のようにまとめられる。これらについて器形・技法の時期的変遷が比較的明らかな須恵器坏、蓋各類を中心にみると、これらに組み合う土師器坏、須恵器瓶、壺類も各類に対応したあり方を示し、土器の組成の類似した古墳もいくつかみられ、大きく三段階の変遷を捉えることができた。以下各段階の土器の内容を概観し、年代的位置付けを試みる。

第１段階（24、48、108、121、204、205 号墳出土土器・第 71 号墳周溝底面出土土器）

土師器坏には内黒のＡＩ1ａ、ＡＩ2ａ、ＡＩ3、AⅢ類と、内面ナデ調整のＢＩ、ＢⅡ1、BⅢ1 類がみられる。内面の調整技法・器形により前者は東北地方、後者は関東地方の土器系統にそれぞれ属するもの（古川：1982）と考えられる。A類が主体となる古墳（108、205 号墳）とＢ類が主体となる古墳（24、48、121 号墳）とがある。内黒有段丸底の坏ＡＩ1ａ、ＡＩ2 類はいずれも丸底の度合いが強く器内外の段も明瞭であるが段以上が直線的もしくは内弯気味に外傾することから東北地方南部における土師器編年(氏家:1957)の栗囲式の新しい段階とされる名取清水遺跡第Ｖ群土器（丹波・阿部・小野寺：1981）よりもやや新しい特徴をもつものと考えられる。段以上が外反するものがない点では栗囲式の範疇から逸脱するが、丸底の度合いが強く段が明瞭である点では栗囲式的であり、ここでは栗囲式の新しい段階のものとして位置付けておきたい。これに対し内黒有段平底の坏ＡＩ3 類や同じく内黒で外面に稜をもつ丸底のＡⅡ類、同じく体部が内弯して立ち上がり内外面に段･稜の無い平底の坏ＡⅢ類などは栗囲式期に系統性の辿れないものでありこれらの類型の上限を示すものとも理解できる。

内面ナデ調整で有段丸底の坏ＢＩ類は須恵器有蓋坏の模倣形態をとどめたもので器外面の段が明瞭で段以上が外反気味に外傾するものである。関東地方南部を中心とした土師器編年（杉原・大塚：1971）の鬼高式の終末段階に比定することができる。器形的特徴だけに限れば鬼高Ⅲ式の新しい段階とされる埼玉県本庄市古川端遺跡第 10 号住居跡出土土器（小久保：1978）の中に類似したものがみられる。一方ＢⅡ1、BⅢ1 類は口縁下部に段もしくは沈線状の段が形成され口縁部が狭く外反するものである。これらに類似したものは宮城県内でも発見例が比較

A 内黒	Ⅰ 器内外に段もしくはくびれが形成されるもの。	1 段が中位にある。「底部は丸味」「が強い。」	a 外面の調整はヨコナデヘラケズリ	
			b 〃 ヘラミガキが加えられる。	
		2 段が下半にある。「底部の丸味」「は弱く平底」「風である。」	a 〃 ヨコナデ ヘラケズリ	
			b 〃 ヘラミガキが加えられる。	
		3 段は下端にある。平底（外面はヨコナデ、ヘラケズリ。）		
	Ⅱ 器外面中位に稜、丸底（外面の調整にヘラミガキが加えられる。）			
	Ⅲ 段・稜をもたないもの。	1 外面の調整はヨコナデ、ヘラケズリ（平底もしくは丸底風の平底）		
		2 外面はヘラミガキ。平底		
B 内面ナデ調整	Ⅰ 外面中位に段をもち口縁部は外反。			
	Ⅱ 口縁下部に稜をもち口縁部は短かく屈曲し外反する。	1 器壁が厚手で小型		
		2 器壁が薄手で大型		
	Ⅲ 口縁下部に沈線状の段をもち、口縁部は短く屈曲し外反する。	1 器壁が厚手で小型		
		2 器壁が薄手で大型		
	Ⅳ 口縁下部で緩やかに屈曲し口縁部は直立もしくは外傾			
	Ⅴ 口縁部が「く」の字状に屈曲し内面に稜をもつもの。（内面に放斜状の暗文あり）			

第57図　古墳出土土師器坏の分類

A 丸底	Ⅰ 器外面に段	1 口縁部は直糸泉的に外傾 (底部は回転ヘラケズリ再調整)	
		2 口縁部は外反 (底部は手持ちヘラケズリ再調整)	
	Ⅱ 段なし	1 口縁部は直線的に外傾 (底部は手持ちヘラケズリ再調整)	
		2 口縁部は外反 (底部は回転・手持ちヘラケズリ)	
B 平底	Ⅰ 底部ヘラ切り	1 底部無調整	
		2 底部全面に手持ちヘラケズリ再調整	
	Ⅱ 底部静止糸切り	1 底部周縁～体部下端に回転ヘラケズリ再調整	
		2 底部周縁～体部下端に手持ちヘラケズリ再調整	
	Ⅲ 切り離し不明	1 底部全面～体部下端に回転ヘラケズリ再調整	
		2 底部全面～体部下端に手持ちヘラケズリ再調整	

A 丸底	Ⅰ 口縁部が内弯	
	Ⅱ 体部～口縁部が直線的に外傾	
B 平底	Ⅰ 〃 直線的に外傾	
	Ⅱ 器高が高く椀状のもの	
	Ⅲ 体部中位に稜。口縁部は外反	

A カエリ あり	Ⅰ カエリ大		
	Ⅱ カエリ小		
B カエリなし	Ⅰ 端部で屈曲し下方に折れ曲がる。	1 端部に段	
		2 端部に稜	
	Ⅱ 端部内面に沈線	1 ボタン状ツマミ	
		2 リング状ツマミ	

第58図　古墳出土須恵器坏、高台付坏、蓋の分類

報告年度	古墳番号	土師器																										須恵器																																							段階
		杯															埦			高杯		蓋	鉢			甕	壺	杯										高台付杯					蓋						長頸壺	提瓶	𤭯	長頸瓶	短頸壺	横瓶	広口壺			甕						
		A								B							A		B	A	B		A		B			A				B						A		B			A		B										A		B	A		B		C	D	
		I					II	III		I	II		III		IV	V	I	II					I	II				I		II		I		II		III		I	II	I	II	III	I	II	I		II								I	II		I	II	I	II			
		1		2		3		1	2		1	2	1	2														1	2	1	2	1	2	1	2	1	2								1	2	1	2															
		a	b	a	b																																																											
昭和57年度	15											1																																						1														第1段階
	39																															1														1				1														不明
	77		1	9				2													1		1	1			1													1							2								3	1		1						第2段階
	201			2					(1)													(1)				1																														1								不明
	202	(1)																																																														〃
	204																																										4							1		1						1	1					第1段階
	205	1		2		1		1									(1)			1						1			1	1			2										(1)						(1)			(2)	1					2						〃
	207																																																									(1)						不明
	209																																																											(1)				〃
	212																			(1)																								1																(3)				第2段階
	217										2																																																					不明
	218																								(1)			(1)																																				〃
	220	2	1			1																																																										〃
	221			4															(1)																																	1					1			2				第2段階
	222					1																													1																													不明
	224																																																															〃
	225									1																																																						〃
	227																	1				1														1																	1							1				〃
	228															(1)																																																〃
	231			2				1																																																								〃
	233			2																																			3									1												1				第3段階
	234																																																	1														不明
	250	1																																						(2)								(1)				(1)												第3段階
	251			1				2																																												(1)						1						〃
	252		1	1																																																				1								不明
	253		2	2	2							1	1					1																																										1				第2段階
	254		1	2	1	1			1			1		1																								3			1					1						2				1		2		4				〃
	256											2																																																				〃
	257																																																												1			不明
	260																																																													1		〃
	263		1	4				2	1								1	(1)								1									3		2															(1)				1	1				2			第3段階
	265																																																						(1)									不明
	266																																		5	1	5			1													2					1		1		1		第3段階
	269'				2							1																		1																																		第2段階
	401																																																					1										不明
	403							1																														(1)																				1						〃
昭和58年度	24	1									3		1						3	4	1																												1	2	1								1	2	1			第1段階
	98											1																																																				不明
	100																																								1					1													1		1			〃
	104			2	1				1						2						2									2	1							1	3			1				2						(1)						1	1				1	第2段階
	106				5				1								1																						2							1					1	3		1					1					〃
	107			1			1														1													1																								1		(1)				不明
	108	2						1				1																															2							1		(1)				(2)				2				第1段階
	109				1	2	1					1																																																	1			第2段階
昭和59年度	48										2																																							1			1		2			1		1				第1段階
	71下	4		2			1																								1																																	〃
	71上			2																																		(1)		1		1				4						3						1		3		1		第2段階
	79																									(1)																														1								不明
	118			2											1																																																	〃
	119																																																						2						1			〃
	120																																													1												1				1		〃
	121									(5)																																																						第1段階
	124			3																																																									1			第3段階
	126			1																											1				2																	(1)										1		第2段階
	134																																																															不明明
	139																																																															〃
	140																																																															〃
	141																																																															〃
計	58基	12	7	44	12	6	2	10	5	6	7	9	2	1	3	1	3	3	4	5	5	2	1	1	1	4	1	1	1	4	3	1	2	1	11	2	7	6	8	5	2	2	7	1	1	10	2	2	2	8	2	18	5	2	8	8	2	16	4	23	8	5	1	

第6表　各古墳出土土器の組成

的多く名取市清水遺跡第Ⅴ群土器・志波姫町御駒堂遺跡第Ⅰ群土器（小井川・小川：1982）に器形・法量の類似したものが認められる。このうち清水遺跡では関東地方各地の土器との直接的な比較検討から埼玉県北部から群馬県にかけての地域の鬼高式終末の段階に類似したものがみられるとしている。

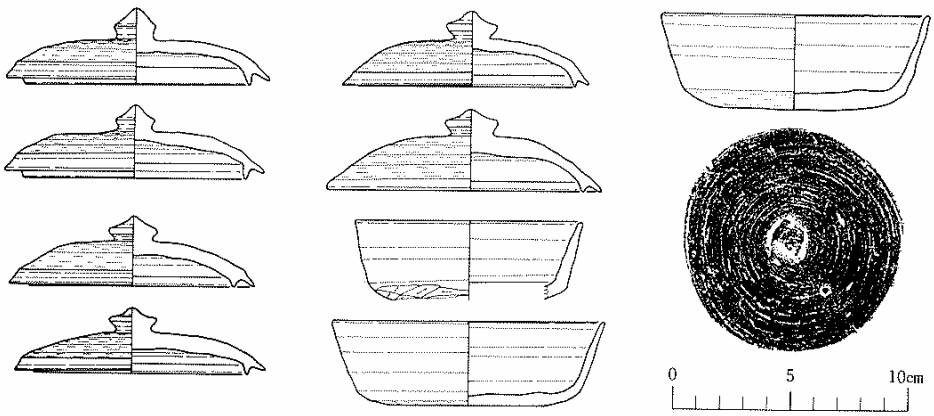
この他土師器埦、高坏、甕がみられる。埦は内黒のＡ類と内面ナデ調整のＢ類があり、これらも上記のＡ・Ｂ類同様系統の異る土器と考えられる。高坏はいずれも坏部が坏ＡⅠ類の特徴をもつもので坏部と脚部が別個に製作され接合される点で共通した技法を示している。甕は底部から体部にかけての破片で体部下半外面にヘラミガキが加えられている。

須恵器坏、蓋は、坏ＡⅠ2、ＡⅡ2、ＢⅠ2、蓋ＡⅠ類がある。坏は丸底のＡ類と平底のＢ類が伴う。蓋は身受けのカエリの付くものでツマミの形態の明らかなものは 1 点だけであるが整った宝珠形である。これらの特徴を周辺地域の窯跡出土資料と比較すると坏の組成では福島県福島市小倉高畑窯跡（工藤：1969）で本遺跡の坏ＡⅠ2 類に類似した丸底の坏と平底の坏が共伴し類似した内容をもつと考えられる。しかしこれに伴う蓋はやや異り小倉高畑窯跡ではカエリのあるものとないものが共存し、カエリのあるものはカエリの形態が本遺跡の蓋ＡⅠ類のものに比べ小さく退化的で、ツマミも偏平擬宝珠形で宝珠形のものはみられないなど、木遺跡出土の蓋ＡⅠ類がやや古い傾向をもつものと理解できる。これらのことを大阪府陶邑の編年（田辺：1981）や、飛鳥・藤原宮跡の土器変遷（西：1978）と比較すると陶邑第Ⅲ期ＴＫ46 号窯式～ＴＫ48 号窯式、飛鳥Ⅲ期～Ⅵ期などにみられるカエリをもつ蓋の減少、坏の各類の消長と、本遺跡出土の坏蓋や小倉寺高畑窯跡出土品の内容がほぼ対応するものと考えられる。

坏、蓋以外の須恵器には、提瓶、長頸瓶、長頸壺、短頸壺、𤮋、甕がある。このうち 24 号墳出土のフラスコ形長頸壺は灰色を呈し墨色微粒を含む精良で特徴的な胎土をもつもので口縁部の形態やその下部の隆帯などから 7 世紀中葉前後のものと考えられる。（楢崎：1959）。提瓶は本段階にのみみられるもので、長脚の付く長頸瓶とともに 7 世紀代の器種と考えられるものである。甕は大・中・小の三種がみられ、大・中のものは口縁下部に隆帯をもつものが多く頸部には櫛歯状工具による整った波状文が施される。また体部のタタキが格子目のものが多い。

以上、第 1 段階の器種とその特徴についてみてきた。年代的には須恵器坏・蓋が陶邑Ⅲ期のＴＫ46～ＴＫ48 号窯式、飛鳥・藤原宮の飛鳥Ⅲ～Ⅵ期に対応する特徴をもつことから 7 世紀中葉～後葉の時期が想定される。土師坏Ａ類が東北地の栗囲式の新しい段階のもので、土師器坏Ｂ類が関東地方の鬼高式後半段階に対比されること、さらに須恵器長頸壺、提瓶、脚付長頸瓶の年代観などからみても矛盾しない。したがって第 1 段階の土器群は 7 世紀中～後葉の年代が与えられる。なお、昭和 25 年、東北大学考古学研究室が本古墳群の上郷 105、109、135 号墳の調査を行い第 109 号墳の玄室からは須恵器坏・蓋の良好なセットが出土している（伊東：

1952）坏は底部ヘラ切り後回転ヘラケズリ再調整のもので、蓋は整った宝珠形のツマミをもち身受けのカエリはしっかりとしたものである。陶邑第Ⅲ期ＴＫ46 号窯式に比定されよう。今回の調査を含め、本古墳出土土器の中では最も古い年代を示す資料であり、本古墳群の形成が７世紀中葉に遡ることを示す資料として位置付けておきたい。



第59図　上郷109 号墳石室出土遺物

第２段階（第 77、104、106、109、254 号墳出土土器・71 号墳周溝堆積土上層出土土器）

土師器坏には内黒のＡＩ1ｂ、ＡＩ2ａ・ｂ、ＡⅡ、AⅢ類、内面ナデ調整のＢⅡ2、BⅢ2、BⅥ類がみられる。前段階同様、東北、関東の土器系統に属すＡ、Ｂ類がみられるが、前段階のようなＢ類（関東系）を主体とする古墳はなく、各古墳ともＡ類を主体としこれに少数のＢ類が伴っている。さらにＡ類の中には、段が上位に位置し器高が高く外面にヘラミガキが加えられる特徴から東北地方北部の系統に属すと考えられるＡＩ1ｂ類（小井川・小川：1982 古川：1982）も少量ではあるが含まれており注目される。土師器坏の主体となるＡＩ2ａ、ｂ類は東北地方南部の土器系統に属すもので底部の丸味が弱く外面の段は明瞭であるが鈍角的で内面の段は不明瞭なものが多い。これらの特徴は栗囲式の基礎的特徴を残しながらもより新しい傾向をもつものと理解できる。一方、段が下端にある平底坏ＡＩ3 類や、外面に段・稜のない平底坏AⅢ類が組成の一部を成している点では国分寺下層式(氏家：1967)段階に比定される志波姫町糖塚遺跡第 1 群土器（小井川・手塚：1976）の組成に類似している。しかし糖塚遺跡では平底が主体で丸底が少ないことから本段階の内黒坏の組成はより古いものと考えられる。このように内黒坏ＡＩ2ａ、ｂ、ＡＩ3、AⅢ類はその器形・組成の特徴から東北南部地域の土師器編年の栗囲式期と国分寺下層式期の間の段階に位置付けられる。

異系統と考えられるＡＩ1ｂ、ＢⅡ2、BⅥ類については、ＡＩ1ｂ類が東北地方北部

地域の土師器編年（桜井：1958）の第Ⅰ型式に、ＢⅡ2、ＢⅢ2、ＢⅣ類は関東地方の鬼高式終末～真間式初頭にそれぞれ対応する特徴をもつものである。県内の類例としてＡⅠ1ｂ、ＢⅡ2 類に類似したものが志波姫町御駒堂遺跡第 12 号住居跡で共伴し、同様にＢⅡ2、ＢⅢ2 類は田尻町日向前横穴古墳羨道部床面出土土器(早坂：1981)に類例が求められる。ＢⅥ類は御駒堂遺跡第 36 号住居跡出土土器に類似したものが認められる。

この他土師器埦・鉢・高坏がある。高坏は坏部を製作した後、脚部を作った中空のものがみられる。

須恵器坏蓋は、坏ＡⅡ1、2 類、高台付坏の全類型、蓋ＢⅠ1、ＢⅠ2、ＢⅡ1 類がある。坏底部の形態にはやや丸味のある坏ＡⅡ類、高台付坏Ａ類と平底の高台付坏Ｂ類があり、平底の高台付坏ＢⅠ、Ⅲ類には底部中央に静止糸切痕の残るものがみられる。また丸底風の高台付坏ＡⅡ類には高台よりも底部が突出するものもある。蓋は天井部に丸味をもち端部で強く屈曲して段・稜が形成され端部がさらに下方に下るＢⅠ類、天井部が平坦で端部内部に沈線状の身受け部をもつＢⅡ1 類がある。ツマミの形態は個体差が大きいが、偏平を擬宝殊形を原則としてもつものである。これらを周辺窯跡出土資料と比較すると高台付坏ＡⅠ、蓋ＢⅠ2 類は涌谷町長根窯跡群Ａ地点 1 号窯跡出土土器(桑原・佐々木：1971)に類例が認められる。また高台付坏ＢⅠ、Ⅲ類については色麻町日の出窯跡群Ａ地点 6、7、8 窯跡出土（岡田他：1970）の高台付坏に器形・技法の一致するものが認められる。丸底の高台付坏ＡⅡ類は周辺地域に類例がないもので美濃須衛古窯跡群第Ⅳ期第 1 小期(渡辺：1984)、猿投窯跡群Ｃ－2 号窯式(楢崎・斎藤：1983)など東海地方の 7 世紀末～8 世紀初頭の段階に類似した器形が見出せる。第 106 号墳出土の高台付坏ＢⅡ類は、灰色を呈し黒色微粒を含む緻密な胎土であり搬入品とも考えられるが他は周辺地域の製品であろう。

須恵器、瓶、甕では、第 71、106 号墳出土の長頸瓶 77 号分出土の広口蓋が白色の緻密な胎土で淡緑色の自然釉がかかるなどの特徴をもつものである。第 106 号墳の大型のものは外方に強くふんばる高い高台の付くもので 7 世紀代でもやや古い段階のものと考えられるがその他のものは 7 世紀後半代に位置付けられよう（渡辺：1984、田辺：1981）。甕は大・中・小の三種とも前段階と法量的にほぼ同一の規格によるものと考えられるが、口縁下部に隆帯をもつものや格子タタキのものが少い点でやや異る。

これらの須恵器のうち特に坏蓋は陶邑第Ⅲ期ＴＫ48 号窯式～第Ⅵ期ＭＴ21 号窯式、飛鳥・藤原宮の飛鳥Ⅴ期の段階に対応する特徴をもつものと考えられ年代的には 7 世紀末～8 世紀初頭に位置付けられる。また周辺地域では 8 世紀初頭とされる長根窯跡群Ａ地点 1 号窯跡、8 世紀前半とされる日の出山窯跡群Ａ地点などに坏・蓋の一部の類例が認められ高台付坏、瓶類の一部は東海地方の編年から 7 世紀末～8 世紀初頭の年代が想定される。このように本古墳の第

2 段階の須恵器は概ね 7 世紀末～8 世紀初頭に位置付けられるものからなる。土師器坏類の中に東北地方北部地域の土師器第Ⅰ型式、関東地方の鬼高式終末～真間式初頭にそれぞれ類似した特徴をもつものが含まれ、主体となる内黒坏が東北地方南部地域の栗囲式期から国分寺下層式期への過渡的な特徴・組成をもつことは上記の須恵器の年代観によく対応する段階のものと考えられる。

第 106 号墳玄室出土の須恵器は 7 世紀後半代とやや古い段階のものが含まれるが、本古墳群では稀な玄室出土品であること、などを考慮すれば、生産から供給までの間に時間差が生じたものと理解できる。また多賀城創建の年代にも関連する日の出山窯跡Ａ地点に類例の求められる高台付坏ＢⅡ、Ｄ類は 8 世紀初頭とされる長根窯跡Ａ地点 1 号窯のものに類似した蓋ＢⅠ2 類と第 71 号墳で明らかに組み合っている。器形・技法的に地方色が薄い（桑原、佐々木：1971）とされる後者の蓋の年代観に従えば、坏底部の静止糸切り技法が 8 世紀初頭には出現したものと理解できる。したがって多賀城の創建年代は文献上の初見である天平九年（737 年）が下限とされ、日の出山窯跡群Ａ地点もその創建瓦を焼成していることから 8 世紀前半代に操業期間が求められているが、本段階の高台付坏ＢⅡ、Ｄ類は組み合う蓋との関係からやや古く 8 世紀初頭に位置付けることができよう。

第 3 段階（第 233・251・263・266 号墳出土土器）

土師器坏にはＡⅠ1ｂ、ＡⅠ2ａ、AⅢ類がある。前段階まで認められた関東系の内面ナデ調整の扨はみられない。内黒の坏では有段で底部の丸味の弱い平底風のＡⅠ2ａ類が主体を占めるが、外面に段・稜のない平底もしくは平底風のAⅢ類も前段階よりもまとまりをもってみられる。主体となるＡⅠ2ａ類は外面に段をもち丸底を停めているが、内面の段は不明瞭で外面の段も鈍角で浅い沈線状を呈するものが多く、また口径に比して器高が小さく皿状を呈する器形のものが多い点が大きな特徴である。このようなＡⅠ2ａ類の特徴や、平底のAⅢ類の増加傾向は前段階同様、東北南部地域の土師器編年では栗囲式期から国分寺下層期への過渡的段階のものとして捉えられ、その中でも新しい段階に位置付けることができる。段が中位にあり器高が高い丸底のＡⅠ1ｂ類は外画にヘラミガキが加えられたもので前段階にみられた東北北部地域の系統に属す土器と同様の特徴をもつものであるが、断片的な資料であり明確な系統性・位置付けはできない。

坏以外の師土器には甕、鉢がある。前段階までみられた高坏はない。鉢は体部上位の内外に段をもつ内黒で平底のもので類似したものが瀬峰町大境山遺跡第 2 号住居跡（阿部・赤沢：1983）から出土しており国分寺下層式期に比定されている。

須恵器坏・蓋には坏ＢⅡ、Ⅲ類、高台付坏ＡⅡ、ＢⅠ、Ⅲ類、蓋ＢⅡ2 類がある。坏ＢⅡ、

Ⅲ類、高台付坏ＢⅠ、Ⅱ類は平底で、高台付坏ＡⅡ類は丸みをもつ底部である。いずれも体部下端から底部にかけてヘラケズリ再調整が加えられ、体部は直線的に外傾する。量的には最も多いのは坏ＢⅡ2 類で底部中央に静止糸切り痕を残す。高台の付くものはふんばりの弱い低い高台である。蓋はリング状のツマミをもつものである。これらの器形・技法上の特徴や法量・組成は日の出山窯跡群Ａ地点の各窯出土資料に極めて類似した内容をもつものである。日の出山窯跡群の製品とされる坏・蓋類は三本木町山畑横穴古墳群（氏家：1973）、色麻町米泉館山横穴古墳群（佐々木：1972）など、近隣の墳墓から出土しているが本古墳出土の上記の坏・蓋類も日の出山窯跡群の製品と考えられるものである。

壺・瓶・甕類では、長頸瓶、短頸瓶、蓋、鉢、甕がある。このうち第 263 号墳出土の長頸瓶は灰色を呈し黒色の微粒を含む緻密な胎土であり搬入品と考えられるが、大きく外反した口縁部に巾の広い口縁帯が付く独特の器形の類例はむしろ宮城県内の横穴古墳出土品に多くみられこれらは胎土でも本遺跡のものに類似している。甕は大・中・小があり、器形、法量は前段階同様の一定の規格によるものと考えられる。頸部の波状文は大形のものにだけみられ、口縁下部に隆帯の付くものはみられない。

以上のように、須恵器坏・蓋類は日の出山窯跡群の製品である可能性の高いものでありその年代は日の出山窯跡群Ａ地点の操業期に比定される。土師器坏は東北地方南部地域の土師器編年の栗囲式期から国分寺下層式期への過渡的段階のもので、前段階の内黒土師器坏との比較からその中でも新しい段階に位置付けられた。国分寺下層式は標式資料の陸奥国分寺跡でのあり方から奈良時代後半に位置付けられている（氏家：1967）。日の出山窯跡群Ａ地点は先述したように天平九年（737 年）を大きく遡らない時期のものとされていることから、本段階の土器群は 8 世紀前葉に位置付けられよう。なお本段階の土器は古墳出土の土器の中では最も新しい段階のものである。追葬を含め、古墳の築造、使用はこの段階で終了したものと考えられる。

古墳出土の土器は以上のように第 1 段階が 7 世紀後葉、第 2 段階が 7 世紀末～8 世紀初頭、第 3 段階が 8 世紀前葉に位置付けられた。各古墳出土の土器群は出土状況からも理解できたように大きな時期差をもたないものによって構成されている。このことはこれらの古墳に追葬が行われなかったことを示すもので、出土土器の年代が古墳の築造年代を関接的に示していると理解できる。第 71 号墳出土土器は第 1 段階のものと第 2 段階のものが層位的に上下関係をもち出土したもので二次的な土器の供献が確認された唯一の例である。

出土土器が断片的で上記の各段階に比定できない古墳も多いが、第 2 段階に属す古墳が多いことは明らかであり古墳群形成の最盛期は 7 世紀末～8 世紀初頭とすることができる。また関東系の土師器が第 1 段階に多いという傾向は古墳群形成の初頭に関東地方（北武蔵・上野）の人々がより多く関わりをもったことを示すもので、後に述べる胴張り型横穴式石室の系譜を理

解する上で一つの手懸りともなろう。須恵器長頸壺・瓶の多くは特徴的なを胎土をもつもので各段階に含まれており、その供給の経路には興味深いものがある。

最後に古墳群の造営機関は、その終末が 8 世紀前葉に、群形成が 7 世紀中葉に位置付けられ、大きくみても 100 年間を越えないものであったと考えられる。

（2）古墳の構造

主体部が確認された古墳は合計 99 基である。主体部形態には横穴式石室、竪穴式小石室、箱式石棺の三種があり、それぞれに対応して外部施設も異なっている。ここでは古墳の規模・構造を検討し、群の構成について考察を加える。

A類：横穴式石室を主体部とする古墳

86 基あり本古墳群を主に構成する。石室の開口方向はＳ－15°－Ｅを中心にいずれも、ほぼ南方に開口している。各古墳に共通した特徴として玄室部の平面形が「胴張り」を呈する単室構造の横穴式石室であること。外部施設として、羨道前面に前庭部をもち前庭部は陸橋状となることなどかあげられる。これに対し石室全長を主とした古墳の規模には格差が認められ、規模的にいくつかのまとまりを示している。以下その計測値を基に分類してみる。

ＡⅠ：石室全長が 5.8m 前後のもの。羨道長：玄室長＝9：10 となる。玄門柱をもち、奥壁部に凝灰岩切石を用いたもの－ａ（第 122 号墳）と、玄門柱をもたず、奥壁は数段重ねのもの－ｂ（第 15 号墳）とがある。

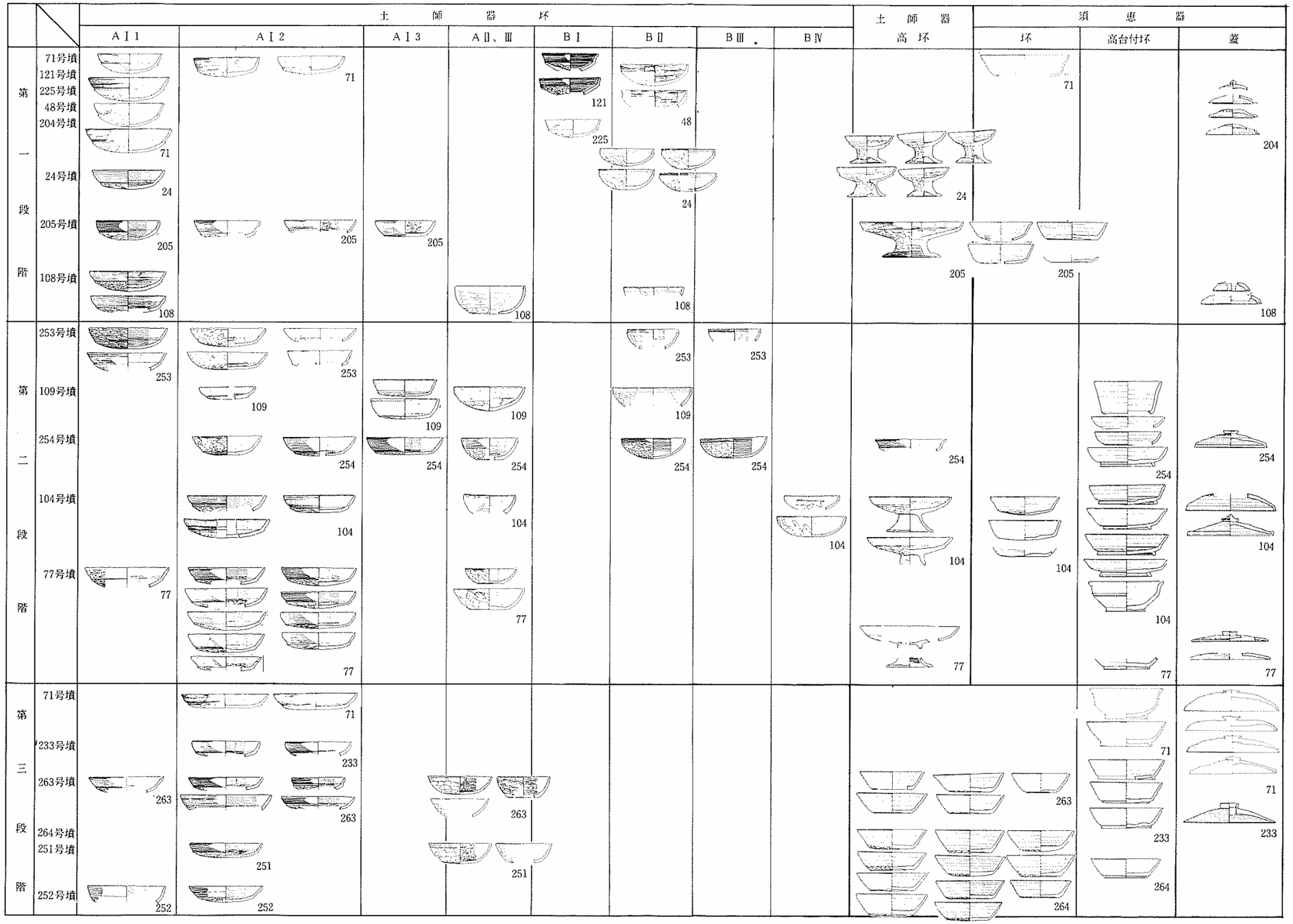
ＡⅡ：石室全長が 5.0m 前後のもの。羨道長：玄室長＝8.5：10 前後になる。玄門柱をもたず、奥壁部は数段積みにしたものがある。（第 24、93、107、108、115 号墳）

AⅢ：石室全長が 4.0m～4.4m 前後のもの。羨道長：玄室長＝6.7m：10～9：10 で、石室全長の大きなものほど羨道長が大きな割合いを示す傾向がある。玄門柱をもたないもののみがみられ奥壁部が一枚石のもの－ａ（第 109、246 号墳）と、数段重ねのもの－ｂ（第 401、402 号）、不明のもの－ｃ（第 250、253、254 号墳）がある。

AⅣ：石室全長が 3.5m 前後のもの。羨道長：玄室長＝7.5：10 となる。玄門部・奥壁部は大半が抜き取られ不明なものが多い（第 233、252、266 号墳）が、奥壁部が数段重ねと考えられるもの（第 263 号墳）、玄門柱をもたないもの（第 248 号墳）が認められる。

ＡＶ：石室全長が 3.2m 前後のもの。羨道長：玄室長＝5.2：10 となる。玄門柱をもたないもののみがみられ、奥壁部が一枚石のもの－ａ（第 106 号墳）、数段重ねと考えられるもの－ｂ（第 221 号墳）、不明のもの（第 127 号墳）などがある。

周溝内周の平面形はＡⅠ～AⅣは玄室奥半部に中心を置く円形を呈し、その半径は石室全長十αとなる。十αの数値は、石室全長が大きいものほど大きい数値を示す傾向がみられる。これに対し、ＡＶは周溝内周の平面形が円形を呈さず、むしろ隅丸長方形、もしくは長万形を呈



第60図　古墳出土土器群の段階的位置付け

するという特徴がみられる。茸石についてはＡⅠ～ＡⅢでは全周するものが確認された。ＡⅣ、ＡⅤについては羨門左右にのみ茸石状の石列が確認できるものもあるがそれ以外の部位に茸石が確認されたものはなかった。

Ｂ類：竪穴式小石室を主体部とする古墳（247、255～258、265、118、135,136 号墳）

9 基ある。石室はいずれも平面形が「胴張り」を呈する。側壁や裏込めの石材の使用方法はＡ類にほぼ一致している。Ａ類の奥壁部に対応する妻部はいずれも一枚石によって構成されており、数段重ねのものはみられない。石室全長はいずれも 1.7m 前後で、周溝内周は不整な円形や楕円形を呈するものがみられる。前庭部、茸石は認められず、石室が半ば地下に作られていることから墳丘は極く小規模なものだったと推定される。

Ｃ類：箱式石棺を主体部とする古墳（第 215、404、123、137 号墳）

4 基ある。石棺の内法は長さ 1.5～1.7m、巾 0.3m といずれも、小さな石棺である。偏平な石材を立て並べ、青灰色粘土で目張りすること。掘り方底面を直接床面としていること。妻部に裏込めが施されないこと。周溝などの外部施設をもたないことなどの点で、ほぼ一致した構造の特徴を示している。

この他主体部が失われ周溝のみが確認された古墳が 27 基ある。これらは周溝規模・前庭の存在、供献土器の出土などからいずれも横穴式石室を主体部とした古墳と考えられるためＡ類に含めさらに周溝内周半径と石室全長の相互関係からＡⅠ～ＡⅣに細分し、各々の類型に加えることができる。

以上の各類について、出土土器から想定される各古墳の構築年代をみると第 61 図に示したようにＡⅠ・ＡⅡ類は 7 世紀中～後葉、ＡⅢ・ＡⅤ類は 7 世紀末～8 世紀初頭、ＡⅣ類は 8 世紀前葉にそれぞれ比定されるものが多い。これは横穴式石室墳でも規模の異る古墳が併存することを示すとともに、古墳の規模が相対的に小規模化する傾向を示している。一方Ｂでは第 256 号墳が 7 世紀末～8 世紀初頭に位置付けられ、明らかに横穴式石室墳と併存している。箱式石棺ついては年代を特定できないが、本古墳群の構成は規模の異なる古墳、主体部形態の異る古墳が併存し、これは被葬者の性格の相違を反映したものと考えられる。横穴式石室は追送機能をもつことにより家族墓として使用され得るものであるが、本古墳群のＡ類の石室規模、羨道の構造には追葬機能の存在を疑わせるものが多い。その傾向はＡⅡ～ＡⅤに顕著であり、供献土器の年代巾が限定されることも考慮すれば、これらは単一の被葬者の埋葬を目的として築造されたと理解できる。本古墳群が 100 年足らずの期間で 500 基もの古墳を用した背景には家族墓のように永続して使用された古墳が少なく、使用期間が限られた単葬墓が大多数を占めていることにもよると考えられる。

東北地方では胴張りのある横穴式石室の古墳の分布が福島、宮城県で確認されている(穴

沢：1972、氏家：1977)。しかし、本古墳群の形成が始まる 7 世紀中葉以前にこのような主体部形態の系統性を周辺地域に求めることはできない。本古墳群に類似した胴張りのある横穴式石室墳を主体とする群集墳は埼玉県北西部、群馬県南西部に認められる。供献土器群の中の関東系の土師器坏についてもこれらの地域との関連が認められることからみて本古墳群の胴張り型横穴式石室の系譜はむしろ関東地方北西部に求められるべきであろう。

（3）古墳群と被葬者の性格

本古墳群は直径 10m 前後の小円墳からなる推計約 500 基の大規模な群集墳である。副葬品の内容は極めて簡素であるが各古墳の規模・構造の差異には規則性が認められ、そこには時期的な変遷とともに被葬者の社会的地位・身分秩序・年齢などの相違が反映されているものと考えられる。その要因を特定できる資料はないが、このような階層性をもつ被葬者集団の性格を周辺地域の歴史的環境と併せて考察したい。

本古墳群で古墳の築造が行われた 7 世紀中葉～8 世紀前葉の時期からその直後の時期には周辺地域に名生館遺跡、城生遺跡、色麻一の関遺跡などの城柵官衙関連施設が配備され日の出山窯跡群では多賀城創建瓦が焼成されるなど律令制的な体制がいちはやく整えられている（51 頁参照）。このような社会的動向に本古墳群の被葬者たちも直接関わりをもったものと考えられる。ここで注目されるのは本古墳群の供献土器群の中に関東系の土師器が含まれ、それに関連して胴張り型の横穴式石室の系譜が関東地方に求められることである。これら 2 つの要素は古墳群形成の契機に関東地方の人々が関与した可能性を示している。本古墳群で 100 年足らずの間に 500 基もの古墳が築造される背景には外的な要因を含む社会的在変動があったものと理解されるのである。

東北地方における城柵について平川南氏は「新たな令制郡の建置を意図した場合、まずその前段階として城柵を設置したのである。そして、城制下に多くの民（柵戸）の移住を行ない、その体制の整備をへて、令制郡が成立するのである。」(平川:1978)としている。本古墳群の位置する色麻町周辺は『続日本紀』天平 9 年(737 年)4 月戊午条に初見の色麻柵が設置された地域とされ(伊東:1957)上記の記事から本地域が賀美郡に属すと理解されている(平川：1978)。

本遺跡の南東約 1km には色麻柵もしくはこれに関連した官衙寺院跡と考えられる一の関遺跡(宮城県教委:1977)が位置し、雷文縁四葉複弁蓮華文軒丸瓦を創建期に採用している。(註) この軒丸瓦は同町内の土器坂窯跡から供給されたもので、その年代は多賀城創建前と考えられている（進藤：1983）したがって色麻柵は本古墳群の形成期間中に極めて近い地域に設置されたものと考えられる。一方本遺跡の位置する宮城県北部地域には、関東地方と同じ郡名が多くみられるが、その要因として多賀城創建期前後の移民が想定されている（伊東：1970）。本古

墳群の位置する賀美郡は、前項の関東系の土器・石室の系譜で関連性が認められた埼玉県北西部の本庄市、大里郡上里町周辺地域に旧賀美郡が存在したことから、より具体的に移住による同一郡名の採用を指摘することができ、城柵の設置・移住・建郡の過程と本古墳群の形成が一連の律令制の整備過程の中で理解できるのである。

これらのことから本古墳群の被葬者集団は律令制もしくはその整備段階に関わっており公民として編戸の対象となった可能性が高い。田尻町木戸瓦窯跡出土の文字瓦には「□□郡中村郷他辺里長二百長丈部呰人」とあり、8 世紀における令制、軍制の秩序が具体的に確認できる。本古墳群にみられる階層性はこのような身分秩序の一端も含んでいるものと考えられる。

（註）1976 年の調査で出土した軒丸瓦のうち型式が判明したものの総点数は 60 点である。このうち 40 点（66.7%）が雷文縁四葉複弁蓮華文軒丸瓦で、建物基壇遺跡周辺からは 17 点（28.3%）が出土している。

〈引用・参考文献〉

穴沢　和光（1972）:「東北南部における胴張りプランの横穴式石室とその問題」『福島考古』13 号　福島考古学会

阿部・赤沢（1983）:「大鏡山遺跡」瀬峰町文化財調査報告書第四集　瀬峰町教育委員会

阿部　　恵（1977）:「一の関遺跡」宮城県文化財発掘調査略報　宮城県教育委員会

〃　（1980）:「色麻古墳群」宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布報告書（昭和 54 年度）　宮城県教育委員会

甘粕　　健（1982）:「東日本における群集墳の総合的研究」　昭和 56 年度科学研究費補助金研究成果報告書

伊東　信雄（1951）:「宮城県加美郡上郷古墳」『日本考古学年報』8　日本考古学協会

〃　（1970）:「多賀城跡調査報告Ⅰ――多賀城廃寺」　宮城県教育委員会　多賀城町

氏家　和典（1957）:「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第 14 輯　東北史学会

〃　（1967）:「陸奥国分寺跡出土の丸底坏をめぐって――奈良・天平期土師器の諸問題」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』

〃　（1973）:「山畑装飾横穴古墳群発掘調査概報」　宮城県教育委員会

氏家　和典（1977）:「仙台平野における横穴式石室について」『研究紀要』Ⅳ　宮城県多賀城跡調査研究所

岡田・桑原（1974）:「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」『研究紀要』Ⅰ　宮城県多賀城跡調査研究所

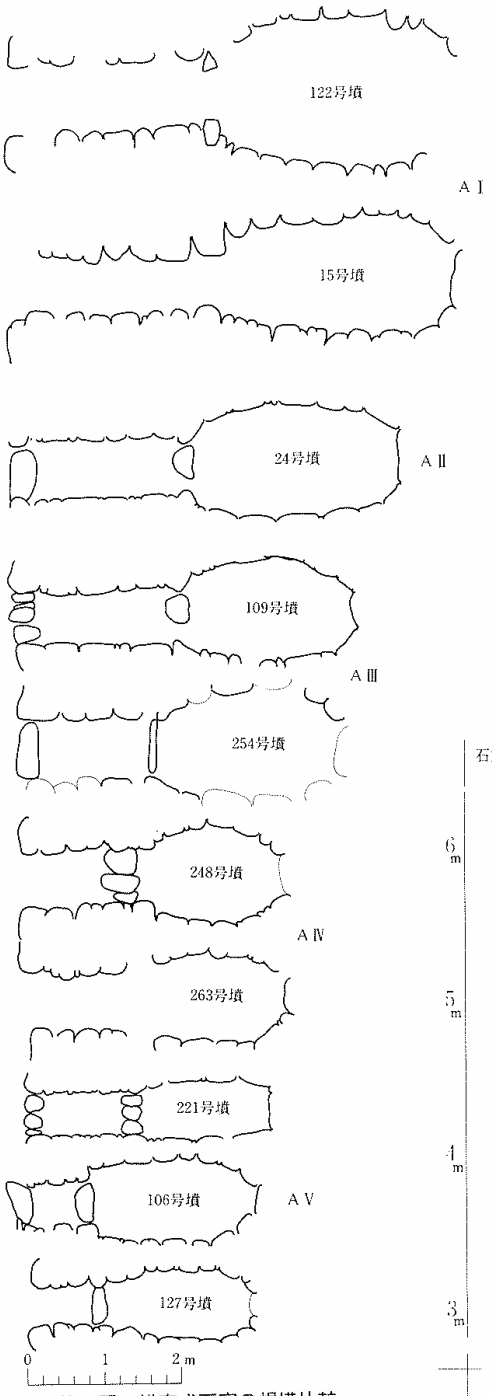
岡田　　他（1970）:「日の出山窯跡」　宮城県文化財調査報告書第 22 集

加藤・阿部（1980）:「観音沢遺跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書（4）　宮城県教育委員会

桑原滋郎他（1971）:「長根窯跡群」　宮城県涌谷町教育委員会

〃　（1972）:「長根窯跡群」Ⅱ　〃

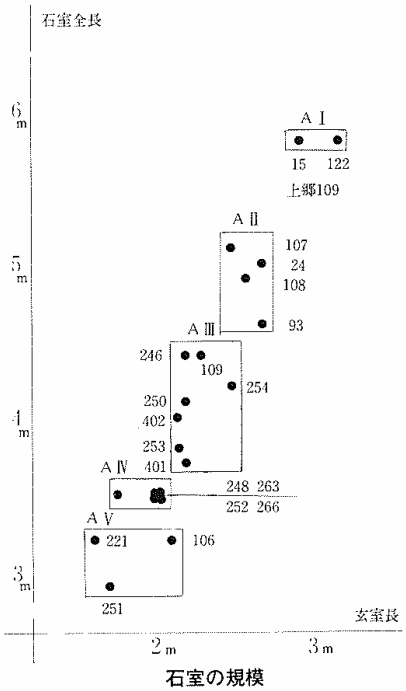
桑原滋郎他（1976）:「長根窯跡群」Ⅲ　宮城県涌谷町教育委員会
工藤　雅樹（1969）:「福島県小倉市高畑遺跡発掘調査報告」　福島県福島市教育委員会
小井川・手塚（1978）:「糠塚遺跡」　宮城県文化財調査略報　昭和 52 年度分
宮城県教育委員会
小井川・手塚（1982）:「御駒堂遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ　〃
斎藤　吉弘（1982）:「蝦塚古墳群」宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書
宮城県教育委員会
桜井　清彦（1958）:『東北地方北部における土師器竪穴に関する諸問題』
東北大学出版会
佐々木茂　（1970）:「古川市塚原古墳群」　宮城県古川市教育委員会
〃　（1972）:「日光山古墳群」　〃
〃　（1972）:「米泉館山横穴古墳群」宮城県宮崎町文化財調査報告第 1 集
宮城県宮崎町教育委員会
進藤　秋輝（1983）:「東北地方の瓦窯」『佛教藝術』148 号
進藤・白鳥他（1982）:「名生館遺跡」Ⅰ　宮城県多賀城跡調査研究所
白鳥・後藤他（1983）:「名生館遺跡」Ⅱ　〃
杉原・大塚（1971）:「土師式土器集成」
田辺　昭三（1981）:『須恵器大成』角川書店
中島　直（1978～1983）:「城生遺跡」宮城県中新田町文化財調査報告書第 1～7 集
宮城県中新田町教育委員会
楢崎　彰一（1959）:「後期古墳時代の諸段階」『名古屋大学文学部 10 周年記念論集』
名古屋大学
楢崎・斎藤（1983）:「猿投窯編年の再検討について」『研究紀要 2』　愛知県陶磁資料館
西　弘海（1978）:「飛鳥藤原宮跡発掘調査報告Ⅱ」　奈良国立文化財研究所
丹羽・阿部・小野寺（1981）:「清水遺跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書（5）
宮城県教育委員会
早坂　春一（1981）:「日向前横穴古墳」東北新幹線関係遺跡調査報告書（5）
宮城県教育委員会
平川　南（1978）:「古代東北城柵の特徴について――建郡との関連を中心として――」
『東北歴史資料館研究紀要』第 4 集　東北歴史資料館
古川　一明（1982）:「色麻古墳群」宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書
（昭和 56 年度）　宮城県教育委員会
〃　（1983）:「色麻古墳群」宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書
（昭和 57 年度）　宮城県教育委員会
〃　（1983）:「色麻古墳群」宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書
（昭和 58 年度）　宮城県教育委員会
渡辺　博人（1984）:『美濃須衛古窯跡群資料調査報告』　各務原市教育委員会
埼玉県教育委員会（1972）:「鹿島古墳群」埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
〃　（1977）:「塚本山古墳群」　〃　Ⅵ
〃　（1978）:「古川端遺跡」上越新幹線埋蔵文化財調査報告Ⅱ
埼玉県遺跡調査会（1980）:「広木大町古墳群」埼玉県遺跡調査会報告第 40 集
群馬県教育委員会（1981）:「東平井古墳群」
群馬県昭和 55 年度遺跡詳細分布調査実績報告書
群馬県教育委員会（1983）:「奥原古墳群」



第61図　横穴式石室の規模比較

石室類型	古墳＼土器	第1段階	第2段階	第3段階
AⅠ	第 15 号墳	●		
	第122号墳			
AⅡ	第 24 号墳	●		
	第 93 号墳			
	第107号墳			
	第108号墳	●		
AⅢ	第109号墳		●	
	第246号墳			
	第250号墳			●
	第253号墳		●	
	第254号墳		●	
	第401号墳			
	第402号墳			
AⅣ	第233号墳			●
	第248号墳			
	第252号墳			
	第263号墳			●
	第266号墳			●
AⅤ	第106号墳		●	
	第221号墳		●	
	第251号墳			●

石室規模と供献土器の年代



石室の規模

2　住居跡とその出土遺物

確認された住居跡 17 軒のうち 9 軒について精査を行なった。ここでは精査した住居跡の構造および出土遺物について考察を加える。

(1) 出土土器について

出土した土器には、土師器・赤焼土器・須恵器・施釉陶器がある。これらのうち、図示できた土器を中心に整理・分類し、年代・性格について検討する。なお分類基準は、出土土器に昨年と大きな違いがみられないことから昨年度のものに準拠するものとする。

〔**土師器**〕

坏、高台付坏、甕、鉢、甑がある。このうち鉢、甑は 1 点のみである。

坏　24 点ある。製作に際しいずれもロクロを使用し、内面はすべて黒色処理され、体部は横位、体下部は放射状のヘラミガキが施される。底部切り離しは、確認できるものはすべて回転糸切り離しである。このうち手持ヘラケズリ再調整のあるものは 3 点で、ほかは再調整がない。主に器形により以下のように分類される。

A類　8 点ある。器高が高い器形のものである。体部は下部にややふくらみをもち、内弯ぎみに立ちあがり、口縁部で外傾するものとそのまま立ちあがるものがある。いずれも再調整はみられない。

B類　16 点ある。器高が低い器形のものである。口径と底径の比の違いにより以下に細分される。

ＢⅠ類　4 点ある。口径に対して底径の比が大きく、安定した形をとる。体部は内弯ぎみに緩やかに立ち上がり、口縁部で外傾するものとそのまま立ちあがるものがある。底部の器壁は厚手のものが多い。手持ヘラケズリ再調整のあるものが 1 点ある。

ＢⅡ類　12 点ある。口径に対して底径の比が小さく、ＢⅠ類に比べ安定感がない。体部は直線的もしくはやや内弯ぎみに外傾し、口縁部で外傾するものとそのまま立ちあがるものがある。底部の器壁は薄手のものが多い。手持ヘラケズリ再調整のあるものが 2 点ある。

高台付椀　2 点ある。いずれも外面ロクロナデ、内面ヘラミガキ・黒色処理されており、底部切り離しは不明である。体部はやや内弯ぎみに立ちあがる。高台はいずれも付け高台で、40－6 は、高さ 1.0 ㎝でほぼ垂直についており、40－7 は、高さ 1.6 ㎝で外側にふんばる。

高台付皿　2 点ある。いずれも外面ロクロナデ、内面ヘラミガキ・黒色処理されており、底部切り離しは不明である。高台はいずれも付け高台である。37－4 は、体部下端に強いロクロ目があり、体部は外傾しながら立ちあがり、口縁部でさらに外反する。高台は高さ 1.3㎝ で外側にふんばる。37－5 は体部は内弯しながら立ちあがり、口縁部で大きく外反する。高台は高さ 1.1 ㎝でやや外側に広がる。

甕　6点ある。製作技法、器形の特徴から以下のように分類される。

A類　ロクロ不使用のものであり、1点ある。口頸部破片であり、外面刷毛目、内面横位ヘラミガキが施される。口縁部は外傾しながら立ちあがり、端部はまるみをおびる。

B類　ロクロ使用のものであり、5点ある。器形により以下に細分される。

BⅠ類　2点ある。胴部最大径が口縁径を上回るもので、砲弾型を呈す。口縁径は18～19㎝で頸部は「く」の字状にくびれ、端部は上方につまみ出される。36－2が内外面ともロクロナデ、36－3が外面上部ロクロナデ・同下部ヘラケズリ、内面体部縦位ヘラナデが施される。

BⅡ類　2点ある。口縁径と胴部最大径がほぼ同じものであり、長胴型を呈す。口縁径は21～22㎝で頸部は「く」の字状にくびれ、端部は上方につまみ出される。いずれも外面ロクロナデ、内面横位ヘラナデに一部縦位ヘラナデが施される。

BⅢ類　1点ある。口縁径13.8㎝と小さい。外面は手持ヘラケズリ、内面はナデが施される。

〔赤焼土器〕

坏・耳皿がある。いずれも1点のみの出土である。

〔須恵器〕

坏・甕・長頸瓶がある。このうち長頸瓶は1点のみである。

坏　7点ある。いずれも内外面ともロクロナデが施され、底部切り離しは回転糸切り離しで再調整はない。口径比の違いから以下のように分類される。

A類　2点ある。口径に対して底径の大きいものである。体部は外傾しながら立ちあがり、口縁部で軽く外傾する。

B類　5点ある。口径に対して底径の小さいものである。体部は内弯ぎみに立ちあがり、口縁部で軽く外傾するものと丸くおさまるものがある。

甕　4点ある。2点は口縁径40㎝前後、頸部径32㎝前後を測り、大甕の類に属す。41－3は外面ロクロナデ、内面ナデが施される。41－4は外面ロクロナデ・同下部ヘラケズリ、内面縦位ヘラナデが施される。残り2点は分類できない。

〔灰釉陶器〕

高台付長頸瓶の底部～体部下半の破片1点がある。底部は回転糸切り離しがされ、高台は回転ヘラケズリ調整の後に付けられている。高さ約5㎜で体部下端に付き、外にややふんばる。

黒笹第 90 号窯式期に属する美濃製品である。(註 1)

〔緑釉陶器〕

体部破片 1 点がある。内面に段がみられ、底部に近い破片である。軟質で淡い緑色を呈す。

(2) 組み合わせと年代

分類した出土土器を住居跡ごとにまとめたものが第 7 表である。Ⅰは住居跡に伴う土器で図示可能であったもの、Ⅱは、Ⅰと図示できなかった住居跡に伴う土器の坏底部破片数を加えたもの、Ⅲは堆積土も含め特徴的な出土遺物の一覧である。

	Ⅰ														Ⅱ					Ⅲ								
	土師器									赤焼	須恵器				土師器			赤焼土器坏数	須恵器坏数	灰釉	緑釉	土師器			赤焼	須恵器	瓦	土錘
	坏			甕				高台付		坏	坏		甕									黒書坏	鉢	甑	耳皿	長頸瓶		
	A	BⅠ	BⅡ	A	BⅠ	BⅡ	BⅢ	皿	瓶		A	B	大甕	その他	坏底部数	手持ヘラケズリ：無調整												
昨年度分類	A	BⅠ	BⅡ		BⅠ	BⅡ					BⅠ	BⅡ																
第36号住居跡			1		2					1					7	1	6	2	0	○				○				
第37号住居跡	3			1		2		2							6	0	4	0	1									
第38号住居跡	1		4				1					2		2	16	2	12	1	7						○	○		
第39号住居跡	2		2								1	2			14	2	10	0	8			○					○	
第40号住居跡		3	1						2			1			10	1	9	0	1		○	○	○					○
第41号住居跡			1									1	2		9	0	8	0	1							○		
第42号住居跡	2		2												5	1	3	0	0							○		
第43号住居跡															0	0	0	0	0									
第44号住居跡															2	0	1	0	2									○

第 7 表　住居跡出土遺物分類表

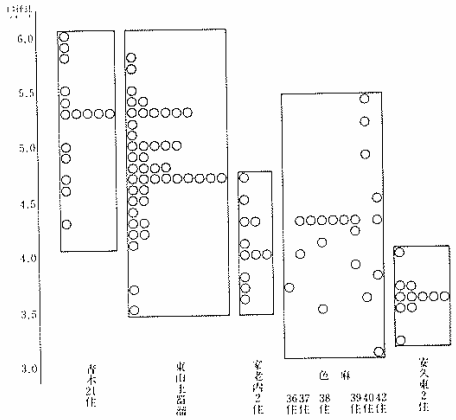
精査を行なった 9 軒の住居跡のうち完掘したものは 5 軒（第 36、37、38、40、44 号住居跡）で、ほぼ完掘に近いものとして第 39 号住居跡がある。このうち、遺物がほとんど出土していない第 44 号住居跡を除く 5 軒の住居跡では、カマド・床面から比較的まとまった数量の土器が出土している。ここでは、これらの住居跡出土土器のうち土師器坏を中心に考えてゆきたい。

製作にロクロが使用される土師器は、東北地方南部の土師器編年（氏家：1957）では表杉ノ入式とされ、平安時代に比定されている。このことから、これらの住居跡はすべて平安時代に属するものとすることができる。しかしその後、表杉ノ入式期の細分が指摘され（岡田・桑原：1974、小笠原：1976 ほか）、資料の増加とともにその細分の成果が挙がっている。このような成果をもとに、本年度の住居跡の年代的位置づけを考えてみたい。

昨年度調査における表杉ノ入式期の竪穴住居跡は三つのグループに分けられている。その共伴関係をみると、第 1 グループでは土師器坏は確かめられないが、底部切り離しがヘラ切りの須恵器坏を主体とし、同坏Ａ類、口縁径 24㎝ 前後で口縁径が胴部最大径を上回る土師器甕、同甕ＢⅡ類を共伴する。第 2 グループでは、土師器坏ＢⅠ類・Ａ類を主体とし、須恵器坏Ａ類、口縁径 24 ㎝前後で胴部最大径が口縁径を上回る土師器甕、口縁径 16㎝ 前後、口縁径が胴部最大径を上回る土師器甕を共伴する。第 3 グループでは、土師器坏ＢⅡ類を主体とし、同坏Ａ

土師器 / 住居跡	底部 切り離し	再調整あり 回転糸切り	再調整あり 不明	再調整あり 回転糸切り	再調整あり 不明	再調整なし ヘラ切り	再調整なし 回転糸切り	土師器坏伴出数	口径比 幅	口径比 集中点	共伴坏 須恵器坏	共伴坏 赤焼土器坏
青木第21住			2	6	4	2	4	18	4.3～6.0	5.3～5.5	5	0
東山土器溜		4	6	15	25		11	61	3.5～5.8	4.6～5.3	28	0
家老内第2住				7			6	13	3.6～4.7	4.0～4.3	なし	なし
安久東第2住							12	12	3.2～4.0	3.5～3.6	3	9

第8表　住居跡比較



第9表　口径比比較

類、須恵器坏A類、土師器甕BⅡ類を共伴し、第1・2グループにはみられない赤焼土器坏も共伴する。

このことを本年度調査の各住居跡と対比すると、40住は第2グループ、36～39住は第3グループに対応する。第2・第3グループとも、手取・西手取遺跡（早坂・阿部：1981）の第1群土器と第2群土器の間に位置付けられており、本年度の住居跡もいずれもこの間に位置することになる。なお第3グループは、五輪C遺跡第5号住居跡（小野寺：1979）、佐内屋敷遺跡第33号住居跡（森：1983）と同時期に比定されている。

さらに、県南部ではあるが、表杉ノ入式期の中で新旧関係のはっきりしている、青木遺跡第21号住居跡（小川：1980）、東山遺跡土器溜（真山：1981）、家老内遺跡第2号住居跡（真山：1981）、安久東遺跡第2号住居跡（土岐山：1980）の中での位置づけを行ってみると、第8表よりわかるように、時代が新しくなるにつれ、

①底部切り離しに、回転糸切り離しの使用が多くなる。

②再調整のあるものが減少していく。

③口径比が徐々に小さくなる。

④須恵器坏にかわり、赤焼土器坏の占める割合が高くなる。

などの特徴を挙げることができる。本年度の住居跡のうち、40住は、土師器坏10点のうち再調整のあるものが1点、口径比は3.6と小さいものが1点あるが、残る3点は5.0前後と大きく、本年度の他の住居跡とは異なる。底部は回転糸切り離しのみで、再調整のあるものが少なく、赤焼土器の共伴がみられないなどの特徴をもち、青木21住と安久東2住との間に位置づけることができる。他の4軒は、土師器坏38点のうち再調整のあるものが6点、口径比は3.5～4.3で4.3前後に集中する。赤焼土器の共伴がわずかにみられるが、40住と同様に青木21住と安久東2住との間に位置づけることができ、家老内2住に近い時期を想定させる。なお4遺跡の住居跡のうち土師器坏と共伴関係にある灰釉陶器により実年代が示されているのは、9世紀中葉前後の東山土器溜と10世紀後半頃と思われる安久東2住（註2）であり、本年度の住居跡はいずれもこ

の間に位置づけられることになる。

第 36 号住居跡床面出土の灰釉長頸瓶高台は、黒笹第 90 号窯式期に併行する美濃産のもであり（註 1）、実年代は 9 世紀後半～10 世紀初頭が与えられる。このことから、36 住は、9 世紀後半～10 世紀初頭の存続が想定され、37 住・38 住・39 住についても同様のことがいえる。40 住はやや古い要素はもつがそれほど大きな年代差は想定できない。これらのことは、前述した土師器坏を中心とする他遺跡との対比においても何ら矛盾はない。

（3）墨書土器について

2 点出土した。第 39 号住居跡出土の土師器坏のものは「厨」と伴読できる。県内での出土例は、多賀城跡、伊治城跡、名生館跡、館前遺跡などの官衙で知られているが、本遺跡での性格は不明である。第 40 号住居跡出土の土師器坏のものは「鍋」と伴読でき、県内での出土は初めてである。

（4）住居跡の構造

精査した住居跡の中で、平面形が方形を呈するのが 4 軒、長方形を呈するのが 2 軒で、長方形を呈する住居跡の方に大型のものがみられる。主軸方向は、36 住、44 住を除き、東に 10°以内の範囲で偏っており、一定の共通性を見い出すことができる。昨年度調査区の地蔵堂地区の大部分が西偏していたのと対象的である。カマドは、不明の 2 軒を除きすべて河原石を袖として構築されている。この中には粘土で固めたものもある。煙道は 3 軒にしかみられない。カマドはいずれも、東辺、南辺に作られており、昨年度も指摘したように、特に冬季の北西からの季節風に対する備えなのであろう。貼り床、周溝は一部の住居跡にしかみられず、住居跡掘り方を床面としている。掘り方は、38 住、42 住、43 住でみられ、このうち 42 住、43 住は 39 住とともに、礫層上あるいは礫層を整地した上に住居跡を築いている。40 住は、他の 8 軒と立地地区が異なり、考察を加えた 5 軒の中でも古い要素を持つことから、字を境とする住居跡群の時間差も想定できるが、住居跡の構造には明確な違いはみられない。

三ヶ年の調査で計 47 軒の住居跡が確認されており、最後に昨年度までの住居跡の一覧表を付しておく。

（註 1）吉田恵二氏の御教示による。
（註 2）報告書では「上限は 11 世紀頃」とされたが、その後の研究成果（佐々木：1984）により 10 世紀後半頃と訂正された。
（註 3）東北歴史資料館の佐藤和彦氏の御教示による。

番号	地区	規模(㎡)	主　軸	時期	調査年度	番号	地区	規模(㎡)	主　軸	時期	調査年度	番号	地区	規模(㎡)	主　軸	時期	調査年度
1	深　山	3.9×3.6	N-7°-E	表杉、入式	57	11	下　原	4.2×4.0	N-26°-W	塩 釜 式	57	25	地 蔵 堂	3.0×3.0	N-12°-W	表杉、入式	58
2	〃	6.0×5.4	N-2°-E	〃	〃	12	〃	4.8×5.7	N-63°-E	〃	〃	26	〃	3.5×4.0	N-7°-W	〃	〃
3	〃	不　明	不　明	不　明	〃	13	〃	3.2×2.8	N-37°-W	〃	〃	27	〃	4.7×4.0	N-5°-E	〃	〃
4	〃	〃	〃	〃	〃	14	栗　木	5.5×4.5	N-12°-E	表杉、入式	58	28	〃	3.2×3.0	N-18°-W	〃	〃
5	〃	〃	〃	〃	〃	15	新宿二番	5.0×4.6	N-3°-E	〃	〃	30	〃	3.6×3.6	N-15°-W	〃	〃
6	地 蔵 堂	4.9×4.0	N-4°-W	表杉、入式	58	16	〃	3.0×3.3	N-3°-E	〃	〃	31	〃	6.6×4.2	N-28°-W	〃	〃
7	〃	5.3×5.3	N-0°-EW	〃	〃	18	〃	2.2×3.1	N-3°-E	〃	〃	32	〃	6.0×4.5	N-36°-W	〃	〃
8	栗　木	4.4×3.5	N-14°-W	〃	〃	19	地 蔵 堂	4.3×3.2	N-5°-W	〃	〃	33	〃	3.4×3.5	N-20°-W	〃	〃
9	〃	不　明	N-9°-W	〃	〃	20	〃	5.0×5.0	N-7°-W	〃	〃	34	〃	2.3×2.1	N-33°-W	〃	〃
10	〃	不　明	N-12°-W	〃	〃	24	〃	6.5×6.5	N-12°-W	〃	〃	35	〃	3.4×2.7	N-11°-W	〃	〃

第10表　住居跡一覧表

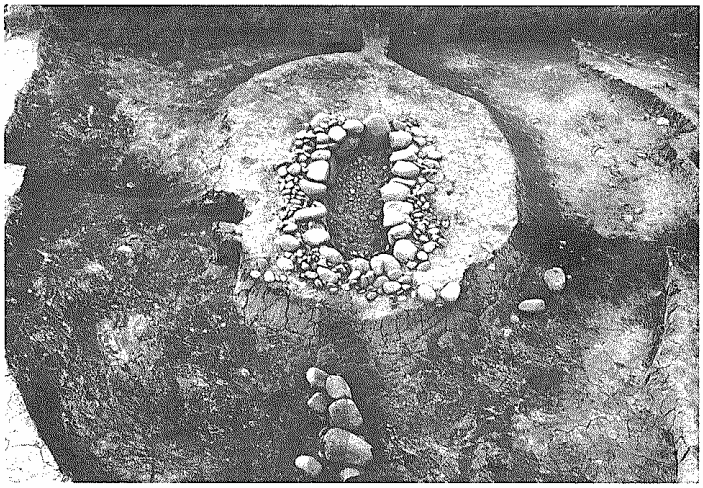
〈引用・参考文献〉

氏家　和典（1957）:「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第 14 輯　東北史学会
小笠原好彦（1976）:「東北地方における平安時代の土器についての二、三の問題」
『東北考古学の諸問題』　東北考古学会
岡田・桑原（1974）:「多賀城周辺における古代杯形土器の変遷」『研究紀要』Ⅰ
宮城県多賀城跡調査研究所
小川　淳一（1980）:「青木遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅳ　宮城県教育委員会
小野寺祥一郎（1979）:「五輪Ｃ遺跡」宮城県文化財調査報告書第 61 集　〃
斎藤　孝正（1982）:「猿投窯における灰釉陶の展開」『考古学ジャーナル』No. 211
ニューサイエンス社
佐々木和博（1984）:「鹿島遺跡・竹之内遺跡」宮城県文化財調査報告書第 101 集
宮城県教育委員会
多賀城関連遺跡発掘調査報告書　第 1～第 8 冊　宮城県多賀城跡調査研究所
多賀城市文化財調査報告書第 1 集「館前遺跡」
土岐山　武（1980）:「安久東遺跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書（4）
宮城県教育委員会
丹羽　　茂（1983）:「宮前遺跡」宮城県文化財調査報告書第 96 集　〃
早坂・阿部（1980）:「手取・西手取遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅱ　〃
古川　一明（1982）:「色麻古墳群」宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書
宮城県教育委員会
〃　（1983）:「色麻古墳群」宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書
宮城県教育委員会
真山　　悟（1981）:「東山遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅴ　〃
〃　（1981）:「家老内遺跡」　〃　〃
宮城県多賀城跡調査研究年報　1971～1983　宮城県多賀城跡調査研究所
森　　貢喜（1983）:「佐内屋敷遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅶ
宮城県教育委員会
吉沢　幹夫（1984）:「宮城県出土の墨書土器について」『研究紀要』第 10 巻
東北歴史資料館

写 真 図 版

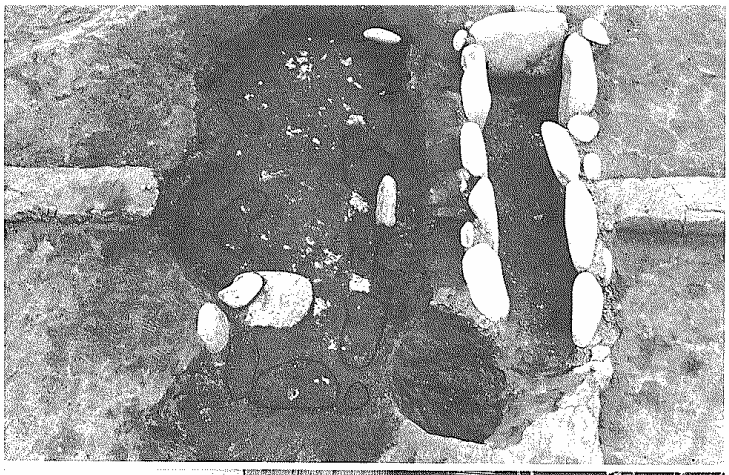
第 79 号 墳

第 118 号 墳

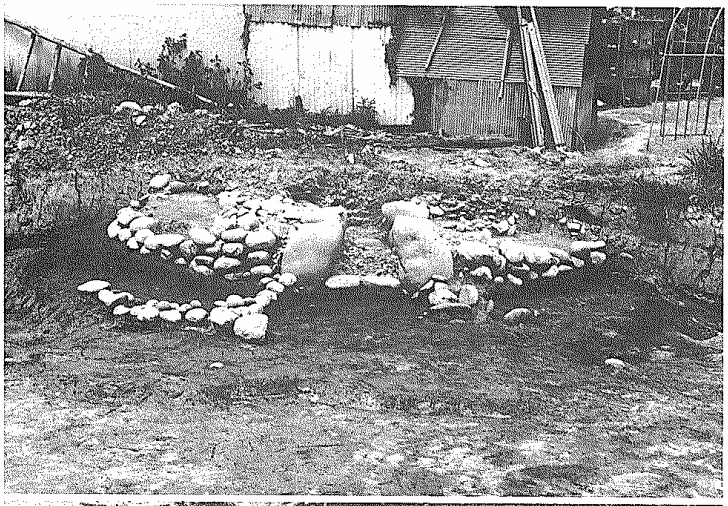


第 122 号 墳

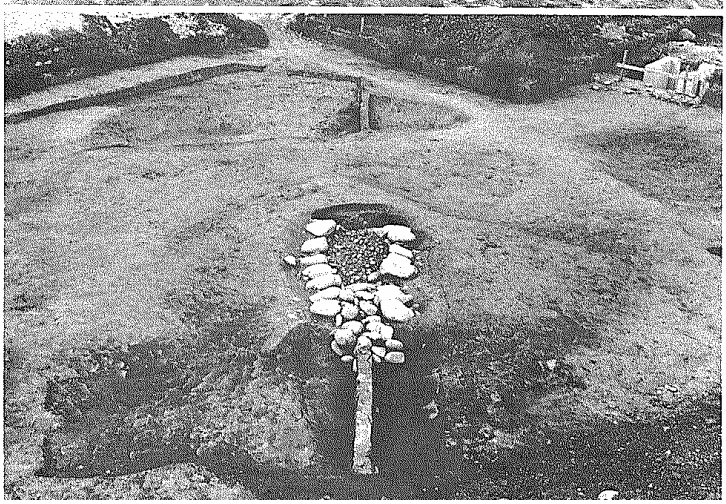
図版 1



第 123 号 墳
第 137 号 墳



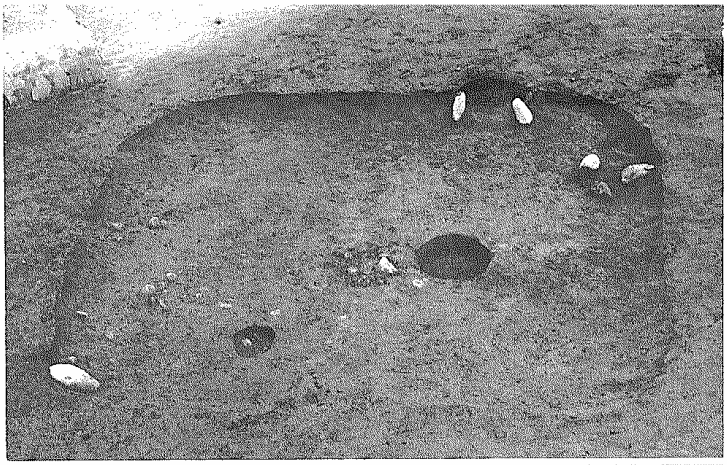
第 124 号 墳



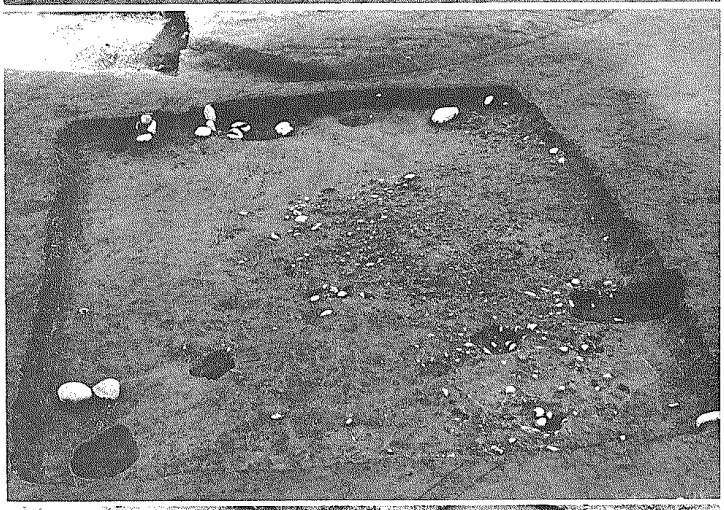
第 127 号 墳

図版2

第 36 号 住 居 跡



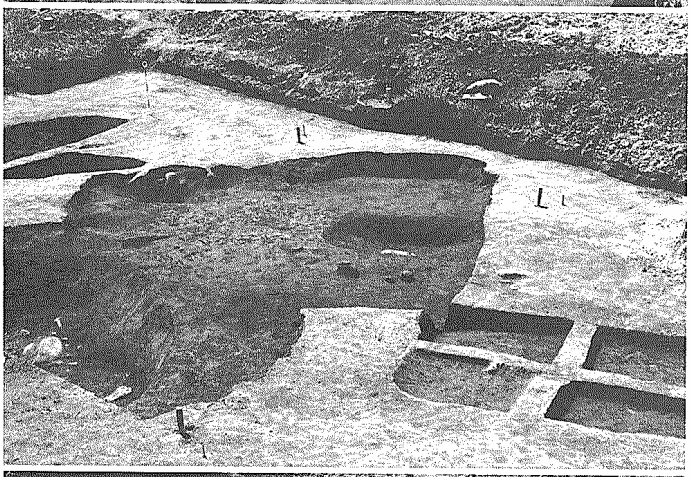
第 37 号 住 居 跡



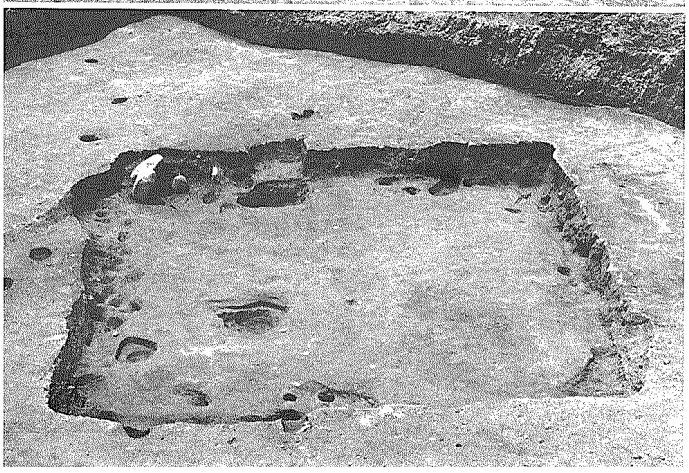
第 38 号 住 居 跡

図版３

第 39 号 住 居 跡



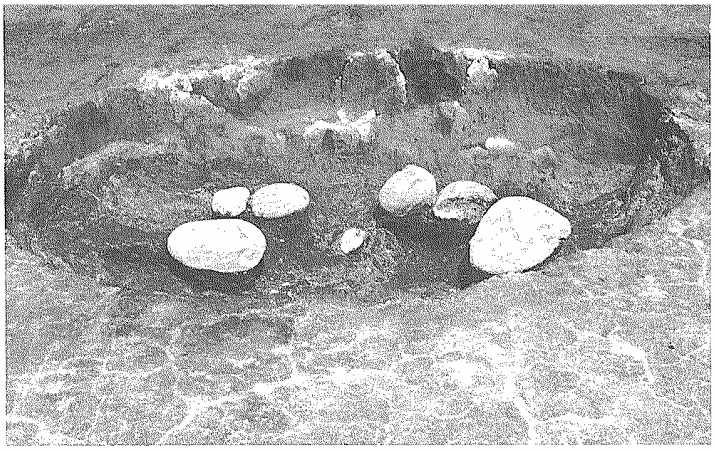
第 40 号 住 居 跡



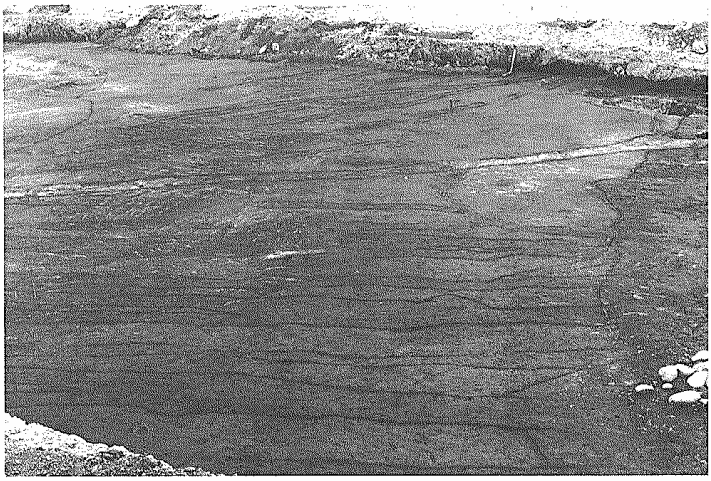
第 44 号 住 居 跡

図版4

第 3 号 土 壙

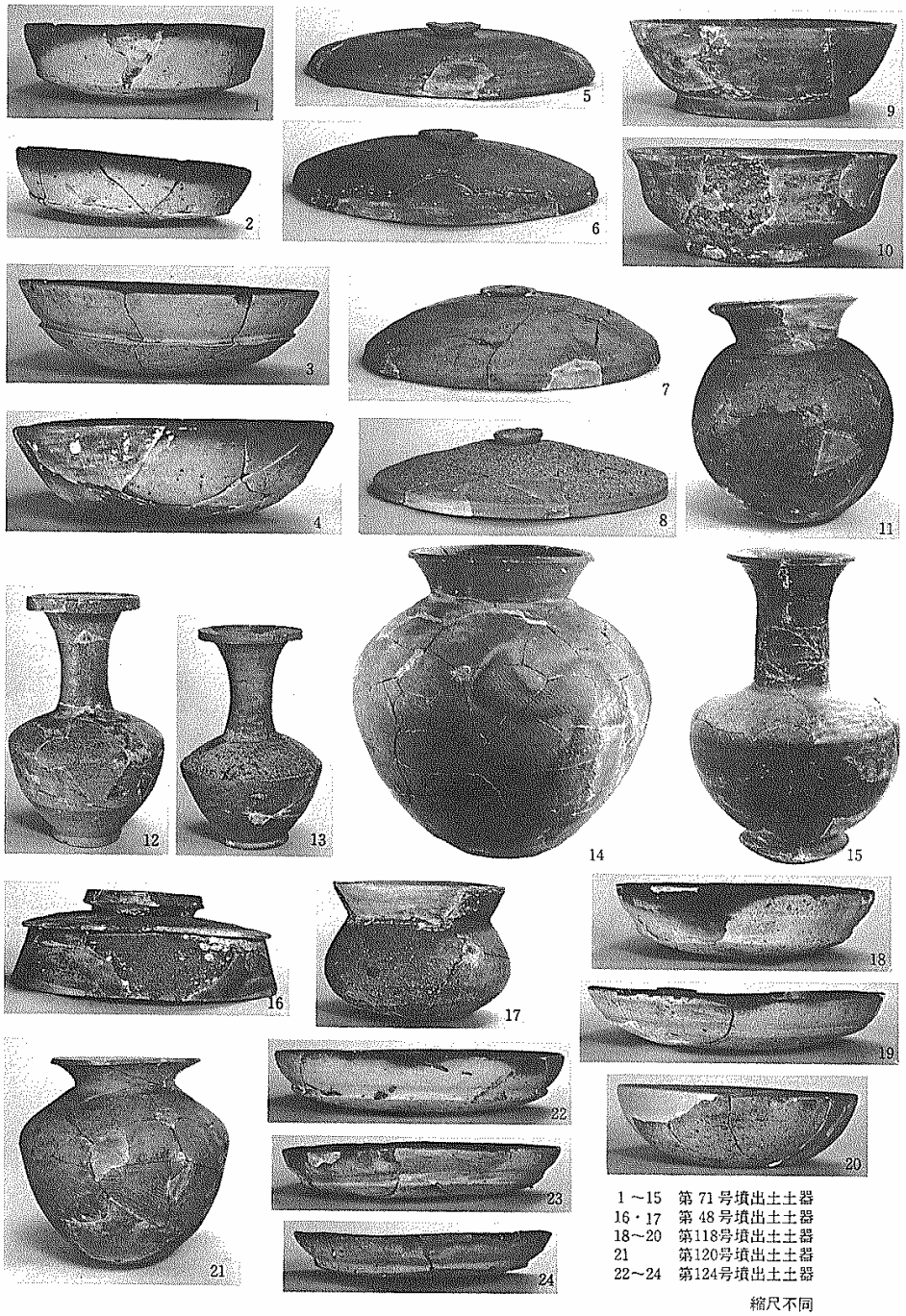


大坊地区畑跡



第123号墳周辺弥生
遺物包含層

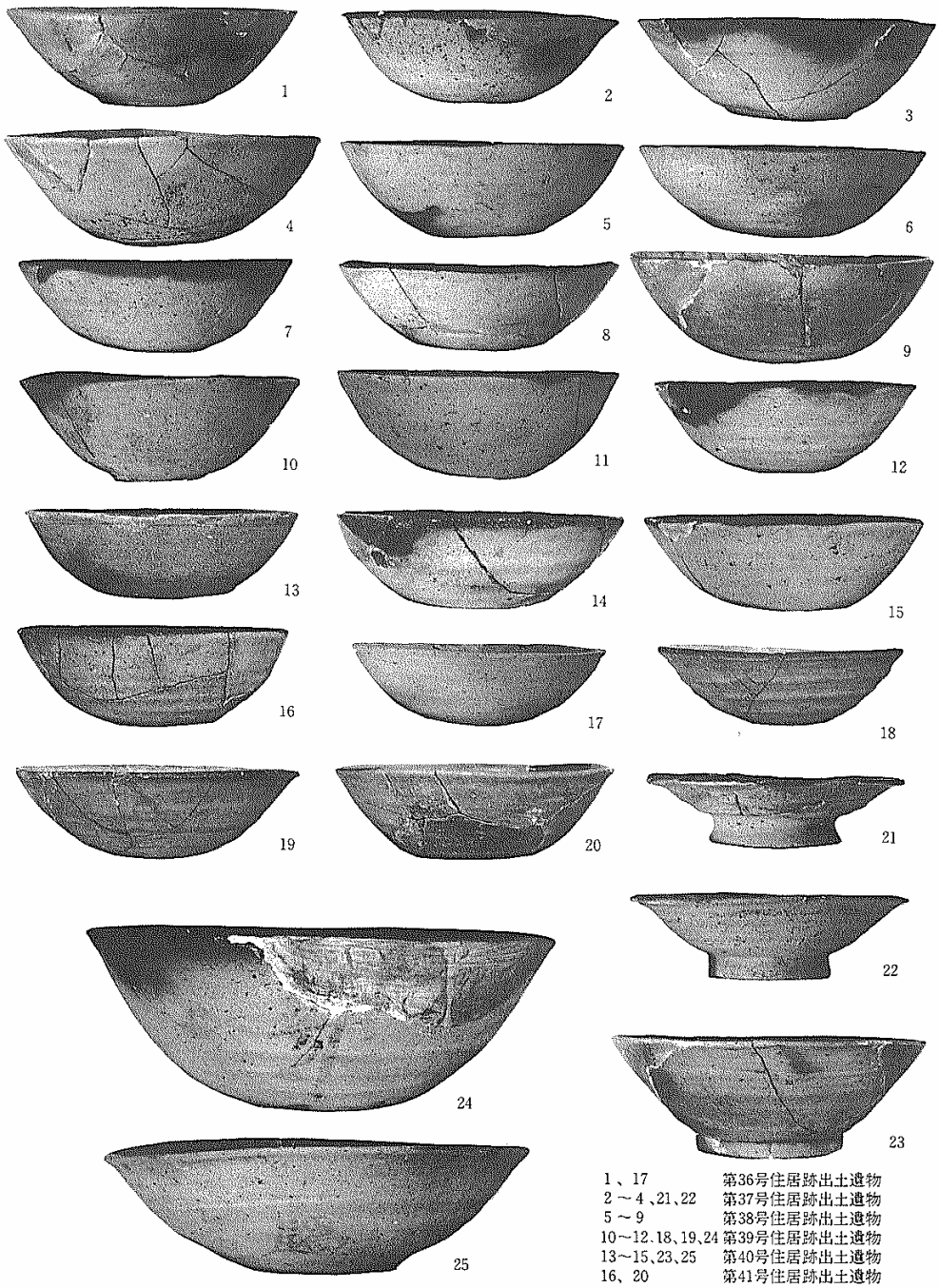
図版５



1～15　第 71 号墳出土土器
16・17　第 48 号墳出土土器
18～20　第118号墳出土土器
21　第120号墳出土土器
22～24　第124号墳出土土器

縮尺不同

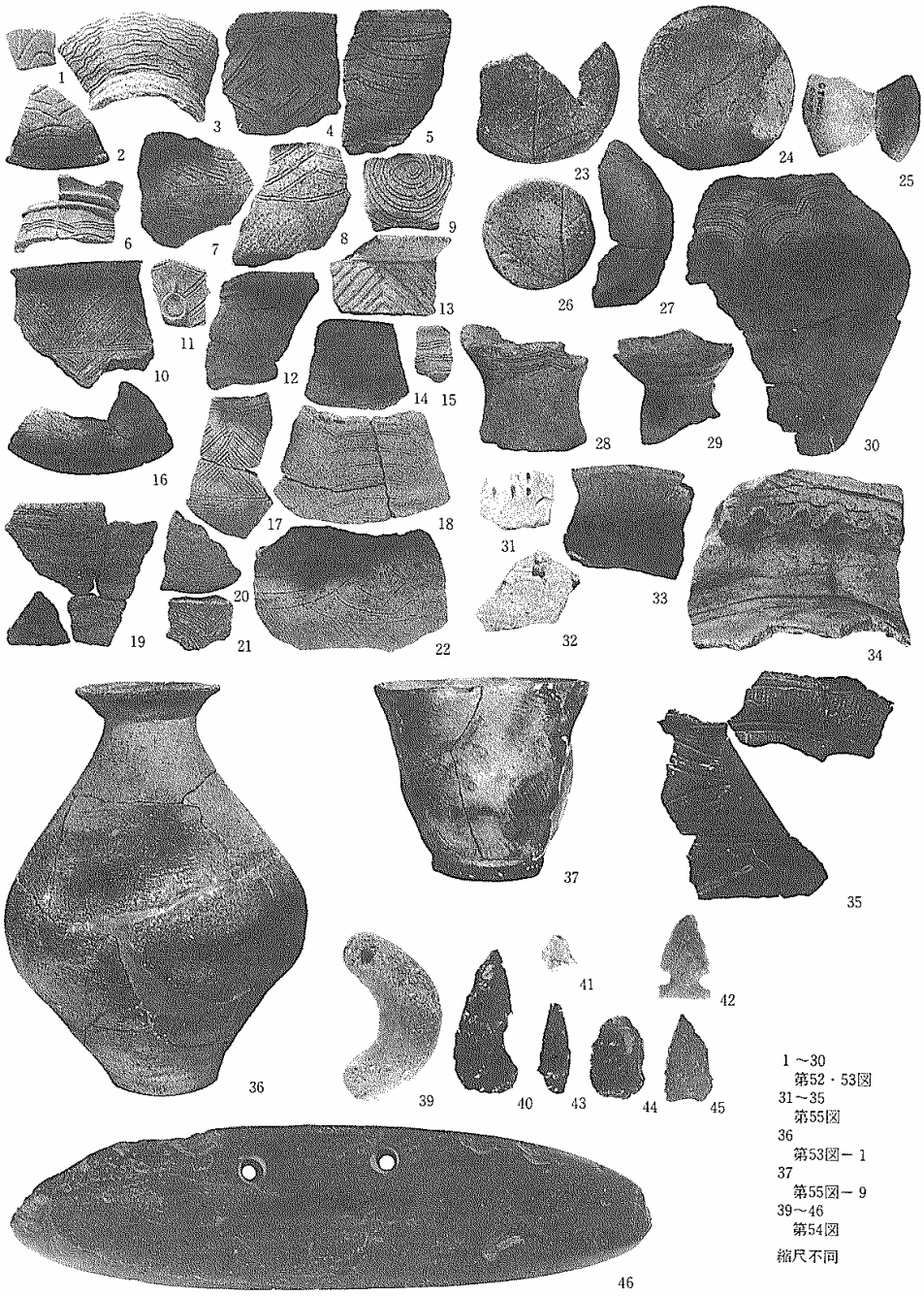
図版６　古墳出土土器



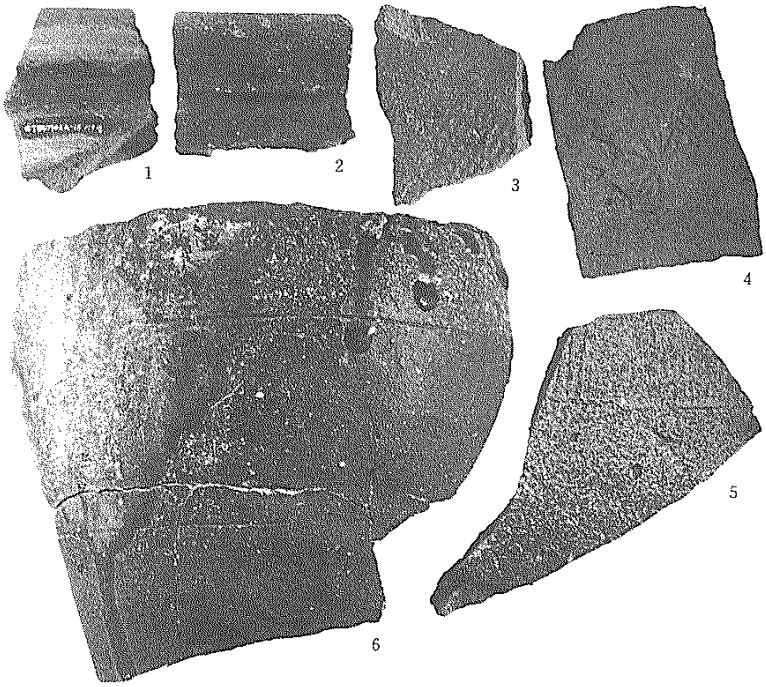
1、17	第36号住居跡出土遺物
2～4、21、22	第37号住居跡出土遺物
5～9	第38号住居跡出土遺物
10～12、18、19、24	第39号住居跡出土遺物
13～15、23、25	第40号住居跡出土遺物
16、20	第41号住居跡出土遺物

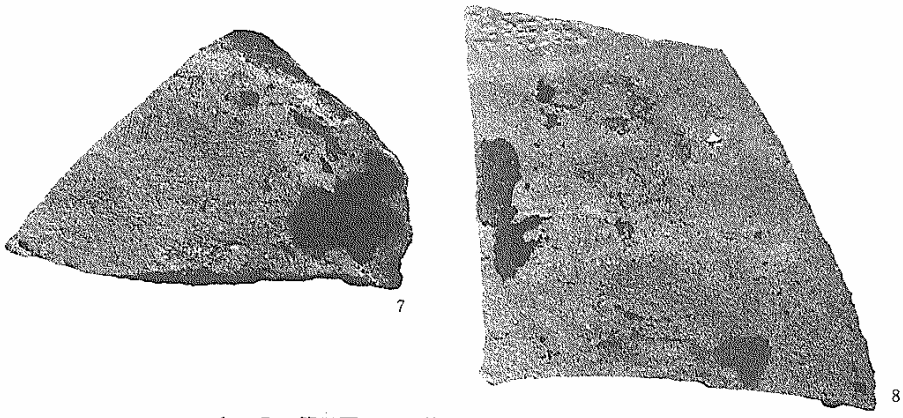
縮尺不同

図版7　住居跡出土土器



図版８　弥生時代遺物包含層出土土器





1～5　第51図　6　第３号土壙出土三筋壺
7・8　布の付着した中世陶器（甕）の体部破片

図版９　中世陶器